

語り継ぐ 11

**あの日から 20 年
両親が生きていなければ存在していなかった
私たち。語り継がれる世代から語り継ぐ
世代として成長した今、18 歳の想いを綴る
『阪神・淡路大震災』**

**兵庫県立舞子高等学校
環境防災科 3 年**

語り継ぐ

秋宗 華香

1 はじめに

阪神・淡路大震災発生当時、私はまだ生まれていなかった。もちろん、母のお腹の中にもいなかった。私の経験談を話すなど震災を経験していないので不可能なことだ。だから、当時、神戸の須磨に住んでいた母に聞いた話を語り継ぎたいと思う。須磨の家には、母・叔母（母の妹）・祖父母の4人。そして大型犬が2匹いた。当時の母は大阪にある旅行代理店に勤めていた。

今回は話を聞いた母の目線で書いていく。

2 須磨の家

鉄筋の二階建ての家に住んでいた。家の前の道は細く、自転車がすれ違うのも気を付けないと危ないほどだ。

父・母・妹は全員二階で寝ていた。私の部屋には、平机とローボードの上にテレビとオーディオセットが置いてあるだけで、とても殺風景な部屋だった。私の向かい側の部屋が妹の部屋で、妹の部屋にも私と同じく、平机とローボードの上にテレビとオーディオセットが置いていた。だが、妹の部屋にはくぼみがあってそのくぼみにすっぽりピアノがはまっていた。大きなピアノが置いてあった。そして、リビングを挟んだ奥の部屋に父と母と一緒に寝ていた。

母はティーカップアンドソーサーを集めるのが好きで、リビングにはガラス張りの食器棚にたくさんのティーカップアンドソーサーが綺麗に並べられていた。

3 震災発生

私は寝ていると、地鳴りのような「ゴォオオ」という音が聞こえ、眠りが浅くなった。「何の音？」と思っていると揺れ始めた。とても揺れたのですぐに地震だと思った。「会社休みや、ラッキー」と思っていたけれど、あまりにも長い間揺れていたので、「これって止まるのかな」と思いとても怖くなった。揺れが収まってからも怖くて、少しの間動けないでいた。

すると、向かい側の部屋から「お姉ちゃん」という妹の声が聞こえてきた。怪我をしたのかと心配になり、妹の部屋へ行った。すると、妹は布団にくるまり半泣きで震えていた。妹の部屋にあった大きなピアノは、くぼみにスッポリはまっていたけれど、横揺れが激しかったのか、壁に穴が開いてピアノが少し前にでていた。妹に「お父さんたちの様子見に行こ」と言うと、「腰が抜けて歩けへん」と言われたので、私は一人で父と母の様子を見に行こうとした。リビングへの扉を開こうとしたときジャリジャリという音がして、リビングの奥から「ガラスが割れて危ないからこっち来るな、お父さんとお母さんは無事や。ちえとさよは無事か」と父の声が聞こえてきた。リビングへの扉が開かなかったので、不安になったが、父の声が聞こえてきたことによって父と母は安全だと分かり安心した。

このときはまだ、事の重大さが分らなかった。

4 外の状況

家族の安全が確認できた私は一人で家の外に出た。玄関のドアを開け、門を開けると、階段には亀裂が入って盛り上がっていた。道路にも亀裂が入っていたり、陥没、隆起していたりした。家の外に出ると、周りの家はほとんどが倒れていて、そこで初めて「大変なことが起きた。」と思い怖くなった。

そう思っていると、近くに住んでいる親戚の家から親戚のお兄ちゃんが「おばあちゃん！おばあちゃん、大丈夫か！生きとるか！」という声が聞こえてきた。この声がとても怖く感じ今でも覚えている。「生きとるかかってなんなん。何が起きてんの。」と思いながらも親戚の家に向かった。おばあちゃんを親戚のお兄ちゃんと助け出そうとしたが、入る場所がない。入る場所を探していると小さな隙間

があり、小柄な私は躊躇もなく、自らその小さな隙間に入っていった。中には空間があり、その空間におばあちゃんが小さくなっていた。なんとか、おばあちゃんを引っ張り出すことが出来たが、今考えると「この小さい隙間に入れるのは私しかおらへん。」と思って入っていったけれど、今考えたらかなり危ないと思った。おばあちゃんを引っ張り出して崩れたりしなかったのも奇跡だろうと思う。そこから後の記憶は気が動転していたのかよく覚えていない。

私の住んでいた地域は地域付き合いがととてもよかったので、誰がいないなどすぐに分り、がれきに埋もれていたらみんなで協力して助けた。地域で一致団結していた。

5 数日後

家は建っていたし、みんな家にいたかったので避難所に行かなかった。

震災から数日後、近所の下の方で火事が起きて、火がこっちまでまわってくるかもしれないという噂がまわってきた。本当の話だった時の為に、母の友達の家が、私達の家から10分ほど山側に行く距離にあったのでそこに一時避難することになった。たった10分ほどの距離なのに被害がほとんどなく、私のところには電気が通っていなかったのに、電気も通っていた。

母の友達の家で避難することになり、犬は連れていけないので、門を開け、犬を逃がそうとしたが、なかなか逃げてくれなかったので「行け！行け！」と叫んだ。犬を見届けてから母の友達の家へ移動をした。

母の友達の家は須磨学園の近くにあった。須磨学園の隣にある貯水タンクが割れて、そこから水が出ていて、溝に大量の水が流れていた。その水を汲めるだけ汲んで、歯磨きやトイレの水などに利用した。そして、自分たちの家に火がまわってきていないと知って家に戻ると犬が2匹とも家にいた。

電気が通るのが遅かったけれど、仏壇があったのでろうソクやマッチがたくさんありとても助かった。何かあったら怖いので、父、母、妹、私の4人で行動するように心がけた。家にいると食料が手に入らず困っていると知り合いが避難所から食料を持ってきてくれた。おにぎり1個だけの生活がずっと続いていた。

ある日、おにぎりのパックを持ってきてくれたボランティアの人がいた。その人が「この辺りに自宅で避難している人がいると聞きましたのでおにぎりを持ってきました。」と言った。こんな時でも自分たちのことを考えてくれていることにありがたく思った。

6 出勤

JRがところどころ運行を始めて、大阪まで通えるようになったので、会社へ出勤することにした。一人のときにまた地震がきたらという不安があったが、行かないといけないと思い出勤することにした。

運行している駅で1番近い駅が神戸駅だった。神戸の港から大阪の南港まで無料で船が出ていた。寒く、真っ暗な道を1時間以上歩いて神戸の港まで行き、その船に乗って大阪まで通っていた。便が少なかった。だから、たくさんの方が乗れるように床に座っていた。船に乗ったら、温かいコーヒーをサービスしてくれたので、みんな床に座りそのコーヒーを黙って飲んでた。

南港に着いたら神戸とは別の世界が広がっていた。何日間もの間お風呂に入っていない、洗濯されていない服を着ている自分が場違いに思えた。自分は臭くないかと自分が発する臭いがとても気になった。会社に着くと、私が持って帰る用に食べ物がたくさん用意されていた。食べ物にはお菓子やカップ麺など日持ちしそうなものが多かったが、他にもおにぎりや会社の人や家族が手作りしてくれたおかずなどさまざまな食べ物が用意されていた。とてもびっくりしてありがたく思った。

JRはところどころ断線しているから、その断線している区間は代わりにバスが出ていた。私は船かJRを使って何時間もかけて会社まで通っていた。

町全体は電気供給が不安定で暗かったため、レイプ事件が多発していた。父か母のどちらかができる限り最寄りの駅まで迎えに来てくれていた。

7 母のまとめ

阪神・淡路大震災を経験してたまたま家は残ったけれど、耐震という知識は必要であると感じた。さらに、近隣とのコミュニケーションも大事であると感じた。日常的に危機感を忘れずにそれに備えることが大切だと感じた。

記憶というものは薄れていくが、薄れずに残り続ける記憶もある。阪神・淡路大震災を経験してから揺れに敏感になった。他人が感じない小さな揺れや橋を渡るときに橋が揺れると「あ…」と妙な気分になる。それとは反対に大きな地震を経験しているから小さな地震だと「このくらいの揺れなら大丈夫。」と自己判断をして落ち着いてしまう。変に地震に慣れてしまったのだ。他にも、震災当時はなんの備えもしていなかったがなんとかなった。そういうことから、備蓄がなくてもなんとかなるといふあまい考えを持つようになってしまった。極端な二面性をもっている。

8 まとめ

(1) 私が阪神・淡路大震災を知ったきっかけ

私は生まれも育ちも神戸だ。幼稚園のころの記憶はないが、小学校の頃、阪神・淡路大震災の時期になると「1. 17の集い」というものがあつたのを覚えている。何をしていたか詳しくは覚えていないが、全校生徒が紙に希望など字を書いたり絵を描いたりしてキャンドルのまわりにその紙を巻き、そのキャンドルで「1. 17」という文字を作っていたのを覚えている。

そのキャンドルを囲むように並び、全校生徒で「幸せ運べるように」の合唱をする。だから「1. 17の集い」の時期になると音楽の授業で「幸せ運べるように」の練習をする。私はなんとなくこの曲が好きで、全校生徒で合唱するということが楽しみで、毎年「1. 17の集い」の時期になるのが待ち遠しかった。正直1年生や2年生のころはなんのための集まりなのかよくわかっていなかったし、阪神・淡路大震災がどういうものなのかもよく理解していなかった。

小学校の時、授業で図書時間があつた、その時間には図書館で好きな本を読むことができる。友達は大勢で遊べるような本を選んだりしていたけれど、私の目に止まったのは表紙が赤と灰色の大きな本だった。なぜかその本に惹かれて私はその本を読むことにした。その本は阪神・淡路大震災の写真集だった。これが今、私が住んでいる町なのか、なぜこんなことになったのかなどたくさんの疑問が湧いてきた。母や祖母なら知っているだろうと思い、その日家に帰り疑問に思つたことを母や祖母に聞くと小学生の私でもわかるように簡単な言葉を並べて答えてくれた。その時の言葉で覚えているのは、「たくさんの家が倒れて、道を通れなくなつてんで」「あのおっきい高速道路あるやろ？あれが倒れてん。」「今からお友達は大切に、たくさんいろんな人に挨拶しなさい。」という言葉だ。

家が倒れて道がふさがれているということ、高速道路が倒れていることは写真で見てもとても衝撃的だったから覚えている。友達を大切にたくさんの人に挨拶をする。そのことがなぜ阪神・淡路大震災と繋がるのか当時は全く理解できなかったが、小学生のころから今まで私は友達を大切に、近隣の方には積極的に挨拶をするようにしている。環境防災科に入学し、祖母の言っていることが理解できた。防災を学んでいき、初めて地域コミュニティと防災の繋がりを知り、祖母の言っていることが理解でき、近隣の方に挨拶をして顔見知りになるということは本当に大切なことだと学んだので、私は出前授業に行くときは必ず地域コミュニティを大切にするように呼びかけている。

神戸で生まれ、神戸で育っているからには阪神・淡路大震災のことを少しでも知っておくべきだと思うが、最近の神戸の子供たちは阪神・淡路大震災のことをよく知らないと聞く。だから、小学校の道徳の時間などに防災教育を取り入れたり、図書館で目立つところに阪神・淡路大震災の写真集を置いたりすべきだと思う。

(2) 母の話を聞いて

母には何度か震災当時の話を聞いたことはあつたが、これだけ詳しく聞いたのは今回が初めてである。家が倒れなかったということも聞いていたけれど、母が一人で小さな隙間に入って親戚のおばあちゃんを助けたという話は初めて聞いた。この話を聞いたときに、母は決断力と行動力があるなと改めて感じた。母は普段からどうしようどっちにしようなどという風に優柔不断なところは一切ない。

たとえしたくないことでもその方法しかなければすぐにその方法です。だから、この時もそのように自分しかいないからいつ崩れるかも分からないようなところに入り、おばあちゃんを助けに行ったのだらうと思った。

母は家が倒れることもなく、空腹感に耐えるというようなこともなかったそうだ。だから、今まで語り部の方に聞いた話などのようにとても大変そうというようには感じなかったが、地域コミュニティーが大切だと改めて思うことができた。母の体験談は主に「人に支えられている。」ということがテーマになるものだと思う。母の体験談を読んでいるとわかるように、震災当時母はたくさんの人に支えられている。家族はもちろん、近隣の方、会社の方、ボランティアの方。ほかにもたくさんの人に支えられていただろう。今、私が語り継ぐを書いているが災害は起きていない。そんな日常でも支えられていると感じることはたくさんあるだろう。特に高校3年生の今、進学についてはたくさんの人に支えられているなど実感する。だが、災害が起きれば今感じている以上に「人に支えられている。」ということが実感できるだろうと母が言っていた。食料に困らなかつたのは近隣の方、会社の方が食べ物をくれたからであるし、火事がまわってくるかもしれないと噂が流れた時、山で野宿しなくてすんだのは祖母の友達が家に入れてくれたからである。だから普段から近隣の方には挨拶をしたり、私の周りで支えてくれる人を大切にしたいと思った。私自身は、災害が起きた時にも自分のことばかりでなく、他人のことを思いやれるような人になり、支え合い、信頼し合える友達を大切にしようと思った。

すべて話し終えた後に「もう20年経とうとしとるし、やっぱりよう覚えてるとこと覚えてないことあるわ。記憶って薄れているけど、いやでも覚えてることの多いな。」と母は言っていた。母は震災で誰かを失ったわけでもないし、特に被害が大きかったということもない。けれど、やはり心のどこかで傷を負っていて、その傷は消そうとしても消えず、消したくても消えないものだった。震災から20年経とうとしている今でも、母のように心のどこかに自分でも気づかないような、消えない小さな傷を負っている人はたくさんいるだろう。日常生活に大きな支障はなくても、その人たちの傷が少しでも癒えるようにするにはどうすべきかが課題ではないかと母と話していた。

毎日仕事で忙しく、夜遅くに帰ってくる母は嫌がらずに体験談を話してくれたから、私はこの「語り継ぐ」を書くことが出来ている。そのことに感謝し、阪神・淡路大震災が風化してしまわないように私なりにできることを考えていきたい。

親の震災体験

泉 遊菜

1 はじめに

僕は、阪神淡路大震災が起きた時はまだ産まれてもなかったし、生きてもいなかった。だから阪神淡路大震災が実際にどのようなものだったのかわからない。いくら勉強したからと言ってこれだけはわかるものではない。今回は父と母から実際に震災体験について話を聞いた。僕が生きてきて、環境防災科に入って、この「語り継ぐ」を書くまでこんなに詳しく震災体験を聞くことはなかった。これを通して自分もしっかり学んでいきたいし、見てくれる人にも忘れないでほしい。

2 地震発生

北区に住んでいた母は、朝食をとっていたところに地震がきた。食器棚の扉がガタッと開き、中からお皿が数枚落ちた。片手で机の上の物を押さえ、上から落下する物をさけ、数秒間何が起きたかわからないまま、時間が過ぎた。

須磨区に住んでいた父は、地震の揺れを感じて、目覚めたと思うが起きてからもまだ2~3分は揺れていたと思う。気が付いて起きあがったのだが立ってられない状況。今までに感じたことのない、激しい揺れだった。

3 発生してから

父は、いったん揺れは収まった時に家の中を見渡せば、考えられない程に家具がなぎ倒され目もあてられない状況だった。まず、両親の安否を確認し、姉がタンスの下敷きになっていたので救出し、あわてて住宅の外へ飛び出した。

4 数時間後

母は、テレビがついてようやく何が起きたのかを知る。会社もいけず、自宅待機、その後1か月半会社は休みだった。水は止まっている。ガスも、数日止まっていた。テレビで火災がひどくなっている様子を見ていた。

5 数日後

母は数日して、自分の住んでいる北区は被害が少なかったため、須磨に住む知り合いの元に車でおにぎりや食べ物を届けた。道は通りにくかったが、なんとか移動はできた。

父は、最初の内は当たり前のようにタバコを吸い、車を走らせていたが次第にタバコも買えず、ガソリンもなく、食事にも困ることになるとは思いもしていなかった。まさか、車に積んであったお菓子で空腹のお腹を満たすことになるとは思ってなかった。

6 復旧に向けて

父は、しばらくの間余震が続き、中学校のグラウンドで車の中で寝泊まりしていた。そして、少しずつ、家を片付けていかないと、いつまでもこんな生活はできないと、家族みんなで片付けていった。水が出ないときが一番つらかった。学校でもらった水を毎回家に運んでいた。街並みは住宅も新しく建て直り、公園もきれいになった。復興したころには、あちこち大火事で、どこもぐしゃぐしゃで、あの頃と比べると本当によくここまで普通の町に戻ったなあと感じた。

7 地震が起きた時

母は、今まで感じたことのない感覚、何が起きたか理解できずにいたため何も考えられなかった。揺れが止まった時、家族の無事を確認して、安心した。

8 自分以外の被害はどうだったか。

父は、今は元気に暮らしているが、奥さんと生まれたての子供が亡くなった後輩もいる。親戚のおばあさんの家も安否確認にいったら全壊で家がどこかもわからなかった。もう別の世帯も2階建ての2階がなくなってぐちゃぐちゃだった。

母は、住んでいる場所の違いで被害は大きく違っていた。母は、数日後にはお風呂、トイレ、全てが普通に戻ったが、何日も避難場所で過ごした人は大変だったと思う。

9 自分は何かできたのか。

父は、電気の知識があったので親戚の壊れた家の電気の修理をした。会社にいってもあちこちの電気の復旧へ向けての工事がしばらく続いた。

母は、自分の住むところで、買えるものは買って届けた。特に水、米はスーパーから消えるほど手に入れにくかった。

10 伝えたいこと

人はみな助け合って頑張れば、すごい力になる。命を大切に、末永く生きていきたいし、生きていって欲しい。どこの地に住んでも自然災害はいつ起こるかわからない。必ず起こらない保証はないので他人事と思わず、いつでも対応できるように考えて生活していくべきだと思う。

助け合い。助け合うことが何より大切。

11 まとめ

(1) 父のまとめ

思い返せば地震直後あちこち町を見に行こうと車でまわってみた時、火事の横の道路を通る時2車線で建物からはなれているのに運転席にまで火の熱が伝わってきた時には、火事の恐ろしさを肌で感じたように思う。ちょっと走っただけで車にもかなり灰が飛びかっていたであろうと思わせるほど、灰で真っ黒になっていた。父の家は倒壊せずにすんだが、三宮では10階建てのビルが道路をふさぎ、同じ地区の住宅は全壊でつぶれ、道路は陥没し、高速道路までがひっくり返り思えばすごい被害だった。完全になくなってしまった店やビルもあるが、昔のまま前の場所で再開される店があり新しくビルが建て替わりそこへ昔の店が戻っていつものように店が再開していつものように段々と戻っていった。

いつも当たり前のようにあるものがないときがこんなに大変だとは思っていなかった。電気こそはすぐに復旧したものの、水はなかなか出ず、ぜいたく品ではあるがタバコも買えず、コンビニがしばらくしまっていたのも不便だった。ガソリンも入れる事が出来ず、ガスはしばらくカセットコンロが活躍していた。お風呂もなかなか入れず早くに再開した銭湯に何十人と大行列に並んで入った。周りの少し復興の早い地区に住んでいる人達の所へ呼ばれて、お風呂入りにおいでとかご飯食べようって誘っていただき、まわりの人達にたくさん支えられた思い出がある。大変な時を乗り越えてきたが、そんなときにしか学べないことをたくさん体験でき、人間の温かみを勉強できた。

(2) 母のまとめ

あの当時、スーパーやコンビニ至る所で水やお米やその他の必要なものがすべて売り切れ、1人の人が買い占めていく姿もすごく印象的だ。自分の家でキープしておきたい気持ちは仕方ないし今思っても当たり前のことだとは思いますが、自分達さえよければという考えは次の災害時には少し控えなければならないと思う。そんなにたくさん買い占めなくても、少し不安はあるだろうが周りの人々も同じ

気持ちだ。そういう所でも思いやりや、助け合いは必要だと感じた。数日なんとか乗り切れれば、必ず何らかの形で物品も手に入るようになるし、食べ物など腐らせて捨てることもへって必要なものが必要な人々に少しずつ回るようにつながると思う。そういった不安を少しでも減らすよう、日頃から万が一の時のためにある程度の水等を用意しておくことも大切だ。水の大切さを、あんなに感じた日々は今までになかった。車の中で数日過ごした人も多かった。ガソリンも中々手に入らず、寒い冬には暖房をつける必要があるため大変困った。しばらくは1人ガソリン何リットルと決められて買っていた。欲しいものが思うように手に入らず、精神的にとてもしんどかった。そんな時県外の友達からいろんなものが届き大変助けられた。交通の不便はすごかった。電車は動かなかった為、代替バスというバスで移動する日々が半年以上続いた。電車より何倍も時間を要し、通勤に大変苦労した。振り返ってみると、会社の修復のために何時間も掃除し助け合った。1人では嫌になってあきらめたくなるがみんなで一緒に乗り越えられたと思う。1年も経つと普通の生活に戻っていた。

私は、たまたま知り合いが亡くなる経験もせずに済み、復興した神戸で、今も何不自由なく生活しているが大切な人を失い、何十年も苦しんで生きてきた人がたくさんいることだと思う。経験で学んだこと。倒れてくる家具の近くで寝ないことや、災害時の火の元の注意、家族との連絡場所の確認、身近な人々との交流の大切さ、助け合いの気持ち、思いやりを、日頃からしっかり意識して生活することを考えていくことが被害にあわれた人から学んだこと。震災を忘れるということは災害時の意識を低下させ、予防をおこたるということだ。忘れずに生活することが、次の災害時に備える意識を保つことになると思う。

12 親の震災体験を聞いて

今回話を聞いて、まずこんな機会がなければ親にこんなにも深く阪神淡路大震災について聞いていなかったなと思った。環境防災科に入ってから何度か聞いたことはあったけど今回聞いたのはほとんど知らない話で驚いたし、父に震災体験を聞いたのは初めてのような気がした。そんな話をたくさん聞くことが出来て良かったと思う。でも、震災体験を振り返って幸いにも、母の知り合いに亡くなった方はいなかったから良かったけど、嫌な思い出を思い出させてしまうことだってあるから、たとえ親でもつらい思いをしている分本気で話してくれると思うので話を聞く側である僕たちも本気で向き合う必要があると思う。

環境防災科に入ってから阪神淡路大震災や東日本大震災を中心に学んできた。学んできたことは概要や詳しく勉強してきた。でも、どれだけ勉強だけをして意味がないことはないが、そこまで本気になれないと思う。そんなところでも環境防災科というのは外部講師を呼んで実際に体験した人から話を聞いて学ぶ事が出来る。それだけでも素晴らしいことだと。だから自分たちは真剣に災害や防災について学べるんだ。それとはまた違うものがあるのが親の震災体験を聞くことだ。いつも教えてもらっていることとは少し違った方向から話が聞けるし、いつもよりも細かい状況まで知る事が出来る。これはすごく大事なことだ。震災を体験した人にしかわからないことがたくさんある。それを聞くことで足りてないところが分かたりもするし、話を聞くこちら側もすごく勉強になる。なにより日本中の人が災害意識を高めるためにはみんなが興味をもつきっかけを与えることが大事だ。でもそんな簡単に興味を持つとは思えない。僕たちは環境防災科にきて防災について学んだりもしているし、ボランティアにも参加できる機会を大人が用意してくれていて成り立っている。だから、普通の震災を体験していない子供たちが興味を持たないのは仕方のないことだ。そこで頑張らなければならないのは親の方だと。僕たちみたいに学んでない人を一人でも救っていくには親が子供に話していくことが大切だ。そしたら興味を持つ人が増えるかもしれない。興味を持たなくても災害というものについての恐れというものも感じる事ができる。親の話なら誰であっても関係なく学べる。だからこそみんなが取り組めることだからぜひ取り組んで欲しいことだ。でも親が震災体験していない家庭もたくさんある。そういう人たちはもっと意識が低いと思う。そんなところには僕たちが伝えられる範囲で伝えることが大切だ。それを少しでも、聞いてくれた人が持って帰ってくれたら、子供から親へ伝えることもできると思う。環境防災科で学んできた中でつながりというのはすごく大切だと感じたのでそ

うやって、自分が伝えたことが少しでも広まってくれたらうれしい。そうして、伝えていくことは簡単なことではないけど、そうした人たちにこれから伝えていくことができるのも僕たちだと。僕たちが高校を卒業して進路は様々で全員が伝えていくことは難しいかもしれない。でも僕達は様々な仕事についてもどうしたら自分の仕事が少しでも防災につながるができるのかと考えている。消防や警察に行く人は考えやすいけどその他は、つなげやすいものもあれば、つなげにくいものもある。それでもつなげていき、将来に生かしていけるのが環境防災科で学んできたことだから考えられることだ。全てを学んだわけではないが、知識があるからこそその対策を考えることができるんだ。将来、少しでもどんな職業についても防災とつながられるようになればなと思う。

僕は高校生活の中でたくさんを経験してきた。まず何と言ってもボランティアに参加させていただけたことだ。これだけは他の高校ではなかなか味わえないことだ。最初は東北など大きなボランティアに行くことが大事だと思っていた。でもボランティアに参加していくうちに大きなボランティアをするだけがボランティアではないということに気づいた。学んでいくうちに、大きなボランティアをただするだけではなくて、小さなボランティアでもいいから続けていくことが大切だと思った。それを知ったのは地域の夏祭りのボランティアだ。最初は軽い気持ちでやっていた。でも準備をしていって、小さなボランティアだったけどすごく大変だし、こうやって準備をするだけでも地域の人たちと一緒に準備して交流をすることができるといったコミュニケーションをとることができた。僕たちとコミュニケーションをとることができるけど、地域同士がコミュニケーションをとれる場として活用することもできると思った。そして、夏祭りのボランティアをしていくなかでコミュニケーションがとれるし、子供自身が楽しんでいる姿をみるとやってよかったなと思えた。そしてこのボランティアには2年連続で参加した。自分自身がまた行きたいと思えし、継続することの大切さを味わったのでぜひやろうと思えた。2年目になると去年と同じ人がいて、覚えてくれていた人もいてそのときは来てよかったと思えし、すごく嬉しかった。今年も参加する予定だ。

小さなボランティアから継続することを学んだ。そして、僕がもう一つ学んだことは災害時要援護者の存在について学んだ。これは環境防災科に入って初めて知った。災害時要援護者がどれほど災害時に辛い思いをしていたか。僕はこのことがすごく気になった。どうしたら災害時要援護者を少しでも助けることができるだろうと。1つはやっぱり地域の助け合いだと思う。地域の周りの人がその人のことを良く知っておく必要がある。周りが理解するのは大変だと思うし1回あったぐらいで全てを知るのも無理だ。だから、防災訓練を行った時などに災害時要援護者になりそうな人は、実際に災害時要援護者として防災訓練に参加していくことが大切だと。その防災訓練を行うことが難しいと思うので、その場を与えることも僕たちがしていかなければならないと思った。僕自身も少しでも役に立ちたいと思う。僕は知り合いに中国の血を引いている人がいる。それがきっかけで中国語を学びたいと思ったし、覚えようと少しずつ頑張っている。大変だとは思いますが、中国語を覚えているだけでも災害時にも役に立てるし、多くの人を助けられると思った。そんなきっかけを与えてくれた知り合いに感謝している。もう一つ僕が覚えようとしているのは手話だ。これは外部講師でも来ていただいてそのころから興味があった。そして一番のきっかけとなったのは聴覚支援特別学校のボランティアだ。最初は子供がいると聞いてボランティアに参加した。でもどれほど耳が悪くて聞こえない状態が大変かを体験してからは真剣に取り組んだ。このボランティアには3年間行かせてもらった。3年目には津波マンとして参加した。僕は真剣に取り組んだ。子供のために真剣に怖がらせて津波というものが恐ろしいものと伝えたかった。自分なりには伝えられたので良かった。このことから手話を頑張りたいと思った。これからも少しずつ頑張りたい。

そして僕は消防士を目指している。今のままでは消防士になるのは厳しいと思う。でも必ず消防士になりたい。僕は環境防災科で沢山のことを学んできた。せつかく学んできたから少しでも多くの人に自分の持っている知識を広げたい。そのためには僕は消防士になりたい。自分が中国語を覚えようとしたり、手話を覚えようとしているのは災害時に役に立つようにするのはもちろんだが、自分は予防課というものに興味を持っている。そこで僕は積極的に防災訓練なども行っていきたい。その他にも自分の知っていることを話せる場を作りたい。そしてその話を日本語だけでは全員には伝えること

はできない。だからいつかは、中国語で説明したり、手話を使って説明できるような人になりたい。これができるのはすごい先になるけど、必ず実現させたい。

最後に今回の震災体験を書いてみて、自分は実際に阪神淡路大震災を体験したわけではない。でも、親からでも震災体験を聞くことができる。これだけでも自分は恵まれていると思う。実際に話を聞くだけで自分が今まで想像していた阪神淡路大震災をより詳しく描くことができた。これはほんとに大きなことだと思う。実際に体験はしていなくても、自分は体験した人の話から少しでも対策を考えることができる。そして自分から広げることができる。そうすることで、南海トラフでの被害を少しでも減らすことができるかもしれない。僕たちが生きている間に必ず起こると思う。僕たちが社会のリーダーとして頑張らなければならない時が来ると思う。そんな時にできるかわからないが何かはしたいと思う。これから、どんな人生が待っているかはわからない。そんな人生に油断せずにもっとたくさんのお話を学んでいきたい。今回話してくれた母と父に感謝したい。

母の記憶

大西 莉加

1 1月17日

(1) 5時46分

震災当時、私はまだ生まれていないため、父、母、兄の3人家族だった。家族は、東灘区・住吉に住んでいた。母は1月17日、早朝よりトイレに行きたくなり目を覚ました。「寒いし、暗いし、布団から出たくないな。」としばらく悩んでいた。すると、外の遠くのほうから『ゴォー』と地響きのような聞いたことのないような音が近づいてきたかと思うと『ドン・グラグラグラ』と大きな揺れに襲われた。左右に揺さぶられると同時に、隣で眠っている生後8か月の兄の上に乗ってしまうのだが、揺れに抵抗することはできず身をゆだねるしかなかった。外では、物が壊れていく大きな音が聞こえた。

(2) 揺れがおさまってから

揺れがおさまり兄の様子を見てから部屋を出ようと引き戸を引くと、目の前には食器棚の上段が出口を塞いでいた。家族が住んでいたマンションの道路を挟んだ向かいは、木造長屋だったが、外が明るくなってからその長屋を見てみるとぺちゃんこになっていた。車のライトで長屋を照らし男の人が誰かを呼んで探していた。いつも見ていた景色が全く違うのだ。部屋の中は砕けた食器や冷蔵庫の中の物、電化製品などが足の踏み場がないほど散らかっていた。隣の部屋は、タンスが倒れて部屋を占領し、タンスの上には揺れで引きちぎられた蛍光灯があった。押入れからは布団が飛び出し、窓際に置いていたテレビは窓を突き破りベランダに放り出された状態であった。外に出るまでにまた揺れが起こり、このまま家に居てはいけないと思い、前日に着ていた服を再び着て、子供の服も取り出し外で着替えさせた。今までの人生で、地震が起きたらガスコンロの火を止めて、机の下に隠れるということしか学んでこなかった母は、外へ出たほうがいいのか、どうすれば安全なのかが全く判断できなかったのだ。

(3) 避難してから

兄をベビーカーに乗せて、歩いて5分くらいの御影高校のグラウンドへ向かった。グラウンドまでの道中、ぺちゃんこになって歩道まで瓦礫がなだれ込んでいる家、1階部分が崩れて斜めになった家、誰かを呼んでいる人の声を聞きながら町中が大変なことになってしまったと思った。その頃には、朝日が出てきていて新聞配達の方がバイクに乗っている姿が非日常と日常の世界でなんだか変な気持ちがあった。グラウンドに着くと体育館やグラウンドに多くの人があった。母たちはグラウンドに行ったが、その中の1人の少年が今、自分が見てきた光景を興奮しながら話をしていて。しかし、その内容は「パジャマを着たおじさんが頭から血を流し、パジャマが血まみれになっていた。」とか「柱に挟まれたおばさんの上半身だけ見えた。」など耳を塞ぎたくなるようなものだった。何が起こったのか、どこがどうなってしまったのか、訳のわからないまま兄を膝に抱き身の凍てつくような寒さの中、時間だけが過ぎていった。それから、近所の大手ハンバーガーチェーンの方がグラウンドに来られて「今日は、営業ができなくてパンが無駄になるから。」とパンを配ってくださった。そして、「家の炊飯器にご飯が残っていたから。」と顔も名前も知らない婦人がくれたおにぎりがとても嬉しかった。兄は離乳食の途中の時期だったため食べる物がなく、ぐずると母乳をあげていた。真冬の1月、寒いグラウンドでの授乳は辛いものがあったが、このような現状でも騒がず、安心した顔でいつものように母乳を飲む兄に元気をもらえた。

(4) 人の死

グラウンドの出入り口付近から数人の方たちが何かを運んできていた。「どなたかお医者様や看護師さんはいらっしゃいませんか？誰かお手伝いしてくださる方はいらっしゃいませんか？」と呼びかけていた。畳で運ばれてきた老人だった。父は「行ってくる。」と言ったが、母は度重なる余震の中、不

安で仕方なく「行かないで。」と言った。母には、他人に手を差し伸べる余裕などなかったのだ。この老人に対して人工呼吸や心臓マッサージがされていたが、しばらくして、首を横に振っている人。腕時計を見ている人。その出来事は、同じ空間で起きている感じがしなかった。今思えば、あの日は朝から1台も救急車のサイレンの音を聞いていなかったと思う。

(5) その日の夕方

日が暮れ始めた頃、家から持ち出した布団と毛布を持ち、体育館へ入った。体育館での余震は、全てのガラスやライトが揺れと共に『ビシビシビシ』と音がして、更に人々のざわめく声がするのでとても恐怖を感じた。底冷えで体が全く温もらず、寒くて眠ることができず、寝返りもできない状態だったのだが、「配給の毛布が来ました。」と呼びかけた声と共に非常灯の方へと我先にと向かう人達。危うく、寝ている兄の頭を踏まれそうになった。だが皆、母たちと同じように寒くて眠れなかったのだろう。しばらくして、「配給のパンが届きました。子供と女性のみ来てください。」と言われ頂きに行った。離乳食時期の兄の分はもらえなかったが。

2 1月18日

(1) 翌朝

日が明けてマンションへ持ち出せる日用品を取りに行った。2号線より南の方へくだった所にガスタンクがあったがそのガスタンクに亀裂が見つかり、避難勧告がでていた。そのためその周辺の大勢の方が避難所へ向かっていた。母たちは、荷物と共に朝8時頃に尼崎の父の兄宅へ向かった。道路はアスファルトが折れ重なり、崩れた家の瓦礫がなだれ込み、ブロック塀が崩れ、まともに走れる道ではなかった。大渋滞のため、いつもなら1時間もかからない道のりを半日かけて到着した。次の日の朝、テレビで初めて長田の大火災を知り、事の重大さを感じた。1か月ほど父の兄宅にお世話になった。父の兄宅へ来てから2・3日してから父は電車とバスで出勤していた。その周辺の家は倒壊した家もなくブロック塀が倒れたくらいで、お店もスーパーも営業していて、同じ兵庫県なのにこうも違うものなのかと、自分が体験した地震が嘘だったのかと思うくらい別世界であった。

(2) 大事な家族

この頃、猫を1匹飼っていたがマンションに置いてきてしまっていたので、父が2日に1回マンションに寄り世話をしていた。しかし、ある日マンションの入り口に貼り紙が貼ってあり「ベランダで鳴いているので保護しています。」という言葉と連絡先が書かれていた。その方にお礼の電話をし、事情を話すと「大阪に住んでいて全く被害がないので預かってあげて。」と言ってくださったのでご厚意に甘えさせてもらった。

それから、西明石に住んでいた母の実姉家族が実姉の方が気を遣わなくて済むのではないかと伝えてくれた。叔母の所は、猫も飼えるように大家さんに話もしてくれいて、これでようやく家族が揃うという喜びで西明石へ行った。数日して落ち着いた頃、猫を迎える準備をし、会える喜びでいっぱいであった。預かってくださっている方へ迎える状態になったことを伝えると「情が移ったので返したくない。あなたは地震の中、置き去りにしたでしょ。」と返す気が全くなかったことを告げられた。どれだけ説得しても聞いてもらえず、2度と会うことが出来なくなってしまった。母にとって地震が起きてからの、何よりも大きな失ったものだった。

3 最後に

(1) 1歩

日常生活が一瞬にして崩壊され、このままどうすればいいのか答えがわからないまま過ごす日々。空家賃を支払うのがもったいないからと住吉のマンションを解約してしまい、戻れないし進めない、本当にどうすればいいのかわからなかった。身内でも同じ屋根の下で住まわしてもらうのは、日が経つにつれ心苦しくなっていくものだ。そうすると、夜になると過呼吸になるという最悪の日々になった。このままではいけないと、知らない土地の駅周辺の不動産めぐりという目的が出来た。この頃、不動産は個人名義で貸してくれる物件がほとんどなく、会社名義でまだ建設途中のマンションを契約

することができ、1歩を踏み出すことができた。

(2) これから

心に負った傷はまだ治っていない。しかし、1度きりの人生、後悔のないようにしたいと思うようになった。「乗り越えられない試練を神様は与えない。」この言葉を忘れずに時間がかかっても前に進んで生きていきたい。

4 感想

(1) 環境防災科に入った理由

私が環境防災科に入った理由は、母の勧めがあったからである。小学生のときから「しあわせ運べるように」を歌ったり、道徳の時間などで当時の写真を見たりして関心はあったが防災にそこまで関心はなかった。1月17日くらいになると母から話を聞いていたが「地震って怖いな」と思うくらいであった。それから中学3年生になり、進路で悩んでいるときに母から「こんな学校があるよ。」と教えてくれた。新聞やテレビで環境防災科が紹介されると教えてくれて、そこからどんどん興味が湧いた。興味を持ちだしてから母に自分から阪神・淡路大震災のことを聞くようになった。だが当時、私は塾に通っていて塾の先生に環境防災科入りしたいということを伝えると、塾の先生に「環境防災科は消防士になるために行く学校。女の子には向いていない。」と言われた。それでも私は、環境防災科に入って防災のことが学びたいと思った。

この“語り継ぐ”を書くときになぜ、あのときに環境防災科を勧めてくれたのかを聞くと「自分が震災を経験したのが1番大きいと思う。環境防災科が何をしているかなど詳しいことは全然わからなかったが、震災の後にできた学校だからそこに入れば防災の勉強ができると思った。あと、自分が被災したときはまだボランティアが全然なくて避難所で困ったから環境防災科でそういうことも学んで、もし災害が起きたときに率先して避難所運営ができるような人になってほしいから」と話してくれた。

(2) 母の話を聞いて

環境防災科に入る前から阪神・淡路大震災の話は聞いていたし、東灘区の被害状況がひどかったことも知っていた。しかし、ここまで詳しい話は聞いていなかったし、まだまだ勉強不足だということを感じた。詳しく聞かないとわからないことがたくさんあるのだと気付いた。

19年経った今でも、震災当時のことを聞くとたくさんのお話をしてくれてどのような話も全部、鮮明に記憶に残っているということが伝わった。兄とは、よく喧嘩するがこのような厳しい状況のなか8か月という小さい体でよく耐えてくれたなと思う。大変な状況だったが母が頑張れたのは、兄のおかげでもあるのではないかなという気がした。それと、今、父がいて母がいて兄がいるというのはいろいろな偶然が重なるなどして、奇跡のようなものなのではないかなと思った。もし、地震が起こる前に母がトイレに行っていたら、避難所で兄の頭が踏まれてしまっていたら、死んでいたかもしれない。そう思うと、今も生きて元気に生活できているのは本当にすごいことなのだと思う。

(3) 家族

人生はいつどうなるかわからないというのは生活していてときどき思うが、動物も同じなのだと思った。私の家は今、犬2匹と猫を1匹飼っている。動物は私が幼稚園のときから飼っているの、帰ったら家に居ることが当たり前のようになっている。今、飼っている動物たちが死んでしまうのは言葉では言い表せないくらいとても悲しいことだが、大事な家族だから最期まで見送ってあげたいと思う。しかし、それができなかった母はどのような気持ちだったのかなと思った。普段の母を見ているとすごく動物が大好きなのが伝わってくる。そんな母の当時の気持ちを考えると、まず、置いてきてしまったことをすごく後悔しただろう。生きているのに会えない。どこにいるのかもわからない。会ったこともない人に大事な家族をとられた怒り、悲しみ。いろいろな感情があっただろうと思う。最初は預かってくれると言っていい人だと思ったのに、情が移ったからと言って返してくれなくなって、最初のいい人というイメージはなくなった。情が移ったとしても人の家族をとるといえるのはおかしいし、母たちも置いてきたくてマンションに置いてきたわけではない。過ぎてしまった

ことだから、いろいろと言っても仕方ないが、どんな状況でも相手の気持ちを考えることが大切で忘れてはいけないことだと思う。猫をとった人も動物が好きだったのだろうと思うが、母のことを考えると動物は癒しにもなるから返すべきだと判断できたのではないかなと思った。

(4) 伝える

そして、今回の“語り継ぐ”を通して聞いて良かったと思ったと同時に、母から聞いた話を私が聞いて終わりにするのではなく、これを読んでくれた人はもちろんだが、これから生まれてくる人にも伝えていきたい。授業でも伝えていくことの大切さを学んだ。だが、伝えていくことはそんなに簡単なことではないなとも思う。今は、環境防災科という居場所があって発表させてもらえる機会をつくってもらっているが、これからはそういうのは自分で見つけないといけない。伝えていくというのは、発表することだけがすべてではないと思うし自分のできる範囲で伝えていきたい。そして、結婚ができて子供ができたなら母から聞かせてもらった話をして次の世代へ残していきたいと思っている。

母は「震災が起きると被災者には全然、情報がまわってこない。」と言っていた。被災地外の人にはテレビや新聞などのメディアから被災地の情報を得ることができるが、被災地ではライフラインが止まってしまっているため、情報が得られなかったようだ。今は、SNSがあったり、阪神・淡路大震災がきっかけで防災に関心を持って、非常用持ち出し袋の中にラジオを入れたりしている人も多いかもしれないが当時は、そういうのが全然なかったのだと思う。情報が全然ない中で生活は不安だらけだっただろうと思う。だから、震災のことを伝えるのと同時に情報収集の大切さも次の世代へと伝えたい。

私は、震災当時はまだ生まれていないため、母から聞いた話や、授業で学んだことを伝えるということしかできない。それでも、伝えていくということをやめてしまったらどんどん風化していつてしまう。そんなことは嫌だから伝えるということしかできないが、風化させないためにもいろいろな人に伝えていきたい。

(5) 私の将来

今、私の将来の夢は2つある。1つ目は、環境防災科で防災や減災のことを学んでもっと知りたと思うようになったから、防災のことが学べる大学へ進み、災害に強い地域づくりをすることだ。授業で災害時は地域に住んでいる人同士の助け合いが大事ということがわかったが、私が住んでいる地域は防災訓練もないし、地域の行事もあまりないため地域に住んでいる人同士の付き合いが薄い。付き合いが薄いと、災害が起きたときなどもしものときに助け合いができない。だから、大学でも防災や減災のことを学び、自分の住んでいる地域から災害に強い地域づくり、まちづくりをしていきたい。

2つ目の夢は特別支援学校の教員になることだ。この夢は、様々な特別支援学校との交流のボランティアに参加させてもらってなりたと思うようになった。障がいがあるから災害時に命を落とすということはなくしたいと思った。だから、自分で命を守ることの大切さを伝え、児童や生徒の命を守ることができるようになりたい。そして、障がいがあるからいつも守られる側、助けられる側になるのではなく得意なことや、できることを見つけて助け合える関係をつくれたらいいと思う。また、生徒や児童に阪神・淡路大震災のことを伝え、その親にも伝えて防災に興味を持ってもらえるようにしたい。

入学当初は幼稚園教諭になることが夢で、2つとも高校生になってできた夢である。どちらにするかはまだ決めることができていないが、ずっと防災には関わっていたいと思う。

(6) これから

どのような進路に進むとしても楽しいことばかりではない。だから私は、しんどくなったときや辛くなったときは、母が教えてくれた「乗り越えられない試練を神様は与えない。」という言葉を出したいと思う。この言葉は、私にとってすごく元気になれる言葉になった。

今回、母から震災のことを聞いて改めて母はすごいなと思った。震災で失ったものもあるし、心の傷も負ったが負けずに生きてきた。だから私は、母のような強くて、優しく、自分の意思をきちんと持って、広い視野で物事を考えて、気遣いがしっかりできる人間になりたい。そして、環境防災科で3年間勉強させてもらったり、ボランティアで経験させてもらったりしたことを忘れずにいたい。

阪神淡路大震災 ～語り継ぐ1. 17～

岡那 小春

1995年1月17日5時46分。あの阪神淡路大震災が起こった。現在高校3年生である私は、もちろん生まれていない。だが体験していない私たちも、この日を決して忘れてはいけない。

1 ここは全然被害はなかった ～家族の場合～

私の家族は、現在と同じ、神戸市北区に住んでいた。神戸市と言ってもほとんど三田市と隣り合わせの場所に位置しており、田んぼや畑が多くある自然豊かな場所だ。

(1) 同じ「神戸」なのに。

ゴゴゴ…という音とともに家全体が激しく揺れ……る、ということにはなかった。震度4程度の小さな地震で、避難所が設置される・避難勧告が出るということもなかった。寝ていた時に地震が起こったが、「あ、地震かぁ〜。」という程度だった。机の上から物が多少落下し、数時間の断水と停電が起こった。あと起こったといえば落雷ぐらいだったという。

(2) 「震災」だからといって変化はなし。

家族内で特にけが人などは出ず、母は普段と変わらず仕事へと出かけた。道は交通渋滞が起こっている等ということはなく、震災前と同じく閑散としていた。

母の当時の仕事は、パチンコ店の事務だった。今までと変わらず通勤をし、職場の友人と「(神戸の)向こうの方、大きい地震だったみたいやね〜。」と互いに言い合った。そしてパチンコ店には震災が起きたばかりだからといってお客が来ないわけではなく、普通にお客はたくさん来たという。

(3) 後世に伝えたいこと ～今後変わるのは何ものでもない、私たち「人間」。～

震災当時、震度4程度で、数日の断水・停電、机の上からの落下物程度のものでした。でも神戸の街や宝塚方面では、もっと大変なことが起きていました。何日もしないと、本当に毎日、何も変わらず出勤・勤務していたので、テレビの世界でしか大変さは伝わりませんでした。

“人々の助け合い・あたたかさ…”人は人でしか救えないのかもしれない。壊れた街をなおすのも人間だし。人と人との関わりは、人生を大きく変えるものだと思います。傷つけあうのも人間だし、励ましあう・助け合うのも人間同士。人間は自然には断然太刀打ちできません。地球が怒らないように、大切にしていけないと、思うこともあります。時代の流れで人々の考え方も変わる中で難しいことかもしれないが、「自分さえよければ」という考えのない社会になればいいと思います。

2 ～三木市に住んでいた方の場合～

私は妹の幼稚園の友達の母親であり、母の友人でもある、当時三木市在住の方にお話を伺った。

(1) 偶然早く目覚めた、その直後。

震災の時は三木市と神戸市北区の市境の住宅地に住んでいた。神戸の中心街や、激しい揺れを経験した土地とは比べ物にならないくらい被害は小さかったが、今までで経験したことの無い揺れだった。

偶然、揺れる前に目が覚めました。「何時かなあ。」と思っていると、「ガーンッ」と大きい音が鳴り、激しく揺れ始め、棚のものがガタガタ揺れて落ちてきた。「これはただ事ではない。」と思い、布団を頭まで掛けた。揺れが収まって家族が起きてきて「すごい揺れだったなあ。」と話していると、揺れ戻しが来て、激しい揺れではなかったのだが動揺して、倒れた花瓶の水で滑って転んでしまった。停電になってしまったので、とにかく明るくなるまで待つことにした。

(2) 一部ライフラインの停止、でもテレビは見られる。

明るくなると、近所の人たちがみんな出てきて、「すごい揺れだったね。」と話したりしていた。ところどころ地割れしてはいたが、車は通れる状態だったので、車で街の様子を見て回ったりする人もいた。水道・ガスはまだ止まっていたが、電気は結構早く回復していたのでテレビを見た。最初は東

海地震だと言っていた記憶があった。神戸の中心街の方は家がつぶれ、橋が倒れている様子が報道されていて、こことは比べ物にならないくらい被害があったのだとわかった。

当時、私は三木市の中心街の方に勤務していたので、小野から勤めに来ている人も多かったので話を聞くと、私の住んでいるところよりは揺れは小さかったようだった。加古川に住んでいた人は、さらに微震だったようだ。だから会社はいつもどおりに稼働していた。

(3) ライフラインの復旧。

私の住んでいた街は倒壊するような被害はほとんどなかったのですが、すぐにライフラインの復旧工事が始まっていた。道路の地割れもすぐ直しに来ていた。震災当日の夜は神戸のFM放送を聞いていた。なすすべもなく、ひたすら燃えていると言っていた記憶がある。

1日で電気もガスも復旧したので、何の不自由もなかったのだが、今ほどインターネットやボランティアといったものが普及していなかったので、「隣の街はひどいことになっているなあ」といった感覚だった。

(4) 変わりつつある神戸の街。

三木市でも神戸に近いところだったので住宅街ばかり増設されていたが、防災を研究するための施設が造られて大きな公園もできたので、自然的にも前より良い環境になったと思う。みんなが地震や災害について真剣に取り組むようになったと思う。私が小学生のころに山崎断層が活発化して、結構頻繁に阪神・淡路大震災の時ほど激しくはないが揺れた。そのころはまだ「関西に地震は来ない。」「収まるのを待つしかない。」といった感覚で、揺れて机の下に入った子を見たらみんな笑っていた。人が亡くなるような地震はまず来ないといった感覚だった。

(5) 善心と出来心。

当時私が勤めていた職場は、給食弁当の会社だったのだが、震災で三木市の方に避難してきた人が同じ職場の人の知人だったので、炊き出し用のおにぎり作りを手伝っていた。どんなに悲しくて辛かったかもしれないのに、みんなのために頑張っていた。

少し腹が立ったというか、まだボランティア精神が定着していなかったからかもしれないが、炊き出し用のおにぎりは神戸市からの要請で、おにぎりの需要があることを知った幹部は、自分たちも会社で作って売ることを思いついて行なっていた。すぐに人気は落ちたものの、一番困難な時に商売をするのはいかなるものかと思った、という。

(6) 実際体験してわかる恐怖。

阪神淡路大震災を経験するまで、地震が怖いとは思いませんでした。東日本大震災を見るまで津波が怖いものと分かりませんでした。戦争や交通事故、犯罪被害の恐ろしさも体験や実際に目の当たりにしないと本当の怖さは分からないのだらうと思います。なってからでは手遅れですから、時々自分や自分の愛する人々がそのような被害に遭ったらどうなるのだらう、どんな気持ちなのだらう、自分だったらどうするのだらうかと、自分に置き換えて考えてみることもいいのではないかと思います。

3 お話を伺って。

「語り継ぐ」をきっかけに、改善すべきことや反省することなど、様々なことを感じた。

(1) 自分の地域にある良さと脆弱性。

私の住んでいる地域は地盤が比較的柔らかい。諏訪先生の授業の中で地盤のお話が出て、舞子高校の近くは地盤が頑丈だと知り、自分の地域はどうなのだらうと思い、調べてみた。すると、かなり柔らかいことが分かった。確かに周りに海や大きな建物がたくさんあるところではない。田んぼや畑に囲まれている田舎である。それも原因の一つかもしれないが、最近よく住宅地がたくさん建設されるようになった。今は高速道路の建設も行われている。そのような森林破壊までして行う都市化開発も原因に含まれているのではないかと思います。地盤が緩いほど、災害での被害は大きくなる。ただ、地盤に関して正直、私は何もすることができない。開発をやめたからといって地盤は強くなるし、防災に最もつながる方法ではないと私は思う。地盤が弱くても、ほかの面で防災を行っていくことが大切だと感じた。

また、防災訓練も地域単位で行うことが大切だと感じた。学校でのボランティアで参加した「多聞南地区防災訓練」では、消防などの協力もある定期的な防災訓練を行っている。消火訓練や救急への通報体験が防災訓練の内容の一環だった。私や私の地域では学校で授業の中で行うだけで、地域で行うことはない。学校で行っていても地域の方も参加できるものでなければ、災害の時には少しばかり役に立たない。多聞南防災訓練を通して、地域と一体となって行うことが重要であり求められると感じた。

学校でおこなっていた訓練といっても避難訓練や火災訓練で、あらかじめ「何時何分に放送が入ります。」と伝えられている。でも、それでは意味がないと思う。本当の災害の時は時間が決められておらず突然起こるものなのだから、訓練でも突然行なったほうが緊張感を持つと思う。実際舞子高校で予告なしに警報が鳴った時は焦ってしまった。人工煙だと分かったのも外に全校生徒が集まった時だった。あらかじめ放送で知らされていた訓練とは違い、緊張感があって、これこそ本来あるべき防災訓練の形態だと思った。

災害時に重要となってくる要素の一つは「地域内での日常的なコミュニケーション」である。誰が何処の辺りで寝ているなどという情報を住民が互いに理解していれば、生き埋めになってしまった方の救出作業も迅速化できるかもしれない。方が一避難所や仮設住宅が設置されて避難せざるを得なくなったときに、孤独にならなくてよくなるかもしれない。必ずしもそうとは言いきれないが、地域内で交流が深いか浅いかではだいぶ変化があると思う。私の地域は子供会やクリーン作戦、花植えなどの地域行事が割と多めだ。地区単位ではあるし少人数だからかもしれないが、そういうところで交流はできているのではないかと思う。だが、いざという時には他人事になってしまう時がある。だから、いくら地域行事を頻繁に行なっているとはいえ、災害時に皆が協力していけるのかは不安である。

(2) 信じられないほどの震災当時の防災意識の低さ。

私が最も信じられないほど驚いたのが、「揺れて机の下に隠れた子は笑いものの対象になる。」というお話だ。阪神淡路大震災が起こるまで防災意識は高くなかったことは授業内で学習したこともあって知ってはいたが、まさか「笑いもの」であったとは思わなかった。いまではその行動に+αで「机と椅子の脚部分を持って固定する」というのが加わったほどだ。机の下に隠れるという対処法を知らない人がいたとしても、決して笑いものにすることだったとは思もしなかった。そのように地震が起きた時の対応を怠って笑っていた人たちも含めて大勢亡くなった災害だったのでは、と思う。

災害直後にしても、大した被害のなかった人々は普段通り仕事に行く。そして「神戸の方は大変らしいね」と客観的に話し合う。テレビを見たりラジオを聴いたりする。でも長田などの中心街では大火災が起こり、交通網の渋滞が起こる。避難所が設置され、多くの人が避難行動をする。ライフラインの止まった不自由で過酷な生活が始まる。大きな被害を受けて大変な状況下にあるなかで、まるで他人事で普通の生活を送ることができた。ましてや、お話しを伺った三木市の方がボランティアとして炊き出し用のおにぎりを作っているのを知って、同じようにおにぎりを作って「売る」人がいた。そのような人々の意識の差や、ボランティアでやっていることを自分の利益としてやる人がいたことに、すごく悲しいことだと感じた。今でも災害が起こると舞子高校などの団体らが募金活動を行うことがあるが、またそれも自分の利益にしようと募金詐欺を行う悪人もいる。しかしそのような状況下でも「大変な災害があったから何か支援できることを」と募金活動という形で支援しようという積極的な取り組みは、阪神淡路大震災をきっかけにできた「ボランティア元年」以降、徐々に広まってきていると思う。それは良いことだが、まだ利益を目的とする人は何人もいる。事故や殺人などの犯罪が無くならないのと同じように、これもまた悲しいことだが無くなることはないだろうと思う。でも、震災前と比べるとボランティアや防災意識は高まっており、「ボランティア元年」はまさにそうだと感じた。来年で阪神淡路大震災から20年を迎えるが、その節目に防災がより懸念されるきっかけになればと思う。

(3) 今、自分がやるべきこと。

阪神淡路大震災についてのお話を伺ったことで、自分が防災対策をまったくできていないことがいかに危険なことであるかが分かった。環境防災科に入って防災を学ぶなかでたくさんのやるべき防災

対策についても学んできた。学ぶたびにやるべきだと思っはいるが、実際は何一つ行動に移せていない。百円の店で買ってできる家具の固定さえもできていない状態にある。家具も入口に物は置いてはいるが、ベッドの頭側の隣には大きな本棚があるし、電気や窓もある。家具の配置の工夫や固定を行うだけで助かる確率は高くなるのに、私の家庭は一切できていない。防災を学んでいるのに何もしていないことに焦りや危機感を感じる。色々な場面で防災の大切さを他の方に教える立場でもある自分が、口だけになってしまっていることに罪悪感のようなものを感じる。どんなに学んでそれを伝えていても、結局は自分ができていなかったら意味がないし説得力もない。今すぐ実践できるかは正直未定ではあるが、徐々に家具の固定や配置の改善から行動へと変えていきたいと思う。

私は将来、防災関連の仕事に就くわけではない。卒業後は社会人になる予定なので、東北などの被災地に出向く機会も作れないし、誰かが作ってくれることもない。自分で行動しなければボランティアを行なう機会はなくなってしまう。だから、まちで募金活動を行なっていたら募金するなど、身近なところ・何らかの形でボランティアや防災に、今後も関わっていききたいと思う。

語り継ぐ

越智 友暉

1 家族構成

私の家族は当時西区に住んでいた父と母、北区に住んでいた叔父と叔母、そして母の妹が長田に住んでいた。

2 1月17日

母と父が住んでいたのは西区のマンションの9階だった。ドーンという音とともにたてにドコドコと揺れたそう。母と父が寝ていた場所がタンスと鏡台の間であった。そして揺れによりタンスが倒れてきたが鏡台が台となってタンスの下敷きにはならなかったそう。偶然にも下敷きにはならなかったのが助かったと言っていました。揺れが収まり部屋を見渡すとタンス、テレビ、食器棚、冷蔵庫あらゆるものが散々になり、足の踏み場がないくらいガラスの破片だらけだったそう。2次災害を避けるため1時的に車に避難したそう。あたりは暗く、体が震え恐ろしきでパニックになった。身内の安否確認のため北区の実家にいった。北区の実家へ行くのに普段なら40分のところが渋滞で3時間かかった。

北区は被害は少なく大丈夫だったそう。西区の自宅はライフラインが寸断されていたが、北区は大丈夫で、北区の実家で住んでいた。

3 父の話

父は当時仕事をしていた。阪神淡路大震災が起きた日も仕事に行った。いつもは電車などで行っていたが地震で行けないので自家用車でいった。仕事に行き帰る途中にスーパーに行ったが何も残っていなかった。ガソリンがなくなりだしたところ、三木のガソリンスタンドに行った。家の周辺ではガソリンも無くなっていたが、三木のガソリンスタンドはレギュラーガソリンは無くなっていたが、ハイオクガソリンは残っていて、レギュラーガソリンの値段で売ってくれた。次の日も会社に行ったが水が出ないのでトイレができなかった。電気もきいていなかった。なにもわからないままお得意先に行ったといっていた。お得意先の会社では水が通っていて水をたくさんもらえたといっていた。次の日から仕事ができないので、一週間休みになった。休みになったが、会社からお金をもらえたといっていて助かったそう。仕事がない間に友達の安否確認をしにバイクであちこちを回ったといっていた。幸い友達で亡くなった人はいなかった。回ってっていると、大丈夫だった人から食べ物をたくさんもらえたといっていた。当時の家では自衛隊から水を貰うのに2時間かかっていた。近くではカップラーメンを1000円で売っている人がたくさんいた。当時はそれでもたくさんの人が買っていたそう。近くのお風呂屋さんがお湯をだせたので、無料で提供していた。近くの新幹線の線路が崩れ落ちていたのはすごく驚いたといっていた。父は前の日に北海道に地震がおきていて、明日地震おこりそうやなーって言っていたら起こったのでびっくりしたといっていた。

4 母の妹

母の妹は震災当時長田に住んでいたのだ。母の妹は震災が起きた当初家に銃で撃ちこまれたと思ったくらいびっくりしたそう。隣に住む方の旦那さんか夜勤でいなくて幼い子供三人連れて泣きながらうちにきた。電話も通じず北区の義理の兄が心配して、車は大渋滞だったのでバイクできてくれた。長田区丸山町に住んでいたので駐車場から山の上の方を見ると火の粉が散ってこちらまで舞ってきていた。私はお腹に子供がいたので心配ですぐに病院で検査をしてもらった。しばらく水も電気もガスも使えなくて北区の実家でしばらく過ごしていた。

5 祖母の話

忘れもしません、19年前の朝、1月17日午前5時46分。

激しい縦揺れとともに布団からとび起きた。「地震だ。」という主人の声で震えが止まりませんでした。テレビをつけると娘（母の妹）の住んでいる長田の方が火災で次々と燃え上っていたのだ。電話も通じなくなり情報が何もわかりませんでした。幸い祖父母の家は一部損害ですんだそう。だが、神戸市内ではビルや商店が多く倒れ電気もガスも復旧が進んでいませんでした。でも今思えば人間の力は強い。震度7の地震にも一人一人が立ち向かってゆく姿は天災も乗り越えました。

これまでの教訓を生かし災害に備え自分を守るのは自分自身しかいない。この災害で私たちは大きく生かされた。

6 祖父の話

1日目 有馬街道は土砂と木々の倒壊のため仕事にはいけなかった。

2日目 勤務先の六甲アイランドはガス漏れがあり出勤できなかった。

3日目 ようやく出勤できたが、仕事はできず社員の安否確認に没頭した。社員2名が亡くなっていた。1人は文化住宅の倒壊により圧死。もう一人は家具の倒壊で亡くなってしまったそう。

4日目 グループ会社からの救援物資が届き、水、食料、ガスコンロなどの配布に追われた。その後2か月ほど対応に追われ、仕事が再開したのは4月になってからだったそう。

7 三木に住む祖母の兄の話

三木に住む祖父の兄の家は半壊状態で住むことができなくなったそう。その兄は震災の前年に定年退職し、その退職金で風呂を新しく買い替えていたがその風呂も地震のためつぶれてしまったそう。

8 母の友人の話

この「語り継ぐ」の話を聞いたときに僕はひとりの母の友人の話を聞きました。その母の友人は両親を亡くしたそうです。阪神淡路大震災が起きた時に一緒に住んでいて、両親は1階、友人は2階で住んでいた。地震のタテ揺れの影響で家が倒壊し、友人とその方の両親は生き埋めの状態になった。その友人は数時間後に救出されたそうだが、その方の両親は救出されず、息を引き取った。その方の両親は即死ではなく生き埋めとなっており被災当時は「助けてくれ、助けてくれ」と声を出していた。1日がたっても救助はされず「助けてくれ」という声は次第に小さくなっていった。母の友人はその声を聴きながら少しずつ弱っていく両親の事を思うと心が苦しくなった。この話を母や他の人に話せるようになるまで長い時間がかかったそう。

9 感想

今回授業という形で親や親せきに話を聞いたが、今までは軽く聞くくらいで詳しく聞く機会はありませんでした。阪神淡路大震災を僕たちは経験していないが親や親戚に話を聞くことでこの震災の恐怖を再確認することができました。僕たちは生まれてなく、親のおなかにもいなかったわけで、もし親がいなくなっていたら僕はいなかったと思うとすごく怖くなります。「語り継ぐ」を機に阪神淡路大震災についてたくさん知ろうと思いました。母や父が感じた恐怖や人間の暖かさ、また人間の怖さについて聞きました。父からこういう話はあまりきかなかったけど今回を機に聞いて良かったと思う。友達の安否確認のために走り回っていたことなどは知らなかったけれど、そういうことをしたと聞いてすごいなと改めて感じた。母から前日はカレーやったと聞いてなんでそんなことを覚えているのか、不思議に感じたが、震災となると以外と些細なことを覚えているのかなと思いました。今でも使っている鏡台が震災の時はそれのお蔭で下敷きにはならずすんだと聞いた時にはすごい奇跡が起きたなと感じた。

僕は幸せ運べるようにという歌がだいすきだ。小学校の頃1月17日が近づくと学校で歌うことに

なっていた。小学生なりにこの歌を聞き、歌詞を見て、涙がでたこともあります。傷ついた神戸や傷ついた人達にはこどもの声が届くと思い制作された歌です。神戸の復興ソングとして親しまれてきたこの歌はすごく勇気が湧いてくる歌だと感じている。地震で亡くなった方々のぶんまで僕たちは大切に過ごしていかないといけないと思いました。たくさんの学校や、国で歌われるようになったこの歌は元気を与えてくれ、歌うことで、スッキリできる。この歌の歌詞からは神戸でおきたことから立ち直るためにすごく大切なことがすべて書いてあるような気がした。

中学生になり小学生の時のように震災について学校で勉強するという日はなくなりました。中3になり環境防災科を知り、阪神淡路大震災がきっかけで作られた学科だと知りました。受験することをきっかけに阪神淡路大震災について勉強をしてきた。そして環境防災科に入ることができ防災について勉強してきました。阪神淡路大震災についてたくさん勉強する機会をたくさんもらいました。3年生になり再び語り継ぐという形で深く阪神淡路大震災について学ぶ機会をもらいたくさん考えた。親から聞いた話を聞き、聞きたくないような話やここにはかけないような話をたくさん聞きました。日本は平和で助け合いをすごく大切にしてきた。しかしそれもそうだけど、やはり犯罪や避難所での醜い争いはあったとたくさん聞きました。テレビや新聞、教えてもらったことではあまりそういったことには触れていません。父から聞いて地震だけがひどかったんじゃないかと人間とのかかわりも被害を大きくさせたんじゃないかなと思いました。阪神淡路大震災は都市直下型地震でボランティア元年とも呼ばれた年だ。わからないことはたくさんあったと思いますがこの地震を機にルールやマナーをしっかりと確立することでストレスを少しでも減らせ、嫌な思いをする人を減らせたらいいなと思いました。僕はこの語り継ぐをして、どうしたらそういったことをなくせるか考えましたがなかなかいい方法は思いつきません。そこにはいろんな人がいるからすべての問題を解決することは難しいかも知りませんが今後もししたらいいか考えていきたいと思うようになった。

語り継ぐをするとき、母や父に話を聞き、おばあちゃんとかおじいちゃんからいろんな話を聞いているうちにもっと知りたいなと思いました。それでお母さんの妹とかにも話を聞くことにした。そこでたくさん話を聞きました。ちょっと聞きにくい話とかもやっぱりありました。でもそれを僕たちのような知らない世代に語り継いでいくことが大事なんだと思うようになった。親を亡くしたお母さんの話を聞いたとき、どんなふうに語り継いで言ったらいいのかわからなかったし、自分がその立場で立ち直れるのか正直わかりません。「助けて」という声が少しずつ小さくなっていく母を前にしたときの母の友達の心境や悔しい気持ちを考えるとすごく心が苦しくなりました。そういった方への心のケアというのはすごく大事なので心のケアの長期支援もしっかりとできる国になってほしいと思う。

阪神淡路大震災ではたくさんの方が亡くなった。長田では火事がたくさんおきた。建物がたくさん潰れた。阪神淡路大震災では様々なことが起きたくさんの人がなくなった。僕たちはまだ生きてはいませんでした。過去の災害から学ぶことでしか、その震災について知ることができません。僕は神戸で生まれ神戸で育ちました。神戸で起きた災害を知るということは僕たちの使命だと思う。だから、この語り継ぐということは大切なことだと思う。なぜ、語り継ぐということをしてはいけないのか。僕はまだよくわかりませんでした。ですが、震災について、知らない人が多くなっているなかでその震災を広め教訓を生かし風化させないことが大切なのだと思います。僕たち若い世代の人達が訴えかけることで、若い世代の人達からも読んでもらえるのだと思います。震災を経験していない、僕たちが広めていき、阪神淡路大震災が起きたことを忘れていかないようにしたい。

神戸では震災の爪痕というのは少なくなっていき、新しい建物がたくさん立ち並ぶようになった。今の神戸からは震災が起きたのだと思うことは少なくなっているなか、語り継いでいく人は少なくなっているの聞いた。なので、少なくとも環境防災科である僕たちが広めていくことで、風化させず、少しでも多くの人に知ってもらいたいと書き始めてから思うようになった。今回聞いたことや今までしてきた防災を今後にも生かしていきたいと思う。

僕は将来消防士になりたいと思っている。阪神淡路大震災では火事が同時にたくさん場所で発生しました。水が出ないところが出たりしたと聞き、以前よりは強くなったと思いますが、そういう面

でも強い神戸にし、阪神淡路大震災の経験を生かしていきたいと思う。消防士になったら、火災を未然に防ぐ予防課に将来的には入りたいと思っている。予防課では、防災を広めていくにはいい場所で、少しでも火災を減らすことや、地域で起こるかも知れない災害を減らすことをしていきたいと思っている。予防課にはいることができたなら建物についてたくさん知る必要があるし、法律についてももちろん、コミュニケーションをとれる人間にならないといけないと思う。

消防士という職業は防災を専門にしているといっても過言ではないほど防災のエキスパートである。なので、消防士になったら何が危ないとか地域の危険をたくさん知ることが大切だと思いました。そして地域の防災力を上げるために避難訓練などに力をいれてやっていきたいと思っている。地域の防災力を上げることが1番の防災になると思うので、消防士になったらそこに力を入れてやっていきたい。今後起こるかも知れない災害に対して勉強し、少しでもたくさんの人を助けられるような消防士になりたいと思っている。

私の母と父は阪神淡路大震災のとき、西区の岩岡町というところに住んでいた。そこには父のほうの祖父母と私のいとこ、そして親がスキーに行くためおいて行かれた当時1歳になっていない私の兄などが一緒に住んでいた。母のほうの祖母は若くして祖父を亡くしていたため、一人で垂水区泉が丘の団地に住んでいた。そして、母の姉は、埼玉県に住んでいた。

1 母と父の行動

阪神淡路大震災のとき、ちょうど母と父はスキーに行っていた。その日は夜に帰るつもりだった。のん気にスキーをして帰る車の中で神戸の事態を知った。いつもはラジオをかけないのにそのときはたまたまラジオを流していた。これでラジオを聞いてなかったら帰るのがもっと遅くなっていた、と母は言う。なんとなくしか情報は入らなかったらしいが、とりあえず、神戸が大変なことになっているということを知った。大急ぎで帰ったとき、もう言葉も出なかった。今まで知っていた町の風景ではなかった。よく写真でも見る、高速道路が倒れているのが最初に見た光景だった。あちこちから火がでていて、サイレンの音がすごかったらしい。

2 祖父母の行動

祖父は私が小学2年生のとき、祖母はまだ私が生まれていないときに亡くなったのでこれは母から聞いた話だが、祖父母は早起きなので、そのときも既に起きていたらしい。揺れ始めたときみんな起きていたため一回は安心したらしいが、よく考えると私の兄がいなかった。祖父母が住んでいた岩岡町は田舎だから家もすごく広い。そのとき兄が寝ていた部屋は、みんながいた居間の真裏の部屋だった。裏の部屋までは、長い渡り廊下がある。祖父は揺れがすごい中、倒れながら裏の部屋まで猛ダッシュで行った。バンッと部屋を開けると兄はベビーチェアの中でぐっすり眠っていた。あれだけ揺れていたのにそれでも寝ていた兄はすごい、と祖父は笑って言っていたそうだ。幸い震源から少し遠かったため被害は少なかったそうだが、いまでもその家に行くと震災によって傾いた居間のドアが勝手に開いたりするので、いつもドアの下に紙をひいて開かないようにしている。

3 祖母の行動

祖母は団地の一番上、5階に犬のうららと住んでいた。震災のときはいつもと変わらずベッドで寝ていた。ベッドの足元、頭上には大きなタンスがあった。寝ているといきなり地震がきて驚いてすぐに目が覚めたようだ。すると目の前がいつもの光景と違う。ものすごく暗い。なぜなら、そう、上下のタンスが倒れてきていたのだった。幸いだったのが、上と下両方にタンスがあった。しかもその両方が倒れてきていた。しかし、そのタンスは真ん中で重なって止まっていたようだ。うららはいつも必ず祖母の隣で寝ているのに、パッと見るといつものところにはいない。慌てて「うららー」と呼ぶと、どこからかひょっこりでてきた。たぶんだが犬の本能で危険だと思いどこかに隠れていたのかな、と祖母は言っていた。祖母はタンスの間に挟まって身動きがとれなくなっていた。うららはずっと祖母の隣で見守っていた。

4 全体

母と父は一番に母方の祖母のところへ行った。階段を5階まで上がり祖母の部屋へ入った瞬間の光景がすごかった。いろんなものが落ちて花瓶なども割れていたらしい。慌てて祖母の寝室へいったら、タンスが祖母を覆いかぶさるようにして倒れていて、一瞬もうおわった。と思ったそうだ。そのときタンスの下から、「ゆりちゃん。」と母を呼ぶ声がした。母と父が慌ててそのタンスをどかすとそこには元気な祖母がいたようだ。ずっとタンスの間にいたが、幸いどこも挟んだり打ったりもしてなくて、無傷だった。そのとき母は涙が出そうなくらい嬉しかったそうだ。母は祖母をひとりにしとけないと

思って、いるものだけを持って家をでて一緒に父の家に行った。

今思うと、祖母の家は滝の茶屋で海がものすごく近い。あの地震でもし津波が発生していたら、祖母は確実に助かっただろうと思う。

祖母の家を出て岩岡に戻ろうとした。しかし、高速道路は使えないし、下の道は家が倒れたりして、戻るのにどれぐらいかかったかは忘れたが、とりあえず、ものすごく時間がかかったようだ。やっとの思いで帰った頃はもうお昼、全員無事で、兄は相変わらず寝ていたようだ。これで全員そろった。

一安心して家の倒れたものなどを片付けていた。そのとき、家の電話が鳴り、でると埼玉に住んでいた母の姉の無事かどうか確認の電話だった。母の姉はそのとき、なかなか電話が繋がらなかったと言っていたようだ。

しかし、ライフラインはすぐにもどり、水などもすぐに使えて何の支障もなかったようだ。父は、バスの運転手をしていて、何回か会社に行ったが何もすることがなくすぐ家に帰ってきていた。

1週間してだいぶ落ち着いたので、滝の茶屋の祖母の家の片付けをしようと思い一旦戻ったようだ。しかし、今までの風景と全く違う、家のほとんどは焼け、慣れていた道なのに、全然違う道のように思ったようだ。帰って改めて家を見たとき絶望したようだ。団地自体はなんの影響もなかったが、家のドアを開けるとぐちゃぐちゃで足の踏み場がないぐらい、花瓶が割れていたり、冷蔵庫の中のもの飛び出していたり、タンスからは服が飛び出していてびっくりするぐらい汚かったようだ。見たこともないぐらいものが散乱していたらしい。どこから手を付けていいのかわからなくて1分ほど玄関で固まってしまった。と母と祖母はいていた。片付けるのに丸二日かかり、ものすごく大変だったようだ。

それからどンドン月日が経っていったが、その時の団地は、震災のときにひびがいていたところなど、私が小学生ぐらいのときにペンキで塗られて外見はまったく何もない団地になってしまっているが、私はひびが入っているのを見ていたので、他にもそういう家があるのかなと思った。

5 感想

私の家は母子家庭で話を聞くことができるのは母しかいませんでした。

中学校のときに初めて震災のときの話を自ら聞き、そのときに初めて生の震災体験を聞きました。最初はなんとなく聞こうかなーぐらいだったのにだんだん聞いているうちに、こんなにすごい体験をした人がいっぱいいるのだと言うことを知りました。

それから時々震災のときの話を聞くことが増えていきこの語り継ぐを書くときも、ほとんど中学のときに聞いて覚えていた話でした。母は「母はスキーに行っていて実際どんな揺れだったとか、そのときどう思ったとかはわからない。」と言っていました。でもそのあとの復興、復旧までの道のりをたくさん聞くことができました。車でかけているときなど、「ここ震災のとき崩れとってんで。」など、母は実際に体験していないからこそ冷静に周りを見て、ここは崩れている、などを覚えたと言っていました。実際体験していたらパニックで何も覚えていなかったのじゃないかな。とも言っていました。だから私は、震災を実際に体験した人ではなく、体験していないからこそ冷静に覚えている、そういう話を聞いてよかったですと思いました。

私の祖母も近くに住んでいるけど、そのときよっぽど辛かったのか、なかなか震災の体験を詳しく話してくれませんでした。だから、この話はほとんど母から聞いた話になってしまったのですが、祖母にもこれから何年かかってでもいつかは震災の体験を聞けたらいいなと思います。

それと父にも一年に1回会うか会わないかぐらいでちゃんと会話をすることがほとんどないけど、今度会ったときは震災の体験を少しでも聞いてみたいと思います。親だから聞けることもあるし、自分の父に対する苦手意識も少しでも無くすために、これを機会に聞いてみたいと思います。

私は阪神・淡路大震災のとき影も形もありませんでした。生まれてからこれまで一度も大きな地震などを体験したことがないので、阪神・淡路大震災がどれだけすごかったのかなど正直想像もできません。だけど母や周りの人、テレビでいまでも見て被害の大きさがものすごく良かったことがわかります。

母は運よくスキーにいらてなんの被害もうけなかつたが、もしこれでスキーに行つてなかつたらどうなつていたか分かりません。今ではこのときは運がよかつたという話になつています。これからどんなに大きな地震がくるかわかりません。このときに今までの経験を生かしてどれほど被害を減らすことができるかが大切だと思ひます。

両親の被災体験と語り継ぐ

工藤 丈太

1 母の被災体験

母が被災した所は長田区の吉田町にある母の実家である。5時46分まだ母は寝ていた。地震が起きた時何か爆発したような音がしたと感じた。揺れている間はすごく長いように感じた。隣に大きいタンスがあってそれが母の寝ているところにちょうど倒れてきた。しばらくは動くことができなかった。母は2階で寝ていて母の父母は1階で新聞を読んでいたり、朝ごはんの用意をしていた。1階から「大丈夫か」という声がして母は安心した。母にとって初めての震災体験だったため何が起きたのか整理することが難しかったそうだ。父と母が2階まで登ってきてタンスをどけてなんとか脱出できた。骨折や大きなケガもなかった。弟も一緒に実家で暮らしていたがケガなどもなかった。しかし家は壁に少しひびができて家自身が傾いてしまったそうだ。でも近所からは「助けて」というような声がたくさんした。消防車や救急車の音が鳴りやまなかった。母の父は近所に行って様子を見に行った。生き埋めになった人もけっこういた。母は長田の近くに住んでいたが長田方面の空は気味が悪いくらい黒かった。昼になっても空が明るくなることはなかった。そのわけは火事の煙で空が黒かったらしい。家が全壊や半壊した所も少なくはなかった。火事などの煙もあったらしい。火事などが起きたが火を消すことはできなかった。家は倒壊をすることはなかったけれど、地面に割れ目ができたり食器など割れていたりした。その割れた食器などのガラスが散乱していてスリッパなどを履いていなかったため足から血がでていたらしい。でもその足から血がでているのを気がついたのも遅かった。母の知り合いは何人かケガをしたりした。

でも幸いにも知り合いの方で亡くなった方はいなかった。母の知り合いの男の方は隣の家で火事が起きていて家が燃えていたのだが、その家の中に人がいた。しかしそれを見ていた男の人は焼け死んでいく人を助けることができなかった。その家で亡くなった方を助けられなかった悔しさが大きかった。それと同時に焼け死んでいく姿を目の当たりにしたショックがとても大きかったそうです。その男の方は震災後自分の職場を辞めて自分の田舎に帰ったらしい。

2 避難所

母と僕の祖父、祖母、母の弟は1日だけ近所の中学校に避難した。余震が多くて結構大きな揺れもあった。その余震の揺れが起きるたびに避難所に避難した方たちは「キャー」などといった悲鳴がわいた。中学校で広い中、家族を探す人がたくさんいた。そして余震がすごかったため夜も眠れなかったそうだ。トイレは悲惨な状況だったらしい。水が使えないために汚物を流すことができず、衛生的にも悪い環境だった(トイレ)。だから少し祖母はトイレが使えないことにイライラしたそうだ。避難所にストーブがあった。そのストーブは暖かく便利だった。母は温かい気持ちになるできごとがあった。それは炊き出しの人たちがたくさん来てくれたことだ。兵庫県の北の方面などの被害が小さかった地域の方たちが炊き出しをしてくださり、心が温かくなったそうだ。避難所に避難した方は炊き出しなど食べながら笑っていた方もいるし、泣きながら食べていた方などさまざまな表情があった。そして1日だけで避難所からでることができたらしい。家に帰ることができたが、揺れで散乱した食器や窓などのガラス関係を後片付けがするのが大変だった。近所の方が片付けるのを手伝ったりしてくれたりしてすごく助かった。近所の人に親切にしてくれた時は感謝の気持ちでいっぱいだったそうだ。阪神淡路大震災で大切なものや日常の生活を奪われたが近所の人たちとの助け合いによって絆はすごく深くなったそうだ。

3 父の被災体験

父は職場で被災をした。たまたまその日は朝はやく家を出て会社で仕事をしていた。そして仕事の

途中で揺れが起きた。近くにあったコピー機などが暴れだしてもう少しで衝突しそうにもなった。揺れが起きた時は少し上に浮きそうな感じがした。

父は机の下で隠れていたためケガなどもすることはなかった。しかし揺れが収まって会社の中を見たらパソコンや書類などがちらばっていた。父もやはり被災するのは初めてで恐怖感が大きかった。父は兵庫県には地震はこないだろうと思っていた。

外に出てみたらビルの窓が割れていた。父の実家は名古屋のため家族に電話をしようとしたがなかなかつながらなかった。父の知り合いにケガや亡くなった方はいなかった。僕の母や家族が無事だったことにとってもホッとしたそうだ。父の実家である名古屋の父の母や父に連絡がとれたときも心配してくれていてすごく自分のことを思っていてくれているのだなと暖かい気持ちになった。震災後に実家から食料や水、生活に必要なものを送ってきたりしてくれて、支えられているのだなと思ったらしい。

父も震災の当時の神戸の写真を見ると思い出すこともあるそうだ。父は仕事する状況ではなかったため会社の掃除や片付けが大変だった。

4 感想

僕は実際に阪神淡路大震災を経験したことがない世代だ。母が実際に被災した家を小学生のときに見たことがある。もうその家は壊されたがその家は壁にひびが入っていたり、地面にも亀裂がはいっていた。小さいときは何も思わなかったが今思えばその地震の揺れの強さがわかる。母は寝ていたときに被災してタンスなどの下敷きになって真っ暗の中どれだけ不安で怖い思いをしたのだろうかと思う。祖父母の家に阪神淡路大震災の写真がある。最近は祖父母の家に行けば、その写真を意識して見るようにしている。阪神淡路大震災を体験はしていないが語り継ぐには自分で勉強が必要である。こういう資料は減ってきているので過去のものを見てどういう状況だったかを写真で見ることができる。でも写真だけではわからないこともたくさんある。だから被災した方の話を聞くことは貴重なことである。それを見ると当時のときのことを想像すると静かで不気味な町になっていたと思う。

生き埋めになった人を助けるというのは消防や警察などの専門家に助けられたよりも地域の住民の人たちによって助けられたという事実がある。だから僕たち一般市民たちによる協力が大事ということがわかる。だから近所付き合いを日頃から大切にしないといけないと思う。あいさつなどでコミュニケーションをとることによって人間関係ができる。近所の人たちで助け合うというのは災害時の時命を守れて被害も小さくすることができる。必ず災害時はお互い協力しなければ命をつなぐことはできない。だから日頃の生活が防災にはつながるのだ。耐震化するのは費用などの問題があり難しいことである。けれど水やカンパンなどといった非常持ち出し袋の用意、あいさつなどをしてコミュニケーションをとることは誰にでもできるのだ。こういう行動で被害を小さくすることができる。母の知り合いで人を助けることができなくて、亡くなっていくところを実際に見て仕事を全部やめて田舎に帰った人がいる。そういう心に大きな傷を負った人もたくさんいる。そういう人たちの心のケアを長期的に行うことが大切なことであり、震災関連死を防ぐことにもなるのだ。そして社会復帰にも大きく関わる。心のケアというのは具体的に話を聞くことやマッサージをする。1番大切なことは寄り添うことであると思う。

母の避難所生活は1日だけだったが余震などで眠れなかった。でも炊き出しなどをしてくれた人たちによって心は落ち着き安心感があつたと思う。被災していない方たちが助けるというのはその被災した方を勇気づけると思う。信頼関係も生まれるし、絆がよりいっそう強くなる。避難所での改善点はトイレ掃除をすることである。トイレが汚れていればストレスもたまるし、衛生的にも問題がある。だから過ごしやすくするためにもトイレ掃除をすれば清潔で落ち着くと思う。防災のことに興味、関心を持てるように伝えていかないといけない。阪神淡路大震災を経験したことがない世代にこれらになっていく。風化させずに阪神淡路大震災でえた教訓を次の災害にいかしていかなければならない。外部講師の方が言っていた。「耐震や家具の固定などの準備をしていれば4000人の犠牲者を減らすことができた」と。父母はまさか神戸に地震がくるとは想像もしなかったらしい。当時は防災や災害

のことなど興味を持っていなかったと思う。自然災害をなくすというのは現実的に考えて不可能なことだ。でも犠牲やダメージ最小限にすることはできる。そのためには地域防災を強くすることがとても大きいことであり重要なことである。地域で防災教育などを行い1人でも多くの方に防災について興味、関心をもってもらいたい。防災を伝えるのは簡単なことではない。障がいがある方や小さい子供や高齢者などといった避難するときに不利な方にとってどうすれば伝わるか、方法も大きく変わってくると思う。でも伝えないと災害が起こったときに大変なことになる。間違っただけを教える命にかかわることになればどうすれば、取り返しにならないことになる。だから伝えるほうも責任重大であり難しいことである。だから日頃の授業を大切にしないとイケない。分かりやすく、そして正確な防災の知識を伝えていきたい。

ボランティアをして自分が満足していても被災地の方に迷惑をかけてしまえばボランティアではなくなる。相手のことだけを考えて行動しなければならない。現地に行けばボランティアのことだけを集中する。ボランティアをやってあげているという考え方ではなく、さていただいているという考え方で行動する。募金活動をするのもボランティアである。話しを聞くということにもつながる。ただそばに寄り添うということだけでも大きな行動である。でも気をつけないとイケないこともある。感染症（ノロウイルス）などをふせぐためにマスクなどといった対策も必要だ。

それでもぼくは環境防災科という場所に通っていることは運命であり、語り継ぐということが僕たちの使命だと感じている。過去の災害の教訓を語り継ぐことによって災害が起きても同じようなミス無くすことができる。もうすぐ東南海、南海地震がくるといわれている。もちろん兵庫県にも被害はでる。でもその被害を減らすために今からできることを考えていかないとイケない。被害を小さくして助けられる命を増やしていかないとイケない。災害いつ来てももいいように、できることは少しでも準備しなければならないと思う。自分たちの世代、そしてこれからの世代に語り継げるように努力していく。過去の災害を風化させないために。

卒業研究

久保 瑠衣

1 母の経験

私には二つ上の兄がいる。震災当日、八か月の赤ちゃんだった兄は、母と眠っていた。「ゴーッ」という音で目が覚めた。たぶんそれは地鳴りだったのだろうが、その時は何が起きているのかも分からない状況だった。飛行機かなにか大きな物体がぶつかってきたのかと思った。そう思っていると同時に、「ドドドーン」と下から突き上げられるような感覚が襲ってきた。その時母は反射的に兄をギュッと抱きしめ上に覆いかぶさった。

しばらくして母は立ち上がり電気をつけようと思いスイッチを押した。しかし当然、電気はつかない。まず何が起こったのか知りたかった。余震が何度も続きやっと地震だと認識できた。家具は倒れているものばかりで、台所では醤油の瓶が割れて粉々になり、ソースやつまようじがいたるところ散乱していた。破片を踏み、けがをしないようにと神経を使った。幸いに我が家にはろうそくがあり、その火を頼りに外へ近所の様子を見に行った。そのとき近所の人にろうそくを何本か譲ったそうだ。

そういえば昨日の夕方、兄を公園で遊ばせていた時、見たことのない数のカラスが大群をつくり鳴いていたことをふと思い出した。あれはもしかすると、震災の前兆だったのかもしれないと振り返る。

近所で熱帯魚を飼っていた方がいた。地震の揺れで水槽の中の水がなくなった。そんなことには気づかずに避難していた。水槽のモーターだけは回り続けているため火災につながってしまった。運よく火はすぐに消火され大きな被害はなかった。近所でこんなことが起こるとは思ってもいなかった。

母はとりあえず兄のために牛乳と、食料確保のため近所のコンビニへ向かった。しかしすでに火事場泥棒が去った後の様子だった。母は、こんな時にも関わらず自分のことしか考えない、お金も払わない人間がいることに愕然とした。何も残っていなかったため買うことはできずにそのまま家に帰った。家に帰ると実家のことが気になり、電話をかけた。もちろんライフラインが通っていないためつながるはずもなかった。その時安否を確認するには、実際に家に向かうしかなかった。道は信号がついておらず、大混乱だった。垂水区内での移動もままならない状況で実家がある明石まで行くのに何時間もかかった。実家は大した被害はなく一安心することができた。

余震が続く中、母と兄は少しの音でも敏感になり、特に兄はその日から夜泣きをするようになった。寒さと恐怖におびえながらパニックと戦い、生きた心地がしなかった。

また、我が家は幸い水だけは使えたので、タンクで実家や友人の家は何時間もかけて水を運んだ。そのように地域が一体となり支えあった。小さな子供がいる家庭には食料やオムツ、簡易式のカセットコンロをダンボールで運んでくださり譲ってくれた。遠方の親戚からも心配の声や支援が届いた。また、友人が近所のスーパーで働いていたため、兄のことを心配し、余ったお惣菜を譲ってくれた。それを近所の方と分け合い助け合った。ライフラインが通っていないため、簡単なものしか食べるができなかった。

そんな中被災がひどかった地域にいた友人の安否が気になり、多くの避難所を探し回った。しかし見つからなかった。心配で胸が張り裂けそうになりながらも震災から数か月たった時、連絡が取れた。本当にホッと少し気持ちが楽になった。

2 母の感想

震災を経験するまでは、自分はそんな大きな災害に巻き込まれるなんて少しも思ったことがなかった。普段の当たり前前の生活が当たり前でなくなり、今までの生活が普通だったことを感謝する機会となった。震災を通して家族の大切さ、支えてくれる友人、知人のありがたみを感じた。

震災を教訓に今では習慣となっていることがある。それは毎日寝る前に家の中の扉は開けてから寝るようにしている。また家具の上に物を置かないことや、背の高い家具は震災後処分した。玄関には

中身は少ないが非常持ち出し袋を用意している。寝る前には食器をすべて棚に直し台所は何も置かないように心掛けている。また大切なこととしては、その日の夕方にガソリンが少ないと思えば必ずその日に入れて帰る。少ない状況のまま朝を迎えないようにしている。

震災で経験したことや後悔したことは活かしていかなければ意味がないと思う。

3 祖父の経験

私の祖父は震災当日、5時15分ごろから仕事に向かっていた。名古屋に行く予定だった。阪神高速に乗るか迷ったが、時間はあったので高速代を節約しようと思い、西宮方面へ向かって車を走らせていた。もしも時間に余裕があれば、すぐに高速に乗っていた。事故にあっていたら。

生田川の近くの信号で祖父は停車していた。5時46分、東の方の道が波のようにながら車している車に向かってきた。朝早く起きていたため、寝ぼけているのかとも思った。そんなことを思っていると「ドーン」という音がした。そのとき、ちょうどトラックが両サイドに停車しているところで信号待ちをしていた。揺れるたびにトラックが「ハ」の字に祖父の車に向かって近づいて来たり、離れていったりと、トラックにいつ潰されてもおかしくないような状況だった。「ここから離れなければ死んでしまう！」と思い、車を無我夢中で走れるところまで進めた。すると摩耶の陸橋が崩壊し落ちていた。

ラジオでようやく地震が起きていると知ることができた。仕事どころではないと思い、一度帰宅することに決め、家に向かった。すると目に飛び込んできた光景が信じられないものであった。公衆電話付近では頭から毛布をかぶった人が列を作っている。また生田川の市営住宅は2階部分が1階に。三宮付近では電線が垂れて火花が散って、道路の陥没にはまってしまった軽自動車。東京三菱銀行が崩壊。長田では西も東も火事がひどく、渋滞で車を止めただけでも車が熱くなりガス臭かった。戦後のようだった。しかし、鉢伏山のトンネルを超えると今までの光景が嘘かのように家が普通に立ち並んでいた。山がひとつあるだけで光景が一変しており、衝撃的であった。

4 祖父の感想

無事に帰宅することができ、家ではテレビが3mほど飛び、本棚が倒れている程度の被害で、家族もけがなく無事であった。今では、トラックの横には信号待ちでも停車しないようになった。長時間車を運転して帰宅したが、信号がない分神経を研ぎ澄ましていたので、疲れ切り信号の重要性を実感した。災害時だからこそ信号は必要だ。なにか対策を練る必要がある。

5 感想

私は被災経験もなく、今まで地震もそんなに大きい揺れを経験したことがない。本当に恵まれた環境で毎日生活できていることが幸せと思っている。幸せということも忘れてしまうほどだ。今回、母と祖父の話を聞かせてもらい、ある程度は何度か話を聞いたことがあったが、こんなに深く話してもらったのは初めてだった。幸い、阪神・淡路大震災では私の親戚や知り合いに大きな被害があった方はいなくて本当に守られているなど感じた。

私が環境防災科に入った理由はシンプルだが人の困った顔を見るのが嫌いだったことが大きいかもしれない。小さいころから、母から「困っている人がいたら、助けることができる優しい人になりなさい」と教わりながら育ててもらった。今思うと、そのことが関係しているのかもしれない。こうして大きく成長することができたのも母のおかげである。兄のおかげである。親戚や近所の方に可愛がられてきたおかげである。もしも、震災で誰かが大きな被害にあっていたら、私の環境は大きく変わっていたかもしれない。また存在すらしていない可能性だって大きい。阪神・淡路大震災だけではない。周りの方が今まで交通事故や健康状態、すべて何事もなく生きてくれていることに感謝しなければならない。

1年生の夏休み、2年生の夏休みに学校から宮城県に行かせていただいた。先輩方は私たちが入学する前、東日本大震災発生直後に現地に行かせていただいたと聞いた。一軒一軒被害があるお宅を回

り、床下の泥かきや畑があるお宅では、もう一度使うことができるように掃除をしたと教えてくれた。

私が1年時と2年時で共通に感じたことは、きれいごとではなく本当に人が寄り添って支え合うことの大切さだ。これはよく聞く言葉で聞き流すことが多いが、人は一人では生きることができない。今まではよく聞くありきたりな言葉だ、としか思っていなかった。しかし環境防災科で学ぶにつれて今では、心にしみる言葉となっている。被災地では毎日自分との戦いや苦しみがあるだろう。どう戦っていいかわからない方も多くいると思う。これは19年の歳月が経った阪神・淡路大震災でも苦しんでいる方、他の災害や事故で傷を負った方にも同じことが言えるだろう。

現地に入らせて頂き、たくさんの事を学んだ。これは2年時だが、仮設住宅で不自由な生活を送っている子供たちと話をし、その時自分の被災したときの話をしてくれた。自分より小さな子が大きなものを抱え、私に笑顔で話してくれた。私はどうしていいかわからなくなり一人になったとき混乱した。また、みんなで被害が大きかった大川小学校にも行かせていただいた。私の知り合いが亡くなったわけでもない。しかし涙が止まらなくなり苦しくなった。そんなとき友人が私に寄り添ってくれ、手を握ってくれた。涙は余計に止まらなくなった。安心することができ、そのときはわからなかったが、心に余裕ができた。

阪神・淡路大震災では6434人もの尊き命が亡くなった。防災対策や防災教育が行き届いていれば、4000人の死者を減らすことができた。人数の問題ではない。本当に一人の人が亡くなるだけで周りの人はどれだけ辛い思いをするか、どれだけ環境が変わり、受け入れるのに時間がかかるか私は今年学んだ。

震災のとき母は、「ゴーッ」という何が起こったかわからない状況にも関わらず、すぐに兄の上に覆いかぶさったと初めて聞いたとき、鳥肌がたった。普段は、毎日冗談ばかりでうるさい母だと思っているが、心から尊敬した。いつも自分のことより、自分の子供を優先してくれる私の母は立派でかっこいい。私もそんな強い母親になりたいと思う。また母も兄も叔父も叔母も全員、無事でよかった。

祖父の話は、今回初めて聞かせてもらった。私の周りの人の中では、一番危ない思いをしたのではないかと思う。もしも、少し出発が遅れていれば阪神高速に乗り、祖父は生きていたか危ういところだった。

来年、阪神・淡路大震災が起きてから20年となる。私が物心ついたときには、街は復旧復興していたように思う。いつごろから跡形もなく街は復旧復興できたのだろうか。東日本大震災から3年の月日が流れたが、阪神・淡路大震災が発生し3年が過ぎたころはどのような様子だったのか。いつ神戸のように元の街に戻ることができるのだろうか。また福島県の放射能の問題はどうなるのか。本当に疑問が次々と出てくる。

阪神・淡路大震災のことを学ぶにつれて、東日本大震災では、と関連付けて考えてしまう。世間は、どんどん新しい話題で埋め尽くされていく。風化を防がなければならない、と発生直後は言っていたが、実際3年たつとメディアはあまり報道しなくなってきているのが現状ではないか。阪神・淡路大震災でもまだ多くの方が苦しんでいる。震災の時に負傷し、後遺症が残り不自由な生活を送っている。東日本大震災でもそんな方は多くいる。そんな方の支援も必要ではないかと思う。

阪神・淡路大震災で失敗したことや学んだこと、教訓をバネに対策をして、生かしていかなければ意味がない。阪神・淡路大震災で多くの方が犠牲になり、4000人の方が対策不足で亡くなった。このような事をこれ以上増やさないためにも、これから起こるだろう、東海・東南海地震に備えなければならない。最悪の想定で夏の正午、兵庫県では2万9100人の方が亡くなってしまうという数字が出た。しかし防災教育を広げ、対策をとることができれば400人に減らすことができる。多くの方にこのことを知ってもらいたい。今までのような悲しみを二度と繰り返してはならない。普段当たり前に話していた人が急にいなくなることは受け入れられない。

母と祖父の話を聞きまた改めて心に刻み込まれた。私たちに今できることはどのようなことだろうか。震災から来年で20年を迎える。あと20年後には東日本は神戸のようにきれいな街になっているのだろうか。20年たったとき、私は何をしているのだろうか。その時にも何らかの形で防災に関わってほしい。環境防災科で学んだことを生かしていきたいと思っている。自分の子供にも、この3

年間で学んできたことを伝え、「困っている人がいたら、助けることができる優しい人になりなさい」と私の母のように教えていきたい。今回聞かせていただいた母や祖父、ほかにも話してくれた方の経験を次の世代に伝えることができるのは、私達の世代ではないかと思う。そのためには、正しく伝えることができるように、もっと学んでいかななくてはならない。また自分の大切な人を守ることができなければ、私は一生後悔する。だからこそまずは、自分の大切な人に伝えたい。これからもそのことを胸に防災を勉強し、私たちの世代が阪神・淡路大震災や東日本大震災を語り継いでいきたい。

阪神淡路大震災から 20 年

倉本 佳奈

はじめに

私は阪神淡路大震災のとき生まれていなかった。だから実際の様子を知らない。当時のことを祖父と母に聞いた。その人の目線で話していきたいと思う。

1 1995年1月17日 阪神淡路大震災

(1) 祖父

① 震災の朝

私は、兵庫区に住んでいた。地震が来るなんてまさか思ってもみなかった。震災の朝、私は長屋のような2階建ての家の1階で寝ていた。5時46分、突然ドーンと下から突き上げられるような揺れとそこから横揺れが続いた。そのときガラスがめきめきと割れていく音がした。近くの家ガラスも割れていく音がしてえらいことだと思ったそうだ。仏壇が倒れてきたが、こたつにいたのでこたつでひっきり体にあたることはなかった。そのあと、家を飛び出した。2階で寝ていた娘と息子は大丈夫なのかと思いで大声で叫んだ。しばらくして返事があったのでほっとした。息子はちょうど山に走りに行っていたらしく、家にいなかった。家は土壁だったため、階段部分にたくさん落ちてきていた。それに隣の家と壁一枚でつながっていたため、壁は倒れかけ、階段は滑り台のような状態だった。私は、娘に「危ないからちょっと待ときよ」と声をかけた。降りてこられるくらいに足場を片づけた。後から見て分かったことだったが、息子の寝ていた部屋にはステレオが置いてあり、ちょうど息子の頭の上に落ちてきているところだった。それに天井もぶら下がっているような状態で、2階に置いてあったはずのものが1階にあり、隙間が空いていて2階も丸見えの状態だった。1階で寝ていた私はよく助かったなと思った。

② 混乱

近所の家は、戸が傾いて開かず鍵が閉まらなかった。だから鍵を開けっ放しで避難していた。ものを取りに帰ってくると、ものが盗まれていたと聞いた。

しばらくして、息子は帰ってきた。途中で警察を呼ぶように頼まれたらしい。交番を見てまわったが、誰もいなくて困ったと話していた。

私は朝ご飯を買いに行こうと思い、近所の店を見て回った。だが、店はどこも開いていなかったの炊き出しなどしていないか公園などを見てまわった。そこにはすでに人はいっぱいこの人数では並んでも炊き出しはもらえないと思い、あきらめた。情報が何も入ってこず、何もわからない状態だった。隣に住んでいたおばさんが近くにある浜山小学校に避難していたらしく、私たちの場所も確保してしてくれた。お弁当をもらった。近所の人から情報を得ていた。

③ 共同生活の始まり

お昼過ぎに、垂水に住んでいた娘（私の母）と義理の息子（私の父）が車で迎えに来てくれた。晩には隣に住んでいたおばさんが場所取りをしてくれましたので避難所に帰ろうと思っていた。だが迎えに来てくれたので車に乗って垂水にある娘の家に帰った。道は渋滞しており、住宅は壊れていたりした。娘の家に着き、水道は断水していたため、水を近くの寺に水を汲みに行った。少し遠いところだったため、バケツいっぱい汲んだはずだったが、いつの間にか半分くらいになっていた。それから家の前が舞子高校だったため、トイレを借りたり、パンをもらったり、水を汲みに行ったりしていた。

そうしている間も余震は起こっていた。このまま地震が起これば、日本は潰れてしまうのではないかと思っていた。あまりにも余震が起これるので怖くなり、加古川の健康ランドに避難した。そこにも人はいっぱいだった。寝るところもなく、廊下に毛布1枚で寝た。加古川でも余震が数十回来た。

3日ほど健康ランドで過ごしたが、お金もかかるので垂水の娘の家に帰ることにした。電気は使えたが、ガスと水道は止まっていた。3日に1回ほど風呂に入るために三木まで行っていた。

④ 職場復帰

3週間ほどたち、私は職場復帰をした。職場の同僚と話をしていると、同僚が通勤途中に高速長田のあたりのコンビニのガラスが割られていて、ものがほとんど取られていたという話を聞いた。地下鉄学園都市駅から乗ろうとすると、たくさんの人が降りてきて乗ることができないということもしばしばあった。職場も兵庫にあり、通勤途中に見る光景は1か月たってもあまりかわらなかった。家が倒れていたりした。

⑤ 阪神淡路大震災を経験して考えたこと

震災が起こるまでは、地震が起こると思ってもみななかった。防災という言葉すら知らないほどだった。だが震災が起こり、物資の大切さを身をもって体験した。絶対家で水や食べ物を用意するなど、地震に備えようと思った。だが、震災から来年で20年が経とうとしている今、恐怖心も薄くなり、今では風化してしまっているように思う。風化させないようにしないといけないと思った。

(2) 母

① 震災の朝

当時母は、舞子高校の前の団地に住んでいた。その前まで、灘区に住んでいた。引っ越してきたところだったので、家の中にはあまり物が置いていなかった。タンスや食器棚などは、数日後に届く予定だった。震災の朝、寝ていた私は何が起きたのかわからず、どうすることもできなかった。家に何も置いていなくてよかったと後から思った。

② 家族を迎えに行く

垂水区はそんなに被害が大きくなかったので車で兵庫区に住んでいる父たちを迎えに行くことにした。渋滞がひどく、すぐく時間がかかった。渋滞を避けようと細い道に入ると余計に混雑し、出られなくなった。兵庫区に近づくと、家が燃えていたりして怖かった。迎えに行くと、たまたま家族は実家がある場所に戻ってきていた。後から聞くと避難所に行っていたと聞いてすぐに出会うことができよかったと思った。姉は泣いていた。

③ 共同生活の始まり

自宅に戻ると、水が止まっていた。だから舞子高校やスーパーに水や食料をもらいに行った。カップラーメンが普通では考えられないくらい高くなっていたところがあったと聞いた。無料で物資を配ったりしているところもあるのに、みんなが困っているときに物価を上げるなんて世の中には色々な人がいて、こういう時にわかるなと思った。地震の揺れが怖くて加古川の健康ランドに避難した。毛布一枚をかぶって廊下で寝た。こんなに人がいるとは思っていなかったのが驚いた。

数日後に、全壊したという証明をもらいに姉と兵庫区役所までいった。人が多くて大変だった。また、三か月後に予約していた結婚式場が潰れてしまい式場の人が謝罪に来た。だが結婚式場が再建するのに時間がかかりそうだったので他のところで結婚式を挙げることにした。

感想

(1) 阪神淡路大震災の話を聞いて

私は、祖父と母の話を聞いて初めて知ったことが多かった。怖くて加古川まで避難したことも知らなかったし、そこまで垂水区の被害がひどいと思っていなかった。この「語り継ぐ」を書くまでは聞いたこともない話があった。聞かないとわからないことがたくさんあるなと思った。まず、場所によって本当に被害の大きさが違う。兵庫区のほうでは火事が多く出ていたりしたのに、垂水区や、また神戸市外や県外に出ると被害が小さく、被害の差というものを感じた。

小学校のころから阪神淡路大震災が起こったということは知っていたが、あまりぴんときていなかった。多くの人々が亡くなったという認識があったが、一人一人のことが考えられていなかった。高学年になっていくうちに私の通っていた小学校で舞子高校の環境防災科の高校生が防災や災害の仕組み

を教えに出前授業に来てくれた。そこで私は興味を持ったし、年の近い高校生に話してもらって少し身近なものに思うことができた。中学校に上がっても舞子高校の震災メモリアル行事に参加させてもらっていた。その時に阪神淡路大震災でお父さんを亡くしたという舞子高校の環境防災科の方がお話していた。そのお話を聞いたとき私は涙が出そうになった。家族を阪神淡路大震災で亡くしたというのを聞き、すごく衝撃的だった。同年代の人がお話をしてくれたということで、聞き入っていたのを覚えている

阪神淡路大震災の概要など学校の授業で習うが、一般市民の活動は聞いたことがなかった。生まれていなかったということもあるが、想像もできなかった。母の話を聞いて驚いたのが、災害が来るなんて思ってもなかったということだ。災害に備えるという意識も低かっただろう。実家が全壊しているのに家族全員無事だったことが偶然だと思った。たまたま朝に阪神淡路大震災は起こったけど、お昼などに起こっていたらもっと被害は大きかっただろうし、家族もバラバラになっていたのではないかと思った。また、阪神淡路大震災は季節も冬だったので暑さもないし、熱中症など関連死も減っただろうと思った。今、考えてみると衛生面でも夏だったら良くなかっただろうと思う。

聞いてみて思ったことは、私たちには、まだまだ知らないことがたくさんあるのだなと思ったし、知らなさすぎると思った。

私たちの年代から阪神淡路大震災のときに生まれていない。だから、知らないことがたくさんある。このような機会がないとあまり聞くこともないだろう。それに私たちは環境防災科なので防災や災害を学ぶが、ほかの高校生や中学生、もっと下の世代は学ぶこともないし、あまり身近ではないと思う。しかし、生まれていなかったから知らないというのでは済まされないと思う。そんなことでは後世に教訓を伝えることなんてできないし、次来るかもしれない災害に備えることができない。私たちが正しい知識を学び、より下の世代に伝えていくことで、幅広い世代につなげていきたいと思う。

そのために今できることは、学び、伝えていくことだと思う。まずは、私たちが大人になったときに子供に伝えていくことが大切だと思った。20年前までは、防災というものがあまり浸透していなかった。そんなところに災害というものがやってきた。混乱しただろうし、何が起こったのかわからなかったと思う。今は阪神淡路大震災が起きて経験した人がいるので実際のお話を聞くこともできるが、私たちが親になって、孫ができるころには誰も知らない世の中がやってくるかもしれない。そんなことでは同じことの繰り返しになってしまう。これから来るといわれている災害に備えることは大切だし、語り継いでいくことは大切だということにこの「語り継ぐ」を書いて気付かされた。

(2) 将来の夢と防災

私は将来、先生という形で子供と関わる仕事に就きたいと思っている。子供に災害を教え、防災を教えることで、防災が当たり前の世の中になってほしい。また、その子供が家で親に話せばもっと広がっていくし、子供に教えることで次世代にもつながる。防災を教える中で今回私が母に聞いた話なども話していけたらいいと思う。実際に体験したことを聞くのは違うし、災害の恐ろしさを知ってほしいと思っている。恐ろしさを知ったうえで防災を学ぶのでは違うと思う。私自身、環境防災科で勉強したことによって、地震や災害についてとても敏感になったし、私の家族も興味を持つようになったと思う。

また、学校行事の中には防災訓練などもあると思う。今まで通りの防災訓練では予告をされて訓練をしていたが、そうではなく、その学校でのオリジナルの防災訓練や、予告なしの防災訓練ができればいいと思う。また環境防災科で、地域との関わりが防災には大切だということ学んだ。それを生かし、地域住民や保護者を巻き込んだ楽しみながらできるイベントとして防災訓練ができればいいと思っている。そういったイベントで少しでも災害や防災に興味を持ってもらい、地域に防災を発信していきたい。

母の話を聞いて思ったのは、なぜ学校などではなく加古川の健康ランドに逃げたのかと思った。揺れが強くて怖かったからというのもあるだろうが、学校に普段は行かないのでなじみがなく、いざというときに頼れなかったのかなと思った。学校という場所は避難所にもなるのでそんなときに対応できるようにしておきたいし、地域の住民の人にもなにかあったら頼ってもらえて、学校も地域住民に

頼れるような学校にしたい。そのために、日ごろからつながっておき、コミュニケーションをとっておくことが大切だと思った。全く知らないところには誰でも行きにくいと思う。子供がいない人達やお年寄りなどにも、少しでも学校を身近に感じてもらえるような学校にできたらいいと思った。

(3) これから生きていく私たち

来年の1月で阪神淡路大震災から20年たつが、風化させないようこれからも語り継いでいくことが大切だと思った。それに阪神淡路大震災の一部の場所だけではなく、様々な目線から知っておくことが必要だ。2011年に起こった東日本大震災でもそうだが、被害大きさだけを知るのではなく、被災地の現状や、私たちにできることはないかなど、考えるべきことはたくさんあると思った。

これからも日本では災害が起こると言われている。その中で生きていく私たちは、過去の教訓を学び、防災を伝えていく使命があると思う。環境防災科に入り、地域でのボランティア活動や募金活動、被災地でのボランティアなど様々な体験をさせていただいた。その経験を普段から生かしてこれからも地域に強くつながって生きていきたい。また、環境防災科の三年間で学んだことを自分の人生に生かしていきたい。これからの人生も防災に関わり続けていきたいと思う。

わたしが知らない神戸のまち

越野 莉亜子

はじめに わたし自身阪神淡路大震災を経験していないので、ほとんどが聞いた話ばかりだ。このころは、わたしの両親はまだ一緒に暮らしてはいなかった。そして、阪神淡路大震災といえばみんながイメージするのはあの揺れだと思う。だが、私の両親ともにあの揺れは覚えておらず、二人とも熟睡していた。

1 阪神淡路大震災前日

私の父は震災前日の夕方頃に当時勤めていた仕事が終わり帰宅しようとしていた。帰宅途中ふと空の色を見た。するとその時の空の色は今までで見たことないくらい赤く、少し不気味だった。その時の父はその空の色をみてあんな大震災がおこるだろうとは思ってもいなかった。

母は震災前日、仲のいい友達と深夜遅くまで遊んでいて、帰宅したのは震災当日の午前3時ころだった。

2 阪神淡路大震災発生

地震が発生したのは午前5時46分。母は震災前日（当日）の深夜3時ころに須磨区にある家に帰って就寝していた。地震が発生した時間、母の父（祖父）は、跳ね起きたが母は帰宅した時間も遅く、正直地震が起きていたときは寝ていたようだ。寝ていたとはいっても半分起きたような感じで寝ぼけて「ジャンボジェット機がおちたんかな…」と思いつつ眠ったようだ。父は震災前日仕事がおわり、長田区にある自宅に帰った。そんな遅くに就寝したわけではないが地震がおこっていたころは眠っていたようだ。2人とも地震がおきてすぐ飛び起きたというわけではなく、揺れている最中のことはわからないようで、揺れている時に家具がとんだや、たんすが倒れてきたや、体が浮いたなんてことは体験しておらず（実際にはみておらず）揺れている最中のことを聞くことは出来なかった。

私の母は父（私からみたら祖父にあたる）から「おい、大丈夫か！？怪我はないか！？？」という声を聞いて「なにを言ってるんや」と思ったらしい。特になにかあったわけでもないから「うん、大丈夫」と答えたようだ。父から地震があったというのを聞き、「あ、災害…地震が起きたんや。」と感じたようだ。

3 災害発生当日

（1）発生直後からの情報の集めかた。

この時代にはまだ携帯電話もなく電話も使えなく連絡をとる手段がなかった。今の時代は友達と連絡を取る方法も自分の携帯電話。周りの情報を得るためにも携帯電話。だが、震災直後情報を得ようとしても携帯電話はない。情報を得るためのものがまったく機能しなくて、とても不安になっていたと母は言っていた。

（2）母の家の店の様子

母は起きてしばらくしてから、母の家が当時板宿駅の方で店を営んでいた自分の家の店の被害状況を確認するために祖父と母は板宿の町に下りていったようだ。店は燃えておりもう無理だと判断した。その後母と祖父はもう少し下まで歩いてみて回った。少し下のガソリンスタンド付近に来たとき母は今まで匂ったことがないくらいのもともガス臭いかおろを感じていたようだ。「これはガス管が破裂してどっかからガスが漏れとうな…。ここで誰かがガスに気づかずに煙草でも吸ってもたら大火事どころじゃないことがおこるな。」と思っていた。

もう少し下の方まで行ってみようとなり、祖父と母は歩いて下って行った。すると前方から男の人が走りながら「火事や！！ここにおったらあかん！早く逃げろ！！！」と叫びながら走って行ったようだ。それから母と祖父は車で家まで帰ったようだ。

(3) まちの風景 (道路)

まちの風景はいつもの板宿とはちがっていた。朝の地震で亡くなった方の死体がいたるところに横たわっていた。今の神戸の状況で亡くなった方を埋葬できるわけもなく、寝かす事しかできなかったみたいであったそうだ。その時の板宿のまちは本当に地獄絵図とっていいほどの酷さだったそうだ。

(4) 須磨区の家に戻ってからのその後

家に帰ってから、電気が通っているのかを確認すると母の家は元通りに通っており、テレビをみる事ができた。テレビには今までとは違う、今まで見たことがない、想像したこともない神戸の姿が映っていたそうだ。母は「ほんまに今神戸のまちでこんなことがおこっとんか」とあまり信じられなかったそうだ。テレビでみた風景がほんとうのことであるのが母は信じられなかったのは、この阪神淡路大震災が起こるまえは「神戸のまちは地震がこない安全なところだ」というのを周りも言っていて、母自身もあたりまえなことだと思っていた。そのため、災害の事については普段からなにも考えず神戸に住んでいたそうだ。そんな安全なまち神戸がこんな燃え上がって無残な姿になっているわけがない。そう思ったそうだ。

(5) 家からみおろした須磨、長田の風景

テレビで信じられない神戸の姿をみたあと家の外から見える風景が(当時の母の家は山の方にあり、長田や須磨の町がみおろせる場所であった。)夕方から夜になろうとしている時間なのにやけに明るいと感じた。不思議と思い自分の家から外に出て長田や須磨の町をみると町一帯が火の海であった。外が明るい原因はこの火事のせいだったのである。火事でできた大きな炎が反射し、真っ赤になっている空。この風景を実際自分の目でみていま神戸のまちがおかれている状態を実感してなんともいえない気持ちになった。そしてそのときみた風景を母は、今でも忘れることはできず覚えている。

4 災害発生から数日

(1) ガス、水道、電気のライフライン

災害後ガス、水道は家に届かず止まっており、三か月くらいかかってやっと復旧したそうだ。その間お風呂はどうしていたのかというと、当時母の友達が妙法寺に住んでおり、その妙法寺の友達の家は幸いにも電気もガスも水道も止まっておらず、お風呂に入ることができ、母たちはその母の友達の家でお風呂を借りたり近所の人にかりたりしていたそうだ。最近の語り継がれていることで、「〇〇さんが△△にお風呂を提供してみんなそこのお風呂に入っていた。とても助かった。」ということが取り上げられていることがほとんどである。だが、母は私にこう言った「そうやって最近のんは大々的にボランティアをやった人ばかりが取り上げられとう。もちろんその人たちに助けられた人は何人もおる。それはほんまや。でもな、そういう資金とか資材がある人だけがお風呂かしてくれたりつくったりボランティアしてくれたりしてたわけじゃないねんで。周りにお風呂はいられへん人がおったら近所でガスとか水が出る家がお風呂かしたりしてくれとってん。近所の人らが近所の人らを助けとってん。助け合いをしとってん。そういうことをちゃんと広めていってな。」と。

(2) 水汲み

救援物資や水汲みでものをもらいにいっているときほとんどの人が順番を守って寒い中並んでいた。水汲みに来ている人もおおく2時間くらい待つ日もあったそうだ。

救援物資でもらったガスコンロは今でも我が家にあり、それをみると「昔、阪神淡路大震災があったんやな」と感じると言っていた。

(3) その後の生活

このころ母は高校を卒業していた。そのため特に学校で困ったこともなく、お風呂も友達の家で入ることができ、家も壊れず身近なひともなくなっていなかったため、特に「これが大変だった！」とかもなく毎日暮らしていたそうだ。

5 母の思い

自分自身あまり語れることはないかもしれないが、これからも語り継いでいくことが我々大人の役割であり、役目であると思っている。

6 感想

(1) 私が環境防災科に入って

私が環境防災科に入ったきっかけは中学3年生の頃の将来の夢である。その将来の夢とは、自衛隊であった。何故自衛隊だったのかというと、災害があるとその災害やその町の状況がテレビに流れることが多い。もちろんネットでもまわってくる。そのとき逃げ遅れた被災者や取り残された被災者の近くには必ずとっていいほど自衛隊の方がいて、人を助けている姿があった。「わたしも人を救助できるようなそんなカッコいい人間になりたい」と思っていたのはじめ、夢を抱くようになった。そんな思いから環境防災科に入学した。最初は地震のメカニズムやいつどんな震災がおこったかなどを勉強するのはとても難しく、正直「昭和とか昔のことやのになんでそんなに勉強するんやろ」と一年生の最初のころは思っていた。そんな考えがいつから変わったのかはわからないが「もっと過去の災害を知る必要もあるしもっと周りと一緒に災害について考えていかなあかん！」と思うようになっていた。

初めて語り継ぐということを経験したのは高校で行った校外学習でのときだ。話を聞くだけでこんなに苦しいし悲しい思いになるのに語り継いでくれている人はどんなつらい思いになっているのだろうか。と思い始めた。そして心理学を勉強したいと思い始めた。そう思い始めるともっと防災や災害そして震災後のことも学ぶ必要があった。今はまた違う夢になってしまったがこの夢もいつか実現できたら防災と関係があるようにしていきたいと思っている。

(2) 今回語り継ぐということをして思ったこと

私は母や父の話を聞き、母と父はそのころ十代で聞いた時はっきりとは覚えていないような感じだった。そこで聞いている内に私が思ったことは本当に語り継ぐということはとても大切なことだと思った。それは、語り継ぐことで語っている本人も震災の事を思い出し、時には思い出すことで辛くなる人もいるかもしれない。忘れることのない出来事だろうと思っている人は多いと思う。だが、今回の私の父や母のように「あれ、忘れるはずないねんけど、あんまり覚えてないわ」ということが沢山おきてくると思う。私自身震災は経験していないため、この感想ではあまり多くの思いをかくことはできない。だからといって震災からはなれるのではなく、今回のような「語り継ぐ」という方法で震災とつながって行きたいと思う。しかし、これからも「語り継ぐ」を絶対にしていった方がいいと思う反面、語り継ぐということがもう難しくなっていると感じた。なぜかというと震災からもう20年がたった。震災を経験した人からすれば「もう」とはなんだ「たった」20年だぞと思う人が多いと思う。こういった震災体験者と震災体験者でない者の違いが出てくる。もう1つの原因は今回話を聞いた私の母は震災当時私とあまり変わらない年齢で特にこれといった被害も少なく、ほとんどのことをもう覚えていない状態だった。こういったようにもう災害を経験した者の年齢が上になって来ているということだ。災害からもう20年となり、ほとんどの人がその頃幼かったり、防災、阪神淡路大震災、過去の事なんてもういいんだといったりする人が多くなっていると思う。そして学生で災害について勉強しようとしても周りにはすでに災害を経験していない世代の人たちが多く、語り継ぐということがいつかなくなってしまうのではないかと感じてしまった。そうしないためにも、もっと私たちぐらいの高校生や中学生、そして小学生や大学生にももっと震災や災害は身近な物なのだと感じていかないといけないと思った。子供から積極的にいくことももちろん大切なことだと思うが、もっと大人も私たち子どもに積極的になってほしいと思った。私の家では私以外は災害の事について特に興味はない。そのため普段から災害についてのことだったり防災についてたりも考えていない。日本は災害大国で防災能力に関してとても高い評価がされているけれども、実際、それはお金があるからこそできるようなハード面での防災がおおいだけであって、中身の1人1人の防災意識はほかの国に比べたらもしかしたら低いかもしれない。わたしはこうやって授業で災害について学んだり考えたりする場が与えてもらえられ、考える時間多いけれども、普通の人にはそうではない。それが当たり前であると周りにはよくいう。だが、わたしはそれが当たり前であるという前にもっと防災と関係ないと思っている人たちの巻き込めるような企画や考えを出して行けるような国づくりや地域づくりができれば素敵だと思う。

(3) これから

私が、高校で災害について学んでもう3年目だ。自分自身3年も学んだような実感が正直ない。この3年で私自身が、災害についての知識がどのくらいついたのかはわからない。だが、高校入学したての頃のわたしと今のわたしを比べると今のわたしの方が知識はついているだろう。毎日のように災害の事について思っているのが今は当たり前だと感じているが、入学する前の私はこんなにも災害の事は考えていなかった。むしろほとんど考えていないくらいだった。わたしたちがいるこの学科以外はほとんどがそうなのではないかと思う。そういった災害を身近に感じていない人たちにもっと学びたいと思えるような災害教育活動をしていきたいと思っている。そしてそのような教育活動をするためにはどのような勉強を私自身しなければいけないのかをも、もっと学んでいかなければならないと思う。私は高校卒業後、大学に通おうと思っている。その大学の学科は防災とは関係がないように思われるが将来わたしは災害が難しいと思っている小さな子たちが簡単にわかりやすく学べるような絵本をつくりたいと思っている。そのためには高校の頃にならった心理についても勉強してその絵本が小さい子にとってトラウマにならないかなどを考えたり、その内容に嘘がないようにしたりなどもっと災害について勉強して行かなければならない。

(4) 南海トラフ地震

近い内起こるとされている南海トラフ地震。近い内に起こるといわれてしまったら「大丈夫、大丈夫今はおらん」と思う人が多くなってしまう。わたしの周りの人も実際思っている。南海トラフ地震は東北地方太平洋沖地震や兵庫県南部地震とは違い被害の範囲がひろく周りの県に救助の要請や救援物資を頼むこともできない。そのような状況になるのだということや自分たちが住んでいる場所にどんな高さの津波がくるのかも知らない人がたくさんいるようなのが今の状況だ。新聞をとっていない人やテレビをあまりみない人にどうやってそのような情報を伝えていくのがこれからとても大切なことになると思う。災害は、今この瞬間に起こってもおかしくはないのだということをもっと意識してほしいと願う。

語り継ぐ

佐藤 杏南

はじめに

私は、平成8年（1996年）に生まれたため、阪神・淡路大震災を体験していない。以下の震災の話は私の母の体験談である。

1 震災前日

1995年1月16日の夕方、母はいつもと変わらず晩御飯の用意をしていた。すると急に「ドンッ」という近くで車がぶつかるような音がした。あまりにも音が近く大きかったため、母は何事かと外を見るために家を飛び出した。しかし、外には車は1台もなくいつもと何も変わらない静かな町だった。不思議に思いながらも家へ帰り、晩御飯の支度をし、いつもと変わらない時間を過ごした。あの大きな音が、地震の前兆だったかもしれないことを知らずに。

2 1月17日

(1) 5時46分

部屋の一室で寝ていると、すごく大きな揺れで目が覚めた。揺れながら「ドーン、ドーン」という音や、食器が割れる音、外から悲鳴が聞こえてきた。母は1歳の姉の上に覆いかぶさり揺れがおさまるのをじっと待っていた。「ドーン、ドーン」という音がだんだん小さくなると同時に地震の揺れもおさまった。母は、こんなに大きな地震など体験したことがなく、父に「今の揺れは何？」と聞くと、「地震だよ。」と教えてくれて、そこでようやく地震が起きたこと理解した。すると、2回目の揺れがやってきた。2回目の揺れがおさまった後、父と部屋の様子を確認しにリビングへ行った。すると、食器棚の扉は開いていて、中に入っていた食器は割れて部屋に散乱し、玄関に置いてある靴箱は倒れていて、テレビはテレビ台から転げ落ちていた。

すると、兵庫区に住んでいるお婆ちゃんから、電話がかかってきた。「あんたの家は大丈夫か！！あんたの寝室には大きな洋服ダンスがあるから、心配したんやで！お爺さんはダンスに囲まれて寝てたんやけど、ダンスとダンスが支えあって空間が出来て、奇跡的に助かったわ。」と言っていた。親せきはみんな神戸に住んでいたが、誰一人怪我することなく助かった。

(2) 社宅で

周りが明るくなると外から沢山の声聞こえた。母が外へ行ってみると社宅の人たちがたくさんいて、みんなで安否確認をしあった。その間も小さい揺れが何回もあった。揺れるたびに、また大きい揺れが来るのではないかとすごく怖かった、と母は言っていた。震災当日は1月という寒い時期で、雪がチラチラ降っていた。雪と一緒に焼けた灰も降っていた。「どこかで火事が起きているのかもね。」と近所の人たちと話していた。

母は社宅の管理人をしていたので、空き部屋を確認しに回った。すると、閉まっているはずの窓の鍵が壊れて開いている部屋や、窓が割れている部屋があった。母は、空き部屋の掃除をした。初めは停電していたが、昼ごろに電気が復旧すると社宅の屋上にあったポンプから水が大量に漏れていて、急いで誰かが止めに行ったそうだ。

一旦部屋へ戻りテレビをつけてみると母は衝撃を受けた。阪神高速道の倒壊や、新長田の大火事。啞然とした。まさかこんなにもひどい状況になっているなんて思ってもみなかった。それから夜まで母はテレビに釘づけだったそうだ。

夜になると町中がガス臭かった。住民から「ガス臭いけどこのまま放っておいて大丈夫なの？」などとたくさん電話がかかってきたので、母はガス会社に電話。ガス会社からは「そのあたり一帯ガスを止めます。」と言われた。水道も、屋上にあるポンプが壊れ、水が大量に漏れて使えなくなった。それから1か月、電気だけの生活が始まった。

(3) 1995年1月18日

次の日、食料を調達するために近所のスーパーへ行った。すると、スーパーには長蛇の列ができていて、人数規制がされていたため、なかなか中に入ることが出来なかった。何時間も待ちようやくは中に入れたころには、商品はほとんどなく、すぐに食べられるものがあつという間に売り切れていた。スーパーにあったものといえば、温めて食べる赤飯のようなものだけだったそうだ。

3 島根県に避難して

私の家族は、状況があまりにも酷いと感じたため、2日後、父の故郷である島根県へと避難した。島根県へ行くとき、神戸市を抜けるのに1時間はかかったそうだ。島根県へ行き、水を入れるポリタンクを購入し、食料などを買った。松江市には2、3日滞在して、神戸へ帰った。帰る際、郵便局でお金をおろしに行った。ふつうなら証明書がいるが、通帳に記載してある住所を見て神戸から来たことを知り、「証明書は大丈夫ですよ。今から神戸へ戻られるのですか？頑張ってくださいね。」と言われ、嬉しかったそうだ。

4 その後

神戸に帰ってからは、ほとんど普通の生活が送れるようになっていた。しかし、屋上にあるタンクは壊れているので水道は使えず、空き部屋に大量に置いてある水を住民で分け合った。ガスは、カセットコンロを買い、それをずっと使用していた。夜の寒い日はエアコンで何とかしのいだ。お風呂は水を貯めるのに何往復もし、何時間もかかったそうだ。普段はぬれたタオルで体をふき、頭はお父さんとお母さんが交代でお湯をかけ洗いあったそうだ。浴槽につかるときは、5、6時間かけてカセットコンロと電気ポットでお湯を沸かした。姉はまだ赤ちゃんだったので、ベビーバスでお風呂に入っていた。お風呂場は冷えるので、リビングの真ん中でエアコンをかけて入れていたらしい。お風呂屋さんに行こうとも思ったが、すごく長い行列で、何時間も待たないと入れない状況で、小さい姉と何時間も寒い外では待てないので諦めて家のお風呂で頑張っって沸かしたな～と思いつながら語ってくれた。

灘区の鶴甲に住んでいた母の姉たちは、近所の公園に自衛隊の方々が持ってきてくれた大量の水を自分の家へ何度も運んでいた。その時を思い出しながら姉たちは「普段やったら絶対にこんなに重いもの運べへんのに、あの時は運ぶことが出来たわ。いざとなると力って出るものやねー。」と語っていた。

震災が起きて何か月も過ぎても、母は時々震災を思い出すと saying していた。社宅の一階に住んでいたが、家の近くをトラックが走ったり、ヘリコプターが空を飛んでいたりすると、その音を聞いて地震を思い出しすごく怖いと言っていた。今もなお、小さい揺れが起きるとすごく慌てて怖くなると言っていた。

5 私の今

(1) 環境防災科に入って

私は、環境防災科に入ってもう3年目になる。環境防災科に入って良かったと心から思っている。私は阪神・淡路大震災を経験していない。大きな災害にすら出会ったことはない。なので、災害に対する本当の恐怖心をまだ知らない。しかし、環境防災科でたくさんのことを勉強した。地震、津波、台風、土砂災害…。この学科に入らなければメカニズムや法律、震災の恐ろしさなど、一生知らなかったであろうことも、ここでたくさん学んだ。また、生の声やボランティア活動、実際に現地へ行くなどして授業では決して学ぶことのできないことも学ぶことが出来た。そして、色んなボランティアを通して、いろんな方と関わることが出来た。東日本大震災では、現地の子と話したりして、連絡先を交換し、いつでも連絡が取れるようにした。今でも時々連絡を取っているが、「元気」という言葉を聞くとすごく嬉しくなる。また、ジュニアリーダーに参加していた女の子とも連絡したりなど、たくさんの人と繋がる事が出来た。このつながりをずっと大事にしていきたい。

しかし、環境防災科に入るまでは正直、阪神・淡路大震災についてほとんど知らなかった。小学校や中学校で1月17日になると、防災教育をし、避難訓練をし、炊き出しを食べる。「阪神・淡路大震災＝炊き出し」のイメージが私の中にあった。しかし、環境防災科に入り防災について勉強していくうちに震災の恐ろしさ、命の大切さなどを学んだ。ここで学んだたくさんのことをたくさんの人へ発信していきたい。

(2) 東日本大震災

東日本大震災が起こった2011年3月11日、私は中学校のグラウンドで部活動をしていた。その当時は部員がいろいろ問題を起こし、顧問の先生に怒られ、部員たちで話し合っている最中だった。怒っていた先生が急に「東北に親戚が住んでいる人はいないか?」と言い出した。初めは何を言っているのだろうと思ったが、先生が「東北で大きな地震が起きた。親戚がいる人は家へ帰って安否確認してきなさい。」と言われ、そこで初めて震災が起きたことを知った。その日、家に帰ってテレビを見て唖然とした。初めて見る光景。何が起きているのか理解するのに時間がかかった。ただの海。皆が大好きな海。その海が多く命を奪っていった。そこで災害の恐ろしさを知った。

そして、舞子高校に入学して4か月がたった時、東北でボランティアをするきっかけがあり、そのボランティアに参加した。宮城県の東松島へ行き海岸清掃、草抜きなどを行った。現地で実際に東日本大震災を経験した方からもお話を聞いた。テレビで語っている話よりもリアルですごく怖かった。

高校2年生の夏も東北にボランティアをしに行く機会があった。1年生の時は主に作業が多かったが、2年は現地の高校生と交流をしたり、いろんな地域へ行って待ち歩きなどをした。私は大川小学校にも行かせていただいたが、その時のことは今でも鮮明に覚えている。学校はほとんどなくなって、お墓があった。手を合わせに行き、お墓に掘られてある名前を見るとほとんどの方が私より若かった。自分より小さい子たちがこの場で亡くなったと思うと、少し涙が出てきた。しかし、大川小学校では泣いてはいけない、可哀想なんて思ったら亡くなった人たちに悪いのではないかと、皆が泣いていたら支える人も必要なんじゃないか、そう思って泣くのは我慢した。しかし、バスに乗って動き出した途端、何かの糸が切れたかのように泣いてしまった。2年の東北ボランティアでは生きることの素晴らしさ、自分は何らかのために生まれて今を生きている、生きているからには自分にしか出来ないことがある、ということをも自分なりに学んだ。

私は阪神・淡路大震災とともに東日本大震災も語り継がなければいけないと思う。東日本大震災も3年の月日が経ち、テレビでも時々しか目に入らなくなり、徐々に薄れているような気がする。この震災は何があっても生きている限り絶対に忘れてはいけない。

(3) 将来の夢

私は昔から誰かの役に立つ仕事がしたいと思っていた。誰かのために動いたりするのは好きだったし、「ありがとう。」と感謝されると「やって良かった。次も誰かのために頑張ろう。」と思えるからだ。私が中学2年生の時、父方の祖父が病気で入院をした。毎日お見舞いに行き、病院で働いている看護師さんが自然と気になった。私は入院などしたことがなかったので、看護師さんと関わるのは中学2年生のときが初めてだった。看護師さんは祖父の体温や血圧を測るなど体のケアをするとともに、祖父の会話の相手になったり、相談相手になったり心のケアもしていて、「看護師さんって凄いな」と思った。

入院をして何か月が経った後、祖父はその病院で亡くなってしまった。すごく悲しくて泣いてしまったとき、看護師さんが「おじいちゃん、いい顔しているよ。」や、「おじいちゃん分まで長生きしようね。」などと慰めてくれた。私は看護師さんの一言がすごく嬉しかったし、私もこんな素敵な看護師さんになりたいって思った。

そして、高校に入学し、たくさん学んだ。心のケアや、災害で起きやすくなる病気などを知った。私はせっき環境防災科に入ったので夢と防災を繋げていきたい。災害が起こればたくさんの方が怪我をしたりするだろう。そんな時に私は少しでも多くの命を助けられるようになりたい。災害時に少しでも多くの人を助けるために私はこの環境防災科で学んだことを活かしていきたい。

(4) 震災から19年たって

震災から19年が経ち、神戸はきれいな街へと生まれ変わった。しかし、きれいになり月日が経つとともに、みんなの心にある震災の思い出を忘れがちになっている。そして、私のように震災を経験していない人が年々増えている。経験していない私たちが今出来ることは「語り継ぐ」ことではないだろうか。震災を経験した人から話を聞き、それを次世代に語り継ぐ。私たちは決して震災を忘れてはいけない。

6 感想

私は母から震災の話を細かく聞くのは初めてだった。母方の祖父が奇跡的に助かったことも、島根県に一時的に避難していたことも今回初めて聞いて知った。話を聞き、私はすごく怖かった。自分が生まれていない間に家族や親せきのみんなはこんなに怖い思いをしていたんだな、と思ったら涙が出てきそうになった。しかし、私の家族や親せきは皆生き延びてくれた。すごく嬉しいことだな、と改めて思った。

自分はとても恵まれた環境で育っている。災害の本当の恐ろしさをまだ知らない。映像で見たり、勉強で聞いたり学んだことしかない。しかし、いつかは大きな災害に必ず出会おうだろう。その時に家族や親せきと一緒に助かりたい。家族や親せきを助けられるように今、たくさんのことを勉強しておきたい。環境防災科に入って学んだことをどんどん生かして耐震や津波の恐ろしさを教えて、絶対に災害で大切な人たちを失なわないために、一生懸命勉強する。いつかは世界に学んだことを発信して、災害によって失う命を一つでも減らせるようにこれからも毎日、勉強をしていく。

語り継ぐ

佐藤 栞

1 母の話

震災の時、私たち家族は兵庫区にある私の実家に泊まりに行っていた。地震が起きた5時46分は、まだ家族全員寝ていましたが、突然ものすごい揺れでびっくりして飛び起きた。いろいろな物が上から落ちてきたけど、怖くて布団の上に座ったままで動くことができなかった。揺れはなかなかおさまらず、とても長く感じた。家の中にはいろいろな物が倒れていたり、荷物が散乱していて食器棚の食器が割れて床の上にガラスの破片あちらこちらに落ちていたのでスリッパをはかないと危なくて歩けない状態だった。

地震がおさまってすぐに電話もつながらず、電気もガスも水道も使えない事がわかった。電気はすぐに普及したけれど、ガスと水道が使えるようになるまでは、かなりの時間がかかった。電気を使えるようになってテレビでいろんな場所の映像が写っているのを見たときは、驚いた。正直、ここまで大変なことになっているとは思っていなかったのだから、茫然とした。うちの実家は建物が古く、あの大きな地震で家が潰れなかったのは奇跡だと思った。それと同時に何よりも家族全員怪我もなく無事で良かったとつくづく思った。

その後も何回か余震があって怖くて眠れなかった。次に大きな余震が来たら家が潰れてしまうかもしれないので、私たち家族が住んでいた垂水の会社の社宅で私の両親と姉を連れて一緒に生活する事にした。毎朝、近くの給水車まで水をもらいにいくのが日課だった。重たい水を持って3階まで何回も往復するのはとても大変だった。ガスが使えないので料理を作るのもカセットコンロやホットプレートを使ったり、食器も紙コップや紙皿を使うのですが、なかなかどこに行っても品切れで手に入らなくて、お皿やお茶碗にラップを引いて汚さないようにして使ったりしていた。

お風呂も週1回ぐらいしか入れない。ガスと水道が使えないのは本当に大変だった。今まで考えた事もなかったけど、毎日普通に生活していたけどそれがどれだけ幸せな事だったのかとつくづく思い知らされた。だから、ガスと水道が使えるようになった時は本当にうれしかった。

震災から19年経ったが、あの時の恐怖は決して忘れることは出来ない。また、忘れてはいけないと思う。震災を知らない子供たちも私もそうだが普通に生活していると、ついつい忘れがちになっている。毎日、何不自由なく過ごしている事が当たり前だと思わないで感謝の気持ちを忘れないでいてほしいと思う。

2 叔母の話

平成7年1月17日午前5時46分突然大きな揺れが神戸を襲った。私は一瞬で起き上がり、座ったけれど揺れが大きくて座って踏ん張っているのも大変な状況だった。しばらく揺れが続き、落ち着いた所でまず2階で寝ていた家族が無事か確認し、全員が無事であることにまず安心した。

電気につかず、あたりが暗かったので夜が明けるまで布団の中で待つことになった。夜が明け始めた頃町内の人みんな大丈夫かどうか声をかけに来てくださった。家族が無事であることを伝え改めて家の中を見ると、自分の寝ていた枕元にはテレビが落ちてきており、台所は食器が割れて散乱し、階段も荷物やガラスが散乱してとんでもない事態が起きたのだと実感した。

まず初めに思ったことが、今日は仕事はどうなるのだろうと、行かないといけないのか考え会社に電話すると上司が出て「誰も来ていないけど、来れるのであれば来て。」といわれ同僚に電話をして確認すると「電車が止まっているから会社へは行けない。」というので私も会社へ行くことはやめて、散乱している家の中の片づけをすることにした。

震災当時、家には両親と妹が甥っ子を連れてきており、母は風邪を引いて寝込んでいたので父親と妹と3人でひたすら家の中の割れた食器やガラスの破片を片付けた。

電気もガスも水道も止まってしまってもまず水が流せないトイレに困りましたが、家が大学病院の前で大学病院に自衛隊の車が水を配給してくれるので毎日、バケツやペットボトルを持って水を貰いに行くのが日課だった。

私の家は築 25 年の木造建で今回の揺れには持ちこたえたが、再び大きな揺れが来たらつぶれるかもしれないという不安もあり、垂水に住んでいる妹の旦那さんに連絡をとり、迎えに来てもらい震災から 1 週間後に妹の家にみんなで避難することにした。

数日で電気は通ったが、アンテナがどうにかなったようでテレビは映らず情報はラジオだけだったので毎日陰気だった。

食糧も必要でガスが止まっているので、火を使わなくても食べられる物を開いている店を探して買い出しに行った。

父親の弟妹が相生・姫路に住んでいるのでカセットコンロとインスタント食品等を持ってきてくれ、それからは調理をして食べる事が出来るようになった。相変わらず、ガスが通らないためお風呂に入ることもできず近所の家族と一緒に車で明石の銭湯に連れて行ってもらったり、妹の旦那さんの実家が三木にありお風呂に入り車で行ってお世話になった。

妹の家で生活を始めると会社から連絡があり、そろそろ出社するという指示で、会社は三宮にあるが当時社員は、大阪・三宮・明石に分かれて出社しており、JRが須磨までしか通っていなかったのとあわせて明石に出社することにした。

明石に出社してみると営業をしている人たちはお客様の安否確認等の電話をしていますが、事務をしていた私は明石にいても何もすることがないため、事務担当のメンバーは翌日から何とかして神戸に出社することにし、JRで須磨まで行き、須磨からバスで神戸まで行き神戸から三宮まで歩いて通った。会社に着くのはお昼頃で出社している男子社員のために女子社員が昼食の準備をし、男子社員は救援物資をもってお客様の家を周り、女子社員は新聞紙に載っている死者の氏名から該当者がお客様かどうかのチェックを毎日していた。社員全員が三宮に揃ったのは、2 か月後の 3 月だった。

三宮も被害は大きく、隣のダイエーはつぶれ、周りのビルが傾いたりしていましたが私の会社は建物の構造が古いのがよかったのかビクともしていなかった。

会社にも他の支店から救援物資が届き、社員で必要なものを選び私も食器等をいただいた。

3 母と叔母の話を聞いた感想

何回か母からは阪神・淡路大震災の話を聞いたことがある。でも、今回久しぶりに阪神・淡路大震災の話を聞いたこともあって忘れていた事のほうが多かったと思う。改めて今回、阪神・淡路大震災の話を聞いて地震の恐ろしさを感じた。

私が今こうして生活ができるのも、阪神・淡路大震災を生き抜いた母親のおかげだと思った。母親と父親どちらか一人でもこの阪神・淡路大震災で命をおとしていたら私はこの世に存在しなかったんだと改めて思った。なので、今はとても母親と父親に感謝している。

阪神・淡路大震災が起きた当日、母はおばあちゃん家で寝ていたと言っていたけれどおばあちゃん家はとても古くてとても阪神・淡路大震災を耐えた家には見えない。家の中も家具や荷物がとても多くて、阪神・淡路大震災が起きた時その荷物が落ちてきたと思うとすごく恐ろしい。そして、二階でみんな寝ているところの頭には大きなクローゼットがあった。そのクローゼットの上にもたくさん荷物が乗っている。祖父は隣にいた兄を服の中に頭を入れて守ったそうだ。なので、本当にたくさんの荷物が落ちてきたんだと思う。兄はまだ小さくて何も覚えていないという。

下でテレビを見ながら寝ていた叔母は揺れに気がつかず寝ていたら顔面にテレビが落ちていたと聞いた。その話を聞いた時とても怖かった。母の話にもあったが幸い母も仕事で家にいた父も兄の祖父も祖母も叔母も誰一人命を落とすことなくすんだことが本当に良かった。ケガさえも誰一人していないことがすごいと思いき感動した。

私は今何不自由なく生活ができている。そして今のこの生活が当たり前と思っている。水道が止まったり、ガスが出なかったりするの考えられない。今のこの生活が当たり前と思っている。でも、

母たちは水が出なかったり、ガスが使えない生活を経験していると思うとすごいと思う。叔母の家が大学病院に凄く近いから水をもらいに行くのはあんまり大変ではなかったと思うけど、それでもやっぱり水を使うたびに大学病院にもらいに行くことがめんどくさく思うと思う。水を節約するために、ご飯を食べるときにお皿にラップをしくのはすごいと思った。私は環境防災科に入学してから知ったから、そのことを母たちが知っているのはすごいと思った。ガスが使えなくなったりすごく不便な生活だったと思うし、テレビが見れないと今の兵庫県の状況も良く分からないと思うしすごく不安だっただろう。そんな中生活するのはすごく不安で安心して生活なんてできないと思った。

私は阪神・淡路大震災を体験していないと本当の地震の怖さは分からない。地震の本当の怖さは実際に体験している人にしか分からないと思う。しかし、これからは災害を体験していない人が増えてくる。もしかしたら、いつか災害を体験していない人ばかりになってしまうかもしれない。災害を体験していないから、地震の怖さを知らないからといって災害対策をしなくていいわけでも、語り継いでいなくてもいいわけではない。やっぱり誰かが昔の災害の話を聞いてそれを色々な人に語り継いでいけなと思った。私も環境防災科を卒業するからには、卒業してからも防災やボランティアをしたい。

卒業してから、さくらネットの河田さんみたいに語り継いでいきたいと思う。河田さんは環境防災科2期生で環境防災科を卒業してから大学も防災の大学に進学して、今はさくらネットで防災や災害の話を語り継いでいる。河田さんがしている活動はとてもすごいと思い、すごく感動した。同じ環境防災科としてとても尊敬した。

私が環境防災科を選んだ理由は、兄が舞子高校の普通科の生徒でその時から環境防災科の存在は知っていた。私が環境防災科を最終的に選んだ理由は、垂水で募金活動をしている環境防災科の先輩が大きい声で募金を呼び掛けている姿を見て私も環境防災科に入学して先輩みたいになりたいと思ったからだ。

だから私も正直、環境防災科に入る前は防災や災害に興味があったわけではない。でも、環境防災科に入学してから防災や災害について勉強していくうちに少しずつ防災や災害に興味を持つようになった。私自身が最初から防災や環境に興味があったわけでは無かったので、他の高校生も最初は無理にでも防災や災害の勉強をしていくうちに興味がわいてきて、災害対策や阪神・淡路大震災の教訓を語り継いでいくことにつながると思う。

私たちが卒業をすると、東北に防災を専門にした学科がもう1つ出来る。すごくいいことだと思うけれど、本当は環境防災科という学科は存在しないほうがいい。舞子高校の環境防災科が出来たのも、阪神・淡路大震災がありその教訓を語り継いでいくためにできた。次に東北にできる防災を専門に学ぶ学科も東日本大震災があったからできた。阪神・淡路大震災がなければ環境防災科は存在しなかった。東日本大震災がなければ、東北にできる高校も存在しなかった。だから、本当は環境防災科なんか存在しないほうがいいのかも知れない。でも、阪神・淡路大震災をなかったことには出来ないし、環境防災科が存在するからには阪神・淡路大震災で得た教訓をみんなに語り継いでいきたいと思う。そのためにも、1月17日だけに阪神・淡路大震災のテレビを流すのでなく頻繁に流すべきだと思う。

将来必ず起こると言われている、南海トラフ地震に阪神・淡路大震災で得た教訓を活かして1人でも多くの人の命が助かればいいと思う。そのためにも、南海トラフ地震が起こる前に一人でも多くの人に阪神・淡路大震災の教訓を伝えるためにテレビで伝えるべきだと思う。

南海トラフ地震は最大死者数が2万9000人という想定がでている。しかし、南海トラフ地震への対策をすると2万9000人だった死者数が400人まで抑えることが出来ると言われている。400人もの命が失われると思うと400人でも多いのかもしれないが、最初の2万9000人に比べるとだいぶ減っている。私は400人でも多いと思うのにもしこのまま何もせず南海トラフ地震が起きて2万9000人もの人が亡くなるとなると、考えるのも嫌になる。

今回、阪神・淡路大震災の話を聞いて地震の恐ろしさ、そして私が無気なく生活している今がとても幸せなことなんだと思った。これからは1日1日を大切に生活して今の何不自由ないこの生活を当たり前と思わずに生活していきたい。

それと同時にやっぱり人とのつながりは大切なのだと改めて思いつた。今からでも近所の人とコミュニケーションを取ろうと思った。いつも挨拶ぐらいしかしないからほかにも地域のイベントに参加したり、ゴミを捨てる所の掃除をしたりして地域の人との交流を大切にしていきたい。やっぱり、私の知っている人が亡くなるとすごく悲しいしそんな人を少しでも減らせるように、近所の人も助けることのできる人になればいいなと思った。

実際に地震が起きた時に環境防災科で学んだことを生かして家族を引っ張っていけるようにしたい。地震が起きた時に冷静に行動して家族を守れるようになりたい。環境防災科で災害や防災を学んだ分家族の中では防災や災害についての知識はあると思う。

そして、これからの地震に備えるためにも私のできることを精一杯やっていきたい。そして、将来につなげて次世代の人たちに受け継いでいってほしい。

1 震災前

震災が起きる前の日。いつもと同じように仕事から家に帰ってきた母は、家でご飯の用意をし始める時に父が帰ってきた。帰ってきた父が「夕日がとてもきれいだ！」というのを聞いた母は、父と一緒に外まで見に行った。いつもの夕日と違ってその日は特別きれいで父と母は、しばらく見ていたそうだ。その時母は、少し変な感じがした。きれいだけどきれいすぎるような。逆に変なような感じがしたと母が言った。父も母も、次の日にあの大震災などくることなど予想などしているはずもなかつたし、きっとだれもが明日からも普通に生活ができると思っていたし母もそう思っていたと、僕に話した。

2 1月17日

1月15日の日曜日が成人式で、16日が振替休日。そしてその3連休のあとに阪神淡路大震災が起きたそうだ。この話は1年生の時に、災害と人間の授業のときに外部講師で来てくださった消防士の人やライフライン関係の方々からお話は聞いたことはあった。母も同じことを言っていた。

5時46分。震度7の巨大地震、兵庫県南部地震が起きた。死者6434人の大災害だった。母と父は、その当時は神戸市の垂水区多聞台の団地の4階に住んでいてどちらもその家で被災した。激しい縦揺れとともにものすごい音が鳴り、家の中の食器が割れる音などがしたという。あの時の光景は今でも忘れないと言っていた。二人とも無事だった。家の中は思ったよりは被害は受けてなくてほっとした。けれどもガス、水道、電気などの、すべてのライフラインがストップした。揺れがおさまったあと近くの神陵台小学校に避難した。避難所に避難している時にも、何度も余震がきてすごく怖かったと話してくれた。震災が起きたその日は、避難所に車を停めて車の中で寝たと言っていた。

3 1月18日から

震災が起きた次の日の朝から、避難所には救援物資が届き早起きが苦手な父も朝早くから母のために食べ物もらいに列に並んでくれたそうだ。父はその当時、無線関係の仕事の会長をしていたのですぐに出勤しなければいけなかった。父が仕事に行っている間は、母は家の片づけをしていた。その時にも余震がありそのたびにまたあの大きな揺れが来るのではないかと思い、とても怖かったと話してくれた。

父は、仕事から帰ってくるとお風呂に入れない母に気遣い母を連れて加古川にあるお風呂屋さんまで母を連れて行ってってくれた。お風呂が入れるようになるまで毎日通っていたと言っていた。父方の祖父母は同じ垂水区に住んでいたのだから、父母と同じく被災した。父母と同じようにお風呂に入れていなかったのだから、たまに一緒に行っていたそうだ。

4 母の友人の被災体験

母と一緒に働いている職場の友人は、あの兵庫県南部地震が起こったときは、病院にいた。なぜ病院にいたのか。赤ちゃんが生まれるからだった。母の職場の友人はあの大災害の中、赤ちゃんを産もうとしていた。その赤ちゃんの誕生日は1995年1月17日。なんとか無事に生まれた。というより生まれてくれたと言っていた。あの時の病院のあわただしさ、あの雰囲気、もし赤ちゃんになにかあったらどうしようという不安は、今でも忘れないと言っていた。

5 現在

今まで母と防災について対策や情報など、まじめな話をするのはめったになかった。でも環境防災科に入学して、震災の被災体験を聞いたり対策を話し合ったり、どこかで災害が起こったというニ

ユースや新聞で見たたりしたときに、どういった対策をしたらいいかなど、防災に関して話すことが多くなった。母は、あの1995年の神戸に赤ちゃんを産んだ母親はどれほど大変だったのだろう。あの中で生まれた赤ちゃんはすごく頑張ったと思う。それ以上に母親はもっと頑張ったと思う。自分はきっとあの状況でなんて考えることもできない。あなたが、少し後に生まれてきてくれて本当に良かった。と、話してくれた。この「語り継ぐ」をする前から、震災を体験していないあなたにもあの震災のことを語り継いでいってほしい。今の子供たちはあの震災を知らない子が多い。神戸にも昔大きな地震があったんだよと、友人や将来の自分の子供などにも伝えていってほしい。それは環境防災科に入学したあなたにはできる。あなただからできること。と私に言った。母にそのようなことを話し合うなんて思ってもいなかったが、この話を聞いて風化させないことが大事だなと、改めて実感した。

6 感想

阪神淡路大震災から20年がたとうとしている。私たちの世代で震災のことを知っている人は少ないと思うし、きっとこれからも減っていくと思う。語り継ぐということは、この学科に入った以上将来私たちがやっていかなければならないことだと思う。それが3年間環境防災科で防災の事を学んできた私たちの使命だと思う

私の将来の夢は警察官だが、今回震災体験の話聞き、語り継ぐを書いていく中で「警察官になりたい。」という思いが今までにまして、大きくなった。大震災という体験を私たちの年代はしていないため、話を聞くだけでは本当の怖さや、辛さのすべてはわからないが、聞いたことや、話を聞いて思ったことを多くの方に読んでいただき災害について知ってもらいたいと思う。

私はこの話を聞いて、震災は本当に怖いものだと思った。私は震災を体験したことがなく、本当の怖さを知らない。

地震体験はしたことがあるが、体験と本当の地震は違う。地震体験で南海トラフの怖さを知ったが、本当に起こったらあたりまえだが、何倍も怖いだろう。私の親は対して困ることなく過ごせたらしい。私の親の家は対して大きい被害がなく、本当に良かったと思う。

しかし、少なからず普段の日常生活より不便に感じたことはたくさんあっただろうと思う。阪神淡路大震災を経験した方はみんな「神戸に地震が来るなんて思わなかった。」というが、この阪神淡路大震災や東日本大震災の経験を踏まえて、地震はいつ起こるかわからないのだから、日頃からしっかり備えをしておくべきだと思う。

30年間の間に南海トラフが動く確率は70%まで上がっているのだから、阪神淡路大震災や東日本大震災を絶対に風化させないようにして若い世代にしっかりと語り継いでいくのが大事だと改めて思った。

災害は忘れたころにやってくると聞いたことがある。私はそれを聞いて一番被害が大きくなりやすい原因だと思った。災害を忘れてしまうことで、防災や災害に対する意識が薄くなる。そこで震災が起こってしまうと防災意識が低いと多くの方が被害にあってしまうだろう。また、これから起こるとされている南海トラフでは震災に加え津波の被害も加えられる。

意識が低いと冷静な対応が取れない方が増えるだろう。そうなれば神戸では地震が発生して80分で津波が来ると言われているのに、80分間何もできずに逃げ遅れてしまうかもしれない方がたくさん出ると思う。だが、震災を風化させないようにし、防災や震災に対しての意識を高めることによって、冷静な対応ができ、津波が来るまでの80分間を無駄にせずにはできると私は思う。そうすれば、沢山の命が救われるのではないと思う。私は震災を体験していないが、今回お母さんに聞いた話をできるだけたくさんの方に語り継いで震災について学んで、防災意識を高めてほしいなと思った。

私が伝えたいのは、今普通に過ごしているということを当たり前と思ってしまうと。ということだ。私たちが普通に過ごしているのは平和というだけであり、いつ何が起こるかわからない。家族、友達などと大切な人との大事な時間はある日突然消えてしまうことがある。阪神淡路大震災でも東日本大震災でも「あの時こんなこと言わなければよかった」や「あの時喧嘩なんて…」と思う方はたく

さんいると聞いたこともあったため、余計に命の大事さや今の普通の生活を当たり前だとは思わずに感謝してほしいと思う。

もう一つは、地域の方とあいさつや少しの会話でいいので話したりしてほしいと思う。地域の方と少しでも仲良くなることで、必ず防災につながり、災害時に助け合えるということを入れて過ごしてほしいと思っている。

そして、南海トラフは30年間の間に起こると言われているから大丈夫だ。と思わずに、日ごろから防災意識を忘れずに過ごすことの大切さを私たちは1人でも多くの方に語り継いでいくことをしないといけないと改めて思った。

初めにも書いたが私の将来の夢は警察官だ。環境防災科に入るまでは、「警察官と防災の関わり」なんて考えることもなかった。この語り継ぐを書くまでは、「地域の治安を守り市民にとって過ごしやすい町を作る。」や、「交通事故など1人1人が注意すれば減らすことのできる事故や詐欺の注意の呼びかけといった警察官の仕事をする。」と考えていた。その仕事もちろんそうだが、それだったら環境防災科に入った意味がない。環境防災科だった自分だからこそできること、自分しかできないことは何か考えた。

警察官になれば派遣された場所の地域の方たちとつながりを持てるだろう。授業で、地域の方との関わりが大事というのを学んだことを教訓に、私は、警察官としての仕事以外に一人でも多くの方とのつながりを持ち、ふれあい、コミュニケーションをたくさん取ることを進んでし、一人でも多くの人に先ほども述べた「語り継ぐ」ということを実行をする。ということも私の夢の一つになった。そして、その夢は必ず叶える。

環境防災科に入学していなかったら、親と震災について考えることもなかったし防災についても真剣に考えることもなかったんじゃないかなと思う。もしかしたら警察官になるという夢も諦めていたような気がする。この語り継ぐを通して、自分の将来についても一度見つめなおすことができたと思う。そしていつか、夢を叶えて外部講師としてまたこの学科に戻ってきたいと思っている。

語り継ぐ

高畑 仁

1995年1月17日5時46分。私の家族は被災した。
その時、私はまだ生まれてなく3つ上の姉もまだ1歳であった。そしてその時住んでいたのは、須磨区である。当時の私の家族構成は父、母、姉の3人家族であった。

1 震災の前日

震災前日父はいつも通り仕事だったという。母は震災の前日、空の雲がおかしかったことがとても印象的だと言っていた。よく本とかでも見る雲のことである。その時はおかしな雲だなとしか思っていなかったらしい。

2 地震発生

5時46分阪神淡路大震災発生。この瞬間から私の家族は被災者となった。

地震が起きた瞬間、家族全員が同じ部屋で寝ていたという。突然、真下から突き上げられたような感覚で父はゴジラが来たのかと思ったらしい。それほど大きな揺れで母と父は必死にまだ1歳の姉を上からかぶさり、守ったという。徐々に揺れは収まっていき全員無事だということが分かった。

その後、母方の祖母の家が歩いて5分もかからないところにあっただので行こうと思い、外に出ようとした。その時は素足だったので揺れで食器が全部落ちて床で割れていたのだが真っ暗の中必死だったこともあり、自分がその食器の破片で足の裏を切って怪我をしていることに気づいていなかったそうだ。

3 祖母の家

祖母の家に必死で父が見に行く二人とも怪我もなく無事だったという。とりあえず安心してお互いの状況やこれからのことについて話し合ったそうだ。

4 周辺の様子

家の周りに建物は半壊のところは多かったが火災などは少なかった。しかし、もう少し東に行ったところは全壊していた建物も多く火災もあった。阪神高速も倒れていて2号線に所々、亀裂も見られたそうだ。

5 その日の夜

なぜか私の家だけ水が出た。だから、祖母や近所の方を読んでガスコンロを祖母の家から持ってきて毎日鍋をしていた。そのうち救援物資も届くようになり私の家族は食糧面では困らなかったという。余震におびえる母を父は慰め、母もおびえながらも必死に泣きじゃくる姉をあやしていたそうだ。

6 世の中色々な人がいる

阪神淡路大震災が起きた時に偶然、コンビニを見た時に中にはほとんどの物がなかったらしい。食糧確保のために色々な人が盗んでいったのだという。しかし世の中そういう人ばかりではない。私の家は水が出ていて水が無くて困っていた人に分けてあげていた。そうすると、近所の人は姉のおむつを探して持ってきてくれたり、鍋に入れるものやおかずをわけてくれていた。このとき母はやっぱり人間というのは支え合いや助け合って生きていくことが大切だと感じたそうだ。

7 家族や周りの人の大切さ

これは母が言っていたことだがやはり一人では阪神淡路大震災を乗り越えられていなかったと言っていた。一人ではストレスに押しつぶされそうになるが父と一緒に喋ったり周りの人に支えられたことによって人の温かみを感じたり、姉には夜泣きしたりで辛いこともあったが、やはり子供の笑顔が見られたときはそのようなストレスも吹き飛んだしその場も和んだ。人間、一人では絶対に生きていけないということを阪神淡路大震災で実感したようだ。

8 地震への恐怖感・トラウマ

母は普段は震災の心の傷などは全く見せないが、1度だけ阪神淡路大震災で負った傷を見せたときがあった。それは1度、震度2か3くらいの地震が垂水に起きたときである。私が小学生くらいのときである。その時、父はまだ仕事から帰ってきてなく家には私・母・姉の3人だけであった。私と姉は自分の部屋で寝ており母はリビングにいた。そのとき少し大きな揺れが来た。私と姉はそれほど大災害になる地震という感じではなかったので目は覚ましたがもう一度寝た。だが母は阪神淡路大震災のトラウマで地震に過剰に反応していた。母は私の部屋にすぐに来て、すごく泣いていた。今住んでいる家はマンションなので普通の家よりは体感の揺れが大きかった。それにしても母の反応は過剰であった。食器が揺れている小さな音でも過剰に反応していた。普段何もないような人でも大きな傷を負っているのだと感じた。地震が起きると、がれきの撤去なども大切だとは思いうが心のケアも重要だと感じた。

9 震災での出来事

阪神淡路大震災で唯一、いいことがあったそうだ。それは家族などとの絆が強くなったことだ。阪神淡路大震災では周りの人でも離婚をしている夫婦もいた。私の父は母のことを必死で自分の身を犠牲にしてでも守ろうとしてくれた。今でもそのことは覚えていると言っていた。あの悲惨な災害の中で得たものというか本当の気持ちが分かったし、これからこの人について行こうと思ったそうだ。

10 伝えたいこと

母がこの話をする中で伝えたいことを最後に教えてくれた。それは人を大切にすること、諦めずに真っ直ぐ進めということだ。まず人間一人では生きていけないし誰かの支えが絶対に必要で、自分が嫌いな人や苦手な人でもその人は誰かのかけがえのない大切な人だし、その人がもしかしたら自分が困っているときに助けてくれるかもしれないということを言っていた。私の名前は「仁」である。仁愛などの人を思いやる気持ちを常に持ってほしいと父がつけてくれた名前だ。自分もこの名に恥じないくらいの人になりたいと思った。そして二つ目にこれは母が日ごろから言っていたことだが、諦めずにこれでもか！って、くらいがむしゃらに頑張れということだ。これは阪神淡路大震災と父の行動を見て学んだことらしい。今でこそ父の店は大きな店であるがそれは父が独立してからずっと色々なことに挑戦し、試行錯誤を繰り返して常に諦めなかったからだということをやっていた。これは日ごろから母に言われていたことだ。このことを日ごろ真面目な話をあまりしない母が言ってくれた言葉だから常に胸に刻んでおきたいと感じた。

感想

私の家族は普段会うことも多くはなく、震災の話をおもひに聞いたことはなかった。今回の課題では普段、親から聞かないことを聞くことができるいい機会だった。今回の課題を通して親という一人の阪神淡路大震災の被災者の体験の話を聞いて親の話だから想像がしやすくとても分かりやすかった。今まで授業で聞いていたことの大切さや、重要さがとても身に染みて分かった。自分が今まで大切だと思ってきたことに対して、そのことが大切だということを確認することが出来た。やはり、地域の繋がりやコミュニケーションは大切だと感じた。私の夢は教師だ。本当に自分に向いているかとか本当になれるかはわからないがその夢に向けて今回の課題で親に聞いたことを次の世代に親から託さ

れたものとして託していきたいと思う。そしてその次の世代がまた次の世代へと語り継いでいくことが、阪神淡路大震災を風化させないことに繋がると思う。日本にいる時点で被災するという可能性は誰にでもあると思う。そして地震を無くすことはできないだろう。そしたらどうしたらいいのか。それはハード面とソフト面による防災力の向上だ。ハード面では、堤防を作ったり耐震化を行ったりすることである。しかし私が考えるにハード面も大切だとは思いますがハード面には限界があると感じる。だから、私が本当に今大切だと思っていることはソフト面の向上だ。教師という職業はほかの仕事よりも出会う人の数がとても多い職業である。だから、それを活かして自分の教え子たちに正しい防災の知識を教え、防災力の高い地域を作り上げて生きたいと思う。

普段、母も父も真面目な話はしない人だが、今回の課題を通して両親の思いや自分たちに教えたこと、伝えたいことをしっかりと聞くことが出来た。そして今回の課題で思ったことは父の偉大さである。今、私たちに地震が襲い掛かってきたら自分の大切な人を咄嗟に守れるのか。諦めずに前を向いてがむしゃらに突き進むことができるのかということを感じた。自分もし地震が起きたら大切な人を絶対に守るという心意気はある。だが咄嗟に守ることが出来るかが不安だ。だから、私は大切な人を守るために防災を学ぼうと思う。そして今後の社会を担う次世代の高校生たちに自分の大切な人を守ってもらえるように防災の知識を語り継いでいきたいと思う。社会の防災力をあげたいというのは具体的ではないと私は考える。自分の一番大切な人を守るためという身近な目標を立てて学ぶと効果的だと思う。自分の嫌いな人や知らない人でもその人は誰かにとって大切な人なのだから、一人一人が大切な人を守りたいと思って防災についての知識を学ぶことで結果的に社会や地域の防災力の向上に繋がると思う。

人を大切にするなど、努力を怠らず、がむしゃらに突き進むということは綺麗ごとだ。中には綺麗ごとだけでは生きていけないという人もいると思う。そのことももっともだと私も思う。だが、その綺麗ごとがなければ生きていけないし綺麗ごとがあるからこそ私たちは頑張っていると私は考える。綺麗ごとを言わなくなったらこの社会は終わりだと思う。だから、私は今回母から聞いた綺麗ごとを胸に刻んでこれからの人生の中でつまずいたときに綺麗ごとで乗り越えていきたいと思う。

今回の話の中で母の言っていた言葉にいくつか共感する部分があった。さすが親子だなと感じた。日ごろから私に「人を大切にすること」を母が言っていて母がなってほしい息子に近づけているのかなと思い、嬉しく感じた。人間だからだれでも嫌いな人はいると思う。そこで気に食わないからいじめるとするのは、私は違うと思う。いじめをする人は大抵、自信がなく弱い人間だと私は思う。私はそういう人になりたくはない。誰かの上に立ちたがる人や自己中心的な人は自分のことが最優先だ。そういう人たちが周りの人を思いやり大切にすればもっとこの社会はよくなると思う。

防災＝思いやりだと私は考える。防災というのは誰かを一人でも多く災害から守りたいという気持ちから出来た言葉だと考える。私が教師になったときには勉強も大切だが、勉強よりも人間性や思いやりの気持ちを教えていきたいと思う。学校だから勉強を教える先生はたくさんいる。しかし、私は誰かのことを常に思いやることの出来る教え子を育てたいと考える。そのためにはまず自分がそういう人になる必要がある。今の自分は周りのことを考えようという気持ちはあるが、まだ考え方が子供で大人になりきれていないところがたくさんある。だからこれからの大学生活や社会に出るときまでに自分の人間性や常識、礼儀といったそういうところの成長を頑張っていきたいと思う。

近いうちに南海トラフ地震が来ると言われている。その時にどのように動けばいいのか、どうすれば大切な人を守ることが出来るのかを考えなければならない。人間というのは、自分なら大丈夫だろうと思う生き物だ。私もその一人だ。だが、被災する未来はこのまま行けば必ずやってくる。その時のための対策や決め事などをする必要がある。堤防を建てることや耐震化工事を行うことの出来る人は中々金銭的な面などが問題であまりいないと思う。だからソフト面の対策が必要だと私は考える。

私が今まで環境防災科で学んできて「一番大切だな」と思ったのは近所同士などのコミュニケーションだ。やはり、人との繋がりほど強い味方はないと思う。地域や近所で繋がりを作ることによって顔見知りというだけで助けてくれることもあるし、親しみやすいと思う。だから近所の人と会いさつをした後に「今日も暑いですね」という言葉をつけるだけで少しだが喋ることが出来るし、そ

こから会話が弾んでいくということも十分に考えられる。こうした日々の積み重ねですこしずつ地域の防災力も向上していくと考える。

今回の課題では普段親から聞かない話でいい経験になった。自分たちは地震を体験したことがないのでこういう話はとてもためになる。これからも色々な人にお話を聞かせていただいて次世代の子たちに語り継いでいきたいと思う。そして語り継ぐだけではなく今後起こるとされている南海トラフ地震に対して今回の話を聞いて学んだ教訓を日頃から実践していき、少しでも被害を減らせるよう、自分の大切な人たちを守るように日々努力していきたいと思う。

震災の怖さとは

橘 茄怜

1 はじめに

私は阪神・淡路大震災を経験していないため大きな地震というものの本当の怖さを知らない。ただ、地震というものが怖く、しんどく、つらいものだというのは、今までに沢山の震災を体験した方からの話を聞かせていただいて想像がつく。

今回はその中の一番身近な母の話を語り継ぎたいと思う。

2 その早朝

母から聞いた話。私の母は垂水区で被災した。震災の前、空の色が紫っぽく、鳥が集団で狂い逃げのように飛んでいくのを見たそうだ。

母はいつもと変わらず、一人、自分の部屋で寝ていた。

3 すごい音

5 : 46。すごい揺れとすごい音に起こされる。母はその時、飛行機が家の前に墜落したと思ったそうだ。並大抵の事故ではない。飛行機が落下したか、大型トラックが家に突っ込んできたか・・・

しかし、地震だとは微塵も思わなかった・・・。地震なんて自分の周りで起こるわけがないという無知な考えから・・・。揺れがおさまって異様な静けさから我に戻り、そこで初めて地震なのかもと思ったそうだ。

4 真っ暗

暗闇の中、どうしたらいいのかわからず布団をひっかぶっていると、下からおじいちゃんの声がしたそうだ。「大丈夫か？地震や！大地震や！ガラスが飛び散るとからスリッパをはいてゆっくり降りて来い！」おそろおそろ、かぶっていた布団から出て、周りを見ると、薄暗く日が差してきた部屋は棚から落ちたものでいっぱい、足の踏み場がなく、想像もしていなかった光景が広がっていた。そしてそこで初めてやっと地震が起きたのだと確信したそうだ。

5 震災時の対応・処置

母たち家族もこんな体験はもちろん初めてのことでとりあえず、現状、世の中はどうなっているのか、近隣の方たちはどうなっているのか、たいしたことではないのか、それとも最悪な事態が風景が外に出たら目の前にあるのか・・・、色々な不安を抱え家族みんなでとりあえず行くあてもなく地域をぐるりと車で周ったらしい。

その行動が正解なのか不正解なのかも分からず・・・。

一番に怖く感じたのは息もしづらいほどのガスの臭いだった。アスファルトはめくれあがり、車ではしるのも困難。空模様も心の不安からか異様な色をしていたことを今でもはっきり覚えている。地域をぐるりと周り、とりあえず情報を得るため帰宅したそうだ。

6 その後の生活

母の家は幸いにも、散らかった部屋を片付けることに苦労を費やしたものの、大きな被害を受けずに済んだ。しかし電気の復旧は早かったが、ガス、水道はなかなか復旧せず、食事などはカセットコンロを使ったり、節水を要求された水はペットボトルにためた水で食器を洗ったり、お風呂はたまたまガスがはやく復旧した20分ほど離れた知人の家に2～3日に一回、借りに行ったりと、不便な日

常を送る日々が結構続いたようだ。年頃だった母はそれが不潔でとてもつらかったようだ。

そして、体験してしまった言葉では言い表せない「揺れ」が体に染みついて、その恐怖心から、ほんとうに長い期間、家族でよりそって寝ていたようだ。

7 母の思い

母が大地震を体験して一番に感じたことは、地震というものにゼロと言っていいほど無知で、悲惨な状況・状態を目の当たりにして初めてその恐ろしさを知るといった、防災意識の無さだった。

防災意識が大災害時には生死を分けるのだと、20年生きてきて初めて実感したと……。地震なんて映画の世界の話……。くらいに思っていた。

現実にしてや自分の住んでいる神戸で起こるわけがないと……。そういった全くの大間違いの知識や、偏見が被災時には大きな別れ道になると身をもって感じた。

そして、近隣のコンビニやスーパー、会社、当時勤めていた会社の方たちが、飲み物や食べ物などを配って回ってくれていたことで、人と人とのつながりの大切さを感じ、心から感謝した。

周り皆、誰もが被災者、でも人と人との触れ合い、つながりで、お互い不安からも解消されたし、助け合えた。被災することで人と人とのつながりがどれだけ大切かを知ることができたようだ。

大震災を経験したが、それは大きな糧にもなったのかも……。と今なら言えるかなと語ってくれた。

感想

私は母の話を聞いて、阪神淡路大震災が起こるまで本当に神戸で震災は起きないと思っていたということが改めてわかり、震災に対しての風化というのは本当に怖いと思った。

私の母は幸い部屋が散らかったくらいで済んだが、この震災ではたくさんの方が大切なものをなくしたり、辛い思いをしたりしている。阪神淡路大震災だけではなく、東日本大震災でも、またこれから起こると言われている「南海トラフ巨大地震」でも言えることだと思う。そこで私はこの「語り継ぐ」を読んでいただいた方に伝えたいことがいくつかある。

一つ目は、震災は起きた瞬間より震災後のほうが辛く、時に怖く、しんどいのだろうということだ。

震災が起きたときは怖い思いをするだけだと思うが、震災後は母の話しにもあったように、後かたづけや、復旧、心に負った傷が本当に大変だということを忘れてほしくない。

私は、震災を体験したことがないので、はっきりとは言えないし、断言もできないが、心の片隅にでも残してほしいと思う。そして、今後起こると言われている南海トラフ地震が起きたときに、このことを思いだして、「震災が怖く、辛かった。」で済まさずに、心に傷を負った方や復旧、また助けを必要としている方の手助けをしてあげてほしいなと思う。

二つ目が、地域の方とのコミュニケーションが大切ということだ。阪神淡路大震災が起き、淡路市のある町では近所付き合いがよかったため、亡くなった方がほとんどいなかったようだ。そして、近所の方とのコミュニケーションは「え？」と思うかもしれないが、これは本当に大事な防災、または減災することのできる方法ということだ。私はこの話を伺ってから近所の方と話すところまではまだないが、挨拶はできる限りするようにしている。そのため私は、一人でも多くの方に近所の方と挨拶だけでもいいので関わりをもってほしいと思う。そして、それぞれの地域や自治体である程度のグループを作り、それぞれが定期的にコミュニケーションをとれる機会を作る場所が増えればよいなと思っている。

伝えたいこと三つめは、防災対策をしてほしいということだ。阪神淡路大震災で6434名の方が亡くなり、その中で防災対策や防災について学んでいると4000人の方は助かっていたということを知ったことがあった。防災には「耐震化」「家具の固定」「非常持ち出し袋」などがあるが、「耐震化」というのはお金がかかりそう簡単にはできるものではないため、「家具の固定」からしてほしいと思う。今は家具に穴をあけたりすることをせずに、強力テープで固定できるものがあるため、誰でも簡単にできると思うので、是非してほしい。また、伝えたいことの二つ目でも書いたことだが、「地域とのコミ

コミュニケーション」をとってほしいということだ。

コミュニケーションをとることで近所の方のことがわかり、助け合うことができ、災害の時だけでなく、災害後でもお互い協力することができると思うのと、避難場所にいるときでも不安ばかりではなく、知り合いがいると少しでも安心すると思う。また、災害後の孤独死をされてしまう方を減らせる方法にもなるので、地域の方との関わりを大切にしてほしい。この三つのことを忘れないようにして日頃から防災に対する意識を少しでももって過ごしてもらえる方が一人でも多くなるといいなと思った。

最後に、私は将来マッサージ師になりたいと思っており、マッサージ師の資格が取れたら、自分のお店を開いて、マッサージ師をしながらボランティアに参加したり、お客さんが近所の方だったら防災訓練を呼びかけてみたり、また防災に関してのプリントなどを月に1回作って配ったりしたいなと思っている。一人でも多くの方に災害や、防災に関して知って学んでもらいたい。と思っている。マッサージを通して、お年寄りの方、特に一人暮らしのお年寄りの方と、一人でも多くつながりをもち、災害時の手助けになりたいと思う。

そしてつながりをつくることで、ここにこんなお年寄りの方がいる、ここには体の不自由な〇〇さんが住んでいる、というように、自分のお客様の情報をプライバシーの侵害にならない程度に把握することで、災害に遭った時に、手助けできるようになっておきたい。また、将来、自分のお店を持つことができれば、防災についてのコミュニティの場にもしたり、月に一度くらい防災や災害について、話し合いをする「会合」みたいなことも開いたりしたいと思う。

そんなにかたく嬉しいものではなく、地域のお年寄りや小さな子供たちとのコミュニケーションをとるのを目的とするような、楽しく語りあい、つながりを広げる場や被災された地域やボランティアをすれば、伝えるための展示会みたいなことを開催したなと思う。そのため、私が将来お店をもったらお店のレイアウトは防災や防災対策、震災のことに関連づけたいなと思っている。マッサージという、癒しの場で人と人とのつながりを一人でも多くの人と作れたらいいなと思う。

マッサージでは心のケアができる。被災された方の体をマッサージするとともに、いろいろな話をしたり聞かせていただいたりして、心のケアにつなげたいと思っている。また、被災された方やそうでない方でも一つでも多くの疲れや思いなどを改善できればなと思っており、その場で母の話やボランティア、授業で習ったこと、阪神淡路大震災や東日本大震災の教訓を語り継いでいきたいと思う。私は今回母に震災の体験を聞かせてもらったが、母だけでなく父や祖母、祖父の話も聞かせてもらい、またこのような語り継ぐ機会があればできるだけたくさんの方に語り継いで、震災を風化させないように、震災の教訓を生かせるようにできればいいと思った。

過去で終わるな

田中 勇樹

1 はじめに

僕らが知らない阪神淡路大震災から19年がたった。当然、生まれてなかったから知るはずがない。小学生の頃はずっと聞いていた震災の話も時がたつにつれて学校以外ではあまり聞かなくなった。小学校の時、阪神淡路大震災の映像を見て衝撃を受けたのを覚えている。僕らは阪神淡路大震災を経験してないし知らないけれどあの震災は絶対に忘れてはいけない。あのときの教訓はずっと語り継いでいかなければならない。

多くの人の人生を変えた震災は一瞬にして起こったのである。

2 震災発生の前日

僕の母は震災発生前日、仕事の友達とご飯を食べて家に帰るのが遅くなったため家に帰ってからは明日の仕事の準備を済ませてすぐ寝たと言っている。次の日多くの方々が亡くなることも知らずに…。

3 震災発生当日

1995年1月17日。最初寝ぼけていたが、地震が起こり母はあわてて起き上がった。

「揺れているな」と思っていたらいきなりドーンという音とともに家具があちこちに移動してタンスの引き出しが飛んでいきとても怖かった。母の兄は母に「大丈夫か」と聞きすぐ祖父と祖母が大丈夫か心配で一階に行くと、一階もテレビや食器棚が倒れていて食器が割れていて素足では歩けないほどだった。祖父と祖母を探すと幸い寝室にはあまりものがなく、倒れてきたものは少なく、今から二人のところに行こうかと考えていたと言う。家族の安否を確認した後、隣の家の様子を見たり隣の方と話をしたりして避難所に行くことになった。会社はつぶれていてしばらく行けず休みになり、避難所に行くとそこにはもうすでに多くの人があった。しばらく休んでいるとご飯が出たが食べてもすぐおなかが空いたと言う。「この生活はいつまで続くのか」や「みんな無事なのか」とずっと考えていた。そうこうしている内に一日が終わり怖かったが、疲れていたのかすぐ寝ることができたそうだ。

4 震災発生から2日後

2日後、昨日は思いもしてなかったが避難所がとても狭く感じたと言う。避難者が増えていたからだ。祖父が家に行ってみようという家へ帰る途中どこの家もつぶれていた。いつもの道が変わっていて怖かったそうだ。家に帰り片付けをしていると「震災前に戻りたい」とふと思った。「あたりまえのことがあたりまえじゃなくなった」こんなことばかり考えていたと言う。避難所に戻ると母の兄が給水所に行っていて水を汲んでいた。改めて、水の大切さを知ったと話している。この日は近所のおじいちゃんが「家がつぶれてとても泣いていた」と言っていた。なだめるのに必死だった。話を聞くと孫にもらったコップが割れて不安だったが安否確認ができていないのがとても怖かったそうだ。あとから聞いた話ではあのあとすぐに連絡がきたと言っていた。母は、すごくホッとしたと言う。家の片付けはだいたい出来て寝ころぶスペースができたが住める環境ではないため少しずつ住める環境に戻っていったと言っていた。

5 震災から半年後

半年がたち、ようやく普通の生活を送れるようになったが、時々あのときの怖さを思い出すそうだ。だが、あの地震が起こったおかげで地震に対する意識が出て、そして地域の絆の結びつきが強くなった。あのときはあまり協力できなかったが半年が過ぎてからは協力できるだろうと言っている。壊れていた道路はきれいになり、避難所から家までの道も地震のことなんか忘れてしまいそうなほど直っ

ていた。母は、新しい会社に行き始めた。職場の人で震災のことを思い出す人がいてみんなで話をしたらしい。話をしている内にみんなの仲が良くなったと話している。

6 震災から19年

震災から19年たった今、あの頃とは比べものにならないほど神戸の街並みはきれいになった。阪神淡路大震災のことはみなしばらく忘れていたが、東日本大震災が起これ、テレビでの被害を見てあのときの光景を思い出したそうだ。母は、「あのときの募金が助かったといい東日本大震災の募金箱に少しずつだが入れている」と言う。みんなが助け合っていけばすぐに復興できるだろうと言っている。だが、今の若い世代は震災のことを知らない。それがとても不安だそうだ。震災を体験した人が子供たちに教えることが南海トラフ巨大地震の被害を減らすことにもつながる気がするという。防災の準備をするのはお金がかかるけどいつ起こるかわからないから早く準備しないといけないと言っている。地域での防災訓練の数を増やすべきだと言っている。大人が「震災体験してないくせに」とか「思いたしたくない」と言うのではなく、今の若い世代に震災について関心を持ってもらうこと、そしてそれを話したことによって少しでも気が楽になったらいいなと話してくれた。

僕が「環境防災科」に入ったおかげで地震の備えを心がけるようになったと言う。今のうちにこの学科でいろんなことを学んで今後、災害が起きた時に動ける人になってほしいと言っている。一人ひとり、震災に対する思いは違うからこの「語り継ぐ」を読んでその思いを感じてほしいと言っている。

感想

僕は、母の被災体験を初めて聞きとてもおどろいた。あまり聞いたことがなく実際、授業で外部講師の方の話を聞くくらいだったのでびっくりした。母は、地震発生前日、やはりいつものように過ごしていた。地震はいつ起こるかわからない。明日起こるかもしれないという恐怖を持ちながらこの「語り継ぐ」を書いている。

母が話をしているとき阪神淡路大震災直後の家の写真を見せてくれた。家の中は、いろいろなものであふれかえって正直、「ここまでひどかったんだ」と思った。だが、ほかの家の方がもっと被害が大きかったと聞き恐怖を感じた。だけど母、母の兄、祖父、祖母が生きてよかったと思う。ひとつ思ったことは、地震が起こると食器やガラスの破片が飛び散ることだ。履物は準備しておかなければならない。

今までの日常生活が一瞬にして地獄に変わるということは僕には予想がつかない。ただ、今の生活をあたりまえだと思わないようにしないといけないということはわかる。避難所は狭く、うるさかったそうだ。僕ならイライラすると思う。だけど、そんなことはなかったと聞いてすごいなと思った。それどころか助け合っていたというのを聞いて地域のコミュニケーションがちゃんととれていたのだなと感じた。今はあまり地域との関わりがないような気がする。地震が来たときに助け合いよりも自分のことしか考えないと思う。そうなるとうつをすると前よりも被害が大きくなると思う。それだけは絶対にしてはいけない。阪神淡路大震災の教訓を生かさないといけないのもっとしっかり考えないといけないと思った。だから、地域とのコミュニケーションを大切にしなければならないと感じた。それにはまずあいさつからなのであいさつは、毎日心がけようと思う。それと地域の防災訓練は地域の人と一番かかわれるチャンスなので積極的に参加しようと思う。

母の言っていたおじいちゃんの話は聞いたことがなく驚いた。安否確認がとれないというのは、一番怖いと思った。家に帰ってからのことを聞いたが、家にはとほころど地震のあとがあったと聞き僕は、地震の爪痕は消えないのだと感じた。

阪神淡路大震災から19年、神戸はとてもきれいな街になったと写真を見て感じた。だが、当時のことを話せない方はたくさんいると思う。そんな方にこの「語り継ぐ」を読んでほしい。外見は復興したが、内面は復旧すらできていない人がたくさんいる。そんな方の話を聞くことが大切だと思う。そして被災者が必要とされていること、問題と感じていることを解決することが大事だ。

阪神淡路大震災は気づけなかったものを気づかせてくれた。特に水道、ガス、電気などのライフラ

インは大きい。地震が起こる前にそのありがたさに気づけば被害は抑えられたはずだ。行政の防災対策の不十分なこともまわりに伝えなければならないと思う。

阪神淡路大震災のことを考えていると思うのが、「幸せ運べるように」だ。母は、この歌が好きで僕も小学校のころから大好きだ。この歌を聞くと神戸の人の思いなどが伝わってくる。

2011年3月11日、東日本大震災で多くの命を失ったがこれから先、被害はどんどん減っていくと思う。阪神淡路大震災で地震の怖さ、火事の怖さを東日本大震災で津波の怖さ、原発の怖さを知り防災がどんどん進んでいく気がする。

環境防災科が目指しているのは一人一人が市民のリーダーになるということで、僕はリーダーという自信はないけれど災害が起きた時は僕が動かないと誰も動かないと思うので引張っていけるようにいろんな知識を身に付けたい。

この語り継ぐというものはいろいろな人の震災体験を伝えていくということでもとてもいいと思う。みんなが見落としがちな建物の復興よりも人の心の復興（心のケア）という一番大切なことを僕は未来の世代の人たちに伝えていきたい。東日本の募金活動をしているとき、よく阪神淡路大震災のお礼にと募金をしてくれる方がいる。そのとき助け合いに感動した。僕らは未熟で被災地にいっても役に立たないかもしれないけれど一つだけできることがある。それは被災者の話を聞くことだ。正直、それが一番のボランティアかもしれない。今もそのボランティアを必要としているところはたくさんあるはずだ。だが、本人たちは「聞いてくれ」などは言わない。それをどう行うかが難しい。阪神淡路大震災でもそのような方はたくさんいたと思う。

今後起こるとされる南海トラフ地震の兵庫県の最大の被害想定は死者2万9千人（うち津波の被害が2万8千人）といわれている。神戸市では9千3百人。地震発生直後に全員が避難すれば250人まで減らせる。だが、防災を学んでいない学生は知らない人が多いだろう。だから、僕たちがリーダーになり避難の指示をしていかなければならない。臨機応変に対処していかなければならない。命は1つしかない。1人でも多くの命を救うことが大切だ。「環境防災科」で学んだ命の大切さ、尊さを守るためにも僕たちがいろいろな知識を学んでいきそれを行動に移すことが人の命を助けることにつながるはずだ。

ボランティア活動は大学に入ってもしたい。ただ、大学からはボランティアセンターに申し込みなどしてしなければならないので少し難しい。だけど、ボランティアは人と人とのつながりを教えてくれる。そのつながりを大切に人々を笑顔にするボランティアをしたい。注意しなければならないことは、ボランティアは「ボランティアしている」ではなく、「ボランティアをさせていただいている」という気持ちを持つことだ。相手側の気持ちになって行動することが大切である。そうすることで相手はこちらに心を開いてくれる。

この「語り継ぐ」をいろいろな人に見てもらいたい。そしていろいろな人たちに伝えてほしい。僕が将来この「語り継ぐ」を読んだらきっと環境防災科に入ってよかったと思うだろう。命の大切さを授業やボランティアを通して学んだ。この学科以外学べないだろう。そんな学科に行けたことが誇らしい。それが僕の自信につながる。見たこと、聞いたことをありのまま伝えるそんなような人になりたい。

阪神・淡路大震災を語り継ぐ

佃 彩音

1 母にとっての阪神・淡路大震災

(1) 母の震災体験

「初めはなにが起きたか分からなかった。飛行機が落ちたんだと思った。もうおしまいや、もう死ぬって、こんなあつてなく死ぬんだって思った。」

震災を体験した母は、今まで私に聞かせてくれた時と同じように死を身近に感じたことを語った。

震災当時の我が家の家族構成は、父、母、二歳の兄の三人だった。住まいは現在と変わらず神戸市垂水区の団地。地震から長い年月が経った今も我が家の天井には、地震の際に入った亀裂が残っている。

(2) 発災

地震が起きた時、三人は居間で寝ていた。母は突然のことにパニックになったようだ。父は割と冷静だったらしく、テレビやタンスなどの家具を押さえていた。母は、地震だと分かると兄の頭を抱えて揺れがおさまるのを待っていたという。

(3) 発災後

揺れが収まった後は、いろいろな事がとんとん拍子に決まった。地震の直後は電話も通じたからか、加古川にある父親の実家から安否確認の電話があり、そちらに避難する旨を伝えたという。それから水を溜め、必需品や貴重品をかき集め、ガスの元をメーターのところから閉め、電気もブレーカーを落とし、神戸を出発したのは午前8時頃だった。

(4) 避難をするとき

家を出た時の団地の様子を、母に聞くと「あっちこっちの家は窓ガラスが割れていた。夜中に車まで移動して夜を越した人もいっぱい居たと思う。」と語ってくれた。火事も起こらなかったし、余震が来るたびにあちこちから悲鳴があがってたから、多分ほとんどの家が一睡も出来て無かったんじゃないかなと、母は語っていた。

家を出た時間が早かったからか、幸いにも渋滞にも巻き込まれず道路もある程度無事だったため何とか父の実家に着くことが出来たという。

父の実家までの道中の様子を聞くと、車屋さんのショーウィンドウとかはほとんど全部割れていたと当時の状況を教えてくれた。

(5) 避難してから

母たちが祖母の家に避難した数日後に曾祖母が祖母の家へ避難してきたそうだが、曾祖母は震災のせいでピリピリしていたらしく、いつもは言わないような小言を言っていたそうで、避難所に行かなくても気分が高揚してしまうものなのだというのを、私は漠然と感じた。

(6) 困ったこと

近くの避難所を利用せず、わざわざ加古川の祖母の家まで避難したのには訳があった。当時二歳だった兄には重い食物アレルギーがあり、普通食事がまったくと言って良いほど出来なかったのだ。

当時は、ナチュラルハウスという会社から兄の食べられるものを宅配してもらっていた。地震が起きた時は、偶然にも数日前にナチュラルハウスから食品の宅配をしてもらったところだったため、兄の食べるものにはそれほど困らなかったという。

「あの時は、本当に運が良かった。お兄ちゃんも普通のお米も食べられなかったから、アレルギー用の食べ物が届いていなかったらもっと大変だったんじゃないかなあ。今なら他にもアレルギー用の食べ物を宅配してるところはあるけど、当時は本当にナチュラルハウスくらいしかなかったから。もしこれが宅配される前で、そろそろ買い足さなきゃって言ってる頃だったらどうしていただろうなあ。」母は、そう振り返る。

もし、祖母の家まで避難せずに近くの避難所に行っていたら、ということを探ねると、「多分すぐに家に戻って来てたと思う。」と即答していた。理由をたずねればやはりアレルギーが一番の理由で返ってきた。「東北の時も、被災した人でアレルギー持ちの人はすぐに帰ってたってテレビで言ってた。ご飯くらい食べられるだろうっていても、避難所でおにぎり配られてそれに何が入ってるかも分からない味付けのりが巻いてあったら、それだけで駄目だから。バナナも食べられないし、菓子パンなんてとんでもない話やし。」と母は言う。

今でさえ、避難所ではアレルギーの人の食べられるものの心配があるのだから、もし当時、家族で揃って避難所に行っていたら兄はどうなっていたのだろうと想像して、私はぞっとした。それと同時に、避難所でのアレルギー面の考慮は、これからの避難所運営側がきちんと考えて対応していかなければならない、大きな課題なのだと痛感した。

(7) 震災を振り返って

まず、母親に尋ねたのは「当時こうしてれば良かったな、といった反省点」である。

母は反省しない人だからと笑いつつ、「主にお父さんがだけど、初動は完璧だったと思う。まあ、今でもあんまり出来てないけど、非常で持ち出せるものをちゃんとまとめられてたら良かったかも知れない。家の中ひっくり返ってるところを乗り越え乗り越えして、貴重品をかき集めてる感じだったから。でも、貴重品はあんまり固めてたら、泥棒が入ったときに一切合財盗られても困るし。でも物を掻き分けて探さないといけない状態にはならないようにしたい。」と言っていた。

次に「今後に備えて、今以上に家の中で出来る対策はあるか」ということを尋ねてみた。

この質問には、「まずはもうちょっと片づけないとね。去年の4月の地震の時に、お兄ちゃんの部屋の細かいものがいっぱい落ちて、あーやっぱりなあ…っていう感じだったから。ものが増えてる分、余計にややこしくなってるし。居間のタンスの上に置いてるものも片づけないとね。」と言い、それから食糧のストックについても話してくれた。

「もっとちゃんと理論立ててしないと。“ローリングストック(家庭で、災害時に備えた食品の備蓄法の一つ。普段の食事に利用する缶詰やレトルト食品などを備蓄食糧とし、製造日の古いものから使い、使った分は新しく足して、常に一定量の備えがある状態しておくものこと)”っていうのは頭では分かっているねん。それが一番良い方法やなっていうのは分かっているねんけども、常に災害の時に役に立つだけのものが、役に立つだけの量あるかどうか分かってないねん。正直うちは狭いから、絶対に理想の量は置けないけど、4人が何日分食べられる量があるとかいうのさえ分かってないから。何となく置いておいて、何となく回してるだけやから、本当はそれがもっとちゃんと理論立てて出来ればもっと良いんじゃないかな。」

2 私にとっての阪神・淡路大震災

(1) 高校に入るまで

私は小学生の頃から、環境防災科の先輩方に出前授業で震災のことを教えてもらったり、防災マップと一緒に作ったりしていて、地震などの災害に自然と興味を持つ環境に居た。毎年、1月17日には震災の話を聞いていたことで私の中で阪神・淡路大震災は「覚えていて当たり前のもの、覚えて無いこと自体がありえないもの」だった。

(2) 環境防災科に入るきっかけ

ただ阪神・淡路大震災は「覚えていて当たり前のもの、覚えて無いこと自体がありえないもの」だという風に思う環境に居たことが、環境防災科に入った全ての理由ではない。

私は昔からとても優柔不断だった。物事をすぐに決めたり、臨機応変に対処したり出来るような人間では無かった。そんな自分を、私は好きでは無かった。受験生になる直前、志望校を決める時もずっと悩んでいて、進路を決められずに居た。「どうしたら、優柔不断で頼りない自分を変えられるだろう。」と考えていた時にふとテレビで見たのが、東日本大震災での環境防災科の活動に関するニュースだった。

環境防災科の先輩方が先生の指示をいちいち仰ぐこと無く、自分たちで考え動いている姿を見て、

私は「ここなら自分の優柔不断で頼りない部分を変えることが出来る、自立心を養うことが出来る。」と確信した。

(3) 高校に入って

環境防災科に入ってたくさんの授業をこなしていくうちに、私は自分の認識が間違っていることを突き付けられた。それは、自分と同じ年代の子で、阪神・淡路大震災の発災日をきちんと知らない人がたくさん居るということ、授業内で先生から告げられた時だった。

阪神・淡路大震災は「覚えていて当たり前のもの、覚えて無いこと自体がありえないもの」。そう思っているのが間違いだと言われたようで、私は頭を殴られたような衝撃を受けたのを覚えている。ただ、そこで私は今まで以上に若い世代が、地震や災害を知ることの重要性を考えることが出来た。

これから大人になる世代が、震災や災害のことを全く知らずに世に出ていくのは、これから先、大きな災害に直面する可能性を考えるとあまり喜ばしくないことだと思う。そういったことを未然に防ぐには防災・減災の勉強を更に広めていくことが一番大事だと私は思う。まずは私たちから。そこから地域へ、そして県内、県外へと少しずつ広めていって、ゆくゆくは全国にしっかりと広まれば良いと私は思う。

(4) 臨機応変に対応するという事

環境防災科の生徒になってから私は、先輩方がどうして先生の指示を仰がずにテキパキと動いているのか分かった。はっきりと分かったきっかけは、2年生の時に行った、東北ボランティアだった。

宮城県にある大谷中学校の田んぼの草抜きの手伝いが、その時のボランティアで唯一の肉体労働のボランティアだったのだが、私は慣れないことをするという事で手順も分からず、おろおろするばかりだった。その時に「テキパキと動けなければ、ボランティアとして成り立たない」のだと痛感した。

人にいちいち聞いていたら、時間が無い。でも、行き当たりばったりでやっていたら、迷惑になることもある。ボランティアの大変さが身にしみて分かったと同時に、臨機応変に対処するという事の難しさも学んだ。

これから先、私たちは色々なことに即座に対応しなければならない場面が増えると思う。そういった時に、慌てずきちんと色々なことをこなせるように残り少ない授業時間を有効に活用し、色々なことに参加していこうと思う。

3 最後に

(1) 感想

私は、今まで自分の身近な人から震災の経験などを断片的に聞いたことはあっても、詳しく聞いたことがほとんど無かった。更に、断片的に聞いただけで「大変だったんだな」などという感想だけで、そこから疑問に思ったことを聞いたり、自分で何かを考えたりせずにほったらかしにしていた部分も多かった。しかし、今回のこの“語り継ぐ”を書くにあたり、母親と面と向かって阪神・淡路大震災の体験を聞くことで、今まで目を向けることが出来ていなかった、避難所以外のことに目を向けて話を聞くことが出来て本当に良い勉強になったと思う。

これから先、この“語り継ぐ”で学んだことと私自身が思ったこと、これから先考えていかなければならないことをまとめ、発信していきたい。

また母が言っていたように、ローリングストック法をきちんと理解し実践する、家の中を片付けて極力いらぬものが出ていない状態にし、地震が来た時に安全に歩けるように足の踏み場を作るといったことを、徹底していくことは非常に重要だと感じた。

ボランティアをする、人助けをするといったことは大前提として、ボランティアをする側が健康な状態にあることが挙げられると私は思う。だからこそ、まずは自分自身の身の安全から確保し、そこから防災・減災を広げるべきだと感じている。

(2) 課題

今回、母から震災の体験を聞いて私は一つ、大きな課題が見つかったと感じている。それは「アレ

ルギーを持つ被災者が安心して避難出来る避難所を作る」ということだ。

震災当時、兄が重いアレルギーを持っていて大変だったことは昔から聞いていたし、私自身も少しではあるものの食物アレルギーを持っている人間だから、アレルギー患者の辛さもしんどさも何となくではあるが分かる。大きな災害に遭った時、食物アレルギーを持っている人は、避難所で配られる食べ物に細心の注意を払わなければならない。また、食物アレルギーが無くても、埃などでアレルギー一症状が出る人も居る。ただ、そういった人が避難所で肩身の狭い思いをすること無く、健常者と同じように生活出来る避難所がほとんど無いのが、現状だとも私は思う。

「どうすればアレルギーを持っている被災者が、避難所で安心して生活出来るか」。これは今後の防災・減災においてとても重要な課題になると、私は思った。

どうしても避難所に行かなければならない、でも避難所に行っても食べるものが無い、落ち着いて寝れる場所が無い、そんな人が少しでも減るように避難所運営の仕方などを変えていく必要があると、私は強く感じた。

(3) 目標

では、どうしたらアレルギー患者が避難所で居場所が無く、すぐに家に帰らざるをえない状態にあるということを、多くの人に知ってもらえるだろうか。私は、一つの大きな目標を立てた。

それは、「自分から個人の体質・ハンディキャップなどを知っていき、発信していく」ということだ。

恐らくアレルギー体質でない健常者は、災害や防災に興味があっても、テレビなどでアレルギー患者が被災した時にとっても困るということを報道していても「自分には関係ないから」といってスルーしてしまうと思う。きっとそれでは、避難所運営の仕方を変えても意味が無い。まずは、健常者に個人の体質とハンディキャップを知ってもらい、興味を持ってもらうことが必要だ。

だから私は、今後自分が災害や防災について発信していく機会があれば、避難所の話に加えて、アレルギー患者の心労などをきちんと伝えていきたいと思っている。避難所運営の大変さや個々のニーズに応えることへの課題などを、今までの大きな災害を例に挙げて話していけば、きっと興味を持つ人が出てくるはずだと私は思う。

実際にアレルギーを持っていて、アレルギーのしんどさが分かっている人が発信することに意味がある。同じしんどさを持っている人がそのしんどさをきちんと伝えられることが一番だと、私は感じる。東海・東南海・南海地震の被害想定などで防災のハード面、ソフト面の見直しがされる中、ソフト面から個人の体質やハンディキャップなどときちんと向き合い、改善していくことで二次被害は免れる。私はそう信じている。

語り継ぐ

辻村 啓悟

1 初めに

僕たちの生まれた年はもう震災から2年が過ぎているので、当時は生まれてすらいない。だからと言って僕たちが何も伝えずに放っておけばどんな災害も風化してしまう。だから、今回親から聞いたことをしっかり伝えていき、自分たちより下の世代に忘れてしまわれぬようにするのが大事だと思った。

2 震災の前日

震災の前日、祖父母の家には両親と生まれたばかりの兄が来ていた。冗談で、「今日は泊まって行こうかな」と言っていたそう。そのまま寝ていたらその近くにあった、スピーカーが落ちてきたので、どうなっていたか分からなかったと教えてくれた。

3 震災の朝

僕は今垂水に住んでいるが、その当時はまだ両親は、生まれたばかりの兄と豊中に住んでいた。地震は朝早くに発生したのでまだ皆寝ていた。そのとき、グラグラッと揺れが来たそう。幸い神戸から少し離れている場所だったので、家具が少し動く程度と食器が数枚割れた程度で済んだ。ライフラインに特に異常はなかったの、割れた食器を片付けるために周りの家からも掃除機をかける音がすごかった。

その後、急いでテレビをつけた。場所は淡路島と神戸の間あたり。昨日帰った祖父母の家は垂水だったので、位置的にもかなり近く、情報も錯綜していた。テレビではマンションが倒れたただの家が燃えている今の今どうなっているのかが全く分からず、かなり不安だった。祖父母の家は市営住宅でもう建ってから何年にもなるころだ。地震で倒れていないか心配になった。その後急いで電話を掛けた。最初の電話は意外にもすぐ繋がり、安全であることを確認した。しかし、2回目以降からは全くつながらなくなってしまった。無事だとわかっている、ニュースの映像や新聞の情報を見て今、どういう状況になっているのかと、不安でたまらなかった。

4 祖父母の家での震災

その時の、祖父母の家では家具や家電が倒れて大変だったそう。水の入っている洗濯機が倒れ床は水浸しになり、ライフラインも通じない、そんな状況だった。また、僕の知っている道なども土砂崩れでしばらく通行禁止になっており、両親のいた豊中と比べると、やはり被害は大きく、大変だったそう。

5 震災後数日

震災の後、母は東京にいた兄である叔父に連絡を取っていなかったそうで、しばらくあとで連絡し、祖父母の家に暖房器具を届けに行ってもらったそう。1月半ばだったので寒さが堪えたと言った。

6 震災当時の風呂事情

垂水ではガスが通じないため当然お風呂が沸かせない、そんな状況になり困っていた時に、近くにあるゴルフ場がお風呂の開放をしていたそう。ゴルフ場はガスが通じており、広い風呂場もあったため、近隣の人たちはそのゴルフ場までお風呂に入りに行っていたと聞いた。祖母から大きくて快適な浴場だと聞いた。

そんな中、両親は兄がいたこともあり、また神戸まで行くのに道路が直ってなかったり渋滞が発生していたりでなかなか祖父母の様子を見に行けなかった。

7 父の体験

(1) 震災の後に・・・

震災が起きてしばらくしてからのことを父から話を聞いた。その当時父は雑貨屋で働いていて、震災直後から多くの被災された神戸の方が物資を買いに訪れた。そういった人たちと話していると、ある被災者の方が「息子がなくなったんよ。」と言われた。とても複雑な気持ちになったという。なぜなら、悲しそうになっていたのでもなく、落ち込んでいたでもなかったからだ。もしかしたら、その方は、悲しいとかそういうものじゃなくて、その事実を誰かに話してスッキリしたかったのかもしれない。そういうこともあるものなのだな、と思わされた話だった。

(2) 街を歩いて

父は震災から1か月後、交通が落ち着いてきたあたりによく、垂水に行けたそう。もちろん車ではいけないので歩きながら、まだがれき処理も進んでない神戸の街を歩いて長い時間を掛けて垂水に着いた。

大阪と神戸では本当に被害の差が顕著に表れていて、大阪が特に大規模な被害が見当たらなかったが、神戸の街の周りは写真で見ると、ビルが傾いたり、焼け焦げた家があったりで悲惨だったそう。ほんの少し場所が違うだけでこんなにも差が出るのかと感じた。

(3) なかなか行けない被災地

渋滞、もしくは道路が破損していたり、電車が一部しか走っていなかったり通行禁止にしており、なかなかたどり着くことができなかった。

その後、ようやく祖父母の無事を確認し安心した。

また、垂水では電話はすぐに戻ったが水道ガスが復旧したのは約1か月後で、やっぱり地面に管を通してものは、時間がかかるのだと、改めて痛感させられた。

また、大掛かりな工事で作られているものは絶対に大丈夫だろう、という高速道路やビルなどもあっけなく倒壊したりしていて、ハードに頼りすぎる事の怖さをしった。

8 感想

僕はこの「語り継ぐ」、でいろいろなことを考えさせられた。今普通に暮らしている神戸の人たち。そんな人たちも、震災の恐怖を体験していたのかもしれないと思うと、震災というものは、物理的にも精神的にも大きなものなのだと思うされた。

小さいころから近くに住んでいた祖父母からは何度か地震の時のことを話してもらったり震災のビデオ等もみせてもらったりしたことがあったので、震災のことを割と身近に感じていたように思う。多分、僕は話を聞いていなければ震災がいつ起きて、どんな被害で、当時どのようなようすだったのかということは、全く持って知らなかったと思う。また、兄は震災の年に産まれたということもあって、授業などで震災の事やイベントなどの行事がたくさんあったと聞いた。

さらに、今回のような場で、初めて両親から震災について詳しく聞いたし、家でこういった震災や、防災について話す機会がなかったので初めて聞く話をじっくりときいて、いろいろ考えさせられた。

やっぱり、近くで、自分の知っている場所は被害にあったということを聞いたときは衝撃的だった。僕の中では最初垂水はそんなに被害がないのかな、なんて思っていたからだ。でも、こうして話を聞くことで、被害の小さい方だといわれた場所でさえ、インフラや道路に影響が出ていると知り、身近でこんな影響が出ていたのか、と驚きを隠せなかった。自分の中のどこかで「ここは大丈夫、大丈夫。」なんていう甘い考えがあったのだと思う。

直接被害にあわれた方はもちろん、インフラや食料のストップによるストレスを抱えた方々もたくさんおられて、普段通りの生活が出来ずに、不自由を強いられるということは大変なことだと思うし、もし自分が同じような状況に置かされてもストレスを抱えてしまうと考えると、直接被害がなくとも、

震災の影響というものは、広く大きな範囲で存在するのだと痛感させられた。また、ご家族を亡くされた方や自身が怪我をされた、もしくは恐怖を感じた方は精神的にも苦痛を受けたと思うと、辛い気持ちでいっぱいになった。

文頭にも書いたが、僕たちは震災の事を直接知っているわけではないし、体験された方の気持ちは計り知れないものだと思う。しかし、こうして話を聞くことによって、全てがわかるわけではないけれども、震災を知らない自分たちのような世代に話がつながっていくことによって、いずれまた起こりうる震災などに少しでも役立ち、悲しい気持ちになる人が少しでも少なくなるようにしていけたらいいなと思った。僕はできればこれから、こうやって聞いたことを身近な友達などに少しでもいいから話したいと考えている。お互いに聞いたことを話し合い考えることはただ、聞いてそのまま話すよりもっとよくなると思うからだ。

震災から20年。生まれたばかりの人はもう大人になるほどの年だ。つい最近のようでもうそんなにも長い年月が流れている。僕たちは環境防災科に所属していることもあり、震災については多くの事を学ばせてもらっている。しかし、自分たちの周りはどうだろうか。多分、歴史などの授業と違って、教えることはあまりなく、どんどん記憶が薄れて行ってしまっていくのかもしれない。それではまた、繰り返し悲惨な被害になってしまうのではないかと思った。勉強している自分たちにこそできることは少しでもあるのではないかと、そう考えさせられた。

せっかくこういった災害について勉強し、ボランティアなどに参加させていただいているのだから、大人になってもほうっておかず、できるだけ被害を減らすためにも、周囲の人達に伝える努力はしようと思う。

また、被害を減らすためにはハードでの対策も重要だが、自分たちが阪神淡路大震災についてこうして話してもらったことを活かしながら、ソフトの面でも貢献できるようになればきっと、それは本当に話を聞いた意味になるのではないかと思う。

確かに、震災などの被害にあったら、誰かに話そう、聞いてもらおうという気にはあまりなれないかもしれない。僕だって大きな被害を受けたら辛い気持ちでそれどころじゃないと思う。

しかし、昔の人も今の人も、次に残して何かをしようとして、次につないでいっているのだから、語り継いだ人たちは本当にすごいと思うし僕も少しでも見習いたい。簡単なことではないけど、昔からやっていることでもあり、重要性を感じさせられた。

もちろん、そういったことを皆には言いにくいという方もいるかもしれないから、今回の僕たちのように、趣旨を伝えて身内の方だけにお話しして、伝えるということもできるかもしれない。僕はまだ東日本大震災の被害に遭われた場所に行って直接何かをしたわけじゃないけど、それは東日本大震災でも同じことだと思う。場所や被害が違って何かできることがあるはずだ。ボランティアの場で話してもらったりすることも、被害を風化させないためには重要なことだと思う。

でも、それだけでは、防災に関心のある人は集まってくれるかもしれないが、普段あまり防災についてあまり意識していない方々には伝わらないかもしれない。ではどうやってその人たちにとっさの判断などをしてもらえるのか、そこから考えなければならないと思った。地域での防災訓練や、お祭りなどでわかりやすく減災を進めていくなど大掛かりなものから、自分の街のポスターなどで啓発していったり、規模は小さいけど知り合い同士のコミュニティを活かして活動していったり、その語り継いだことを活かしたら、被災された方たちからお話を聞いたものが具体的にどうすればいいのかということになっていくと思う。小さい子供たちには学校で形式的な避難訓練をするのではなくて、登下校や家にいるときの訓練をしたり、お年寄りなら、どこに逃げたら保護してもらえるのかをお教えしたり、会社で普段働いている方たちにはできるだけ子供と一緒に防災訓練に来てもらったり会社ごとで本格的な避難訓練をするなど、世代ごとにかつ身近に防災に関わっていけば、そうした普段防災に関わらない人たちも巻き込んで、皆にもっと防災の大切さを知ってもらえれば語り継ぐは成功したといえるのかもしれない。災害が起きるたびにどんどん被害が減っていってくれば、防災がますますひろがって大きなものになっていき、世界中で災害に遭う人が減ると願っているし、そうできるようにこの先努力していきたい。

これから先、南海トラフでの地震が予測されていて、それはもういつ起きるかわからない時間まで迫っている。昭和南海地震を経験された方たちのお話を集めることは難しくなっているかもしれない。しかし、その被害に遭われた方たちからお話を聞いた方は何人かいるかもしれない。そこからつながりさえあれば、被害をぐっと抑えることが出来るのではないだろうか。広い範囲での被害が予想されているため、支援は大きくは見込めないかもしれない。その時の自助と共助は特に大事になってくると思う。それ以外にも、これから先未曾有の災害が起きるかもしれない。その時、語り継いでいったことや防災教育がいかんできているかで大きく被害が変わる。皆の身近に防災があって自分の身を守れるようなものになるまで、これからも「語り継いで」いきたいと思う。

語り継ぐ

土屋 くるみ

1 「語り継ぐ」を書くにあたって

私は阪神淡路大震災を体験していない。だからこれまでの先輩方のように体験談を書くことはできない。ここに書くことは母と父の話聞いてまとめたものだ。しかし、家族の話聞くにつれて記憶がなくても私たちは聞いた話をこれからも責任を持って次世代に語り継いでいかなければいけないと思った。

2 震災前夜

私の家族は震災前の日もいつものように晩御飯を食べていた。しかし、いつもより空が明るいことに疑問を持っていたらしい。空の色は赤色がかった少し変わった色をしていた。庭に漬け物樽を置いていてちょうど父が漬け物を取りに懐中電灯を持って庭に出ると夜にも関わらず漬け物樽の底がくっきりと見えて何かおかしいのではないかと不安に思った。そして母はその時妊婦でおなかの中には次男がいて出産間近だった。

3 阪神淡路大震災発生

5時46分「ゴオオオオ」という地響きと共にまるでジェットコースターに乗っているのではないかと思うくらいの揺れを感じ目が覚めたという。周りにはテレビやタンスが揺れと共に暴れている。その光景を見た家族は家具が生き物に見えた。しかし、地震であると気づいた父は母と長男を守らなければということしか考えられなかったようだ。当時家族が寝ていた部屋は大きなタンスが並んでいて隙間なく配置していた。そのおかげでタンスが倒れてくることはなく無事だった。逆にもし配置の仕方が悪かったら、、、と考えると今でも恐ろしく感じると父は言っていた。

地震発生から少し経ち、ようやく落ち着くことができ今の状況が理解できた。家族が住んでいる垂水区は被害も大きくはなかったようだ。

4 震災発生から数日がたち

震災から数日とアバウトな日数になってしまったが、母や父が言うには今日が何日だろうとか考えていなかったようだ。普段なら当たり前のように感じる時間の流れも震災のときはいつもより長く感じたと言っていた。

5 1月27日

ついにこの日が来たと話をしてくれた母の表情が一気に真剣味をもったものになった。この日、ついに母の陣痛が激しくなり救急車を呼んだそうだ。しかし、「妊婦は自分で来い！」と電話を一方向的にきられた。母は一人でタクシーに乗り、板宿の病院まで向かった。タクシーに乗っているとき陣痛の苦しさや不安がいりまじりこのまま自分は無事に次男を産むことができるのだろうかという不安で冷や汗が止まらなかった。この時にタクシーから見た町の風景は一生忘れることはないだろうと言っていた。

病院に着き、けが人が沢山いる病院の中を見て言葉では言い表せられないと母は言っていた。妊婦である母への対応はあまり良くなかった。そして、ついに次男の兄を出産した。出産道具も十分にあるわけではなく大変な出産現場だった。けれど、無事兄が生まれ看護婦さんに赤ちゃんを取り上げてもらい兄を初めて見た母は胸がいっぱいだった。長男の出産のときは180度変わって、十分な道具もなく被災したこの場所で新しい命を誕生させなければならない母親としての責任感や不安はきっと、計り知れないものであっただろうと話聞いていた私は同じ女の人としてそう感じた。

6 次男の障害

震災発生から約数か月が経ち、町も少しずつ落ち着いてきたような感じだった。

次男が生まれ被災した家でも少しずつ家族で助け合いながら生活していた。そんなとき、次男が急に口から泡をふいてともしんどそうにしているのを母が見つけてすぐ救急車で次男を産んだ時の病院に連れて行った。病院の先生はそのうち治るから心配することはないといった。その時は安心した母だった。

それから2年かがたった。次男は普通の子供なら寝返りがうてたりタッチができたりする年齢になったのに、次男はそれができずそれ以上にまだまだ赤ちゃんのようだった。次男の成長に疑問と不安を感じた母は実家の岡山の病院で次男を見てもらった。すると、検査の結果兄の脳のほとんどは死んでいる状態だった。次男の兄は生まれてからすぐ看護婦さんが兄をうつ伏せのままおいてしまっていたらしく、それが原因で窒息し脳のほとんどが機能しなくなった。次男が産まれた病院から紹介された子供病院では発達が遅れているだけで問題はないと嘘を言われ続けていたそうだ。そして、兄が障害者であることが分かったとき「地震だったから仕方がない」と言われ家族は涙が止まらなかったと話してくれた。「地震だったから仕方がない」この言葉は一生忘れられないと家族は言っていた。

7 震災を体験していない若者へ

震災から19年経った今も阪神淡路大震災の記憶は鮮明に覚えていると母と父は言っていた。毎年1月17日5時46分になるとテレビの前で手を合わせている家族を幼い時からずっと見てきた。まさか私が追悼式に行き防災関係の学科に進むと思っていた家族は私が環境防災科に入学したことをとても喜んでくれた。そして阪神淡路大震災を体験していない若い世代の子供たちに環境防災科で学んだこと、自分の親から聞いた被災体験などたくさんの人へ語り継いでいって欲しいと言われた。「これはあなたたち環境防災科だからこそ出来ることやで。責任を持って今後震災で一人でも多くの人の命が救われるように次世代を引っ張って行けるようなリーダーになって欲しい。」と最後に家族は話してくれた。

私は今まで話をしてくれた家族の思いを無駄にしたくない。そして無駄になんかしてはいけないと思う。この「語り継ぐ」という場を通して多くの人に震災の時のことを知ってほしいと思う。私自身実際に地震を体験したわけではないけれどこれからもいろんな人たちと情報を共有していきたい。こうして地震について考えたり、悩んだりすることがこれからの防災に繋がっていくと思うし阪神淡路大震災で亡くなった方々のために私たちができることだと思う。

8 家族の話を聞いて

私は今回「語り継ぐ」を書くことになり改めて家族に震災体験を聞いてみて胸が苦しくなった。次男のこともあったのでよく震災の頃の話は聞いていたけれど、その度に辛そうに語る家族の表情を見るのが心苦しくてなるべく聞かないでいたほうがいいのかとずっと思っていた。しかし、環境防災科に入学して、被災された方の話や授業で地震のことについて勉強しているうちに、阪神淡路大震災を体験していない人たちにも絶対に知ってもらわなければならないと思いはじめた。

9 次男の話を聞いて

私は家族から震災のときの話を聞いて一番印象に残っているのは次男の話だ。今まで障害を持った兄がいることに対して恥ずかしいとか嫌だとは思ったことはない。しかし、もし生まれたときが地震のときでなかったら今頃こんなに苦労することはなかったのではないかなと考えてしまう。病院で言われた「地震だから仕方がない」この言葉がずっと忘れられない家族の気持ちがとても伝わってきた。「いくら地震だからってその一言でまとめてほしくない」私は家族にそう言うと、家族も辛そうな顔をして

「私たちだって辛いし病院も信じられへん。でもこんな思いをしているのは私たち家族だけじゃない

はずやから過去を引きずったってなんもいいことないしお兄ちゃんも辛くなるやろ？だから、みんなでお兄ちゃんが幸せに暮らせるように支えてあげることに決めたんやで。」そう家族は言った。この言葉を聞いたときに私はこの家族のもとに生まれてきて本当によかったと心から思った。

ニュースでは亡くなった方の追悼や建物の被害などを主に映しているのをよく見るけど、地震によって被害を受けたけど負けずに今も頑張っている人などがたくさんいるからそういう人のことも知ってほしいと思うし、今も震災の苦しみを抱えながら生きている人がたくさんいることを忘れないでほしい。

10 環境防災科に入ろうと思ったきっかけ

私が環境防災科に入ったのも兄の影響だった。兄の生活している障害者施設に小学生の頃からよく母とお手伝いに行ってピアノを弾いて歌を歌ったり行事のお手伝いをしたりしていた。最初はボランティアという言葉が知らなくて自分も楽しいのに相手にも喜んでもらえることが嬉しくて土日になると兄の施設のお手伝いをずっとさせていただいていた。今でもそれは続いているけれどそれがボランティアというのだと知ったのは中学生の時だった。施設のお姉さんに「くるみちゃんがしてくれていることはボランティアって言ってとても素敵なことだよ」と教えてもらった。その時にボランティアっていいなと思ひ、ちょうど長男の兄が舞子高校出身だったので環境防災科のことを教えてもらったりして興味を持ち始めたのがきっかけで、高校に入ってもっとボランティア活動がしたいと思ったのと、阪神淡路大震災についてもっと知りたいと思ったから環境防災科を選んだ。

私が環境防災科に入ろうと思ったきっかけもボランティアに興味を持ったのも全部兄のおかげだ。私が環境防災科に合格できたのも兄のおかげだと思う。よく家族は「兄もきっと喜んでくれている。これは兄も望んでいることだと思う。」という。確かに私が環境防災科での話をしている時などとてもニコニコして話を聞いてくれる。話の内容は分かっていたとしてもそうやって笑顔で私の話を聞いてくれる兄を見て阪神淡路大震災によって兄にとって、家族にとって大きな傷は出来たかもしれないけれど私たち家族にとっていい経験にもなったし、兄のおかげでいろんなことに挑戦して来られたと思う。

11 しあわせ運べるように

この曲は阪神淡路大震災をきっかけに作られた曲だ。「地震にも負けない強い心を持って亡くなった方々の分も毎日を大切に生きていこう～」高校生になってやっと歌詞の意味がわかるようになった。私が小学生のとき朝の時間に歌を歌う時間がありこの曲をよく歌った。小学生ながら悲しい歌なのだなと思ひながら歌っていたが歌詞の本当の意味を全く考えずに歌っていた。しかし、高校生になって環境防災科に入学し阪神淡路大震災について知るにつれてこの曲の重みを感じるようになった。

小学生のとき1月17日の日にしあわせ運べるようにを歌いながら涙を流している両親を見たときなぜ泣いているのかわからなかった。でも今ではその理由もわかったし自分がこの曲を歌う時も意味をきちんと考えながら歌うようにしている。

12 追悼式

初めて追悼式というものを見たのは小学生の時だった。テレビの前で目をつむって手を合わせている家族を見て最初は何をしているのかわからなかった。テレビの映像ではたくさんのロウソクが円を描くように並べられていて建物に1・17という文字が浮かび上がっていた。綺麗だなと一番はじめに思ったことを今でも覚えている。私が環境防災科に入るまで追悼式なんて自分には縁のないものだと思っていたし、行くことなんてないのだろうなと思っていた。でも環境防災科に入って一年目に初めて追悼式に参加した。テレビでは見ていたはずなのに実際に現場に行くとテレビとはまた違ったように感じた。

ロウソクの前で目をつむって悲しい表情をしているおばさんやおじさん。小さい子からお年寄りまでたくさんの方がきていた。1月のまだ日の上がっていない時間ということもありとても寒かった。し

かし、震災当時もこんなに寒かったのだろうかなど感じることもできた。今まで追悼式に行ったことがなかった私だったが、年に一回の大切な追悼式で震災を体験した方や家族や友達など自分にとって大切な人が震災の犠牲になった人たちにとって1月17日の追悼式の日が自分が震災の時のことと真剣に向き合える大切な日なのだと感じた。

13 語り継いでいく

今回、「語り継ぐ」を書く事になり家族からたくさんの震災当時の話を聞いて改めて思ったことは語り継いでいくことは大切だということだ。震災を体験していない私たちの世代やそれ以降の世代の人たちにとって阪神淡路大震災は身近なことじゃないかもしれない。私は環境防災科だからこそ震災のことも身近に感じるができるけれどそうでない人にどうやって阪神淡路大震災のことを知ってもらえばいいのだろう。今はわからないけれど、この「語り継ぐ」を一人でも多くの人に読んでもらいたいと思う。

これから起こると予想されている南海トラフの地震で一人でも多くの方が救われるように過去の地震について知ることは少なくともこれからの自分の運命を左右することにもつながると思う。だから、この「語り継ぐ」だけではなく私自身もこれからボランティアなどを通してたくさんの人に私が高校で学んできたことを発信していき、自分にできることを精いっぱいしていきたいと思う。

私は7でも書いたように、この「語り継ぐ」という場を通して多くの人に震災の時のことを知ってほしいと思う。私自身実際に地震を体験したわけではないけれどこれからもいろんな人たちと情報を共有していきたい。こうして地震について考えたり、悩んだりすることがこれからの防災に繋がっていくと思うし阪神淡路大震災によって犠牲となった方々のために私たちができることだと思う。

「語り継ぐ」

坪之内 麻世

1 震災直後

母は震災当日 インフルエンザだった。もう治りかけだったそうだが、それでもまだ体はだるくてくらくらと揺れたときも意識が朦朧として夢を見ているのかと思っていたらしい。おもちゃ箱を激しく揺らしたような揺れと耳を塞ぎたくなるような音で母はようやく地震ということに気付いた。父・姉（当時1才）・母 という風に3人で川の字になって寝ていたらしく 父が姉を庇う姿が一番に目に入ったそう。揺れが収まった後、外に出ようとしたが 辺りはぐちゃぐちゃで普通には通れないからふすまを倒して玄関へ向かった。揺れが収まるとドアボックスから『大丈夫ですか』とたくさんの人から声を掛けられた。当時は社宅に住んでいたらしく周りは会社の知り合いばかりで仲が良かったらしい。社宅の人は順番に無事を確認しにまわっていた。父はそれに着いていき母は幼い姉と一緒に残ったが、とにかく何をしたらいいのか分からなかったらしい。災害の知識が全くなくて途方に暮れていた。そしてそれは皆も同じだったようだ。とりあえず母は父が帰ってくるのを待ち、部屋へ戻った。おしいれの上の戸袋（ふすまの上にある小さいサイズのふすま）が、全部倒れていて、食器もたくさん割れていた。部屋のあらゆるところに ガラスの破片が飛び散っており、そのせいで 足を何か所か切っていることも分かった。地震が発生した直後は 全く気付かなかったが、擦り傷も切り傷もひどかった。少し落ち着いた後 部屋を見回すと自分たちの命が奇跡的に助かったことが分かった。洋服ダンスが部屋の端から端まで、高さもギリギリで置かれていて（補強はしていない）倒れてこなかった。もし、長さが高さが少しでも違えば 洋服ダンスは確実に落ちていて、自分たちの命は危なかっただろう。

2 祖父母と避難所

幸いにも社宅に死者とけが人はでなかった。安否確認をした後 父は隣の市営住宅に住んでいた母方の祖父母のもとへ向かった。祖父母は11階に住んでいる。エレベーターが動いているはずもなく、父は階段を使って11階まで歩いた。祖父母も無事だったらしい。避難所という発想がなかった父は祖父母に車の中に居ようと提案し、午前中は皆で車の中にいた。ずっと車の中にいる予定だったらしいが、皆は情報が全くないことに気付き、そこで初めて避難所という文字が頭の中に浮かんできて、西須磨小学校へ向かった。本当は須磨体育館に行く予定だったらしいが、すでにいっぱいという情報が外に出たときに回ってきて西須磨小学校に変更したらしい。最初に行く予定だった須磨体育館はゆくゆく死体安置所になったそう。

空は薄気味悪い色。ガスが爆発するような臭い。倒れている家。寒くて、見かける人は皆パジャマ。西須磨小学校はとても近かったけれど、普通に道が通れる状態ではなく、ものすごく遠回りをした。余震もあった。なんとかたどり着いたものの 小学校は混雑していて階段しか腰を下ろせるスペースがなかったらしい。次の日の朝までは 避難所で過ごしたが、疲労は溜まるし、いつまでもこうしているわけには行かず、朝、車で三田に住む父方の祖父母の元へ向かった。

3 避難所で

私は母から教えてもらった話で心に残っている話がある。避難所での話だ。小学校1年生の時。小学校には毎月『今月の歌』というものがあって 朝の会の時や音楽の授業の時に歌を歌っていた。歌は毎月変わる。そして1月の今月の歌が『しあわせ運べるように』になった。この歌が1月の歌に選ばれた理由や地震のことを先生が授業で教えてくれたが、いまいち怖さも分からない。死者も数字はものすごいことは分かったが、それがどれぐらいかと問われれば想像できない。正直、興味も関心も何もなかったが、私はなんとなく帰宅してから 阪神淡路大震災のことを母に聞いた。どれだけのことを話してくれたのか、どんなことを話してくれたのかは 全然覚えていないけれどひとつだけ唯一覚えて

いる話がある。それが、避難所での話だ。

姉は被災した時 1才だった。まだまだミルクが必要な歳だ。しかし、家のミルクが不足していて母は困っていた。避難所で、もしかしたらミルクがもらえるかもしれないと母は 食料を配っている人に聞いた。すると、配っている人に『おにぎりと交換になりますか？それでよろしいですか？』と言われたそうだ。ミルクは老人優先で配っていたらしい。母がそれに悩んだのか、すぐに返事をできたのかまでは覚えていないが、最終的には交換することを望んだらしい。しかし、それをすぐ近くで見えていた親切なおばあさんが 母にミルクをくれた。自分も大変なはずなのにそんな状態で人に優しくできるとても親切なおばあさんに母だけではなく父も祖父母もとても心が温かくなったと思う。関心がなく、実感も何も湧かなかったわたしですら心が温かくなって、幼いながらに覚えていた記憶だ。口ではいくらでもた易く『思いやり』という言葉が口に出ることができるとは、実際に思いやりのある行動ができる人は、なかなかいないと思う。私の家族と祖父母の避難所での大きな話はこれだけだが、たった何十時間しかいなかった避難所でこんな優しい人に出会えたことはとても恵まれていると思った。

4 三田へ

5人で父方の祖父母の家へ向かう時。高速道路は とても空いていたらしいが、逆方面は みたこともないような、ものすごい停滞だったらしい。三田に到着し、一夜を過ごした後 父は会社に行かなくてはならないため、朝に神戸へ戻った。父は会社に泊りがけで働いていて、神戸の復興状態や自分の無事を毎晩 母に連絡していた。1ヶ月経過しても『まだ帰れる状態じゃない』と父に言われたが ずっと都会で生活してきた祖母と母には 田舎暮らしが耐えられなかったらしい。1ヶ月を三田で過ごした後、強引に神戸へ戻ってきた。

5 神戸の復旧と復興

1ヶ月ぶりに神戸に帰ってくると、復旧しているものや変わったことが ちらほらあった。スーパーはもう再開していた。しかし、まだ区役所に救援物資は届いていないらしい。祖父母は、救援物資をいただきながら生活をしていた。私の家族が住んでいた社宅は 仮設トイレが設置されていたそうだが、祖父母の市営住宅には設置されていなかった。祖父母は11階に住んでいたから、11階まで水を運んだ。それが一番 辛かったと言う。私の家族は、水が必要になっても2階に住んでいたので 簡単に運ぶことができた。母は、祖父母の生活を支えながら自分も生活していたというが、母曰く、住んでいた社宅はガスや電気などのライフラインの復旧が神戸で一番遅かったらしい。何一つ大切なものを失わなかったし、生活をやっていける環境にはいたが やはりライフラインの復旧が遅かったということは相当きつかったらしい。その時、はじめてライフラインのありがたさを知ったという。

そして、もうひとつ。避難所だった須磨体育館が帰ってきたら 死体安置所にかわっていたことが 大きかったそうだ。自分自身、失ったものはないけれど、社宅のすぐ近くに そういったところができ、人がそこへ入っていくのを見ると 大切な人を亡くした方が大勢いるのだ、と体育館を見るたび 辛い気持ちになり 心が締め付けられるという。

6 震災を体験して

母は、震災を体験して「人間って無力やな」とつくづく思ったらしい。とにかく空が一番心に残っているらしく、空は、昼間でも夜みたいな暗さで時間が全く分からなかったと話している。一晩中、消防車などのサイレンの音が鳴り響いて本当に地獄にいるかのようなようだった。電気、ガス、水道がこんなに有りがたいものだったことがなく、震災がライフラインの大切さを教えてくれた。震災は、絶対に許せないもの。でも、人の優しさや物の大切さをたくさん教えてくれた。避難所の時だけでなく、たくさん知らない人が話しかけてくれたらしい。小さい子どもがいるから皆が気を遣ってくれて、日本は温かいなあと改めて思った。これから高齢化社会がどんどん進んでいき、あんな大きな地震がきたらそれこそもっと大変になるだろう。その対策をきちんとしていなかないといけないと思う。そのためには、近所の繋がりが大切で、日頃からコミュニケーションをとらないといけない。それか

ら、母は「震災が起きたのが冬だったからいいけど、夏だったら体力的にもしんどかったと思う。季節による災害の見直し方を考えていかないといけない。非常持ち出し袋の中身も考え直さないといけない」と話す。

7 これからどう生きていきたいか

やはり、平日頃からの取り組みが大切だ。老人は引きこもりをやめて、一日に一回でも外にできるようにして、体力をつけていかないといけない。母も洋服ダンスのことが怖くなったらしくて、寝室にはもう何も置かないようにしている。これから、どんどん年老いていくが、人との交流をやめずに困っている人がいたら手を差し伸べ、常に体調を気遣い、無理をせず、できるだけ運動をして体力を蓄え、いざという時に大切な人の命や自分の命が守れるように生きていきたいと母は言った。この世から阪神淡路大震災のことが忘れられるのは辛いから多くの人に震災のことを知ってほしい。これから生きる人に地震のことをいつまでも語り継いでいってほしい。それが母の願いだ。

8 震災の話を聞いて

私は、小学校の6年間 毎年1月に『しあわせはこべるように』を歌ってきたけど、歌詞の意味なんて考えたことがなかったし、震災や防災の授業もあまり関心がなかった。母の避難所の話は感動したけれど、それきりで別にその後防災に興味がでたとか何か動いたとか、そういうことは一切なかった。避難訓練はただ単にめんどくさい行事だなあ、とっていたし 嫌な授業の時に行われると ラッキーと思ったり、その程度のものでしかなかった。知っていた知識は「地震の時は机の下にもぐる」とことと「運動場で地震が起きたら皆でしゃがんで真ん中の遊具などが無い場所に行く」ということぐらいだった。中学生にあがってからも別に興味なんてなかったし防災に関心が芽生え始めたのは中3の時だった。舞子高校の普通科のオープンハイスクールに行った時に「環境防災科」の存在をはっきり知った。姉のとても仲が良い友だちの弟が環境防災科に興味がある、と聞いて存在は知っていたが、詳しい話は全く知らなかった。しかし、その時は、環境防災科の存在を知っても「珍しい学科があるんやな」程度にしか思っていなかった。私は「どこの学校に行ってもそんなに変わらへんやろ」と思っていて、あまり進路に前向きではなかった。勉強も、塾でしかしていなかったし 塾でも勉強に対する意欲がなさすぎるせいで先生にも親にも毎日のように怒られていた。しかし、この環境防災科のことを知ってからなんとなく気になって 親や塾の先生、周りの人に震災のことを聞いた。そこで、あまり皆、震災のことを積極的に話したがることを知った。いま考えれば、それは自然なことだし当たり前だけれど 当時の私はとても疑問だった。だから、携帯やパソコンでなんとなく、震災のことを調べてみた。そうすると、小学校の時 聞いた覚えがある話が幾つかネットに載っていて 小学校の時は分からなかったけれど、率直な感想だが、辛い話だなと思ったし、自分も辛くなった。正直、特別防災に興味があってこの学科に入ったわけではなかったけれど、見てきたたくさんの学校の中で一番興味と何か惹かれるものがあつたから志望校を環境防災科に決めた。

そして、入学してから、阪神淡路大震災の時の話を聞く機会がたくさんあった。消防士、ガス、水道局、NTTなどたくさんの方が来てくれて、たくさん立ち場から阪神淡路大震災の話やこれからその体験をどう生かしていきたいかを話してくれた。阪神淡路大震災のことを初めて詳しく聞いた私は改めて災害の恐ろしさを知った。初めは「この話を次の世代に伝えていかないといけないな」と思っていたけれど、だんだん学校生活に慣れてくると 意識が弱くなってきて まじめに話を聞かなくなったり、寝てしまったり いい加減なことをするようになった。一生懸命私たちに震災のことを伝えようと話をしてくれている人の気持ちなんて考えていなかった。

しかし、2年生に上がってからボランティアで 大勢の人の前で発表する機会があった。その時、初めて人の前にたって私に阪神淡路大震災の話をしてくれた人の気持ちが分かった。真剣に聞いてくれる人がいる一方で寝ている人がいる。一生懸命伝えようとしてくれた人たちのことを私は蔑ろにしていたのだと初めて気付いた。広島原爆のテレビを見ている時、「体験した人がどんどん亡くなっていて伝える人がなくなっている」と体験した人が言っているのを思い出した。阪神淡路大震災

もいずれはそうなるのだからその伝えるという役を私が引き継いでいかないと出来ない、伝えていきたいと強く思った。しかし、話をしてくれる人から話を聞いて勉強することはできるが、親や知り合いなどあまり話したがらない人に「あの日のことを教えて」というのはできなかった。親や身近な人の思いをこれから伝えていきたいと思う一方で、「あの日のことを思い出したくない」、「胸の中にしまっておきたい」と思っている人もいることを知った。皆が皆、伝えていきたいと思っっているわけではなく、思い出したくない人やいまだに後遺症が残っていたり、深く傷ついている人のことも考えなければいけないと思った。

9 聞いた話を伝えていく

私は、震災の話などを人前で話す機会があったが、授業する機会などは全くなかった。しかし、特別支援学校で授業をするというボランティアがきて1年生の秋、初めて授業をした。「阪神淡路大震災の話をしてほしい」と事前に言われ、「体験していないのに上手く授業ができるのか」と、とても不安になった。私は、阪神淡路大震災のことを勉強しているが被災された方の気持ちが分かるわけではない。だから、震災のことを詳しく知らない人の前で震災を体験していない私が震災のことを語るのは、なんだか不思議な気持ちになった。しかし、実際に特別支援学校の生徒に「阪神淡路大震災を知っていますか」と聞いたら知らないという子がほとんどだった。阪神淡路大震災では、障害がある方のことも問題になったと勉強した。差別を受けたり酷い言葉を吐かれたり。そういうことをなくすためにもそういった目線から、災害のことを考えていきたいし、障害のある人たちもできるだけ最低限命を守る勉強をしてほしいと思った。だから、「阪神淡路大震災を知らない」と答えた人たちのために、災害を体験していないが、していないなりに私の中にある知識すべてを伝える必要があると思った。

それから、最初はあまり災害のことを語ろうとしなかった私の周りの人が、だんだん災害のことを私に教えてくれるようになってきた。きっと、「話したくない」、「この震災の話は永遠に胸にしまっておこう」と思っていた方もたくさんいたと思う。でも、私が防災を勉強しているから、「話したくないけれど、私のために話そう」、とってくれたのだと思う。そんな方のためにも私はその人たちの経験が将来役に立つように、語り継ぐことを忘れないでいたいと思った。

10 ボランティア

先ほど、支援学校の話があったのだが、私は支援学校との交流ボランティアにいくつか参加したことがある。私の母は障害者手帳を持っている。見た目ではわからないものではないのだが、肩の骨がほとんど欠けてしまっていて、手も骨がでていて、強く握られたり、あたられるととても痛いのだという。そういった母のような人をどうしたら災害の時に助けられるのかを自分自身よく分かっていなかったもので、意見をシェアしていきたいと思っていた。そうしているうちにだんだん支援学校の子と交流するのが楽しみになって、1年生の時に行った特別支援学校に2年生のとき再び行かせていただいた。

「きっと知識も話したことも忘れてるから一から話そう」、そう思って、私は1年生の時と同じような形で授業をさせていただいた。1年前のことは、自分だって忘れてるからおさらいも含めて一から話そう、と思っていたのだが、いざ授業をしてみると1年前は全然知識のなかった生徒さんたちが『地震のときは机に隠れるだけじゃなくて、机の足を持つねんで。そうしないと机揺れてまうねんで』と、私が言おうと思っていたことを説明してくれたり、知識が明らかに増えていた。学校で、防災教育をするようになったから知識が増えたのか、覚えてくれていたのかは分からないがそれでも防災に興味を持っていてくれる人が増えたのだな、と思ってとても嬉しくなった。きっと、環境防災科設立に関わっていた方や、外部講師として来てくださった方も毎年こんな気持ちなのではないかと感じた。伝えていくことはきっと勉強することにも繋がるのだと思う。

11 これからの生き方

私は、大学や専門学校に行く予定はない。高校を卒業したら就職をしようと思っている。大学で防災を専門に学んでいく人がたくさんいるけれど、私は防災の道から離れることになる。それでも、防

災のことと、この学科で学んだことを忘れずに生きていきたい。私は将来、たくさんの国に行きたいと思っている。日本は地震大国と呼ばれているからそのことを海外に行ったら聞かれるかもしれない。その時にきちんと日本のことを伝えられるようにしたい。それから、東京オリンピックが決まった時、世界中の人が「日本は原発の問題がまだ片付いてないのに大丈夫なのか」と思ったと思うし、実際にテレビやネットで言っていたのを聞いた。そういった意味のすごく汚い言葉を海外の方がネットで言っていたのを見たことがある。確かに、福島の問題は片付いていないと思う。そんな中、海外の人が心配になる気持ちも分かる。でもそれを小汚い言葉で指摘されたことがとても辛かったし、私の気持ちとは比べものにならないくらい被災した人は傷ついたはずだ。きっと、こんなことを言うのは正しい知識を知らないからと、知ろうとしないからだと思う。私も全然詳しくないから偉そうなことは言えないけれど、正確な情報を海外の人に伝えていきたい。海外の方も安心でき、被災した人を傷つけない方法を探していきたいと思った。そして、私には 夢というか憧れていることがある。それは、海外で日本人ホテルを作ることだ。簡単なことではないし、夢みているだけなのだが、もし私が海外で日本人のホテルを運営できたら、防災対策が完璧な作りをしたい。建築関係の方が 外部講師として来てくださったときに教えてくれたことをたくさん取り入れて安全な作りにして、日本人向けホテルだが、海外の方が関心してくださるようなホテルと耐震技術を取り入れたい。

それから、「聞いた話を伝えていく」にも書いたように、阪神淡路大震災のことを忘れずに、防災の道に進学・就職しなくても、母や身近な人の思い、ボランティアで地震の話をしてくださった方たち、外部講師として私たちに震災のことを様々な立ち場から教えてくださった方の話と思いを語り継いでいきたい。被災した人からすれば「地震のことを知らないのに軽々しく語り継ぐとか、教訓とか偉そうな顔をするな」と思われることもあるかもしれないけれど、私は私なりにできること全てをしようと思う。これから、生きていくうちに大きな地震にあうかもしれない。防災と関わりがなくても生きていくうえで、防災を無視することは誰であろうとできないのだ。常日頃というのは無理かもしれないけど、防災の道に進まなくても、防災のことを忘れず、時間が合う日にはボランティアに参加したり、直接防災に関わる取り組みはできなくても、何かしら関わりを持っていきたいと思った。

語り継ぐ

年増 佳奈子

1 はじめに

私は震災後に生まれた。だから母の震災体験を書こうと思う。

阪神淡路大震災発生前、私の家族は母と父だけだった。垂水区にある普通のアパートに暮らし普通の生活を送っていた。私の母は1月16日の時点で、出産予定日約2週間前だった。私の兄である。いつ生まれてもおかしくないという状態にあったらしい。1月16日、もうすぐ出産ということで垂水区にある家から灘区にある祖父の家に移ってきたところだった。祖父の家には、祖母と祖父、叔母が住んでいた。祖父の家は、震災の約一年前に建てた2階建ての一軒家である。父は母を送った後、垂水区の家に帰って行ったそうだ。

昔から、神戸には巨大地震が起きないと言われていたらしく、母もそれを信じていた。だから、明日大地震が起こるなんて思ってもみなかったと言っていた。そして震災が起こった。

2 1月17日

(1)震災発生直後

祖父の家の一階に母と祖母、二階に祖父と叔母が寝ていた。

1月17日の朝、母は祖母の隣で寝ていたと言っていた。するといきなり横揺れが始まった。

最初は「いつものことだろうからすぐに止まるだろう」と思っていたが、なかなか止まらなかったらしい。それどころかだんだん大きくなっていったそうだ。そんなとき、隣で寝ていた祖母が母の上に覆いかぶさってきた。母とお腹の子を守るために。何分かしたら揺れはおさまり、祖父と叔母がすごい形相で二階から降りてきた。まだ余震が残っている状態でとりあえず安全な場所へと思い、トイレの中に逃げた。祖父の家はトイレが階段の下にあり、柱が狭い範囲にたくさんあるから安全だろうと判断したようだった。しかし停電していて電気がつかなかった。すると、祖父がもしもの時のために用意していたという懐中電灯を持ってきた。しかしそれは、電池切れで使えなかった。ふと祖母を見ると、額から血を流していた。しかし突然の地震で何が何だか分からなかったという状態だったらしいので、祖母自身、自分が血を流しているどころか痛みさえ感じなかった様子であったと言う。

揺れがある程度おさまって、母は父の安否確認をしようとした。でも、何回も何回もかけても電話は繋がらなかった。公衆電話でかけてやっとだったという。幸い、父は無事だった。父は祖母の家に向かおうと思ったらしく、電車で行こうとしたが、駅自体が機能していなかった。だから父は車で向かおうとした。ただ、垂水区の道路は特に目立った被害はなかったが、長田区、兵庫区の方へ進むにつれ道路が割れてしまっていたり、ひびが入っているような道路が多くなっていったと言っていた。そして、大渋滞が起きていたという。普段かかる時間を大きく上回ってやっとの思いで祖父の家についたらしい。

(2)一時避難

祖父の家の近くの一軒家が倒壊してしまった。もしかしたら、祖父の家も倒壊してしまうかもしれない、ということで祖父の家の近くの公園にアウトドア用のテントを張ってそこにしばらく避難しておこうとなった。テントには、母、祖母、叔母、そして飼っていたねこが暮らしていた。祖父は、買ったばかりの家でくらし、父は垂水に帰った。その公園には、母達ともう一軒の家族がテントを張っていた。母は祖父に、精神的ショックを受けたらお腹の子に悪いからということでできるだけ外へ出るなど言われていた。自衛隊がやってきて、水とお菓子や乾パン、毛布などを分けてくれた。少し離れたところでは火事が起こり、救急車や消防車のサイレンが鳴りやまなかったらしい。テントに毛布

だけという状態で、2～3日生活していたそうだ。

3 出産

陣痛はまだ始まってはいなかったが、妊婦がこんなところには居てはいけないという祖父の意見で、病院へ入院することになった。病院は震災後でもいつも通りに動いており、それどころかいつもよりも看護師が多かった。入院中、たくさんの報道陣が入院している人たちを取材しようとインタビューしてきたらしい。各局の記者たちが次々と入院している人たちに次々に取材の許可をとりについていたと言っていた。母もインタビューをしたいと言われたが、断った。母は2～3日入院していたが、まだ生まれそうになかったため、垂水の父のいる家に帰った。結局、その戻ったその日の夜に陣痛が始まったらしい。

そして1月31日。兄が生まれた。何も異常のない元気な赤ちゃんだった。まだまだ復旧は進んでいなかったが、たくさんの親戚が母や兄のところを集まってくれた。突然の大地震でたくさんの人が笑顔を失いかけていたが、みんな兄をみると笑顔になった。母は震災が起こったときこんな時に無事に出産できるのかと不安に思っていたが、今はこんな時にこそ生まれてくれてよかったと言っていた。

4 復旧と子育て

父曰く、垂水の自宅はほとんど被害がなかった。食器棚が倒れて食器がほとんど割れてしまった程度と言っていた。そして、家の周りも目立った被害はなく、一部破損などはあったらしいが安全だったと言っていた。一番困ったことは水がなかったことだった。水がないので飲みものがなかったことやトイレや風呂が使えないということが大変だったと言っていた。あるボランティアがお風呂を提供してくれているということで父は入りに行った。母はたくさん人が入っていて、あまり衛生的にもよくないから入れなかったそうだが、父は久しぶりに風呂に入ることができてすっきりできたしありがたいと思っただけらしい。

兄が無事生まれ、両親にとって初めての育児が始まった。だが、まだ救援物資で生活しないといけないうち中、子育てをすることはとても不安だったと言う。幸いなことに、近所の人や親戚が兄のためにオムツをたくさん届けてくれた。そのおかげで約一年間オムツを買わなくて済んだと言っていた。また、食料を多めに分けてくれたりもしてくれた。近所の人たちも自分たちの生活がたいへんなのに、兄のこと、母のことを気遣ってくれて人のあたたかさを心から感じたと言っていた。

多くの人が母に向かって「地震中に身一つで良かった。」と言った。もし、震災前に兄が生まれていたら、母は自分の命、そして兄の命の二つの命を守らなくてはいけなかったからだ。多くの母親たちは自分の子どもを守ろうとして、そのまま下敷きになって亡くなってしまったらしい。

毎日毎日、新聞のテロップに亡くなった方の名前が載ってあった。それを見るのが日課になってしまったと言っていた。

国外からもたくさんの救助隊やボランティアが来てくれた。もちろん、日本のあらゆるところからも来てくれた。埋まってしまっている人の救助や炊き出しをしてくれた。「人っていいな」「困ったときはお互い様なんだな」と感じたそうだ。どのボランティアもとても嬉しかったと言っていたが、一つ悲しいことが起きた。それは、被災者のために炊き出しや救援物資を送ってきてくれているのに、他府県の人達が被災者のふりをして、炊き出しや救援物資を貰っていたということだ。それを聞いてすごく悲しくなったと言っていた。

5 きれいな神戸へ

そして、灘区、長田区、兵庫区あたりは道が狭くて消防が入れないということがたくさん起こったため、多くの町が区画整理された。祖母の家もその対象だったらしい。祖母の家は2階建てだったが区画整理により敷地面積が減ったため、3階建てになった。他にもいろいろな建物が建て直しになっていった。

母は小さいころ兵庫区のあたりに住んでいた。さまざまな人が立ち上がったおかげでどんどんきれいになっていった神戸。その反面、子供のころから見てきた風景がどんどん変わって行って、「なつかしい」が無くなったと言っていた。昔よく行っていたお店もなくなり、今は「全く別の町のような気がする。」と言っていた。震災から20年が経とうとしている今、その地域に行くと「きれいになったな」という思いもあるが、どこかに「寂しい」という気持ちもあるそうだ。子供の頃の記憶とは全然違って、本当にここで育ったのかとも思ってしまうらしい。

6 母の話を聞いて

今までにも何度か母に震災体験を聞こうとしたことがあった。しかし今までは「なにも被害にあってないから話すことはない」と嫌がられ続けた。今回だって、別の人に聞いてと言われたがなんとか聞くことができた。

母の震災体験をこんなに詳しく聞くことは初めてだった。母は妊娠中でもうすぐ生まれるという状態で震災を経験した。揺れが始まって、祖母が自分の命より母とおなかの赤ちゃんのことを守ってくれたことや、親戚や近所の人たちが母と兄に食べ物を分けてくれて、たくさんの方が自分も大変な目にあっただけで母と兄の安全に無事に生まれ、育つことを応援してくれた。その話を聞いて、母も感じたように人ってあたたかいなと私も感じた。そのおかげで今の母があり兄があり私があるということをおぼえてはいけないと思った。そんな人々が助け合って生きている中、救援物資を貰いにくる他府県の人たちがいたという話はとても残念に思った。

震災で被災された方々一人一人にそれぞれの震災体験がある。その中で今回は一番身近な母の震災体験を聞いた。震災は失うことも多いが、その分震災があったから得られた人のあたたかさもある。悲しい被害の様子も大切だと思うが、得られたもの、教訓を私は大事にしていきたいと思った。神戸に住んでいる人たちのほとんどの方が震災体験をしている。だから、他にもいろんな人の話を聞いて、震災をしらない子供たちに語り継いでいきたい。

もちろん亡くなられた6434人の方々のことも忘れてはいけない。亡くなられた方々の分までしっかりと生きていかないといけないということを改めて実感した。

7 環境防災科

私は今環境防災科として3年間やってきた。だが私自身、高校で防災を学ぶなんて思ってもみなかった。小学校の頃は、授業で阪神淡路大震災のことを学んでも、この神戸であんな被害が起きたなんて到底思えなかった。どこかずっと遠くの話だと思っていた。だから、避難訓練があってもなぜこんなことをしなくてはいけないのか分からなかったし、もし災害が起こっても本当に役に立つのかとか、こんなことしても死ぬときは死ぬと思っていた。先生が「備えましょう」と言っても私は災害にあらうことはないと思っていた。ずっと防災は他人事と思っていた。

中学生になってもそんな考えは変わらなかった。

そんな中、3月11日、東日本大震災が起こった。毎日毎日、津波の映像や被害のようすが報道され、私にも何かできることはないかと思うようになった。そんな時、環境防災科の先輩方が東北へボランティアに行っていて、私の兄も普通科だったが東北へボランティアに行った。被災地にボランティアに行く人たちって特別な人っていうイメージがあったけれど、普通の高校生でも被災地に入り、人のためにボランティアできるのだなと思い、私もそんな人になりたいと思い、環境防災科に入った。

そこで防災をきちんと学ぶにつれて、防災教育の大切さや備えることの大切さを知ることができた。そして将来の夢も見つけることができた。

私のような防災にまったく興味を持っていない子供はたくさんいると思う。そんな子供たちに防災の大切さや必要性を伝えていきたい。特にこの神戸に生まれ育ってきた子供には。私は、神戸の一市民として阪神淡路大震災は知っておかないといけないことだと思う。私は環境防災科に入るまでは阪神淡路大震災のことを詳しくは知らなかった。今となっては、被災者・亡くなられた方々に失礼なこ

とだったなと思うし、すごく恥ずかしい。今回母の話を聞いて知らないこともあった。まだまだ阪神淡路大震災について知らないことはたくさんある。というか、私が知っていることはほんの一部にすぎないだろう。子供たちに震災のすべてを知ってほしいとまではいかないが、最低でも知っていてほしいことがある。今の私たちは6434人の犠牲者の上に立っていて、震災当時多くのところが焼野原になったがさまざまな人が立ち上がったおかげで、今のきれいな神戸があるということ。今生きていることは決して当たり前ではなく、多くの人が生きたいと思った今日を生きているということ。

8 将来の夢

今私は国際協力をしたという夢がある。阪神淡路大震災や東日本大震災の時には国外からも多くの方がすぐに関わってくれた。だから私も海外で大きな災害が起きてしまったら、すぐに現地に行ってボランティア活動をしたい。困ったときはお互い様だと思うし、恩返しの意味も込めて。もちろん、日本で災害が起きてすぐに関わられるようにしたい。ほんの小さなことしかできないかもしれないが、私の今できることを全力で取り組みたい。

そして平常時には、発展途上国で防災を伝えたい。発展途上国に限らず、どこの国でも防災は必要だと思うが、特に発展途上国には防災がかかせない。発展途上国のせつかくの発展も、災害が起これば逆戻りになってしまうからだ。だから、今まで学んできたことを発展途上国で教え、発展途上国の開発を支えていきたいと思う。また、経済面からも貧しい国は予算的に防災対策を行っていないという国が少なくない。日本でできる防災と発展途上国でできる防災は多少違うと思うが、同じ部分はそのまま伝えていきたいと思うし、現地にあった、現地でする防災というのも考えていきたい。ハード面は国や地方の予算的に難しいのであれば、ソフト面を強くしたい。この3年間防災はハードだけではなくということ学んできたから、そのことも生かしていきたい。

9 最後に

震災を経験していないから、震災を知らなくてよいなんてことは全くない。今は体験してなくても、今後起こるとされている南海トラフ巨大地震やほかの災害にあうことは十分考えられる。自然災害は必ず起きるのだ。そして、それがいつ起きるのかは誰にも予測できない。いつ起きるか予測できればいいのだが、今の技術ではできない。だからと言って、諦めるのではなくて日々から備えることが重要である。毎日毎日災害が起きるのではないかと不安になっていたら、精神的に病んでしまうから、東日本大震災があつてたくさんの方が防災に目を向けている今、備えることや防災対策に力をいれるべきだと思う。

それを促していくのが私たちの役目だと思う。南海トラフ巨大地震だって防潮堤の整備や津波の対策をしていれば多くの方が助かる。防災対策をすることは決して無駄なことではないということ伝えていきたい。ただ、こんなことを言っても実際に行動に移す人は少ない。これがまた、被害を生み出してしまうと思う。防災対策は耐震化だけではない。簡単にできるものもあるということを広めていきたい。

また、逃げれば助かるということも伝えて、逃げることを諦めて死んでしまったという人をださないうようにしたい。自分の命は自分だけのものではない。自分は死んでしまったらそこで終わりだが、残された遺族や友達は深い悲しみに襲われる。高齢者も「もう十分生きた」とは思わずに、自分のためだけではなく、残された人たちのことを考えて逃げ、生きてほしい。

だれだって災害は怖いと思う。怖いだけで終わらせるだけはいけない。行動に移そう。もっと過去の災害から学ぼう。子供たちに教えるときに大人と学生では全然違うと思う。だから、高校生、大学生のうちに子供たちに伝えてきたい。今だからできることということたくさんある。それをどれだけ実践していけるかが、今後の防災にかかってくると思う。

私は今まで3年間防災を学んできた。普通の人よりは多少は知識があると思う。それを自分のものだけにするのではなく、多くの人に共有することが私たち環境防災科の使命だと思う。また、阪神淡路大震災も東日本大震災も経験してなくて、語り継ぐことは他人の話ばかりになってしまうが、

その聞いた話を元にして防災教育を進めていくことも、震災を経験していない私たちのすべきことだと私は思っている。

語り継ぐ

友清 慎吾

1995年1月17日午前5時46分、父、母、兄は同じ部屋で寝ていた。当時2歳の兄は震災を全く覚えていない。右も左も分からない赤ちゃんだったため無理もない。だが、父、母は鮮明に覚えていた。

1 震災からの日々

(1) 母の証言

地震発生時家族は全員寝ていた。揺れを感じた母はとっさに兄の上に覆いかぶさった。そのあとすぐに、父が覆いかぶさってくれた。揺れが収まってからも母は兄の上からどうもしなかった。同じ揺れが再度来るのではと思い怖くて動けなかった。揺れが収まり数分経った後に兄が目覚めた。何が起こったのか分かっていなかった。揺れている間も眠り続けていたため震災での恐怖は感じていなかった。母は何も分かっていない兄を見てとても安心した。震災を覚えていないことがほんとうに良かったと思った。しかし、今考えると兄は震災の前、いつもは無いはずの夜泣きをしていた。普段はあまり泣かない兄が泣いたときは、とても驚き発熱かと思った。翌朝、近くの診療所に行こうと思っていたが、その明朝に震災が起きた。当時は忘れていたが、あの時の夜泣きは震災の前触れではなかったのかと今は思う。ようやく動けられる状態になり家の中を見て回ると食器が割れ、寝室とは違う部屋のタンスが開いていた。住んでいた場所が垂水区内だったため大きな被害もあまりなく特別に困ったことはなかった、あえてあるとしたら震災の日から兄は夜泣きをするようになり少し怖い思いをした。

揺れが収まり家も家族も無事であることを確認した父は出勤した。母は家にいたら余震で崩れてしまうかと思い地元の本多聞小学校へ避難した。しかし、当時の教頭先生に「校舎が古く地震で傾いたため避難所にはできません。」と言われ追い返された。どうすればいいのかわからなかった母はそのまま実家に向かった。母の実家は学校から近く、家からも遠くない位置であったため徒歩で向かった。実家は少し傾いていたが余震で元に戻ったみたいだった。食器などが割れただけで祖父母は無事だった。実家の方が安全だと思った母は兄と一緒に避難した。必要な家具だけを持ち運び、仕事から帰ってくる父を待った。父の仕事場は大阪にあり、普段と変わらない仕事量であったため家に帰ってきたのは震災から1週間後だった。仕事が終わっても帰るための交通機関がなかったからだ。母も震災の日仕事があったが兄のこともあり仕事を休んだ。電話が繋がらず無断欠勤した。しかし、実家に避難した次の日から兄を祖父母に預け出勤した。震災の影響もあり通勤時間がいつもの倍以上かかり大変だった。震災の日から3日経つと病院も通常通り運営し始めた。いつもより患者が少なく少し不気味だった。1週間も経つと父が帰ってきて実家から普段の家に戻った。

(2) 父の証言

震災前夜、明日から出張のためいつもより早く起きる予定だった。6時に目覚まし時計を設定していた。しかし父は5時30分過ぎに起きた。後30分寝られると思い再度寝ようと、うとうとしていた時震災が起きた。いきなり下から持ち上げられる感覚であり一瞬で地震だ、と思った。すぐに隣で寝ている兄、母を守らなければと思い上にかぶさった。揺れが収まるとすぐに安全確認をしに見回った。食器が割れ、タンスの扉が開いていた。家の被害が小さく少し安心したそうだが枕元に置いていた目覚まし時計が寝室からリビングまで飛んでいて、もしこれが頭に当たっていたらと思うと少し危険を感じた。テレビなど重たい家具は少し移動していたがこの場で暮らすのに支障はないと思い職場へ電話を掛けた。1回で電話が繋がりに事情を説明した。出張先には行けない事としばらく休暇を取れないかという連絡だったが休暇は取れず、震災の日の午後から出勤した。本社が大阪にあり電車が動いていることを知り電車で通勤をした。しかし電車は長田で止まりこれ以上は進めないとわれ歩

いて大阪まで向かった。途中、黒い煙など見え地震が甚大な被害を与えたのだとその時初めて知ることになった。大阪に近づくにつれて普通の光景と変わりもなくどこか別世界に来た思いだった。本社に着いたのが夕方だったためその日は泊まることにした。大阪は震災の影響がなく、食糧など困らなかったそうだが、神戸にいる母や兄の事を思うと食事が進まなかった。次の日、母や兄の事を考えながらも仕事をした。すごく苦痛だった。大阪は本当に被害がなくテレビで神戸を見ると、現実になっていることなのか疑問に思うことがあった。一番衝撃だったのが高速道路の崩壊だった。テレビで見た時、なぜ自分たちがこんな辛い思いにさせられたのかと思い、悲しみと憎しみがこみ上げてきた。父は神戸にいる母と兄のことを思い帰るよう努力はするが、電車が止まっており帰る手段がなく、週末まで会社に泊まった。父はあの時の泊りはすごく辛かったと言う。家族の大黒柱が震災の日から約1週間、家を空け、仕事をしてきたからだ。震災から逃げたと強く感じたそう。ようやく家に帰る日が来て、父は震災の時に歩いた道に戻ってきた。震災の日には誰もいなかった線路はたくさんの人で行列ができていた。その大半がサラリーマンだった。父は自分だけではないと少し気が楽になった。急いで家に帰ると、母と兄は母の実家におり、笑顔で迎えてくれたそう。いつもと変わらないことがとても懐かしく思いとても嬉しかったそう。約1週間働き、ようやく会社から休暇を取り家の片付けなどをした。震災の日からあまり変わらない街並みに心苦しかったが一步一步進んで行こうと思ったそう。「慌てても意味がない。今を悔いなく生きよう」と思えたそう。基本は家で片付けなどしていたが、たまに実家へ行きみんなと楽しく遊んだりした。兄は震災の事をほとんど覚えておらず怖い思いはしなかった。祖父、祖母と一緒に遊べて楽しそうだった。

2 復興

震災は神戸に甚大な被害を与え、人々に大きな傷跡を残していった。母も父も仕事で兄を保育所や実家に預け普通の生活に戻ろうとした。比較的被害が小さかったためすぐに元に戻った。見た目だけは、人の心は空っぽのままだった。震災の日からまだ立ち直れていない人がたくさんいた。母はそう言っていた。母は兄の世話で困っている時、他府県から来た見ず知らずの人(ボランティア団体)に助けてもらった。最初は抵抗と戸惑いがあったが、困った時に頼りになり、とても救われたと言っている。阪神淡路大震災の日をボランティア元年と言うのは的確だと思った。震災から19年が経ち震災を知らない世代が社会の中心となっていく中忘れられかけているのが母にとってはとても残念だそう。今も大きな揺れ、小さい揺れを感じると阪神淡路大震災を思い出す。そして辛い思いを再び思い出すのだ。恐怖、安堵が入り混じった思いで。

3 感想

今回、「語り継ぐ」を書き終えて阪神淡路大震災がたくさんの被害を与えたことがすごく分かった。自分が産まれる前で何が起きたか体験談をすることはできないが母や父、祖父母の話聞き来世に残していくことは可能だと思った。地元の災害でこれまで、たくさんの勉強をしてきたが少しイメージしにくく、どこか他人事のように思っていた。しかし、身近な人の体験談を少し深く聞いてみるとすごくリアリティーがあり、とても怖かった話もあった。自分の家族はそこまで被災をしていないが、同じ神戸の人が深い傷を負い立ち直れない人がいる。その人たちのことを考えると、何も知らない自分たちの世代は少しでも勉強をすることが大切であると思った。被災者の気持ちを全部分かろうとするのはおごりだが、被災者の気持ちになって話を聴くことはできると思う。3年前に起きた、東日本大震災の被災者にもできることだ。今の自分たちができる使命は災害を忘れず、受け継いでいくことである。同じ日本人として、同じ神戸人として過去の災害から学び、これからの災害につなげていくべきだ。

母は震災の日、避難所に行ったが追い返されてしまった。理由は避難所の老朽化だ。比較的被害の小さいところだったためすごく困ることはなかったが、あってはならないことだと思った。避難所は避難場所になれなければ意味がなく、次にどこを避難場所にしたら良いのか分からなくなる。だから、避難場所に指定されている場所は日頃から災害に備えておくべきだと思う。

阪神淡路大震災でも、東日本大震災でも想定にとられすぎていると思う。阪神淡路大震災では「神戸に地震はない」と言われていた。その言葉じたいが間違っている。日本に住む以上地震から逃れら

れることはない。災害と上手く共存していかなければならない。そのためにも災害に対する勉強と母や父が体験した災害の話を知ることが大切だと感じた。

阪神淡路大震災の記録を見て、被害が大きかった東灘区で被災された話を聴くことができた。揺れ始めてすぐに周りの建物が壊れていく音が聞こえその人は何もできずにただ揺れに体を預けていた。揺れが収まり家の外に出ると今までとはあまりにも変わりすぎていて別世界だと感じたようだ。壊れている家や燃えている家の横を通り避難場所に逃げてもたくさんの人で混乱状態だった。逃げてくる際にたくさんのがが人を見たときパニック状態で言っている人もいた。と、この部分だけでも阪神淡路大震災が恐ろしい災害だったと感じることができた。それからの生活は本当に辛いもので、よく耐えて生き延びてくれたと強く思い、同時に尊敬した。その人が言った言葉は自分の胸にしっかりと置いておきたい。

今の自分がどれだけ幸せなのか体験談を聞いて思った。何不自由なく生きてこられたのは両親のおかげだと思った。これからの人生、どんな困難なことに当たってもくじけず、前を向いて確実に一歩一歩、歩むことが大切だと思った。少々のことで諦めないことが大切だと思った。たくさんの人に出会うが、自分の思いをしっかりと持ち、相手に話すことができるようにしたい。

今回学んだことはこれからの人生に活かされると思う。その時、感謝の思いも忘れずに持ちたい。辛い体験談を聞いたことは今後の財産となり、しっかりと受け継いでいこうと思う。決して忘れてはいけぬ阪神淡路大震災を受け継げるようにこれからも精進していきたい。そして来世にしっかりと残せるように頑張りたい。この阪神淡路大震災の話をしてくれた母、父にも感謝したい。辛い体験談を思い出させ当時の心境など詳しく教えてもらえた。分かりやすく何度も繰り返して教えてもらえて本当に助かった。兄もいながら阪神淡路大震災を戦い続けた母は強く尊敬する存在だ。家族のことを考えながらも社会の一員として働き続ける父も尊敬する。もし自分が体験することがあったら何ができるのかまだ想像もできない。何が正解で何が間違いなのかもないこの災害は、その時の状況によって変わっていくものだと思う。そのため、臨機応変に動くしかないと思う。自分は将来、消防士になりたいと思っている。消防士は災害現場にいち早く出動する部隊だが、自分は家族、親戚を置いて仕事に行けるのかすごく不安だ。家族を守らないで他人を守るほどの余裕があるのか、とても不安だ。しかし、地域を守るのが消防士の任務だ。給料を貰っている以上家族を置いて出動しなければならない。自分の父のように。家族の理解が必要となる決断も含め、今から考えなければならないと思った。将来、消防士になれば阪神淡路大震災の教訓や辛い体験談など、多くの人に知ってもらえるよう努力したい。計画もない状態で災害を受けるより、しっかりと考え、早めに対応策をだしておけば少しは安心するのではないかと思った。どんなに辛い体験談であっても受け継いでいかなければならない。その受け継ぐ人がまた誰かに伝えなければ意味がない。人から人へと受け継がれる話は大切に受け継いでいかなければならないと強く思い、それはとても責任のある仕事だと感じた。その仕事を率先して、消防士という立場から、地域や小学生、中学生、高校生、大学生へと教えていきたい。簡単な話ではないが、一所懸命頑張りたい。「諦める」という言葉をこの世から消し、どんな壁にぶち当たっても乗り越えられる精神力と判断力を身につけていくことが大切だと思った。「乗り越えられない試練を神様は与えない。」を胸に何事にも挑戦しこの言葉を自分の手で実現したい。どんな苦境に立たされてもくじけず、諦めないで、前を向いて進んでいきたい。これをこの「語り継ぐ」で1番学んだことだ。自分以外にも苦しい人がいる、自分よりも辛い思いをしてきた人がいる。このことを忘れないでおきたいと思った。

語り継ぐ

中尾 益都希

1 母の阪神淡路大震災

(1) 地震発生～直後

地震が起こる数分前、まだ赤ん坊だった次男が泣き出した。ふと向こうの空を見るとやけに明るかった。次男を布団に引きずり込んだその瞬間「ドーン」という大きな音の直後に「ガー」と音を立てるようにして揺れ出した。咄嗟に足元で寝ていた長男を足で押さえ、側にいた次男を抱きかかえたそう。揺れは20秒ほどだったが母にはすごく長く感じ、両開きの食器棚の扉が開いたり閉じたりし、そのたびに食器がぼろぼろと落ち割れる音がとても怖かったという。

揺れがおさまり家族の無事を確認した後、両親のことが頭によぎり電話を掛けた。けれども相手の話し声は聞こえてくるのに対し、自分の声は雑音となり相手にも伝わっていないようだった。その後何度も電話を掛けなおしても繋がらなかった。

しばらくしてから部屋を出ようと思ったが、停電のため電気が付かず暗くて何も見えなかったそうだ。玄関へ行くためには台所を通らなくてはいけなかったのだが、台所の床にはガラスや食器の破片が散乱していたので父が玄関まで靴を取りに行ってくれた。その際父は足を負傷した。兄たちはまだ幼かったので台所に出ないように前の日に買ってあったマドレーヌを与え、その間に台所に散乱してあるガラスや食器の破片を片付けた。片付けている間にも何度も余震が起こり、そのたびに恐怖心から体が固まり動けなくなったそうだ。

(2) 長田での生活

当時私の家族は垂水区にある11階建ての集合住宅の4階に住んでいた。電気はすぐに復旧したが水道とガスはまだ使えなかったので生活ができなかったそうだ。電気も復旧しているが蛍光灯が割れて使い物にならなかった。4階と11階では揺れの大きさも異なり、4階以上に住んでいる人たちは恐怖心からほとんどの人が県外や被害のない地域に避難したそうだ。また、よその地区で高層建物の真ん中の階が潰れ、自分のところもそうなるのではないかという噂も流れた。それらのことから震災から1週間が経った頃、私の家族も父方の長田の実家へ行くことになった。

父の実家は幸い被害が少なかったが、長田区は火災がひどかったのでガスの復旧が遅れていた。そのため生活をする際にカセットコンロが必需品となった。食料の救援物資はパンが多かったうえ量も少なく、毎日手に入るわけではなかった。だからほぼ毎日カセットコンロを使い祖母が味噌汁を作りそれを食べていた。服も毎日着替えられるわけではなかったので洗濯物は下着を手洗いする程度だった。そして何より兄たちはまだオムツをしていたので、カセットコンロで沸かしたお湯で体を拭き、なんとか清潔を保つようにしていたという。

2 母が伝えたいこと

(1) 当たり前だと思わない

2週間が経ち少し落ち着いたので垂水区の家へ戻った。ガスと水道の復旧がまだだったので再びカセットコンロの生活となり、もちろん家のお風呂には入れなかった。けれどもしばらくしてから、民間のお風呂屋さんや公共の施設にある温泉などが無料で開放されるようになった。祖父母と子供たちを連れてお風呂に行くことが母の仕事となった。

トイレの水はお風呂の浴槽の水を使えたが、飲み水は近所の小学校まで汲みに行かなければならなかったそうだ。父が仕事の日には母が汲みに行かなければならなかったのだが、子供たちを家に置いていけるはずもなく、1人を抱きかかえ、もう1人をベビーカーに乗せ、寒い中大行列に並んだ。持ってくる量が少なすぎて1時間以上並んでも貰えない時があったそうだ。

震災が起きてから就寝時にはパジャマではなく、地震が起きた時にいつでも外へ逃げられるように

外着を着て寝ていた。枕元には靴も置いていた。余震も頻繁に起こっていたため、とにかくリラックスができない生活だったという。

ご飯を食べて、お風呂に入って、子供たちと公園で遊んで。こういった当たり前の日常がどれだけありがたいことなのか、震災を通して母は気づかされた。震災が起きてから外は危険で何度も余震があったので、子供たちを遊ばせる場所などはなかった。だから、子供たちはビデオを見たりかくれんぼをしたり、室内が遊び場となっていた。また、今みたいに当時はみんなが携帯電話を持っているわけではなかった。連絡をする余裕もなく、一日一日を生きることに精一杯だった。だから知り合いと連絡を取れるようになったのは震災からしばらく経ってからだった。水が出たとき、無料でお風呂に入れたとき、本当に嬉しかったそうだ。毎日こうして生きていること、生活していることを決して当たり前だとは思わないでほしいと強く言った。

(2) 日常と防災

地震の直後、部屋から一番離れた人が「大丈夫？」と心配して来てくれたそうだ。揺れによって玄関のドアはすぐには開けなかったのが中から「大丈夫です」と返事をした。そのたった一言だけでもすごく安心したと母は言う。隣の家の方がタンスの下敷きになった時は、近所の人たちですぐに救出したそうだ。このように当時住んでいた集合住宅では近所付き合いも良く、みんなが普段から挨拶を交わすような仲だったので、震災の時共助の力が本当に大きなものとなった。

しかし普段からあまり近所と関わりがなかった人たちは、聞く人がいないので情報源がなくとても困っていたという。母は親子同士での繋がりも多く、たくさん情報が得られたそうだ。もしもその付き合いがなければ、きっと自分も誰に聞けばいいのか分からず困っていただろうと言った。たかが挨拶と思うかもしれないが、日常の近所付き合いや挨拶がいかに大切なのかを思い知ったという。

そして近所同士での繋がりも大切だが、やはり家族の存在がどれだけ大きかったかが分かった。長田での生活では、父の母親が毎日料理を作ってくれたそうだ。給水車に水を汲みに行ってくれたのは父だ。祖母と叔母は地震が起きてすぐにカップ麺などの食料を持ってきてくれた。震災から2週間が経った頃には、北区にある父の弟夫婦の家でお風呂に入れてもらえたそうだ。2人の幼い子供がいる母にとって、こういった家族の助けが本当に心の支えとなったと言う。日常と防災。人と人の繋がりが防災にも繋がるのだ。

3 母の話を聞いて

(1) 感想

私は阪神淡路大震災を体験していない。しかし私は神戸で生まれ育ってきたので小学校の頃から防災教育を受けてきた。何度も長田区の火事の様子や高速道路が傾く様子をテレビや写真で見してきたが自分が経験していないから分からず、いまいちピンとこなかった。環境防災科に入ってからにはさらに阪神淡路大震災について学ぶことが多くなったが、やはりどこかで他人事のように感じていたのかもしれない。しかし今回こうして語り継ぐを通して母から当時の事を聞き、今まで写真や映像で見してきた救援物資に並ぶあの列に、自分の親も並んでいたのかと想像すると他人事では片付けられないと思った。

今までにも母からは当時の話を聞くことはあったが、こんなに詳しく聞いたのは今回が初めてだ。私の家は母子家庭で、私が3歳の時に両親は離婚したので父の記憶はほとんどない。父がどんな人なのかよく知らないし知ろうとも思っていなかった。しかし語り継ぐの話の中で父の話が多々出てきて、母の代わりに玄関まで靴を取りに行ってくれたり、水を汲みに行ってくれたり、父親としては当然のことをやったのかもしれないことがなぜかすごく感動した。そう考えると今こうして私が生きているのって両親のおかげだなと思う。もしも地震によってどちらかが犠牲になっていたら私はこの世に生まれてきていなかった。生きていることを当たり前だと思わず、両親に感謝したい。震災のときに母を支えてくれた父の母にも感謝の気持ちでいっぱいだ。そして少しだけだが、父について知りたい、父にも当時のことを聞いてみたいと思い始めた。

昨年のアクティブ防災の授業の中で心のケアについて学んだ。PTSDやPTSR。母は震災によって家族や親戚、友人を亡くしたわけではないが、今でも震度3などの小さな揺れに対しても敏感で、フラッシュバックかどうかは分からないが体が固まってしまう。話の中でも余震が何度もきて、その度に体が固まったと母は強張った表情で話していた。やはり何年経っても心の傷は癒えないのだなと思った。それと同時に、もしまた巨大地震が発生した時、自分が母を守らなければならないなと思った。もしかすると母は恐怖で体が固まり動けなくなるかもしれない。私自身も実際に起こるとどう行動するかなんて分からない。しかし自分が守らなくて誰が母を守るのだと考えると、もっともっと自分はしっかりしなければならないと思う。実際に、昨年起きた4月13日の淡路島震源の地震。垂水区では震度4の揺れだった。今までにも何度か小さな地震を経験したことはあるが、こんなに大きな揺れは初めて経験した。私は頭に南海トラフがよぎり恐怖で動けなかった。「地震が起きたら机の下に入る」小学生でも分かるようなこんな基本的なこともできなかった。環境防災科の出前授業やボランティアで子供たちに偉そうに教えてきた自分に恥ずかしく思うと同時に情けなくなった。どれだけ防災の勉強をしても、それを実際に行動に出来る臨機応変な態度が出来なければ意味がないのだと思いついた。次また地震が起こった時はこの時のように動けなくなるかもしれないが、阪神淡路大震災の時に母が兄たちを守ってくれたように、私も大好きな母を絶対に守りたい。

(2) 夢と防災

私の夢は地域に防災を広めることだ。そのためにはまず地域の人たちの繋がりをつくらなければならないと思っている。たくさんボランティアに参加してきて、舞子高校の周辺地域と自分の住む地域との意識の差に疑問を抱き始めたのがきっかけだ。防災意識の高い地域は挨拶がしっかりできていて、地域の方たちはそういったコミュニケーションの基本的なことが出来ていると感じている。母の話聞いてより一層、日頃の挨拶や近所付き合いが災害時にいかに重要となるかを理解した。災害時にどれだけ共助が大切となるのか、日頃の近所付き合いが防災に繋がるかということ普通の人には知らないだろう。もし自分がタンスの下敷きになった時、誰も助けてくれないなんて本当に悲しいことだと思う。誰に聞けばいいのか分からず、情報が全然入ってこないなんて不安でいっぱいだと思う。けれども自分の住む地域に置き換えて考えてみると、そういった人たちがたくさん出てくるはずだ。私は自分の地域が大好きだ。垂水区が、神戸の町が大好きだ。誰一人として災害によって命を落とすほしくない。みんなで助け合える町にするにはやはり日頃からの挨拶が大切になってくる。コミュニケーションの基本は挨拶だ。極端に言うと、「おはようございます」というこのたった一言で命が助かるか助からないかが左右されるのだ。

私自身、昔は挨拶が苦手だった。「ありがとう」のたった一言でさえも口にするのが恥ずかしかった。小学一年生の時、祖父からプレゼントを貰い私はありがとうの言葉を言えなかった。普段あまり怒らない母だが、その時すごく叱られたことを今でも覚えている。この時だけに限らず、私が挨拶が出来ていない時母は必ず叱る。そう考えると、こういった何気ない一言でも信頼関係が築かれるのかなと思う。私が近所の人に挨拶をするようになったのは高校に入ってからだ。何度か挨拶を交わすうちに「おかえり」と言ってもらえることも多くなった。そのたった一言ですごく嬉しくなる。挨拶の持つ力ってすごいと思う。初対面の人にもそうでない人にも、会うときは必ず挨拶をする。将来私は、挨拶を基盤に地域のコミュニティを上げられるように地域みんなで町をつくっていきたい。母の言うように人と人との繋がりが防災にも結びついて素敵なことだと思う。防潮堤や耐震化といったハード面から考える防災も大切だが、私は防災教育や近所付き合いといったソフト面から考えられる防災をやっていきたい。自分が伝えるだけでなく、子供たちと一緒に考えることのできる教師になりたい。そのためにはもっともっと勉強しなければならないと思う。

長田の実家へ行く途中、火災によって変わり果てた鷹取の町を見て母は涙が止まらなかったそうだ。毎年1月17日になると当時のことを思い出して涙する母を見る。その中でも、あの時見た鷹取の町の風景は忘れられないと口にする。災害によって傷ついた心や思い出を思い出したくない人はいるかもしれないが、母のこの思いは決して忘れてはいけないと思った。そこで何があったのか、どれだけの人

が亡くなったのか、私たちは知る必要がある。それが犠牲者の方々への弔いでもあるのではないだろうか。

私を含め、未来の子供たちは震災を知らない。兄たちは震災を経験したが当時のことは全く覚えていない。誰かが伝えなければ震災は風化していく。阪神淡路大震災では6434名もの方が亡くなった。犠牲となった方々には一人一人家族や友人、大切な人がいた。一人一人の思いを決して無駄にはしたくないし、それぞれの思いを未来へ伝えたい。神戸で生まれたからには阪神淡路大震災を忘れてはならないと思う。私も母の体験や思いを未来へ伝えたい。未来の子供たちに防災を伝えるとともに、命の尊さを伝えられるような人間になりたい。阪神淡路大震災を伝えることが神戸に生まれた私たちの使命ではないかこの語り継ぐを通して強く思った。母から子へ、子から子へ、そして次の世代へ。阪神淡路大震災を決して忘れない。

語り継ぐ

中尾 悠人

1 阪神淡路大震災まで

両親から聞いた話だが、地震が起きる何日前から前兆のようなことがあったそうだ。近所の近くにすんでいる犬が阪神淡路大震災がおきる一週間ほどまえからずっと吠えていて、近所の犬に関わらず、あちらこちらで犬が吠えていたそうだ。また明石の海ではいつもは釣れない魚がとても釣れ、父はアオリイカを大量に釣り、とても嬉しい反面、不思議に思っていたと言っていた。また、今は四人兄弟だが当時は長女の姉の一人だけで、そして姉はまだ一才二カ月ほどで何も分からない状態だったので、阪神淡路大震災のことは全然記憶にないと言っていた。

2 父から聞いた話

(1) 避難所の話

当時の家は半壊で壁のクロスがひび割れただけだったので、避難所には行かなかった。母親の祖母の家も半壊だったので、避難所には行かなかったそうだ。しかし父親の祖父母の家は長田に住んでおり、家は全壊だった。だが避難所にはいかず、両親の家に半年間ほど住んでいた。そして仮設住宅が長田に作られ、そこに一年ほど住み、家を建て直した。当時、避難所があちらこちらに建てられていて、なかなか仮設住宅が壊れることはなく、たくさんの方が家を失ったのだなと思っていた。

(2) おばあちゃんの話

父の両親は被害が一番ひどい長田区に住んでいた。父はテレビのニュースを見て長田の町が火で覆われているのを見て、あわてて家に電話をしたが繋がらず、大急ぎでバイクで長田まで行こうとしたが、途中で高速道路が倒れて、火事などもあちらこちらで起きていたので、ほとんど祖父母の安否はあきらめていたそうですが、絶対に生きていると信じ、そして実家の長田に着いたときは二階部分が一階に崩れ、隣の家が倒れて乗っかってきていて、完全な全壊だったのでもう諦めかけていた時、母親が飼っていた犬を抱えながら家に戻って来たところで出会ったそうだ。父は一安心し、そしてどうやって助かったのかと聞くと、父親の祖父母が寝ていたところに仏壇があり、仏壇が倒れ、仏壇の上に大きなタンスが倒れ、二階部分がその上に崩れてきた。一階の床から天井までの高さは一メートル未満。その仏壇とタンスのすき間で奇跡的に助かったそうだ。それから足が血だらけになりながらも家が裂けてできたすき間から外に出ることができたが、外の景色は地獄絵図そのままだったそうだ。父の祖父母は毎日仏壇に手を合わせ、お供えも毎日供えていたから仏壇の中の祖父母の両親が命を助けてくれたのだとおっしゃっていた。神様は本当にいるのだなと切実に思ったそうだ。

(3) 食糧、炊き出し

食糧のほうは、スーパーに並んである日常生活で使うもの、食べるものとはにかく買いだめをして、姉の分の粉ミルク、紙おむつなどもいろんな薬局を探して回って買い置きしたそうだ。垂水は被害が少なかったので炊き出しなどはなかった。だが三木の方で救援物資があると聞き、おむつ、食器、おもちゃなど車に積めるだけ積んで、ありがたく頂いた。

(4) 当時の家の被害

僕の親の家は当時垂水区の垂水東の地域の家に住んでいた。三階建ての家で揺れはひどかったが、被害は壁のクロスがひび割れたのと食器が割れたくらいで済んだ。母の祖父母の家は垂水区にあり、こちらも被害が少なかった。そして父の祖父母の家は長田区で、全壊だった。

(5) 町の被害について

垂水区は、比較的被害はすくなかったようだ。しかし揺れは激しく、とても長く揺れを感じたようだ。そして父の実家の長田区は被害がとてもひどく、長田の近くの国道沿いの高速道路は倒れ、道路はぐちゃぐちゃだった。そして火災もひどく、長田区は煙に包まれ、あちらこちらで市民同士が、救助活動をおこなっていた。

(6) 父の仕事について

父の仕事は神戸市環境局で、父の実家の瓦礫処理などの片付けや、僕の両親の家に一時的に引っ越す為に荷物を仕分けたりしたりで、仕事の復帰は阪神淡路大震災が起きてから二週間後位から始めた。そして父の担当地域は兵庫区だった。兵庫区は瓦礫の山だらけで、燃えるゴミなどは一切出ていなくて仕事にならなかったようだ。しかし燃えるゴミがなくとも瓦礫撤去をしないとイケなかった。しかし二t車、四t車で瓦礫を積んでも、積んでも瓦礫は全然減らなく、現場が行き詰まった。だがそこで他県からたくさんの応援部隊が駆け付けてくださった。そのときは本当に感謝の気持ちでいっぱいだった。東京都、高知県、和歌山県などたくさんの清掃局の車が泊まり込みで来てくださり、神戸市は大変助けてもらったおかげでわりと早くに瓦礫を撤去できた。しかし瓦礫の量が多すぎて、埋め立てをする場所がなくなってしまったようだ。そしてやむを得ずあちらこちらの公園やグラウンドに臨時的に瓦礫を置き、なんとか処分することができたと言っていた。

こうして阪神淡路大震災のせいで神戸市の布施畑環境センターは、予定よりはるかに埋め立てする年数が減ってしまった。そこで神戸市のごみは二分別だったゴミ出しが現在の六分別になり、徐々にゴミの量が減ってきた。「これからも、ゴミの分別はきちんと一人一人がしっかりしていくと、ゴミはもっと減らすことができるはずだ。」と父は言っていた。

3 母から聞いた話

平成七年一月十七日、午前五時四十六分、「ドーン、ガタガタ、グラグラー！！」と家がひっくり返るくらいに揺れた。戦争が起きたのか、思いながらも何が起こったかわからなかった。そして目が覚め、お父さんがお母さんに「おさまるまでじっとしとけよ！」と言って布団をかぶせてくれて、布団のなかで「揺れ」がおさまるのをまった。「揺れ」がとりあえずおさまり、また地震がくるのではないかとすごく怖かったが、一回のリビングに向かった。すると食器棚の扉が開いており、中身がほとんどおちて割れていてガラスがあちらこちらに散乱していた。こんな地震を体験したのは初めてだったので、これはただ事ではないと思った。二時間後に電気が通り、テレビをつけると燃え盛る炎を目にした。あの見覚えのある高速道路が倒れ、家事もいろんなところで起きていた。当時住んでいた垂水区は地震が起きた二時間後には電気が通ったが、水が出るのに一週間はかかり、いとこの家にお風呂を借りにいったり、お風呂屋さんに一～二時間並んで借りに行ったりして大変な思いをしたことを覚えていると言っていた。

感想

(1) 父や母の話を聞いて

父も母もこんな凄まじい体験をしていたのだなと思った。僕たちはまだ阪神淡路大震災のような経験をしていないし、阪神淡路大震災のような経験は決してしたくないなと思った。僕は小さい地震が起きただけでも怖いし、死んでしまうと思ってしまう。震度1か2程度でも怖いのに、家がつぶれるほどの震度を経験した長田区の人達は阪神淡路大震災が起きた時、どう感じたのだろうと思った。長田のおばあちゃんの話聞いたとき、鳥肌が立ってしまった。あの被害が大きかった長田で、しかも全壊の建物から助かった人はそうそういないだろうと思う。そのうちの一人がおばあちゃんにならなくて本当によかったと心から思った。僕は神様とかは信じない人だけど、毎日仏壇にしっかりとお供えをしていると、いつか報われる時が来るのだなと思った。

阪神淡路大震災では、八割の死因が建物の倒壊に押しつぶされてしんでいる。地震はいつ起きるかわ

からない。そのお亡くなりになった人たちは、明日死ぬなど思っているはずがないと思うし、そう考えると、地震は一瞬にして大切な人や命を簡単に奪っていくのだなおもった。そして東日本大震災では、津波でたくさんのひとがお亡くなりになった。阪神淡路大震災とは違い、津波被害がひどくて防波堤なども全く意味がなく、これもまたたくさんのひとがお亡くなりになった。僕たちは絶対にこの命を無駄にはしてはいけない。阪神淡路大震災では、市民の方々が助け合うことの重要さを知った。東日本大震災では津波を甘く見ず、高台や遠いところに避難することが必要ということを知った。

今言われている南海トラフの地震は、阪神淡路大震災のような地震ではなく、どちらかという東日本大震災のような津波の被害が大きい地震になるといわれている。今の時代は阪神淡路大震災や東日本大震災とは違って地震の被害額や地震の被害面積やどのような地震などというのわかるので、被害は最小限に抑えることができると思う。

これからは、そのようにコンピューターを使って地震の推測をどんどんはからってほしい。だが、想定内に終わることがないのが「地震」の一番恐ろしいところだと思う。そこで、避難訓練もしっかりとやっていかなければいけないと思った。阪神淡路大震災を経験した人でも「地震はもうこない」と思っているかもしれないが、地震はいつ起こるかわからない。何時に起こるかもわからない。明日起こるかも知れない。日本は太平洋プレートに分布しているので、地震国である。そういう危機感を感じながら、毎日の生活を過ごしてほしい。

阪神淡路大震災をどう伝えていくか。

阪神淡路大震災をどう伝えていくかと考えると、今回のように「語り継ぐ」という阪神淡路大震災を経験していない人たちに語り継いでいかないと、僕たちのつぎの世代にも語り継いでいくことができないまま終わってしまうし、あの悲惨な出来事は絶対に語り継いでいかなければならない。ぼくは毎年震災の日の一月十七日になると、震災の当時の特集の番組を流したらいいのではないかと思った。そのような映像をみて、不快に思う人もたくさんいるとおもうが、阪神淡路大震災を経験した人がその特集の映像をみて、震災を知らない僕たちのように、自分の息子や娘に震災の体験を伝えて、またそういうことで自分が独立して結婚して息子、娘へと語り継ぐことができいくと思う。

このように、サイトで掲示板のように書き込んで伝えるのもいいが、正直そんなに見ることがないと思う。やはり一番見られるのは、映像、テレビだと思う。また、生の被災者の声だと思う。震災を経験した人だけだと正直重いという気持ちがあるので、僕たちのような世代に阪神淡路大震災を伝えて語り継いでいくには、若い人が伝えていくのもいいじゃないかと思う。そのためは、伝える側となった人たちは震災のことを被災したひとと同じ知識を持たないといけない。しかし若い世代に震災を若い人が伝えていたら、逆に説得力があって、聞きにしてくれるかもしれない。そうして伝えていくのもいいと思う。

また、僕たち環境防災科が、若い世代へ阪神淡路大震災を伝えていかないといけないと思う。そうしないと、なにをに環境防災科に入ったかわからないし、僕たちが伝えていかないとこのままでは僕たちの世代から下は誰一人、阪神淡路大震災という地震の名前すら浮かばなくなるかもしれない。僕はあまりボランティアというものには参加していないが、それでも災害の知識や、阪神淡路大震災のことについては三年間しっかりと勉強してきた。だからある程度のことなら話せるので、僕は小さい子供の世代に教えていきたい。二年生のとき、小学校に出前授業を教えに行った時、地震のクイズなどを出したら、真剣に考え、答えてくれた。また、疑問に思ったり、不思議に思ったりしたらすぐに質問してくださり、とても感動した。このように小学生に阪神淡路大震災について語る時に、震災がどれほど恐ろしいということを教えないといけないとおもう。初めからそのように伝えて、当時の写真を見せると絶対怖がると思う。この怖いと覚えることが重要だと思う。避難訓練はとても大事だし、自分の命を守るという面については素晴らしいと思うが、正直言って避難訓練は怖さや、恐ろしさが足りないと思う。だから、写真などをみせて恐怖感をもってもらおう。地震がどれほど恐ろしいかというのをしたら、いくら若い人たちでも絶対に避難すると思う。そういうことが阪神淡路大震災を通して地震という災害を知り、地震に敏感になってほしい。

やはり阪神淡路大震災をこの先にも後世に伝えていくには、テレビを使って伝えることが一番影響力は強いが、それだけでは足りないと思う。だから、自分らの世代やその先の世代も、自分の親に震災のことを話してもらい、その話を自分の息子や娘が高校生くらいになった頃ぐらいに伝え、その聞いた話をその娘や息子が結婚して生まれた子供にまた伝えていったら、いつまでも次世代に伝えることができると思う。しかし、結婚もしていない人たちはどうしたらいいかとなると、新聞を読んだりして自分なりに解釈したことを自分の親戚の子供などに話したらいいと思う。

また、東日本大震災のような震災が再び起きたら、いろんなアーティストの人たちが一つになって歌を作ればいいと思う。そうすればテレビでそのような歌が流れて、この歌は～大震災が起きて作られた歌だと宣伝してくれると思う。阪神淡路大震災が起きた時は、「幸せ運べるように」が作られ、東日本大震災が起きた時はEXILEの「RISING SUN」が作られ、被災地を元気づけた。逆に迷惑がっていた被災者もいたと思うが、少なからずとも元気づけられた人たちのほうが多いだろう。昔の歌がいまでも流れるように、歌は後世に受け継がれていくので、震災がきっかけで作られた歌も後世に語り継ぎ、そして子供たちがその震災に疑問や興味をもち、震災を知っていくことができる。また、お正月などの大人数で集まる時などにも阪神淡路大震災のことをちょっと話したらいいかなと思う。ちょうど17日後は阪神淡路大震災の日だし、人数も多いしちょうどいい機会だと思う。もうあるかもしれないが、震災の体験を一般の人がホームページに書き、みんなが共有できるようにすればいいと思う。

阪神淡路大震災をどう残していくか

阪神淡路をどう残していくのかと考えると、ルミナリエが一番伝えることができる行事だと思う。建物もきれいだし、人がたくさん集まるので、阪神淡路大震災を残していける大切な行事ごとだと思う。ルミナリエとは何がきっかけでつくられ、なぜ作られたのか、僕たちの世代でも知らない人が多いと思う。だから、ルミナリエは阪神淡路大震災がきっかけで作られ、亡くなった方々の気持ちをいつまでも忘れないために作られたということ、ルミナリエの期間中はテレビで伝えるべきだと思う。正直環境防災科に入っていなかったら僕も、ルミナリエはただのきれいな模型としか思っていなかっただろう。そして僕はいま、阪神淡路大震災という震災を伝える側として回ったので、しっかりとみんなの胸に残していきたい。まずは、友達に伝えることから始めていきたい。友達に伝えることが簡単なようで一番難しいと思うので、友達の胸に阪神淡路大震災が残るように伝えたい。そしてそれからどんどん教えていく活動を増やしていけばいいと思う。

僕は将来絶対に消防士になるので、そのなった暁には、阪神淡路大震災の地震に関連を深めつつ、防災活動をどんどん教えていきたい。阪神淡路大震災をいつまでも残していくのはとても難しいと思う。でも、僕たちは環境防災科なので、必ず語り継いでいかなければならない。阪神淡路大震災だけではなく、関東大震災や、中越沖地震や、東日本大震災など、日本には語り継いでいかなければならないことがたくさんある。しかし地震のすべてに共通していかなければならないのはなにかというのを見つけないといけないと思う。それをさがすのが環境防災科、または僕自身の使命だと思うので、がんばりたい。

阪神淡路大震災を語り継ぐ

中末 知弥

1 阪神淡路大震災の前日

1995年1月17日午前5時46分阪神淡路大震災が起こった。その時はまだ、私は生まれていなかったため、父と母の被災体験を書きたいと思う。この時は神戸には地震が起こらないと言われていたが、前日の昼頃にお尻をドンッと突き上げるような縦揺れの地震が一度きた。その時は名谷の家のコタツに入っていた、そのときはいったいなんだろうと思った。この日の夜はパチンコ屋に行った帰りに月をみて特に地震が起こることも思わなかった。

2 阪神淡路大震災当日

(1) 午前5時46分

この日、父は仕事で阪急伊丹駅前の標識に供給している電源を撤去しに行く日だったが、5時46分頃突然激しい揺れに襲われた、明け方にグラグラと揺れていることに気づいた母は飛び起きて横に寝ていた父を起こした、揺れている時はいったい何が起こっているのかわからなかった。後で聞いた話だが仕事で行くはずだった阪急伊丹駅は潰れてしまって、もし仕事をしている時間に地震が起こっていたら、死んでいたかもしれない。また、仕事で阪急伊丹駅に行く時に使う阪神高速道路が倒れていたことも後で知った。もし、時間がずれて阪神高速道路に乗っていたら死んでいたかもしれない。

婚礼ダンスの上に乗せていたガラスに入った結納の人形が頭の上に落ちてきて木っ端微塵に割れた。一瞬のことだったがもし母が父を起こしていなかったら上から降ってきた人形とガラスが頭の上に落ちていた。揺れているときはまるでトランポリンの上で跳ねているような感じがした。自分の思っている方向へ動けなかった。また、外が光っていたように見えた。父は最初横揺れだったときは地震だということには気付かなかった。しかし縦揺れになって地震だと気づき、急いで頭を枕で守った。そのあとも揺れが何回もきた、揺れが収まって仕事で使っている倉庫や駐車場がめちゃくちゃになってしまっていると思った。

(2) 揺れの後

家の中を見てみると食器は食器棚から全部でているし、時計も壁から外れて落ちていた、余震が来るかもしれないと思い父と母はテーブルの下にいたが時計を見ても時計は壊れていて、いつまでたっても時計は動かなかった。それに気づいたのは1時間後くらいだった。テーブルの下からでて外を見に行ったら近所の人も外にでて周りをみていた、南の方を見ると黒い煙が山越しに上がっているのが見えた。外に出て車を確認して車が大丈夫だったので車のラジオを聞いて情報を集めた。

名谷の方の被害はパティオの駐車場の壁が一枚落ちているくらいだった。家に戻ってから、前の年に母の友達がマンションに住んでいて、台風の被害にあったときに停電と水道が断水してしまった。しかしマンションの上には高架水槽があつてその高架水槽に溜まっているうちは水がでるとい話を思い出して、お風呂をきれいに洗ってから、お風呂いっぱい水を貯めた。さらに水の貯められるバケツや鍋などに貯められる分だけ貯めた。その時の水を貯めていたことでトイレの時やラーメンを作る時や食器を洗ったり手を洗ったりすることに使えた。阪神淡路大震災が起こったあと、その余震が起こる前に震源地の淡路島の方から地鳴りのような音が聞こえてきて地震がきた。

(3) 安否確認

そのあとは、家の電話はつながらないし、まだ携帯電話は普及していない時代だったので近くの酒屋にある公衆電話から家族の安否を確認して、家族全員無事だということがわかり一安心だった。

名谷の家は1時間から3時間ほどの間で電気は復旧したのでテレビのニュースを確認したら神戸のいたるところが火事で燃えていていた。そのあと、近くのダイエーに買い物をしに行くのとたくさんの人が並んでいて食パン1斤と牛乳パックとカップラーメンしか売ってもらえなかった。

買い物から帰ってきて家の中の片付けを行った。父の部屋にあった本棚は潰れて本が崩れていた、父方の祖父の家の近くが火事で大変だというニュースを見て、もう一度安否を確認するために名谷の駅の2階にある公衆電話に電話をかけに行った。なんとか連絡もとれて無事だということがわかった。父方の祖父の家は半壊だったが現在の夢野中学校（そのときは夢野小学校）のグラウンドに車で避難していたということを聞いた。その日の夜はグラウンドにとめている車の中で寝るので大丈夫だとわかったので安心して家に帰った。この時は携帯電話を持っている人のほうが少なかったので逆に携帯はよく繋がった。家に帰ってきてからはずっとニュースを見ていた。被害は六甲山系の北側と南側とは被害が大きく違った。北側では街並みが普段どおりなのだが、南側はまるで街のいたるところに爆撃があったかのような感じだった。ニュースでは阪神高速道路が倒れていたのを見てすごいことが起こったのだと思った。

昨日まで普通に暮らしていた場所や歩いていた場所が一瞬で廃墟と化してしまったようで現実離れしている気分になった。食器棚はガムテープを貼って食器が出ないように塞いだ。その日はタンスが倒れてくるのが怖かったのでテーブルの下に布団をひいて頭をテーブルの下に入れて寝た。

被害がそこまで大きくなく、避難所にはいかなかったため救援物資をもらうこともなくすごした。

(4) 灘に住む叔父の話

叔父は小さな家がたくさんあった灘の地域に住んでいた、そのため地震直後、すぐに家の下敷きになってしまった人や瓦礫に埋まってしまって怪我をした人を見て助けて回った。

自分のことをするよりも先に多くの人の命を救ったという話を聞いた。叔父は大工をしていた為、家屋に詳しくいろいろな道具を持っていて埋まっている人を助けるときに道具を使えた。叔父は地震のあとは地震で壊れた家屋の解体の仕事にも貢献した。

3 阪神淡路大震災の次の日

この日は電気が通じていたのでご飯を炊いておにぎりを作って父方の祖母の家に持っていきこうとしたが、西神戸有料道路が通行止めになっていたことを知らず、渋滞に巻き込まれてしまった。いつもだと20分ほど着く距離のはずが8時間もかかってしまった。父方の祖父の家に行くのと持っていったおにぎりを渡して一緒に食べた。そのときは避難所としての機能があまり備わっていなかったので支援がほとんどなかった。そのため、グラウンドに車で来て車で寝泊りすれば安全だと思われていた。

その後、避難所の近くの幼稚園にある蛇口から、その幼稚園にある井戸の水が出たため、あらゆる場所から水が出るという話を聞きつけて多くの人が来た。近くの市場では店はしまっていたが被害を受けていない地域からきた人が瓶にお茶（500円）やポリタンクに入れた水（5000円）を高価な値段で売りに来ていた。そういった店から祖母がポリタンクに入った水2つと瓶に入ったお茶2つを買った。父方の祖母は自宅のガラスの引き戸が揺れるたびに地震が来たのかと思い怖がった。

その後、親戚がダンボール箱にレトルト食品や野菜を入れて持ってきてくれたのでいろいろなものが作って食べられるようになった。この日の夜は小学校のグラウンドに車を持ってきて車中泊をした。

4 その次の日以降

その後1週間ほどは水汲みをしたり食料の確保をしたりといった生活が続いた。名谷の家に帰ってガスが戻るまではカセットコンロがとても重宝した。水道は復旧するまで1週間から10日ほどかかったが地震が起こってすぐに貯めておいた水はなんとか足りてとても助かった。

名谷の家のほうで水が戻ると家でポリタンクに水をくんでいくつも父方の祖父の家に運ぶ生活が続いた。とにかく水が大事だということがわかった。

地震の前には母は神戸大丸でお花の先生として勤めていたが神戸大丸がほぼ全壊してしまったため、仕事を辞めた。父は電気の仕事をしていただが、地中線の仕事を主にしていたためあまり仕事がな

かった。普通の電気屋は家を建てるときや修理するときには仕事があり、大忙しだったが地中線の仕事は修理等の仕事はそんなに無く、主に被害の現状を調べる復旧調査を行った。地震から半年くらいまでは常に道路が渋滞していた。いたるところで通行止めが起こり、国道43号線も使えず、その周りの狭い県道や神戸市の市道が使われて、移動するのにとても時間がかかった。いつもだと15分から20分くらいで父方の祖父の家の事務所に行くのに1時間ほどかかった。

三宮に行くのにも兵庫区の事務所を朝の8時頃にでも、三宮につくのは昼頃になっていた。

5 阪神淡路大震災の教訓

この阪神淡路大震災が起こる前までは寝室にタンスや落ちてくると危ないものがあったのだが、この地震が起こってから、寝室には頭の上に落ちてくものがないような場所で寝るようにした。また食器棚の扉が開いて食器が散乱したことから扉を揺れで開かないようなものを買ってきて取り付けた。

夜、お風呂に入ったあと、すぐにお湯を捨てないで次の日のお風呂を入れるまで水を貯めておいた。これによって地震が来た時も水が使えるようにしていた。食べ物や水を備蓄しておいたり、非常用持ち出し袋を用意したりしていた。普段は車で移動していたが、震災が少しの間は電車で移動することが多くなった。車で移動するよりも電車や徒歩のほうが早かった。

6 話を聞いて感じたこと

父と母から阪神淡路大震災が起こった当初の話を聞いて感じたことは、本当に地震はほとんど前触れ無く急に起こるということが改めて感じた。前の日に余震があったがほとんど気にとめていなくて、まさか次の日にこんなに大きな地震が起こるとは思ってもいなかったという話から、私は今まで地震が来ても、それが大きな地震の余震だとは考えたこともなかった。だから、これから起こる小さな地震は次に来る大きな地震の予兆かもしれないと考え、伝えたり備えたりしたいと思う。

また、神戸は地震が起こらないと言われていたが、こうして大きな地震が起こってしまったことから、その地域は自然災害が起こらないと言われていても、自然災害が起こって避難ができるように備蓄や避難の準備、避難訓練などを行っておくべきだと感じた。阪神淡路大震災が起こった時は何が起こっているのかわからなかったということを知り、その当時は地震という現象が神戸ではあまり知られていなかったと感じた。私が2013年の春に起こった地震が初めての大きな揺れだったがそのときはすぐに地震だと気づくことができ布団の中に入って体を守ることができたように、何が起こっているかわからないとその対応は遅れてしまうのではないかと感じた。2013年の春に淡路島で起こった地震が地震だとわかったのも、阪神淡路大震災のことを教訓として小学校の頃から学んでいたからだと感じた。

過去に地震があった地域は教訓としていろいろな地震の知識があるところも多いと思うが、大きな地震が過去に来ていない地域は教訓として地震の知識がないため、阪神淡路大震災の時の父と母のように地震ということも気づけないかも知れない。

また、地震が起こったのは早朝だったため、家にいた人が多く都会のビルが多く倒壊したがその中でなくなってしまった人は少なかったと思った。だが、当直などでビルの中にいた人がなくなってしまったのも事実である。父と母がタンスの上にガラス張りに入った人形を置いていたのが落ちてきて木っ端微塵になってしまったように、寝室で自分の頭の上に落ちてくものがないような状態にしておかないと、とても危険だということも感じた。揺れている時にトランポリンの上に乗っているようで自分の思っている方向に動けなかったということから、大きな縦揺れはその場から全く動けなかったということを感じた。動けないので、もしタンスのような大きなものが倒れてきたらその場で潰されてしまうしかないのは嫌だと感じた。だから、上から落ちてくものが無いようにするだけではなく、大きなタンスなどが飛んでこないようにしっかりと家具の固定をすることが必要だと感じた。

揺れが収まって、食器棚からほとんどの食器が飛び出て割れてしまったことから、食器棚はしっかりと固定して、簡単に扉が開かないような工夫が必要だと感じた。その工夫は開くところの部分に栓

をできるような工夫があれば普段の時は少し面倒だが、地震の時は簡単に食器棚の扉が開かずに安全なのではと考えた。また、時計が落ちてしまっていて、5時46分で止まってしまって時間が確認できなかったということから、腕時計などを安全な枕元に置いておくなどして、時間が確認できるような環境を作っておくというのではないかと思った。外に出て、父は車のラジオを使って情報を集めたと言っていたのだが、よく咄嗟に車のラジオを使おうと思ったなと感じた。私だったら、慌ててしまってそんなことも思いつかないだろうと思った。そのために非常用持ち出し袋用意しておいて、その中に携帯ラジオを入れておいたほうが、もし、車が壊れてしまっていたりしても情報を集めることができるのではないかと感じた。以前、父と母が住んでいた名谷ではそんなに被害がなくて、近くの建物の壁が落ちてしまっただけと聞いていたが、確かに他の地域と比べると被害が少なく感じるが実際には普通は起こらないようなことが起こっているので十分被害があったのではないかと思った。

あまりにも他の地域の被害が大きすぎて感覚が麻痺してしまっていたのではないかと感じた。地震が起こってすぐにお風呂に水を貯めたという話では以前に高架水槽というものがあるということをつままたま聞いていたから、水がすぐに貯めることはできたのだと思う。たまたまでもその話を聞いて覚えていたのは幸運なことだったのではないかと感じた。

地震がきたあとの余震が来る前には地鳴りのようなものが聞こえてきてから余震がくると聞いて、地鳴りというものを聞いたことはないが恐ろしいと思った。今も地鳴りが聞こえると地震が来るのではないかと体が反応してしまう人があるという話を聞いたことがある。それほど、阪神淡路大震災後の余震は恐ろしいものだったのだと感じた。今は携帯電話が普及しているが地震当時はそんなに携帯が普及していなく、固定電話が主流だったという話を聞いて、家族の安否を確認するのが難しかったのだと感じた。

父方の祖父は携帯電話を仕事柄持っていたが当時は携帯を持っている人のほうが少なかったため、携帯は意外と繋がったということに驚いた。父と母は公衆電話が1番つながりやすいと知らなかったが公衆電話にかけに行つて安否を確認できたのは本当に幸運なことだったと思った。いまは公衆電話が災害時にもっとも電話がかかりやすいと知っている人も増えたと思うが、当時は知らなかった人がほとんどだったと思う。いまはスマホなどが主流だが、災害時はスマホの回線はつながりにくくなるが、Line等のアプリは意外と繋がるという話を聞いたことがある。父と母が住んでいた名谷は電気が他の地域よりも早く復旧したのですぐにテレビなどが使えたことによって情報を集めることができたのは本当に大きなことだと思う。

近くのダイエーに食べ物などを買いに行った時に決まった分しか買えなかったという話を聞いて、なるべくたくさんの人に少しでも食べ物や飲み物が渡って、全員同じ分しか買えないようにしていることによって買い占めが行われないようにしたダイエーは災害時にこういった行動ができる準備ができていたのだと感じた。

父方の祖父の家が半壊して近くの小学校に避難した時、まだこの時は避難所としての機能が今のようにはしっかり果たせていなかったということから、避難所が災害時にできるということは本当に被災者にとって助かることだと感じた。また、避難所が機能していなかったため安全か分からずに体育館に避難する人も少なく、グラウンドに車を持ってきてその中で寝る人がほとんどだった話は驚いた。六甲山の山側と海側では被害の差が大きかったということを知り、海側の方の地盤が緩く、ビルなども多い都市部のため、大きな被害になってしまったと感じた。

逆に山側には住宅は多いものの地盤が強い地域が多く被害が少なかったのではないかと思った。父がまるで街が爆撃をうけたようだったと言っていたが、私は震災時のニュースの映像などを震災学習でみて、本当にいつも見ている神戸の街の様子と異なり、本当に起こったことなのかと思ってしまった。

本当に現実離れしたようなことが地震によって起こってしまったと感じた。父と母は被害にそんなにあわなかった為、救援物資をもらうこともなく、避難所に行くこともなかったと言っていたが、被害の大きかった兵庫区から東の地域は本当に支援が必要な地域だったと感じた。

灘に住む叔父の話を知り、感じたことはまず、自分のことを置いてまでも周りの人を救おうとす

ることをしたということが本当に素晴らしい人だと感じ、私も緊急時に少しでも人を救える人になりたいと思うようになるきっかけの人だった。また、大工をしていたということもあり家屋の知識があり、道具もあったということが、周りの生き埋めになってしまった人を救うことができた大きな理由だと思う。得意なことや実際にやっている仕事の知識が生かされたのが本当に素晴らしいことだと感じた。

私も、自分の得意なことや技能を活かして、人の為になれる人になりたいと感じた。いつもだと20分程度で着くはずの距離が地震で渋滞してしまって8時間かかってしまったということがあったのは、やはり考えることは皆同じで、親戚の心配や会社が心配で車で移動しようとしたのが原因だと感じた。また、道路が壊れてしまっていることや、塞がっていたことも原因だったと思う。父方の祖父の家の近くの幼稚園に井戸があり、そこから出る水を貰いに来る人がたくさんいたというのは、本当に命が助かることだと思う。いまは水道があらゆるところにあるが、井戸は災害時にも水が止まらないため、常に水が出るということが素晴らしいと感じた。近くの市場で被害の受けていない地域から水やお茶を高価な値段で売りに来ていたのはしょうがないことなのかもしれないが、日本は水道も安全だしほとんど無料と言っても過言ではないので、売るにしても安価な値段で売ろうとは思わないのか？と感じた。まるで火事場泥棒のような弱者につけこむ商法だと私は感じた。私が、もし他の被災した地域に水やお茶を持って行くなら、できるだけたくさんの人に水やお茶を飲んでもらえるような活動を行いたい。また、被災していなかった母方の祖父の家から野菜やレトルト食品を持ってきてくれたのは親戚の繋がりや家族のつながりというのは大切なものだと再度感じた。

ガスが止まっている間はカセットコンロが役に立ったというのは普段使わないものでも、災害時に非常に役に立つものはたくさんあるのだと思った。震災によってなかなか復興が進まず、母が仕事を辞めてしまったように、多くの人が仕事を失ったりしたと思った。逆に電気工事などのライフラインの工事や家の修理、解体の業者は仕事が増えたと聞いた。阪神淡路大震災の教訓から水が本当に大事だったと母が言っていた。人間は水さえあれば1ヶ月生きていけると聞いたことがある。また、水があれば料理に使えたりトイレを流したりといろいろなことに使える。震災後すぐには車での移動が思うように行かず電車を使ったというのはいい考えだと思った。電車を使うことによって鉄道会社にお金も入り。車よりも早く移動できるというのはいいのではないかと思った。また、食べ物や非常用持ち出し袋を用意しておくのは万が一の時、避難所が機能しない場合や、支援が入るのが遅れた地域に住んでいた時に命を救うものになると感じた。

私は阪神淡路大震災を体験していないが、こうして聞いた話を次の世代へ語り継いでいかなければならないと感じる。なぜ、語り継いでいかないといけないか、その理由は体験していないからと誰も地震のことを話さずに時がながれると阪神淡路大震災と同じような地震が来た時に同じ被害がでてしまうからだ。誰も体験していないからといって風化させるのではなく、話をつなげていき忘れてはいけないものにしないといけないと感じる。

いつまでも忘れない

成尾 春輝

1 体験していない震災

僕は、阪神・淡路大震災のあとに生まれた。僕は母から震災体験をきいた。

2 阪神・淡路大震災発生まで

当時、神戸市垂水区の上高丸というところの団地に兄と二人で住んでいた。まだ住み始めて一年ほどしかたっていなかった。その地域では、最寄りの駅まではバスで行き、仕事が終われば近くのスーパーで買い物をする程度だったのであまり状況や人を知らなかった。仕事は、ほぼ正社員状態で個人商店のような花屋に勤めていた。その花屋は中央区二宮にあった。日曜日以外は仕事だったため、ほぼ毎日バスで駅へ行き、JRに乗って三宮駅へ行くという生活をしていた。上高丸の家には寝るためだけに帰るようなものだった。毎朝7時半くらいに家を出ていた。生活をしていた部屋はとても狭く、だがその部屋にガラス扉の棚やキーボードなどを置いていた。

3 震災当日

地震発生の午前5時46分まではいつも通り寝ていた。地響きやゴーという音は聞こえず、気が付けば揺れていた。地震なのかなと思った。揺れているのが怖くてすぐに布団の中に潜った。完全に目が覚めた。幸い、家具などが倒れてきて当たるといことはなかった。しかし、頭のほうにあったガラス扉の棚の上に置いてあった服などを入れていた箱が足元に落ちていた。戸棚のドアはあいていた。揺れがおさまった後、リビングは醤油臭かった。醤油入れが壊れていて醤油がこぼれていた。電気、ガスはストップしていた。水道の水は少し残っていたのか、少しの間は出た。だが、すぐ出なくなった。神戸には地震が起きないと言われていたし、大きな揺れも人生でほとんど感じたことがなかったのでどうすればいいかわからなくなっていた。真っ暗で何も見えなかったし、懐中電灯もなかったのでさらに怖かった。違う部屋にいた兄が無事か不安だったがほとんどけがもなく無事だった。台所がぐちゃぐちゃだった。外が明るくなるまで部屋の布団の中にいた。電池式の携帯ラジオはあったのでそれで情報を入手していた。その情報の中に電車がダメになっているという情報があったことを覚えている。情報量は非常に少なかったが、垂水より特に東側で大きな被害がでていることを知った。職場には行けないのかと思っていた。三宮のほうの情報は少なかったが、少しだけ流れていた。職場に連絡をしたかったが電話がつながらなかったので連絡ができなかった。職場で一緒に働いていた人たちは大丈夫なのか、自分のことを心配していないだろうかと不安だった。垂水区より中央区で被害が大きいのかかもしれないと思ったので仕事に行くのは諦めた。だんだん外が明るくなってきて、お腹がすいてきた。家には寝るために帰ってきているようなものだったので、食料が全くなかった。情報が少なすぎて、大震災になっているとも知らなかった。近くのスーパーがあいているのではないかと思い、兄と買い物に出かけた。そのスーパーは開店時間前だったが人が並んでいた。普段は、人が並ぶようなスーパーではなかったので驚いていた。スーパーは開店したが、店内にはパンやおにぎりなどはなく、お菓子や缶ジュースなどがあつた。お菓子をいくつか買った記憶がある。お菓子の中でも、お腹にたまりそうなものを考え、その結果米などが使われているおかき類を買った。全くおなかにたまらなかつた。だが、そのスーパーで、お店に商品が届かないということは大変なことになっているのだと初めて察した。

4 初めての避難生活

垂水区上高丸の家には住み始めて一年ほどしか経っていなかったし、ほとんどの時間を垂水区以外で過ごしていたため、土地のこともわからず、近所の人顔もわからなかった。そしてとりあえず食

べ物が無いことに困った。住んでいた家から歩いてすぐのところに垂水中学校があった。お昼になって、とりあえず垂水中学校へ行った。垂水中学校が避難所になっていることを初めて知った。行ってみると顔を知っているような本当に近所の人たちがいた。中学校の教室が解放され、そこには家が崩れてしまっていて避難しなければ生活ができないような人もいた。母のような一人では不安で避難所に来たという人も多くいた。大きな地震を経験したことがなかったため、余震の知識がなかったが余震を体感し怖かった。夜になり、電気がつかなかったため真っ暗だったというのが精神的につらかった。懐中電灯は、非常持ち出し袋なんてもちろん用意をしていなかったし、使うことがないので手元になかった。水がないのは肉体的につらかった。結局電気がついたのは二、三日経ってからだった。避難所には人がたくさん来ていた。冬だったのでみんなで寒い寒いと言いながら避難所にいた。その日の夜は食べるものがなかったが、近所の人がおにぎりをくれた。震災の当日か次の日に同じ職場でとても仲の良かった友達がバイクで来てくれた。連絡が取れていなかったので会えたことは嬉しかった。その友達は名谷に住んでいたが大きな被害は受けていなかった。職場の様子を見てくるとバイクで行って来てくれた。18日の昼か夜にはどこからかはわからないがお弁当が避難所に届いた。届いたお弁当は誰が配り方を決めたのかわからないが「一家庭に一つずつ」と言われた。母は兄と二人だったため困ったことはなかった。父とはまだ出会っていなかったが父以外の父の家族も避難所に来ていた。父は八人兄弟の十人家族だったため一つのお弁当では足りなかった。中には、たくさんの家族がいる家庭の人たちはその決め方に不満を持ち実際に結構もめているところも見た。母は、お弁当の冷たさよりも食べるものがあるという喜びが大きかった。実際に、避難所を仕切っている人があるのかさえわからなかったし、お弁当の分け方もおかしくて不公平だった。だが、だんだんともらえる食料は増えていった。トイレには困ったが、学校ではバケツに水をためて流したらしい。その水は誰かが車で運んで来てくれていた。歯を磨いた記憶はない。一週間経ってからお風呂に入っていなかったことに気づいたくらい、生活をするのに必死だった。だんだん、毛布を配ってくれたり、ストーブを焚いてもらったりと快適に生活ができるようになってきていた。人が多かったため寒さにみんなで耐えることができた。垂水区ではほとんどの方が無事だったという情報も入ってきて安心材料がだんだんと増えてきた。だが、反対に被災地全体での死者発表が詳しくなっていく数が増えていく。中学校にあった公衆電話からは電話がつながった。一週間か十日後に学校のトイレで水が出てくるようになった。蛇口から水が出るということがわかったので周りの人たちと一緒に水道をあげに行った。周りの人たちは感動していた。水道が復旧してからはガスが出ないことに対して不便さを感じ始めた。カセットコンロやボンベが売れていたがボンベを一本も持っていなかった。ガスは震災発生から一か月間出なかった。週に一回くらい北区にあるスーパー銭湯や名谷に住んでいた同じ職場の友達の家でお風呂に入ることができた。中央区二宮のあたりでは公園に自衛隊が来ており、毎日ではなかったがお風呂を用意してくれていた。結局垂水中学校には二週間くらい避難をしていた。周りの人たちも二週間くらい経つと家に帰っていた。中学校は学校の再開ができていなかった。いつ再開したのかもわからない。

5 阪神・淡路大震災があつて

母の両親は震災当時、割と近くに住んでいたし、連絡も取れなかったのもとても心配だった。また、祖父は鷹取あたりの病院で入院をしていた。ラジオからは鷹取での火災の情報がとても多く流れていたため怖かった。しかし、その病院は全員避難ができたらしい。祖父も無事だった。震災から十日くらい経つとJRが西の方から神戸駅まで動き出した。母も神戸まで電車に乗り、三宮の方まで歩いて職場まで行った。そんな生活を二、三週間していた。神戸から三宮にはたくさんの歩き通勤の方がいた。そして多くの方がマスクをしていた。神戸までの車窓からは、大震災の被害を受けたまちの姿が見えていた。景色といえるものは何もなく、泣きそうになった。元町商店街の崩れた建物のあいだを通った。とても悲しかった。勤めていた花屋の隣に豆腐屋があった。その豆腐屋は震災後店を閉めた。花屋はある程度無事だったが社長の奥さんの実家は地震被害で一階部分がなくなる被害を受けた。普通に寝ていて起きると一階に寝ていた感じだ。二階で寝ていたため助かったが、なくなった一階部分

ではお店をやっていた。お店の経営が生きがいであったのに、その生きがいを失った。あるマンションは地下に駐車場があったが、マンション自体が沈んで車ごとつぶれた。そういう悲惨な話を聴く機会も多くなっていった。身内や知り合いが亡くなったということはなかった。だが、辛い話を聴くことはあり、それを聴くことで辛い思いもした。特に中央区はお店が多く、そのような話が多かった。また、花屋をしていて職業的なことで感じたのが、「震災では花は役に立たず、仕事がない。」ということだった。だが、復旧・復興期間にはとても需要があり、特に仏墓の花が売れ出した。あまり被害も大きくなく、仕事もでき、家にも帰ることのできる状況にあったが、自分の職業である「花」で人を支えることができたり、癒すことができたり、亡くなった方々を供養するところに少しでも携われて良かった。人生で初めての経験ばかりだった

6 母の被災体験を聴いて

僕の母は当時垂水区に住んでいることは知っていたし、身内や知り合いは亡くなっていないということも知ってはいたが、今回初めて詳しく聴いて改めて阪神・淡路大震災の恐ろしさを感じることができた。母が避難所で生活をしてきた経験があることは驚いたし、知らなかったのがとても恥ずかしいと思った。恐ろしさを改めて感じた母からの話だったが、同時に今までより身近に感じたものだった。身内や知り合いが亡くなっていないこと、被害をあまり聞かない垂水区に住んでいたことはわかっていたが、語り継ぐときなどはいつでも被害の大きい場所がクローズアップされるということを感じていた。確かに、被害の大きいところの方が学び取るべき教訓が自ずと多くなってくると思う。そして、被害の大きいところの話の方が、語られる側は想像が比較的しやすいと思う。どちらが復旧、復興で大変だったかということではない。被害の小さい地域の人たちは、被害が大きく困っている人たちがいる中でこんなことでしんどいなんで言いにくいと思う。でも実際、阪神・淡路大震災はたくさんの方が亡くなったが、僕はひとりひとりのストーリーというか、ひとりひとりの想いや経験に向き合うべきだと思った。そして、いまでも震災時に問題になったことを話し合ったりゲームを通して考えたりしているけれど、実際それは被害の小さなところでも起こっていたのだということを知っていてほしい。例えば、垂水区の避難所になっていた中学校で母が実際に経験したことだが、避難所に届いたお弁当をどう分けるかという問題がある。こういう問題に正解はないし、過ぎてしまったことをあの判断は間違えていたと責めることもできないが、母の場合ではお弁当は何人家族であろうが各家庭に一つずつだった。これは本当に正しかったのだろうか。避難所で大家族の人たちは怒っていたらしい。小さな喧嘩もあったらしい。このようなことを考えること、そして次に来た災害に生かすことはとても大切なことであると思う。これは現在クロスロードというゲーム形式で答えのない問題を考えるというものがある。実際にいろいろな考えがあるが、このように考えるということは語り継ぐことができているひとつの証拠だと思うし、これからも発展させていくべきものだと思う。

そして今回、改めてというかほぼ初めて母の被災体験をしっかり聴いてこのような形でまとめたが、身近な人の被災体験を全然知らなかったと思った。ぼくたちは高校で防災を学び、いろいろな方から震災体験を聴かせていただき、震災を知らない世代、経験していない人たち含めいろんな方に向けてその経験を発信してきたつもりだ。だからこそ、一番身近な人の被災体験を詳しく知らなかったことをとても恥ずかしく思った。母の話からも学ぶべきところはたくさんあるし、生かすべきところはたくさんある。それをこれから考えていきたい。

母の被災体験で一番驚いたのが避難所に行っていたことだった。そんなこと全く知らなかったし、家のすぐ横の中学校が避難所になっていたなんて考えもしなかった。近所付き合いをあまりしていなかった母にとってとても大変でさみしい時間だったと思う。避難所にとりあえず行ったのかもしれないが、周りは知らない人たちばかりでさみしい思いをしたのだと思う。それに加えて、緊張もし、ストレスも多かった時間ではなかったかと思う。災害時だけでなく困ったときは近所の人と助け合うということがいかに大切かは僕自身防災を学んでいる中で感じている。その繋がりの大切さをもっと身近に感じられたのが今回の母のお話だった。だが、知らない人からおにぎりをもらったという話はとても心があたたかくなった。人間って優しいということを改めて感じた。ぼくも人が困っていたら、

知らない人でも手を差し伸べてあげられる人になりたい。そうすれば、困る人は減り、近所付き合いも増えると思う。母の話の聴き、結局最後は人間同士のやり取りでどうなるかが決まるということを感じた。あたたかく優しい人間が増えることで地域が変わり、被害を減らせると思った。

突然だが、僕は将来教師になりたいと思っている。原爆を落とされた国に生まれたものとして「平和」ということもこれから深く学んでいきたいと思っている。今少しずつ学んでいる防災に加えて、平和学習というものを通して学べるたくさんの方のことを若い世代の人たちに伝えたいと思っている。そのためにたくさん勉強をし、いろいろな方のお話を聴きたい。防災教育と平和学習には共通するところがたくさんある。まずは命の大切さ。母のように何も備えをしていなければ、被害の大きさによって亡くなってしまうこともあるということを知りたいし、亡くなった方々の分もしっかり生きていくという強い希望を若い世代の人たちに持たせたい。もうひとつは、語り継いで忘れないことの大切さだ。ぼくは阪神・淡路大震災を経験していない。そしてこれからも経験していない人たちが増えていく。阪神・淡路大震災のニュースは1.17の日を除けばほとんどない。とても少なくなっている。知らないということは関係ないし、20年経つただけでもういいというのは間違っている。確かに語り継ぐことは難しい。語る人が減っていく中で、聴こうとする人も減っていく。どんどん風化していく。聴いたことを継いでいこうとしても聴いてくれる人がいない。忘れてもいいと思う人はいなくても、忘れられてしまう。ぼくはそうやっていくのがとても怖い。そうさせないことがぼくの使命だと思っている。語り継ぐことは本当に難しい。でも、語り継ぐことで確実に救える命は増える。語り継ぐことに協力することがひとつの防災活動といえると思う。もうひとつ若い世代に伝えたいことがある。それは困ったときに助け合うことの素晴らしさだ。語り継ぐこともこれを浸透させる一つの方法かもしれない。助け合うための日ごろの行いや繋がりづくりの大切さを広めていきたい。

今まで書いたこのような考えは、ある意味阪神・淡路大震災のおかげかもしれない。本当にたくさんの方の命が亡くなり、たくさんの方の悲しい出来事があった。経験していないぼくは写真や動画でしか見ることができないし、経験した方のお話を聴くことでしか状況を理解することができない。だからこそ、亡くなった方の命を無駄にしないという意味では少しポジティブにも捉えられるかなと思う。震災当時の様子、被害の大きさなど大変だったことだけでなく、生き延びられたこと、避難所での心温まる経験なども伝えていきたい。そして忘れてはいけないと思うのが、一人一人のおもいだと思う。

経験された方のお話はとても貴重だ。だが、語り継いでいく上で「経験していないから」というのは絶対に関係ない。経験してなくても伝えられることはたくさんある。とても難しいことではあるがそれが残された者、生きている者の使命である。ぼくは阪神・淡路大震災をいつまでも忘れない。

1. 17を語り継ぐ

南木 颯人

これは神戸市兵庫区荒田町4丁目で震災を経験された方から聞いたお話である。

1 震災前

当時の家族は妻と小学校2年の長男、母親がいた。神戸市兵庫区荒田町4丁目に有名住宅会社の軽量鉄骨3階建の住宅を建てた。軽量鉄骨は地震や台風に強いという点から選んだ。しかし、地震が神戸に起こるとは思っていなかった。また、周りの人たちも神戸に地震が来るなど、誰も予想もしていなかった。

大震災前日の16日の晩は3階で夫婦、1階で母親と長男が就寝した。長男は普段2階で寝るのだが、その晩はたまたま1階の部屋で寝ていた。

2 1月17日

(1) 地震発生

地震発生の5時46分は部屋で寝ていた。地響きと大きな横揺れで目を覚ました。「地震だ。大きいな」と思った瞬間「ドンッドンッドンッ」という音とともに、大きな縦揺れが来た。トランポリンのように30cmくらい飛び跳ねた。「これは地震にしては凄すぎるな」と思った。テレビが飛んできた。揺れが収まった後もただ茫然としていた。しばらくして家の中を回って家族の無事を確認した。2階の台所にある食器棚が倒れ壁にもたれかかっていた。中の食器は床に落ちてほとんどが割れていた。本棚も倒れ部屋中に物が散乱していた。このような状況を見て「生きるも死ぬは紙一重」だと思った。余震が怖かったため家族全員3階で毛布に包まって過ごした。

(2) 外の様子

窓から外を見てみると停電しているのが分かった。向かいの長屋の瓦が落ちて下地がむき出しになっていた。他にも数件の建物が傾いているのが分かった。「凄いことになっているな」と思った。当時から八百屋を経営していたため店が気になり外に出た。商店街の入り口にある薬局は1階の店舗部分が潰れ、瓦礫の上に2階の住居部分が載っている状態だった。中にいた人は地震発生時1階にいたがすぐ飛び出して無事だった。あちらこちらで電柱が倒れていた。鉄筋コンクリート造りの店は、建物がゆがんでしまい4枚あるシャッターが、どれも開かなかった。郵便ポストから中を覗くと物が散乱しているのが分かった。半壊だった。

兵庫区の湊川町と松本通りでは大規模な火災が発生していた。窓から長田区や須磨区の方を見ると、至る所から煙が上がっていた。しかし、断水で水がなく、消防車が来ても消火は行えなかったようだった。同じ商店街で向かいに店を持つ人も家が全焼した。家具も思い出も全て失った。そういう人が大勢いた。火災が出だしてからは消防車や救急車、パトカーなどのサイレンが鳴りやまなかった。自衛隊などのヘリの音も鳴り響いていた。

3 翌日以降

(1) 生活

自宅に大きな被害はなかったため、避難所には行かずに過ごした。周りの家を失った人たちは避難していた。最初のうちは余震が多かった。辺り一帯はライフラインが寸断され水道、電気、ガスが停止した状態だった。電気の復旧は早かったが水道やガスは時間がかかった。商店街の植木屋だけ何故か水道が止まらなかったため、近所の人に分けていた。家の中にあつた電気温水器の中に水があつたため自分たちの分は何とかなつた。家の中や店に食べ物も沢山あつたため苦労することはなかった。テレビでは被害の様子がずっと流れていた。長田区や須磨区などの火災や倒壊した建物の様子などが

流れ続けた。高速道路の倒壊など被害があまりにも大きく驚いて、言葉も出なかった。親せきなどとの安否確認は、直接会って行った。震災直後から飼い猫が行方不明になっていたが、1週間ほど帰ってきた。近所の兵庫区役所では、壊れた家に被せるブルーシートの配布を行っていた。辺り一帯が断水していたため、湊川公園で自衛隊による風呂の提供も行われていた。数か月後、荒田公園などに仮設住宅が建設されはじめた。公園に建った仮設住宅の横で子供たちが遊ぶ風景が、至る所で見られた。

(2) 商店街と中央卸売市場の様子

近所の果実店は震災当日から店を開けていた。3,4日経って徐々に店が開き始めた。何日かたってから、壊れたシャッターをこじ開けて店に入った。床には物が散乱していた。100kg近くある自動包装機が何mも移動していて驚いた。壁には大きな亀裂が入っていた。店を開けるために、親せきと一緒に片づけを始めた。水道が出なければ営業ができないため、再開には時間がかかった。

中央卸売市場の様子が気になったため車を走らせた。震災の混乱はほとんどなく意外と道は空いていた。しかし、周りの建物はぐちゃぐちゃに潰れていた。新開地にある銀行は倒れかけて窓からブラインドが垂れ下がっていた。市場に着くと建物は建っていた。市場の建物自体には大きな被害はなさそうだった。海の方を見ると岸壁は亀裂が入りガタガタになって、地面が波打っていた。しばらくして、市場も再開し取引が始まった。市場が再開してからはすぐにものが入ってきた。普段と値段はほとんど変わらなかった。震災直後は缶詰やレトルト食品といった、簡単に食べられるものがよく売れていたという話をよく聞いていた。

4 その後

(1) 店の建て替えと生活

店は半壊だったため建て替えが必要だったが、至る所で被害が出ていたため業者の手が足りなかった。全国から業者が来てくれていたが、それ以上に被害が大きかった。震災から約1年後、店の建て替えが決まった。同じ場所に立て直すため、自宅の駐車場にプレハブの仮店舗を建設した。しばらくは仮店舗での営業を続けた。建て替えが終わり元の場所の新しい店舗で営業を再開した。建て替えや仮店舗、従業員の給料を払わなければならないため、金銭的負担が大きかった。たまたま地震保険に加入しており、建て替えに必要な予算の足しになった。

自宅は目立った被害は確認できなかったが、少し傾いているのが分かった。購入した業者に連絡を取り、調査を頼んでいたが、結局来なかった。震災により取扱件数が多く、業者自体も混乱していたのだろう。

(2) 地震対策

震災後、家の中の全ての家具を針金や金具を使用し、壁や天井に固定した。震災の時に食器棚やテレビが倒れてきた教訓からだ。19年たった今も固定したままである。震災直後は食料や飲料水などを買い置きしていたが、いまはほとんどできてない。また、タンスの上に物を置かないように気を付けていたが、今はほとんどできていない。19年も経てば被災した自分たちですら当時のことを忘れかけている。

5 自分の感想

(1) お話を聞いて感じたこと

正直、お話を聞いている間はつらかった。でも、震災当時の経験した方からしか聞けない生の声を聞くことができ、貴重な経験になった。1対1でお話をうかがうことは、語り部の方のお話を聞くのとは違う感覚だった。話し手の気持ちを直接感じることもできた。被災直後に感じたこと、周りの様子など経験した本人にしかわからないことが、たくさんあると思った。お話の中で一番印象に残ったのは、やはり地震が起きた瞬間のことである。突然襲ってきた大きな揺れを体験して感じたことについての、お話しを聞いている間は、ずっと鳥肌が立って背筋が凍るような思いだった。大きな縦揺れで体が宙に浮く感覚、目の前で倒れる家具の様子などは経験していない人には想像するしかできない

ことを、体と頭で記憶している。本やインターネットで文書を読むだけでは、決して感じる事ができない感情を肌を感じる事ができた。また「生きるも死ぬは紙一重」という言葉も心に残った。タンスの横で寝ていたら下敷きになっていたし、起きて台所にいたら食器棚の下敷きになっていたかもしれない。地震の防災が考えられていなかった当時は、助かった方と亡くなった方の防災対策や知識の差はほとんどなかったのだと思った。「たまたま助かった」というケースがたくさんあったのだろうと思った。次に災害が起こった時に「たまたま」ではなく「対策を取っていたから助かった」と言う人が増えるように、より多くの人に防災を広げていきたいと思った。また、自分も高校卒業してからも防災や災害の勉強を続けていこうと思った。

阪神・淡路大震災では各地で近所同士の「助け合い」の行動が見られたという話を聞いたことがあるが、今回聞いた中でも自分の家だけ水が出ていたから、独り占めにせず困っている人たちに分けてあげた植木屋さんの優しさを感じる事ができた。災害の時に現れる「心の温かさ」は素晴らしいものと思った。それも、知っている近所の人だけでなく見知らぬ人でも、困っている人に手を差し伸べることは、人の素晴らしい面だと思った。特に日本人には、このように手を差し伸べてくれる人が多いと思う。自分も災害時はもちろんだが、日常生活においても困っている人には、手を差し伸べられる人になりたいと思った。

災害用に食べ物を備蓄しておく必要性はあるのかどうか疑問に思った。今回お話を伺って「家の中に食べ物があつたから意外と不便じゃなかった」と聞いたからである。自分の親からも震災の時に救援物資をもらわなかったと聞いている。わざわざ非常食を備蓄するより、普段からレトルト食品や飲料水を少し多めに買い置きしておくだけでいいのではないかと思った。そのほうが日ごろから気を付けなければならないし、金銭的負担も小さくて済むのではないかと思った。

震災を体験された方からお話を聞いてみて、体験していない人が話を聞いて語り継いでいくことは、もちろん大切なことだが、体験した方から話を聞くことは、もっと大切なことだと思った。

(2) お話を聞いて今後どう生かしていきたいか

まずは今回聞いたお話を語り継いでいきたいと思う。それが「語り継ぐ」を書いた理由だからだ。ただ文書を書くだけで終わってはいけないと思う。自分の口から広めていくことも大切だと思ったからだ。インターネット上や冊子の中にあつても、興味のある人の目にしか触れないと思う。だから防災教育などで子供と接する際に伝えたいと思った。また、子供だけでなく自分より年が上の震災を体験していない人にも伝えなければならないと思った。

お話を聞いて改めて家具の固定の大切さを実感した。家具の固定をしておくことによって命が助かるだけでなく、後の片づけが楽になると思った。今は金具や突っ張り棒だけでなく、シールのタイプなど多く市販されているので、どんどん広めていかなければいけないと思った。南海トラフを震源とする大地震は30年以内に70%と言われている。阪神・淡路大震災の発生確率は0.02%~8%、新潟県中越地震は予測さえされていなかったことを考えれば、いつ起こってもおかしくないと思う。こうして、複数の災害を比較して説明し、わかりやすく説明して危険度を認識してもらいたいと思っている。でも間違つたことを言うてはいけないから勉強していかなければならないと思った。

そして、自分の防災意識向上を目指すため、高校を卒業してからも災害や防災の勉強を続けていきたいと思う。そして、ずっと防災に携わつて生きていきたいと思う。自分自身が災害で命を落とすことがないよう「まずは自分から」を目標にしていきたいと思う。

(3) 「語り継ぐ」をしての感想

自分は阪神・淡路大震災を経験していないから、お話をうかがう方を探すところから始めなければならなかつた。みんなが親や親せきにインタビューしていたが、自分の親は当時から西区に住んでおり、とくに大きな被害はなかつたと過去に聞いていた。どうせ聞いて書くなれば「より被災の規模が大きい地域の方から話を聞きたい」と思い、お話してくださる方を探すことにした。趣味で繋がつている知り合いに連絡を取つたところ、その方のお父さんがお話を聞かせてくださると返答があつた。すぐにアポ取りをし、日程を調整した後、ゴールデンウィークの終盤にインタビューを行った。繰り返すことになるが震災にあつた方のお話を聞くのは、非常につらい思いもあつた。でも、話してくださる相

手の方も当時のことを思い出して自分以上につらいのだろうと思った。当時の悲しみや苦労話は聞くだけではすべては伝わらない。実際に経験した人でないと分からないことのほうが多いと思った。だからこそ、最後の一言も聞き逃さないように聞いた。また、後からメモを見返して気になったことを、確認できるように録音もした。「授業で提出しなければいけないから」そんな気持ちではできないことだと思った。自分のために時間を作ってください、お話していただいているのだから責任を持って「語り継がなければいけない」と思ってお話を聞いた。インタビューが終わって家に帰ってからメモを見返した。お話を聞いている間も正直、つらかった。メモを見返してお話を聞いている時と同じくらいつらかった。パソコンへの入力を始めてからも、なかなか録音のデータを聞くことができなかった。そこには被災した人にしかわからない、生の声が入っていたからだ。「災害の生の声を聞きたい」という思いと「つらい話を聞きたくない」という思いがぶつかって、なかなか書き進められなかった。でも「生の声を語り継ぎたい」という思いが背中を押した。改めて当初の目的に戻ったことで、新しい気持ちで続きを書き始めることができた。目的を見失っても初心に戻る大切だと思った。

そして、無事に書き終えることができた。ここまで出来たのは「提出しなければならない」という気持ちではない。「語り継いでいきたい」という気持ちだけだ。次に災害があった時は犠牲者を1人でも減らせるように、自分が率先して防災を学び広げていきたいと思う。

いずれ自分たちの「語り継ぐ」も冊子やインターネット上に掲載されることになるだろう。しかし、本当にそれだけでいいのだろうか。それだと興味のある人の目にしか届かないのではないだろうか。自分の勝手な考えだが、高校の「現代文」や「国語総合」の授業で活用することはできないかと思った。また、週1回「防災」の授業を設置し読んでいくことはできないかと思った。もちろん環境防災科に限らず、普通科の生徒に行わなければならない。そうすれば、より多くの人に震災の怖さが届くと思った。それも、震災を経験していない高校生の目に。

語り継ぐ

西中川 穰

1 当時、新長田に住んでいた父から聞いた話

(1) 震災前

震災が起こる前、家族は3歳の長男と妻と一緒に6畳の部屋で長男を真ん中にし、川の字で寝ていた。すると、夜中に長男が突然、私の布団に入ってきた。

(2) 地震発生

その直後「ドンッ!!」という地響きのような音がし、体験したことのないような揺れを感じた。その時は、地震が起きたということがわからず、いったい何が起きたのかも分からなかった。すると揺れのせいでタンスが倒れ掛かってきていた。しかし、部屋がちょうど狭かったため壁にタンスが引っ掛かって下敷きにならずに済んだ。そして長男が寝ていたところをふと見ると、タンスの上に置いておいた重たい木製の衣装ケースが落ちてきていた。だから、長男がもしも、布団に入ってきていなければその衣装ケースは長男の頭を直撃していた。家具の下敷きにならずに済んだため、家族3人で「逃げなければならない」ということになったため、とりあえず家の外に出た。外に出て空を見ると南の空がオレンジ色になっていた。この時もまだ地震が起こったということが分からず、戦争が起きて爆弾が落とされたと思っていた。

(3) 災害対応

住んでいたところが集合住宅だったので、住民がみんな外に出て話し合っているうちにやっと、大きな地震が起こったというのがわかった。集合住宅の人が全員無事か分からなかったため、手分けして誰かが何かの下敷きになって逃げられないかを、一階から、順番に見ていった。すると三階まで来たところである一室から女性の「助けて」という声が聞こえた。そこは玄関も窓も鍵がかかっていたので窓ガラスを割って中に入った。中では女の人が家具の下敷きになっていたため、家具を協力してどけて何とか助けることができた。そして集合住宅に住んでいた人が全員無事だったことが分かった。周りで火事になるかもしれない避難所に逃げることにした。当時は冬でとても寒かったので防寒具など各家庭から出せるものは出して、そのあとに皆で近くにあった体育館に避難していった。体育館に避難するとすでに多くの人が避難していた。警察官の職業に就いていた父は家族をその場に残して、近くの署に行った。そこで班分けをして、道具もない状態で救助活動をするようになった。また警察だけでなく地元の人とも協力した。残った母親と長男は、心配して避難所を探しに来ていた祖父母と会うことができ兵庫区にある実家へと向かった。自分は命令で所属していた所に行くことになったため、それを伝えに避難所に戻ったが、もうその時には祖父母の家に向かっていっていたので残っていた人に事情を聴き、理解することができた。その後自分の勤務先まで歩いていくのだが、その途中に見たものはいろいろなところに電気がついていなかったり、あちらこちらで煙が上がりビルが倒れていたり道路が陥没していたりしているのを見た。そんな状況を見て改めて「すごいことになっている」というふうに思った。そう思っているうちに職場に着くことができた。そこからは救助活動にあたり、生きて助けることができた人もいるが、亡くなった人も多くいた。そういう救助活動が何日も続いた。

(4) 警察での活動

警察は非常用のための電気があったからなんとか電気は確保できたが、水とガスは全くなかった。水道がダメになっていてトイレを使うときに非常に困った。そのために近くの川から水を大きいバケツで汲んでくるという係ができていて、その係は一日中水を汲んでくるものだった。日にちの感覚が分からないまま活動を続けていると自衛隊や全国の警察の応援がきた。活動中は一日中忙しく、家に帰ることができなかった。頭を洗うときは近くの川の水を使い。着替えはなかったため服はそのまま

でいた。

その後は状況もだいぶ落ち着いてきた。

(5) 感想

あれだけの大惨事があれば、海外では暴動などが起きているが、日本では暴動も起きず、みんなが今、自分のできる最善のことを考え、さらに、自分のことだけを考えるのではなく助け合い乗り越えていったことに、日本人のすばらしさを改めて感じた。現在は、震災のことを知らない世代が増えてきているため、このことを風化させないように伝えていかなければならない。また東南海地震が起こるとされている今、どう対策していくか、何を備えておくかをみんなで考える必要がある。

2 父の知り合いからの話

(1) 地震発生

地震直前、私は一階の宿直室で仮眠中だった。直後にかすかな横揺れを感じて目を覚ましたが、その揺れは次第に大きくなり、鉄筋コンクリートの建物が音を立てて揺れ出した。何が起こったのかを考えるだけで、事態を把握するには至らなかった。揺れは今までに経験したことがないもので身をゆだねることしかできなかった。その瞬間に、部屋のコンクリート、空調機器などの部品やかけらが降り注いできたのが分かった。部屋が真っ暗で状況が理解できないなかでコンクリートの臭いがそばでし、庁舎崩れたのだと分かった。手探りで周りを確認してみると、天井が腕を伸ばし触ることのできる距離にあり、金属製のロッカーが真ん中部分で折れ曲がり、崩れ落ちてきた天井をわずかながら、支えていた。右側には、天井を支えていたはずの大きな柱が、横たわっていた。膝から下は倒壊したロッカーに挟まり、瓦礫に埋もれていたため、動くことができなかった。しばらくして顔に水の流れる感覚がしたので、天井を触ってみるが何もなかった。しかし、自分の頭を触ってみるとべったりとした感覚があった。落下物で頭と額を怪我しており、かなり出血していた。この時点ではまだなんとかなると思っていたのだが、周りに強烈なガスの臭いがし、「死」を直感した。

(2) 救出から治療

自分のいる庁舎だけが倒壊していると思い、何とかして足を引き抜こうとしたができなかった。せめてでも、空気を確保するために木の欠片で周りをつついたが、コンクリートや金属に覆われていた。「死」をこれほど身近に感じたことはなかった。埋まっている最中に余震がきて倒壊した庁舎が大きく揺れたが、そんなことは怖くないと思っていた。余震がくるたびに挟まった足を引き抜こうとしたからだ。しかし、うまくはいかなかった。だんだんと弱気になってしまった。それから時間の感覚はないが30分か、40分たった頃に、人の声が聞こえ懐中電灯の光が差し込んできた。好運にも難を逃れ、被害を確認していた寮生がきていた。救出の時には困難が多かったが自らのことを後回しにし、生き埋めとなった宿直員の救助にあった署の同僚などの活動により約4時間後に救出された。救出された後、瓦礫の下敷きになっていた足は麻痺していてもう少し救出が遅ければ重大な後遺症が残っていたという。また、救出中の同僚の声が励みになったこと、救出されてから外で吸った空気が格別にうまく生きて出てこられたことを実感したこと、などは強く覚えている。治療のために病院に搬送されたが、その途中に倒壊したビルや火災現場を見て初めて地震の被害の大きさを理解することができた。このような惨状の中では自分の負傷は軽傷に過ぎず、すぐに担当していた署に戻るために病院を出た。病院の玄関に向かっていく自分の姿は下着姿に毛布をはおって裸足という格好だったが、その姿を見た看護師さんが簡易のナイロン製のカバーを靴の代わりにくれた。その親切さに頭が下がる思いでいっぱいだった。

(3) 家族との再会

担当の署まで歩いていこうか迷っていた最中に本部自ら隊のパトカーが待機していたので、兵庫署まで送ってもらった。本署前には多くの住民が押しかけており裏庭には犠牲者の遺体が運び出されている状況だったため感傷に浸る時間はなかった。地震発生から二日後、署長から「帰宅して治療せよ」と指示を受け後ろ髪を引かれる思いで自宅に向かった。家族は自宅近くの駐車場の車の中で避難していた。私の姿を発見すると一目散に駆け寄ってきた。中でも長女は泣きながらだきついてきた。その

姿を見て「九死に一生」を得たことに感謝するとともに、命は決して自分一人のものではないという。という「生きていることの本当の意義」を悟った気がした。

(4) 感想

地震発生 of 2 時間前である午前 4 時、いつもの宿直であれば目を覚ますはずがないのに目が覚めた。窓を開けて外を見ると満月が出ていた。それを見て「良い天気だな」と思ったことを鮮明に覚えている。そしていつもと同じの平穏な朝がやってくる、と確信のもとに眠りに就いた。

再び目が覚めたのは、あの大地震の揺れによってである。当然のことが当然でなくなる予測もできない自然の猛威、何の備えもなくその中に放り込まれた人間は、なんと無力なものなのかと、ということをつくづく思い知らされた。また、このような環境の中で、ひるむことなく、献身的な活動をした数多くの同僚の姿を見て、いかに時代が変革しようが、日本警察創設以来の警察官魂は永遠と受け継がれていると確信した。そして、大震災警備に従事した貴重な体験は、次代を担う世代に受け継いでいかねばと決意している。

何度もいろいろな方から阪神淡路大震災の話を知っているが、身近な人の話を聞くとより一層リアルに感じることができ、自然災害の驚異というものを改めて感じた。自分は環境防災科に入って、これまで様々な災害やそれらの特徴、被害、対策を多く学んできた。その中でいろんな人の話も聞いてきた。それぞれに生活があって被害にあった。父の話を知りてまず、兄があのまま寝ていたら今生きていなかったし、その事によって自分もいなかったのかもしれない。そう考えると地震はいろんな影響があるものだと思った。そういう意味で幸運にも助かった兄と守ってくれた家族には感謝しなければならない。また、元々あったといわれている自助、共助、公助のうち二つを実行しており、公助よりも先に共助が救った数のほうが多いというのを、父の話で納得することができた。ただ、今ではもっと地震対策の意識や、災害への興味は昔よりも高まっていると考えているから、自分の寝るところにはタンスが倒れかかってこないようにする、家具の固定をする、といった最低限できる対策をして多くの人が助けられる側から助ける側に回ってほしいと思う。職が警察だったため、家族を置いて自分の仕事に就かなければならなかった父は、家族のことが心配なはずなのにそれでも自分が自分の役割を果たそうとしていたのはすごい責任感だと思った。災害が起こった時には何の仕事に就いていようとそれぞれがその町のために何かしようとしていて、全体が一つになっているように思われた。助かる人が多ければ、その町も多くの人が残り復興にも大きな力になる。いくらお金があっても、建物などが元に戻ろうと、そこに住む人がいなければそこはだんだんと衰退していくし、お金も無駄になってしまう。そういうことを考えて共助を大切にしていきたいと思った。

警察でも活動中に困ったことは水だというふう聞いた。避難生活する中でもやはりライフラインが整備されていなければ、避難中にも関連死が生まれてくるかもしれない。どの家庭でも予備の電気、非常用の水を確保するというのはできない。そういうときのために企業や行政がしっかりと対策をとるべきだと思った。避難所になると考えられている学校などでも貯水タンクや太陽光発電などといった設備を用意するべきだ。まずは避難所で生活しておけるように避難所がある程度安全な避難生活を送れるようにすること。その間に困ったことがあればボランティア団体や応援に来た企業に助けを求めればいい。ただし、企業にもやることもある。絶対ではないが、災害が起こった時に対応できる人を何人かおいておいたほうがいい。会社には会社の方針があるしそれに見合った人材をとらなければならない。じゃあ具体的にどうやって用意すればいいのかというと、会社の誰かが知っておけばいいということと働く人がみんな、災害のことを忘れないということだと思ふ。誰かが知っていても自分だけのものにしては意味がない。こんな災害が起こってしまうところは危ない、と気づいた人が周りの人に知らせるなり部長に話したりすることで、対策をとってもらえるかもしれない。でも、具体的な被害がわかっていなければ、しっかりと説明ができなければ話が流されるかもしれない。そういうときの為に、ボランティア団体などが災害について、その災害の特徴についての講演などを行えばいいと思っている。語り継ぐということはこういうことでもあると思った。

しかし、人が集まらなければいけない。だからといって一つ一つの企業に説明していくのにもお金の問題や時間の問題がある。みんなに興味を少しでも持ってもらえるようにしなければいけないが、

その興味を引くことができないという風になれば、何もできない。自分が考えることができるのは新聞やニュースで知らせていくということしか思い浮かばない。新聞やテレビなら全員とは言えないがほとんどの人の目についていると思う。「そういうところからしか始めることはできないのかな?」と思った。

どんなところでも日本にいる以上は何らかの災害に合ってしまう、ここ最近で起こるとされている地震もそうだ。そういうニュースにどれだけの人が関心を持つかで被害の数やひどさが変わってくる。自分の身に危険を感じてからでは遅い。避難中に何か自分でできることも限られている。被害を減らすにはまず災害が起こる前にしっかり対策することが大事だと考えている。

災害が起こったあとの対策も考えなければならない。例えば、避難所での生活で感染症が広がってしまえば高齢者などでたくさんの被害が出てしまう。そうなってしまうと死者数が増えてしまう。特に授業ではトイレからの感染症が多いということ聞いた。トイレはやはり人間にとってプライバシーの空間であり生活するためにも欠かせないものである。そういった面でも大切である。何度も言うように水がなければ流せない。このことを知っている、もしくは気づいた人が掃除の当番を決めておく、水をあらかじめ用意しておくといった対策をする事が大切である。トイレ以外でも夏の避難所や高齢者における避難所でのストレスで被害が出る。年齢や季節によって支援の仕方が変わってくる。また、災害で直接怪我をしたなどでは、血が止まって壊死してしまうというふうな状況で素早く救助して対処しなければならない。簡単な止血法なら誰でも分かると思うので学校などで積極的に講演を行うというのが大事だと思った。子供などに教えることによって家庭で話題が出るかも知れない。そういうことでだんだんと防災などが広がっていくのではないかと考えた。

将来には自分は情報技術関係の仕事に就きたいと思っている。情報が主な仕事だが、電気関係の仕事でもある。被災地に出向き直接的に何か支援ができるのかと言えばとても限られている。限られてはいるが被災地にはかかせない支援であると思う。それは、被災地に電気を届けるために、特殊な車を運ぶこと、臨時的な放送局を設置し被災者に素早く情報を届けられるようにすることだ。このような災害中や災害が起こった後の支援もあるが、災害後の対応がある。災害後に被災地の震災関連記録や資料をデータ化することによって自治体が世界に公開できるようになり、その情報を様々な人が閲覧することによって防災教育や防災・減災対策に活用され役立つことができる。しかし、誰もが見るわけではないため何かイベントや学校の先生が取り上げない限り防災やその震災の記録や真実が広まっていかない。そのために何ができるかというのはあまり考えられていない。いろいろな年齢層の人に防災を知ってもらうのはそれぞれ特徴があるのでどれも同じ方法では広まっていかないと思う。そこで何か工夫を入れなければならない。子供に広めるための方法としては学校の先生が積極的に防災や災害に関することに触れ、小学生の頃は簡単なことから、だんだん歳があがるにつれて自分の身を守るために何をすればいいのか、周りの人を助けるためにはどうすればいいのかという具体的なことを習っていくと良いと思っている。そこで情報通信業は防災や災害のことを情報として誰にでも分かるようにし、簡単にまとめられるようにすることができると思いました。実際、ある企業は小学校にパンフレットとして災害対策のことを広めている。こういうふうには、かなり多くの範囲に広めていく方法もあるが、まずは身近なところから広めていきたい。まずは、家族に、友人に。その後は就職した先でどんな災害対策を行っているかを見て、そこから学べることもあるし、足りないと思ったことをこの学科で学んだ知識を活かし、何かの機会に広めていければいいと思っている。

災害のことを忘れないというのはとても必要だ。また、それによって亡くなった人、怪我をした人、障がいが残ってしまった人がいるというのも忘れてはいけない。つねに災害のことや震災のことを考える事は誰でもしんどいことだ。心の隅にしまっておくぐらいじゃないと忘れようとしれない人の心が病んでしまう。そうして忘れていない人が広めていくと同時に語り継いでいき、過去の災害の教訓を活かすことが大事だ。しかし過去の災害の教訓にとらわれすぎて、逆に被害を出してしまうかもしれない場合がある。臨機応変に動けるようにするのが最善だが、みんなができるわけではない。災害時要援護者などは避難さえ困難である。そのために、普段から学校や地域で実践的な避難訓練をすることが重要だ。実践的とは具体的にどういう訓練かという自分考える限りでは、予告して行う

のではなく期間を決めてその期間の間にいつか行うというもので、訓練するたびに状況を変える、想定外という考えをなくすため訓練途中により大きい被害予告や津波警告を発表し、できるだけ逃げ、避難する、というふうな訓練を行えばいいと考えている。また中学生や高校生が率先避難者となり、災害時要援護者を手助けできるようになるとさらに良い。実際自分の地域では避難訓練などは行われていない。なぜ行われないのかはおそらく、災害の被害などをまだ知らない人が多いからであると考えている。自分にできることはマンションの講義室を使って防災についての話をすることができるが、自分一人では計画できないことであり、そんな行動力もまだまだ足りないと思っている。これが自分のこれからの課題である。

この「語り継ぐ」をしていて、考える事が多くあったし、「自分はこんな事を考えているのか」ということを文字にしてよく見直すことができた。被害がありなぜそれが起きたのかという原因やそれに向けての解決策など頭を使うことがあった。正直、脱線している部分が多くある。しかし、こうして自らが答えのない物事を考えられるのはこの学科でしっかり勉強してきたからである。もし違うところに行っていれば自分も災害の恐ろしさを知らないただの高校生になっていたかも知れない。災害や様々な分野から見る事ができる。まだまだ学び切れていないこともたくさんある。それをこれからの高校生活とその後の人生でしっかり学んで次の世代へ伝えられるようにしたい。阪神淡路大震災の経験をした人から話を聞き、聞いたことから自分が考えていること、自分なりの災害対策などを考えることができた。しかし、考えるだけや文字として綴るだけで終わらせたくないと思っている。こういうふうに自分の考えを書ける機会もなかなかない。いきなり大きいこととは言わずにコツコツと小さいことから行動していきたい。

語り継ぐ

西村 卓己

1 父の体験

(1) 地震発生前

当時、11階建てのマンションの9階に住んでいた。

(2) 地震発生直後

まだ目覚めるには早い時間帯だった。地響きとともに床が押し上げられるような揺れが起き、慌てて目覚めたと同時に家具や食器棚をなぎ倒す大きな横揺れ。妻（僕の母）と布団をかぶって揺れが止まるのを待つしかできなかった。どれくらい時間が経過したかわからなかったが、揺れがおさまるまでには相当長く感じた。電気は全く使うことができずライターを懐中電灯代わりに使い外に出ようとしたが、食器棚が転倒し、中の皿やグラスが壊れて床一面に散らばって外に出ることすらすぐにできなかった。やっとの思いで外に出て9階のフローアから周囲を見渡すと暗闇の中に人影が確認できた。

(3) 発生してから

地震発生から30分は経過したところに塩屋駅近くにある実家に電話すると、両親共に大きなけがもなく大丈夫とのことだったが、隣の八百屋の1階部分が倒壊し、中にまだ人が取り残されているとのことで、当時垂水消防団塩屋分団に所属していた私は、妻を自宅に残して慌てて実家まで行った。道中各所で全壊家屋、路頭に迷っている人々を見かけたが生き埋めの救助を最優先に車を走らせた。いつもなら5分かからないルートではあるが、倒壊家屋などに阻まれて30分を要した。到着するとすでに数名の消防団員が屋根瓦をめくって救助活動を実施していた。かすかながら中から「助けて！」という声が聞こえた。どれくらいの時間が経過したか全く分からないが、屋根瓦をめくった隙間から中に入り2人を救出した。すでに太陽が明るく周囲を照らしていた。

(4) 救助後

消防団詰所に向かい、垂水消防署と連絡し今何をすべきかの指示を仰いだが、消防署自体が全く機能しておらず状況把握すらできていなかった。ゆえに、当時の分団長をはじめ幹部の指示のもと、3～5名の班を作りエリア別に塩屋を散策し、状況把握に努めた。その際に国道2号線でガス臭が発生しており発生場所付近の警戒に当たった。各班が昼食前ぐらいに情報掌握から戻ると同時期に電気が復旧した。すると、2号線沿いのマンションから出火しているのを発見し、いつもの訓練通り消火栓へホースを接合し消火活動を実施したが、全く水が出ない。後日考えてみれば水道管自体が破損しており水など出るわけがなかった。慌てて小型動力ポンプで塩屋谷川から水をくみ上げて消火対応ができ、大きな火災にまでは至らなかった。あわせて消火活動をしていない団員については同様の火災が発生していないか近隣をパトロールさせた。タイミングが良かったのか同時期に2件の漏電火災が発生したが大事にはいたらなかった。以降は交代でパトロールと2号線の交通整理を行った。幸い詰所の向かいに消防団0Bがいて、その方から水と在庫のパンなどの差し入れがあり空腹を満たすことができた。

(5) 震災の日の夜

日が暮れたところに岸和田・泉佐野方面の漁師さんが漁船で食料を大量に運んで来てくださった。団員の半数余りが漁師ということもあり、連絡を取ってくれて持ってきてくださり、本当にありがたい差し入れだった。夜更けからは詰所前の2号線を各地の消防車両がたくさん通過していく光景はあまりにも壮大だった。交代で仮眠をとりながら翌日を迎えた。本当に長い一日だと痛感した。しかし、これからの新しい試練だった。

(6) 震災翌日

住民にとって食糧はもとより水さえも手に入れることができず、小学校や児童館で避難していた。そこへ、できる限りの物資を消防車で運搬して廻った。自衛隊からの飲料水等の知らせがあれば消防

車で配給場所・時間をアナウンスして廻り、配給も消防団で行った。

(7) その後

家を出てまる1週間、自宅へも実家へも帰れず、団員と昼夜を過ごした生活は今となっては貴重な思い出である。震災当日から翌日というように時間の経過とともにいろいろな情報が入っていった。当初はここが一番酷いのに消防・警察は全く活動していないのはなぜだ！と不満を口にすることもあったが、テレビ、ラジオを通じて他所の状況を見聞きすることによってこの状況は致しかたないとの思いと、二次災害が発生しないよう何とかみんなで頑張るしかないとの思いだった。塩屋地区では約40軒が全壊したが、これこそ不幸中の幸いで、倒壊した家屋の方々のほとんどが年に一度の町内慰安旅行で外出しており大事には至らなかった。もし旅行が1日でもずれていれば八百屋をはじめ何名かの犠牲者が出ていたことは間違いなかったであろう。

(8) 震災が落ち着いてから

1週間が経過しある程度街全体に落ち着きに戻った時に交代で三木にある銭湯に行き、浸かった時の快感は忘れられない。約1か月間団員と24時間体制で詰所にて万が一に備えて昼夜を共にして過ごした経験は一生忘れることができないであろう。これらの経験を後世に伝えていきたいと思う。

2 感想

(1) 父の話を聞いて

父からここまで中身の濃い内容を聞いたのは初めてで、八百屋の店の人が生き埋めになった話は本人や両親、祖父母から聞いたことがあったが、到着するまでの過程や電話が通じたこと、到着するまでに30分も要したと聞き正直驚いている。聞いたこともある話の中に、こんなことが現実に起こるのかと思わされるようなものが多かった。当時住んでいた家で玄関に置いてあった靴箱が倒れており、玄関扉を開けたくても開けられなかったことは聞いたことはあったが、家の中の状況については初めて聞き、災害の強さがわかった。当時住んでいたマンションは今もあり、普段ならそこから祖父母の家までは約5分で行けるところにあるのだが、震災時は30分も要したと聞き、普段の6倍以上の時間がかかるほどの被害のすさまじさが想像できない。当時、父は当時消防団に所属し、震災が発生して生き埋めの人を救出後消防団詰所に行き、消防署に連絡をしたが消防署自体が全く活動していないと幼いころに聞いていたが、その当時はなぜ消防署が機能していないのだろうと思っていたが、高校に入り外部講師の授業で消防士の方に来ていただき震災当時のお話を聞いて、なぜ機能していなかったのかわかった。そのような状況の中でも幹部の人が落ち着いて3から5人の班を作りエリア別にまちの安全を確かめに行かせるように指示を出したことは凄いと思う。団員の中には家族などを家に置いてきた人もいると思うのに、まちのため、町民のために活動した消防団員の人も凄いと思った。このように効率よくまちの安全確保などが出来たのも、日々の訓練のおかげだと思う。日々の訓練がしっかり出来ていなかったら、このように効率よく救助活動も出来ていなかったと思う。この話を聞いて事前準備の大切さを教えてもらった気がする。

震災当日に電気が復旧したのも驚きだが、それによって火災が発生し、火災の消火活動も消防団でやったと聞き、普段現場に出ることがほとんどない人たちでも災害の時に対応できるのかと思わされた。さらに、水道管が破裂したため消火栓から水が出なく、その時に臨機応変に川の水をせき止め消火に当たったと聞き、凄いと思ったし見習いたいと思う。

震災が発生したら“人との助け合い”とよく聞くが父の話を聞き本当に人との助け合いがあるのだとはじめて実感した。それは、震災当日の夜、詰所に待機している際に空腹になり、困っていると近所のコンビニの人が在庫のパンなどを持ってきてくれて、空腹を防いだという話で、ふだんは買ってもらうために売っているものを災害で困っているから、無償で配るというすばらしい話に感動した。そこのおじさんは僕も知っているが、とても優しくとてもいい人で、このような事をして下さったと聞いて改めて凄い人だと思った。また、団員の大半が漁師でその関係で岸和田・泉佐野方面からも漁船で食糧を運んでくださったことを初めて聞き、驚きと感動でいっぱいだ。県外の大坂からわざわざ夜に運んで来て下さり、たぶんほとんど面識ないのに助け合いをしようとする漁師の人を含めて日本

人って凄いなと思わされた。自分だったらこのような事が出来るだろうか、助け合えるだろうかと考えてしまう。語り継ぐことをしなかったら考えることはなかったと思うので、このような事をやってよかったと思う。

震災から翌日までが長かったと聞いているが、何が起こりかわからない中の夜だったと思うから、不安で仕方が無かったと思う。それが長い夜だと感じさせる原因だと思う。翌日から最大の試練と聞いたが、話を聞くと確かに翌日の方が大変だと思う。今は非常持ち出し袋や最低限の水を置いてくようにと言っているが震災当時はあまり耳にしなかったと聞いている。だから、水を用意している家庭は少なかったため自衛隊からの給水がある時刻をアナウンスして廻り、さらに配給も行ったそうだが、水を運ぶのは力仕事だし、少人数でたくさんの家庭に運ばなければならないから大変だったと思う。さらにはたくさんの苦情も入ったと聞き、その対応も大変だったようだ。震災によって精神的にもおいつめられているのに、さらに苦情の対応も大変だったと思う。

震災全体として、震災当日は町内の旅行でほとんどの人が旅行に行っており不幸中の幸いで大事には至らなかった事を聞き、住んでいる地区で死者が出なくて本当によかったと思う。これからの災害に対して、阪神淡路大震災のように不幸中の幸いはもう二度と起きないと思うから、事前に出来る準備（耐震、非常持ち出し袋など）をしっかりとっておき方が一に備えたいと思う。

(2) 写真などを見て

祖母から阪神淡路大震災についての写真を見せてもらったが、特に印象に残っているのが神社の狛犬や鳥居の一部が階段から落ちてボロボロになっている写真で、固い石で出来た鳥居や狛犬ですら、地震によって壊れ落ちる被害が出ており、そのような揺れの中で塩屋地区で全壊家屋が40軒ほどですんで本当によかったと思う。阪神淡路大震災ではいくつかの偶然が重なって死者が出なかったと思う。この偶然を次起きた時は偶然じゃないようにするためにしっかりとした対策をとってほしい。

(3) 祖父母の家

祖父母の家はそれほど大きな被害はなかったが、棚の上に置いていたテレビが地震によって玄関近くまで移動していたと聞き、そのテレビはブラウン管で出来ておりとても重たくて1人で運ぶのが大変な重さなのだが、それが地震によって5mほど移動したと聞き地震の揺れの大きさがすさまじかったことがわかる。また、当時祖父が寝ていたところに置いていた衣装ケースが倒れ、祖父は助かったがそれ以降その部屋では寝られなくなり、別の部屋で寝るようになったことから、それも小さいものだが一種の心への障害なのかなと思う。そのほかにも少し家が傾いたという話を聞いたことがあり、家の端を見ると壁と壁を固定するために板でつながっているのを見て、地震による被害が今でも残っていると実感できた。さらに部屋と部屋をつなぐ扉の窓ガラスが一枚種類違うのがあり、なぜだと聞いてみると、阪神淡路大震災でガラスが割れてその扉のガラスは古いため、同じ種類のガラスが無かったようだ。だから、種類の違うガラスを入れたようだ。このように阪神淡路大震災は目に見える小さな爪痕を今日まで残したと思う。今後必ず起こる地震に対して最低限の準備はしたいと思う。

語り継ぐ

西脇 かれん

- 1995年1月17日 -

1 震災前

震災前、母は中央区のとあるマンションに住んでいた。母は働いており、ごく普通に暮らしていたようだ。

2 阪神淡路大震災の日の朝。

当時兵庫県に住んでいた母はその日は家でぐっすりと寝ていたはずだが、地震がおきた時“夢なのか現実なのか”わからなく、窓の外をのぞいてみると外には赤い光が差してきた。それが美しい赤色ではなく、少し気味の悪い赤色でそれと共に、馬が何頭も向こうのほうから走ってくるような音が聞こえてきたのであった。

その光景、その音をどれだけ体感したのかよく覚えていないそうだ。そんな風を感じていると時間差である恐怖の大きな揺れがやってきた。まずは、大きく突き上げるような縦揺れが起き、それからだんだんと横揺れに変わっていき、最初の縦揺れでサッシのロックが開き、横揺れでサッシが開閉していた。空を見上げながら地震の恐怖に声も出なかった。

避難することもできなかった。母はそのとき死を覚悟しながらも収まることを神に祈りつづけた。

3 震災直後

どのくらい揺れていたのでしょうか。それすらも把握できなかった、そんな余裕など少しもなかった。収まっている間に母は「とりあえず手に持てる必需品、服やバックをもっていこう」そんなことを思いながらあわてて手に持ち外に出て、近くの公園に一旦避難したようだ。そこには人がいっぱい避難していたようだ。その中には、知り合いも避難しておりすごく怯えていた。母は驚きで声が出なかった。

4 震災から何時間か

それから、6時ごろには車に乗り実家がある長田区へと行った。道路はがたがたで信号は点滅するどころか道に倒れ、道路がとても危険なため気を付けながら走った。1時間ほどかかり長田区へついたらそこにはすでに日が明けて被害の状況が目の前に広がっていた。

倒壊しているビル、家、病院かずかずの建物を見てショックをうけたようだ。

そこまでは、まだまだの被害状況だったが、それからの火災の発生による被害が拡大したと思う。実家へと向かうのは1時間ほどだったが、母が住んでいる中央区に戻るのには、道が地割れや物が倒れていたり、帰るのに4時間ほどはかかったようだ。

家に帰ると近所では大きな火災が発生しており、母と先ほど公園であった知り合いは運よく家の被害は少なく、けがなどをすることがなかった。

しかし、実家は家の2階はすべて崩れ、2階では母の弟が寝ており、いうならば私の叔父にあたる人だ。叔父はとてもマイペースな性格をしており、震災当時も建物が崩れているにも関わらず、ずやすやすと寝ていたようだ。

この時私ならどうなっていたのだろうかと考えてしまった。私も叔父のように寝ていたのだろうか。

5 ライフラインの乱れ

それから、電気、ガス、水道などのすべてのライフラインが復旧するのにかなりの時間がかかったため、日ごろ私たち何気なく使っていた便利なものの大切さ痛感させられたようだ。避難生活も経験

し、そこには、今までにないほどの光景だった。一室に何人もの人が詰め入り、みんなそれぞれが混乱状態だった。プライベートの一つもない生活。その生活の厳しさ大変さもよくわかった。

6 仕事への復帰

母が仕事を再開するにはさほど時間がかからなかった。この時母は、「これが現実なんだと」いっぱい自分に言い聞かせたそうだ。

7 震災を通して感じたこと

でもそんな現実にも負けなかったのが、市民、住民の復旧に向けてのパワーだった。みんなが助け合い、お互いを思いやり、みんながみんなを救助しあい、みんながみんな命を救おうとしていた。そんな姿を見て感動でしかなかったそうだ。わたしもこの話を聞き、私がこの場にいたのなら、おそらく泣いていたであろう。誰も責めることができない、だって誰も悪くないから。自然災害の怖さ。復興することを信じ頑張ったことが今の子供たちと毎日幸せに暮らせる唯一の幸せにつながっている母は思っている。とてもつらく悲しく、生きたくないと感じた日もあった。とてもしんどい経験だった。が、自分の人生の大きな自分自身を見直す貴重な体験だったのではないかと今では思う。自分の子供たちには決して起こってはほしくない災害だが、何かの節目。節目には話し合っ、毎日当たり前前に過ごしている学校、家での生活、友達との時間、そんなごく当たり前の幸せな生活の日々のありがたみをちゃんと感謝し、実感してほしいと思う。そして母は経験したからこそこれからも忘れていかにしたいと思ったそうだ。

8 震災による不便

震災でいろんなものを失った。母が震災後に不便だと感じたことがある。まずはライフラインのストップにより、電気、ガス、水道など日常で必要となる使えなくなったこと。日ごろは普通に使えるという便利さ、なくなれば何もできないという絶望さ、生活のすべてが不自由になるという不安さ、そんな風に思う恐怖さ、震災があり、心も体もボロボロなのにも関わらず、そんなところにも悩まされることがあった。正直、どう生きていいのかわからなかった。こんなにも不便があるなかその中でも、一番不便だったことは特に水道だったそうだ。そんなときはじめて水の大切さを知った。飲み水はもちろん、お風呂屋食事など生活において生きていくための大事なものだが、その中でも、トイレの水が流せないというのが一番心が落ち込んだそうだ。衛生面での不安が一番きつかったそうだ。今では風呂水は流さず、残しておくようになった。震災によって生きていく知恵もついたと思うと。日用品を日ごろからストックおくことなどという子もしている。実際、災害への、備えに限度はあるが、最低限の準備はこころがけている。

9 被害状況

家は半壊したので避難所生活の経験もした。他人とのプライベートのない生活はとても大変だったそうだ。都会に暮らし、他人とのコミュニケーションが少なかった日々だったが被災により、慣れない集団生活はとても難しかったそうだ。余震の恐怖でかなりのストレスをあたえ、自分の家でほっとすることのできない疲労感が日を追うことに増していった。だからこそ早い復興を望んでいた。

- 今回の母の話を聞いて -

今回母から話を聞き、ここまで詳しく聞いたのははじめてかもしれない。私がかつ知っている。ニュースなどで見たことのある大きな震災は東日本大震災だ。何度か被災地に行かせてもらったこともあ

る。東日本大震災では、一番印象に残っているのはやはり大津波である。私が、直接体験したわけではないが、母の話を聞き、考えさせられることがたくさんあった。

「語り継ぐ」

野澤 愛未

1 おじいちゃんの震災体験

(1) 地震の朝

おじいちゃんは地震当時、兵庫に住んでいた。3階建ての家だ。おじいちゃんは地震の日2階の部屋に1人で寝ていた。しかし震災当日、夜になぜかいきなり目が覚めてお茶を飲んでまた布団に横になった時「ごおーっ」と音がしてその後「ガシャーッガシャーッ」食器が大量に割れる音がした。おじいちゃんは落ち着いていて揺れている時部屋をずっと見渡していた。おじいちゃんは足を広げて布団の上に座っていた。そして、部屋に置いていた重たいテレビが股の間にどん！と飛んできた。もし足をとじて座っていたら大けがになっていたにちがいない。本当に何センチかずれていても怪我をしていた。危機一髪だった。

2 母の震災前・・・

震災前、大阪に勤めていたため大阪で1人暮らしをいていた。しかし、勤めていたところで体をこわし働けなくなったため仕事を辞めた。住んでいた1人暮らしの家を引き払い、当時、神戸市兵庫区にあった実家に戻って自宅療養をしていた。1、2ヵ月経ったところで、阪神淡路大震災がおこったのだ。

3 阪神淡路大震災

(1) 真っ赤な空

2ヵ月前まで家を離れていたの自分の部屋はもうなくて、夜は母と同室で寝ていた。この日も母のとなりで寝ていた。熟睡していたが明け方、突然地面をドドン！！と突き上げる感じがしたかと思うと、家が東西に大きく揺れだした。当時住んでいた家は4階建ての鉄筋コンクリートで3階部分の部屋にいたが家が東から西、西から東、180° 何度も何度も揺れた。平衡感覚がなくなり隣で寝ていた母とすわりこんだまま抱き合っって悲鳴をあげるのので精一杯だった。長い間揺れていて心の中で「早く止まって！！ブルドーザーでも突っ込んできているのか？もういや！怖い！！」という思いがぐるぐる回っていた。

どのくらい経ったのか、揺れが止まるとあたりは真っ暗で静かで、すりガラス越しに外が赤くみえた。父が2階で寝ていたので「大丈夫？！」と声をかけ返事があり、とりあえず安心した。しかし、2階に降りようにも部屋の姿見の鏡が布団の上に粉々に割れていてタンスは倒れ部屋はぐちゃぐちゃ。なんとかスリッパとメガネを探し出し、2階の父のところへ。父のところへ行くと、父の頭の横にテレビが数メートル飛んで倒れていた。台所の食器棚はたおれ、皿は全部割れ、大きな冷蔵庫でさえも飛んで倒れていた。外に出てみると、ガスのにおいがし、家の南側にあった木造の家はほとんどペッチャンコになっていて、たくさんの方が亡くなられていた。

西側の空は真っ赤。となりの町の長田が火事だったからだ。

(2) 避難所での生活

家族全員で近くの小学校に避難した。しかし、町はガスのにおいが充満し、近所の町工場があらこちらで突然爆発し、火の手が避難先の小学校のすぐそばまで塞まってきた。その後の余震も多く恐怖で何日も寝られなかったし、もうだめだと死ぬ覚悟もした。

心身ともに衰弱していたところに友達が、「うちの中学校の体育館のほうに物資も多いし、火事もないから」と呼んでくれて家族と移動した。そこには毛布も多く、毎日同じおにぎりだったが1日、1回～2回食えることができた。自分の家族のスペースの周りに避難されている方々に励まされ、励まし、温かい交流がうまれた。お互い運命共同体としてかたい絆でたしかに結ばれなんとか毎日を乗り

越えていけた。

4 1ヵ月後・・・

地震後、1ヵ月ほど経ったある日、食糧をさがしに友達と商店街があったほうに歩いていくと、パチンコ屋のお店のかたが「うち水が出るよ！！」と声をかけてくれた。道端でホースからでる水で地震後初めて、頭を洗った。水は冷たかったけど嬉しかった～～！！今でも毎日、お風呂に入ったら「今日も無事こうしてお風呂に入り、髪や体を洗いドライヤーで乾かすことができ、ありがとうございます」と心の中で思っている。

そして、自衛隊の方々による炊き出しも感動した。温かい食べ物は心がホッとし安心し、涙がでるほどおいしかった。自衛隊の方々の過酷な環境の中でのがんばりや、優しさに触れ、頼もしく、救われた気持ちになった。

5 震災を経験して

日々、当たり前だと思っていたこと、お腹がすいたらご飯を食べ、着たい服を着、帰る家があり、風呂に入り、歯を磨き、鏡を見たり、布団で寝たり、学校に行ったり、仕事に行ったり、友達がいたり、体が元気で、家族がいて・・・というのは、すべてなにもかも当たり前ではないこと、生きていることさえ当たり前ではなかったことをすべての人に知ってほしい。今あるものすべてを大切に、感謝して生きていくことが、本当の生きていくということではないかと思う。

そして、自分は、自分や人のために何ができるか、そのためには、備えも必要だし、知恵や知識、情報、行動力など、日頃から準備しておかないといけないと思う。

<私の感想>

私が最初に思ったことは、震災から19年たった今でも思い出したらとても苦しくしんどくなるのだということだ。この“語り継ぐ”のインタビューで母にきいている時、とても辛そうだった。「もう思い出したくない」とも言っていた。辛い思いや体験を思い出させてしまって申し訳ないと感じた。ごめんなさい。

母の阪神淡路大震災の話はわたしが小さい頃から聞いていた。小さい頃は、ただ聞いていた。しかし環境防災科に入って最高学年になって、ある程度震災について分かってきたころに改めて震災の話をしきりと心にしみた。

阪神淡路大震災の時、私の母、祖父、祖母は鉄筋コンクリートの家に住んでいて本当に良かったと思った。木造の家に住んでいたなら、もしかしたら私や弟は生まれていなかったかも。たった家の造りひとつで人間の生死にかかわるなんてとても怖い。阪神淡路のときにみんなが鉄筋コンクリートや丈夫な建物にいたら亡くならずにすんだ人もたくさんいるだろう。でも、無駄になったわけではないのではないか。言い方が悪いかもしれないがその方々のおかげで木造の家は地震に弱い、火事を広げるともということが分かった。だから今の日本の家はあの頃より強くなった。木造の家がまだ残っていることが不安だ。母達は、鉄筋コンクリートの家に住んではいたが、家具の固定をしていなかったためタンスや、食器棚、テレビがとんでいった。祖父はギリギリのところまでテレビにあたらなかったが、あと数センチずれていたらと考えたら怖い。祖父はいつもこのテレビの話をするとき笑って話すが、震災時は本当に怖かったと思う。いま私の家の家具は全部ではないが家具の固定がしてある。あと寝る部屋にはタンスや重たいものは置いていない。わたしは邪魔だと思って置いていないが、母は寝室にスリッパを置いている。まだまだ自分には危機感や備えが足りていないと感じた。

避難所は安全だと思っていたが、母の最初に行った避難所は近くに工場があり危険な場所だったので避難所も近い避難所に避難するのではなく、避難所の周りになにかがあるのか把握しておくことが大事なのだった。工場、木造建築、川、ダム、土砂崩れがおこる可能性がある場所・・・危険な場所はたくさんある。避難所選びが重要なことが分かった。

母の話聞いて人とのつながりも大事だなと感じた。たくさん知り合いがいたらお互いに情報交換

ができる。母の場合も、母の友達が2つめの避難所の情報を提供してくれたから安全な避難所に行くことができた。近所や友達、顔見知りの人を増やせば助かる幅も広がる。1つ思ったのが、母が震災前に神戸に帰ってこなければ、大阪に暮らしていたら阪神淡路大震災を経験せずにすんだが、母が神戸にもどってきて良かったと思っている。母が帰ってきてなかったら、友達の情報がいかなかったわけだから祖母や祖父は、そのまま危険な避難所で暮らしていった精神的な疲労がたまって倒れていたかもしれない。

友達に紹介されていった避難所は、物資が豊富で安全。私は舞子高校がそんな安心で安全な避難所になってほしい。舞子高校の周りは特に危険な場所もないから少しでも、生きる希望がもてるような避難所にしたい。舞子高校以外でも地域、地域で安全な避難所を作ってほしい。

パチンコ屋の人が、水が出るよという呼びかけは母にとってすごい助けになったと思った。震災で気持ちが暗くなっているなか、人の優しさ温かみにふれて元気になったと思うし、この時母が思った「嬉しかった～～！」という気持ちは心の底から思ったことだと思う。お風呂に1日でも入れなかったら私は気持ち悪くて落ち着けない。わたし以外にもたくさんいると思う。だから、お風呂が入れない期間とてもストレスがたまっただろう。普段は思わないが、阪神淡路大震災をふりかえるといつも風呂に入れること、生活できていることにありがたく感じる。訓練でたまに学校で炊き出しをするが、炊き出しのご飯は本当においしい。優しい味が心がほっこりするのわかる。炊き出しは当時、たくさんの方の心にしみただろうなと思う。

今回これを聞いて、母が活着ていることに感謝した。当たり前前の生活ができてるのは母のおかげ、活着ている人のおかげ。だから震災を体験した人のことは大事にしないとけないと思う。自分でできることはまだまだたくさんあるし、しなければならぬ。環境防災科で勉強しているのに、いざ災害が起きて備えができていなかったら恥だ。母はすごくしっかりしているから、災害時の避難グッズは家族分用意してくれている。だから、避難所に行ったときに母を支えられるようにしておきたい。

普段、環境防災科のボランティアで耐震、免震の説明をしているが、その説明は大事なことだと思った。私の母みたいに建物が強かったため生き残れた人もいるはずだ。木造の家に住んでいる人はたいていお年寄りで、長く住んでいた家だから離れたくないという思いがあるのだと思う。そう思ったら、「木造の家じゃなく安全な鉄筋コンクリートの家に住んで！」とは言いにくい。だから私は無理にはすすめないかもしれない。木造の家に住んでいる人を把握しとして、災害時、優先的にそのお年寄りを救出できればいいのではと思う。しかし、二次被害も起こりやすい。いい解決方法はわからない。でも何年後かには木造建築は日本から消えるかもしれない。そのときは、そのときで新しい問題は出ると思うが。みんなで支え合って協力するかぎり助かる。感謝の心を忘れない、支え合う、これを大事に暮らしていきたい。

地震が起きて

松岡 晴季

1 母から

(1) 1995年1月17日5時46分

当時、母の実家は垂水にあり、母は水質調査をする会社に勤めていた。夜勤もなく地震が起きたときは、実家の布団の中だった。地震が起きた時はぐっすり眠っていたが、大きな物音と揺れですぐに目が覚めたと私に話してくれた。ガラスが割れた音がしたがスリッパがなかったので慎重に1階におりていった。食器が床に落ちて割れている以外に家の中の被害はなかったと言っていた。その日は、母と叔母、祖母、祖父が2階で寝ていた。家族は全員無事だったので、すぐに近所の人たちの無事を確認するために外にでた。すると家の外壁が一部剥がれ落ちていた。祖父が内装の仕事をしていたので、知り合いに頼み、安い値で直してもらえた。直してもらうまでの間、家には隙間風が吹いていて寒かったとはなしていた。

(2) 出勤

母の仕事の事務所は神戸から西の遠い場所だったので、出勤する必要があった。出勤には車を使った。その車の中でラジオを聞いて神戸が大変なことを知った。このとき下り車線はすいているのに対し上り車線は混んでいたように感じたらしい。しかし、仕事場のある街は、ラジオで聞いた神戸の現状とは裏腹に普通の日常があったようだ。仕事場のテレビで被災地の映像を見たときは驚いたと話した。

2 祖父から

(1) 「何が起きたかわからなかった」

家族と一緒に寝室で寝ているときに被災した。激しい揺れで布団にしがみつくなかった。しかし、家の被害は大きくなかったため、そこまで大きな地震ではなかったと感じたと話していた。電気が寸断されテレビがつかなかったため、まさか神戸の街が壊滅状態になっているとは思わなかった。

(2) 出勤

祖父は内装の仕事をしていたため被害の大きかった地区に出向く機会があった。そこで見た景色は本当に神戸なのかわからないほど変貌していた。多くの家屋が崩れ、あちこちから黒い煙が立ち上っていて、まるで戦後のようだったと話してくれた。

2, 3か月の間仕事の量が数倍になりものすごく忙しかったそうだ。揺れがひどかった地域では木造建築の建物はほぼ崩れてしまっていて、おもに改修したのはコンクリート造だった。垂水、舞子、塩屋あたりまでが改修可能、それより神戸よりの地区では改修に時間がかかることが多かったそうだ。

被災した当日の夜、仕事帰りに夕飯を買って帰ろうとしたが、どこのお店も売り切ればかりで食料を調達するのにかなり時間がかかった。結局手に入れた食べ物はすくなかったので娘に分け与えて自分は夜ご飯を食べることはなかった。食後に銭湯に行った。断水していたため周辺の住民が集まりお風呂の水を飲み水以外の生活に必要な水としてもらいにきていた。水がない生活は本当に不便だったらしく、この時の水はありがたかったと話した。幸いにも蛇口からはお湯がでていたので、バケツを持って蛇口とお風呂場を何度も往復して、お湯をためお風呂に入った。電気が復旧してもガスが復旧しなかったため、食べ物の調理にはホットプレートを使っていた。

3 叔母から

(1) 地震発生直後

「あまりに大きな音と衝撃で飛び起きた、何が起きたか理解できなかった。」叔母はそういった。激しい揺れで部屋の入口のふすまがゆがみ、揺れがおさまった後部屋から出るのが大変だったそうだ。こ

のとき、足の裏で、尖ったものを踏んでしまいけがはしなかったものの、しばらく動けなくなってしまった。

当時叔母は高校生だったため、地震があったが登校しようとした。須磨にある高校で電車に乗らなければならなかったが、須磨方面に向かう電車は大方止まっていた。遅れてでも学校に行こうと自転車で行くことを決めた。道路は車が多すぎて大渋滞が起こっていた。なんとかその間を通して学校に行った。しかし学校は学校としては機能しておらず、避難者が何人かいた。学校では生徒の安否確認だけおこなわれ、すぐに家に帰るように言われた。この時学校に来ることのできなかった生徒が多く安否確認は難航したようだ。学校はしばらく休校となった。

(2) 夜

学校から家に帰ったが、電気が通ってなかったので、ろうそくで一夜を過ごそうとした。しかし、たびたび余震が起こっていてろうそくが倒れる可能性があったので、結局明りのないまま一夜を過ごすことになった。地震が怖くて眠れないと思っていたが、案外すぐに眠りにつけたようだ。

(3) 2日目

学校が休校になったため、朝起きてから家の片づけを手伝った。大方、初日に母がやってくれたみたいで、やることは少なくなかった。ゴミ捨て、ペットの世話、散らかった部屋の整理などたくさんやった。祖母は威厳のある人だったらしく、片づけは徹底されたようだ。家のことが済むと近所の人の片づけを手伝いにいった。普段から親交が深かったので、作業はスムーズにいった。このとき、普段からご近所づきあいをよくしておけば、困った時に助け合えると思ったようだ。その日の夕飯はおにぎりとおかずだけだった。昨夜に、冷蔵庫のものが腐ってしまうので、腐る前に食べようということになった。おなかいっぱい食べることができず、おなかすくので、その夜はすぐに就寝したと話した。学校が再開してからは、普段通りの生活に戻った。

感想

今回改めて阪神淡路大震災の話を聞いて、知らないことが多いと思った。今まで母からは、自宅近辺の状況しか聞かされてこなかったが、被災の少ない地域がどうなっていたかなどあらたなことがきけた。母から話を聞いて一番驚いたことは、被災の少なかった地域では普段通りの生活を送られていたということだった。それは当たり前のことだが非協力的に思えた。被災地以外の場所にも生活があるわけだから支援できないのはわかるが、あまりにも他人事ようだったと母が話してくれて悲しいことだなと思った。車のラジオでやっと被害の大きさが分かったらしいので情報収集のためにもラジオは必須で、いつでも枕元に置いておくべきものだった。母は現在コンタクトレンズをつかっているが、被災したときは、眼鏡だったそうで、枕元になければ困っていたと聞いて、目が悪い人が避難時に、よく見えなかったことで負傷したという事例があるので、眼鏡も枕元に置いておくべきだと思った。母の話によると多くのメガネ店は商品が壊れていてなかなか再開しなかったそうなので、震災時に壊れてしまったもしくはなくしてしまった人は、その後の生活がとても困ったのではないかと思った。

祖父の話を聞いて、壊れた建物が多すぎたと思った。みんながみんな困っていてどの家から手を付ければいいか判断できるのか疑問に思った。しかし、耐震工事を済ませてある木造建築物は倒れていなかったと聞いて、耐震工事をするかしないかが生死の分かれ道だと思った。祖父の仕事場には被災から2、3日でボランティアの人たちがかけつけてくれたようだ。他県の内装工事業者が手伝ってくれて、すごく助かったと話してくれた。しかし、技術や知識もなく、自分での生活装備も無いボランティアの人もいたようだ。こういう人たちに何も与えないわけにもいかないので、結果的に現地の食糧事情を悪くすると思った。またこのような人たちが、単独で被災地に行くことによって交通事情はすごく悪かったようだ。救助や救援を遅らせるだけだから、むやみに被災地に来ないほうが良かったのではなかったのかと祖父が話してくれて、本当にそのとおりでと思った。被災地では、救急車や、自衛隊の給水車、消防車などの優先すべき車両がたくさん走っていたと思うので、これらを妨害することは復旧、復興の邪魔になっていたのではないかと思った。震災が起こってから10年ほどたってから

大阪で仕事があったとき、仕事場の木造建築の家に耐震工事が施されてなかったという話を祖父から聞いて、被災地とそうでない地域で溝があると感じた。ほんの数キロ先では同じ木造建築の建物が倒れていたにもかかわらず、自分は大丈夫だと勘違いしてしまっているのではないかと思った。もしもそうではなくて、金銭などの問題だったとしたら、国や地方自治体が金銭的援助をして耐震化を推進、促進すべきではないかと思った。

お風呂のお湯を入れるために台所と浴槽を何度も行き来したという話は初めて聞いた。被災した建物の改修工事に追われていた当時の祖父には重労働だったのではないかと思う。家の水道が止まらなかったのは不幸中の幸いだと思った。多くの地域ではトイレを流す水、食器を洗う水に困ったときいていたので、幸運だったと思った。水が出なくて自衛隊などの給水車を待つ作業は肉体的にも精神的にもつらい作業だと思った。被災の直後にはこういうこともボランティアとしてできるのではないかと思う。しかし、被災直後しか必要ないボランティアだと思うので、現地の学生などが活躍できるのではないかと思った。それには普段からの近所づきあいが欠かせないので、それを大切にしていかなければならないと思った。

叔母の話聞いて、自分はなぜ叔母が学校に向かったのか分からなかったが、住んでいた地域が比較的被害が少なかったことと、被害の大きさが情報として回ってきていなかったことが原因だと思った。家ではろうそくの明かりだけで過ごしていたが、それもやがて余震で倒れると危ないのでなしになったという話を聞いて、こういう余震のことを考えずにろうそくを使い続けるのは危険なので、いい行動だと思った。

家具や物が散乱していたため、玄関まで歩くにも足の裏を怪我してしまったという知人が多かったそうだ。足をけがすると立つことさえできず大変なので、枕元には靴やスリッパを置いて寝るべきだと思った。

叔母が近所の人のかたづけを手伝ったという話を聞いて、ただただ親切心で手伝いに行っただけだが、近所の人にとってはすごく助かったのではないかと思った。声をかける、訪問するなどの、誰かと繋がっているという気持ちにさせることが大切なのではないかと思った。人との繋がりを作るには、多くの時間が必要だと思うが地域の行事などがあれば親密になれるきっかけになると思う。自分の将来の夢は観光、町づくりなどであるが、このような地域の行事を盛り上げていくことを提案し、人と人の近所づきあいを大事にしてもらうことが出来たら防災に大きく貢献できるのではないかと思った。

食器を洗うための水を節約するためにサランラップを使うという方法は学校で習ったが、母からも同じようにしていた友達がいたという話を聞いて、普段聞かないだけで実際に被災した人たちは多くの教訓を得ていると思った。すべての話を聞いて、家族からも勉強になる教訓や知識などが聞いて驚いた。環境防災科である自分でさえこの状態なのに普通に生活してきた人たちは災害の知識やその教訓が多いとは思えない。南海トラフ地震が近い将来高い確率で起こるとされているのにもかかわらずこのままではだめだと思った。家庭での備えとともに地域での備えを重視しなければならないと思う。ただ、倒壊した家屋から人を助けたいと思ってもものこぎりやバールがなくて困ったという過去の事例をそのまま活かして、のこぎりを備えていても鉄筋コンクリート造の種類建物が主流の現代では意味があるとは思えない。このように風化してしまう教訓とそうでないものを見極める必要があると思う。それらを踏まえて備えていればこれから起こる災害の被害を小さくおさえられるのではないかと思った。

語り継ぐ

松本 紗弥

1 震災前日の夜

母と父と二人の共通の友達とかにを食べに旅行に行っていた。その日の夜は、遅くも早くもなくふつうに寝た。

2 震災直後

5時46分地震発生。ドンと突き上げられ、そのあとには横揺れが続いたそうだ。団地に住んでいたが、団地は崩れなかった。1階に住んでおり、地震の揺れもそこまでひどくはなかった。震災直後は、電気もストップしており、テレビもつかなかったために情報を入手することが困難だったが、自分の車に乗りラジオを聞いて情報を入手した。家の中のなかは、ぐちゃぐちゃというほどではなかったが、タンスなどが倒れていたそうだ。母は、お腹の中に私のお姉ちゃんを身ごもっていたために、父がすべて片付けた。

(1) 母の話

母は、私のお姉ちゃんがお母さんのお腹の中にいたためにお腹の心配をすごくしていた。阪神・淡路大震災が起こる前のお腹の中で出血していたそうだ。「次の日に病院行こうね」と父と話していたが、地震が起こってしまい、自分が通っていた病院に行けなかった。他の病院に行ってもどこも見えてくれなかった。沢山の病院をまわったそうだ。しかし、命の危険な人がたくさんいるのに、お腹の中が出血したぐらいで見えてくれる状況ではなかった。個人病院にいったらやっと診てくれた。大きい病院は、電気やガス水が止まっていて大変だった。妊婦さんは、後回しだった。

(2) 父の話

父はその時、小学校に勤めていた。自分の家の片付けを終わらせて、母を父の実家に送り、小学校に向かった。地震の影響でバス、電車が動いてなく自転車かバイクで小学校に向かったそうだ。道路はとても渋滞しており、車で移動することは困難だった。須磨浦公園の前の道路に断層がはした跡があり、道路が盛り上がっていたそうだ。小学校は避難所になっていたが、大きい地震が起こったことが初めてで、避難所のマニュアルができていなくて手探り状態だった。考えて避難所運営をしていたそうだ。

3 地震発生から・・・

(1) 母の話

父の実家に避難しており、外へ一步もでなかった。私の祖母は垂水の役所に勤めており、役所から配給されたお米でおにぎりを作る手伝いをしていたそうだ。

(2) 父の話

休む暇もなかった。土曜日、日曜日関係なく小学校に通って避難場運営をした。たくさんのトラブルも発生した。子どもたちの安否確認のために、自転車で地域をまわったそうだ。全壊の場所や半壊の場所、危ない場所を地図にまとめていたそうだ。避難所運営をすることも大切だが、子どもたちが学校に来られるように、避難している人が生活出来るように、子どもたちが勉強できるようにと色々考えながら、避難所運営をしていたそうだ。

4 震災直後の学校の様子

学校に行った時の様子はすごかったそうだ。学校の校舎が半分以上壊れてしまった。しかし、小学校に避難してきた人の人数は800人こえたそうだ。800人の人を把握するために一人一人名前を聞いて行ったそうだ。学校にはたくさんの問い合わせの電話がたくさんあった。NTTのかたが来て

くださり電話を繋いでくれたそうだ。そこから、電話がひっきりなしに電話かかってきており、大変だったそうだ。プレハブ校舎は基本的に強い造りだそうだが、スライドドアが上下から力が加わり「くの字」になって外に飛び出していた。2階にあったテレビも窓ガラスを割り外に飛び出していた。筋交はちぎれていた。グランドピアノは、ドンと最初に縦揺れがあった為か、縦向きになっていたようだ。校舎が半分壊れていたために入れる教室も少なかったためにトイレの前や、階段の踊り場にまでひとがいた。そのまま避難してきた人が多くほとんどの人がパジャマだった。避難所で一番困ったことは、トイレだった。校舎が改築中でプールに水がなかったために、流すこともできずに大便を手で運んで処理をしていた。物資で、カップラーメンをたくさん送ってくださったが、水がなく困った。なかなか、ご飯が食べられなかった。父は、西須磨小学校に当時勤めていた。その地域は、地震の影響で火事が沢山おこっていた。そのために火を怖がる人が多くて公には火を焚けなかった。部屋の中では毛布などを使って体を温めたそうだ。火を焚くには、運動場の端にいて火を焚いたそうだ。

5 発生から時間がたって・・・

(1) 1週間後

① 避難所

物資がたくさん入ってきた。最初は自分の命が助かってよかったとほっとしていたが、時間がたってから、周りの事が見え始めこれからどう生活していくか、自分の家はどうなったのか、自分の家族は無事なのかなどのショックや不安を抱えている方々が多かった。また、住み込みで炊き出し、一般の人が沢山助けに来てくれた。

② 周りの様子

場所によって被害は全然違う。私の家の周りは被害が少なく、時間がたつと買い物もできた。しかし、ひどいところでは一週間では、何も変わらない。道も寸断されていた。誰も助ける余裕もなかった。自分の事で精一杯であった。それほど、地震に追い詰められている方が多かった。

(2) 1か月からその先

もう、町も復旧していった。

学校の様子

神戸市の名谷では、たくさんの仮設住宅が建っていた。父の学校は神戸市の中で一番避難生活をしている方が長く滞在していた。学校を再開したのは、2月27日阪神・淡路大震災がおこってから約1か月ちょっとかかった。トイレや水道学校生活をするのに必要な準備をした。避難所生活をしている人には、教室からでももらった。プレハブ校舎は壊れていたの直すのが大変だった。

6 震災を体験して学んだこと

父は、震災を経験して学んだことがあった。それは、地震は大変であり、自然の猛威をまのあたりにした。だが、人はすごいと思ったそうだ。なぜなら、父の勤めていた小学校は避難所になっていた。避難所に、美容師の方やたくさんのボランティアの方々が来てくださったそうだ。生活が厳しいときこそ、お互いを助けあい、自分の出来ることを生かして助けあっていたそうだ。震災を通じて人間のすごさを痛感した。辛いときだからこそ、人間は助け合って生活していけると今回の阪神・淡路大震災で学んだことだそうだ。

7 話を聞いて私が思ったこと

私が、阪神淡路大震災の話聞いて思ったことは、やはり想像以上に本当に大変だなと思った。私たちの家族は幸いひどい被害はなかったけど、父の話聞いてとてもすごい地震だったのだと改めて感じた。筋交さえあれば、耐震出来ているから安心とずっと思っていたのに、阪神・淡路大震災で筋交がちぎれるという話を聞いて、これからくる南海トラフ地震などは、阪神・淡路大震災よりもすごい被害の出してしまうかもしれない地震だ。また、少なくとも私が生きている間には南海トラフ地震は

絶対来ると言われているので対策は筋交だけではいけないのかなと思った。他にどんな対策があるのかなと思った。ガスがないのだったら、火を焚いたらいいと軽く考えていたけど、いろんな地域があって、火が怖くて焚けないという話を聞いて私はびっくりした。火事の被害に合われた方たちのことも考えてなかったなと思った。私たちは、環境防災科で、ボランティア活動をさせてもらっている。被災地に行くこともある。その時には、いろんな方がいることを頭に入れて活動していかなくちゃいけないし、周りを見て行動すること大切なことなのだなと思った。プレハブ校舎は強いはずなのに、ドアが崩れたりしているなんて建築士もビックリしていたそうだ。「想定外だった。」そんな言葉ではもうすまされないと思う。これぐらいの規模かなど考えずにどんな被害が出てでも対応できるように日頃からしっかり対策をとっていかなくてはいけないのではないかなと思った。

8 考えたこと

私が、阪神淡路大震災の話をきくことによって考えたことは、震災はつらいこともたくさんあったが、辛いことばかりではなかったのではないかなと父の話を聞いて考えた。私は、環境防災科に入って辛い話をたくさん聞いてきた。東日本大震災でもたくさんの方が地震の被害に遭われた。つらいこと、大変だったこと、悲しいことは、良かったことなんかには比べたら数倍多いと思った。悲しかったこと、つらかったことも勉強して次に絶対同じような被害にあわないようにすることは本当に大切だと思うが、震災が起こったからこそ、気づかされたこともたくさんあると思った。そうした地震が起こったからだと気づかされたことやよかった話を、私たち環境防災科が拾っていき、辛い話だけではなくいろんな視点から阪神・淡路大震災を勉強していくべきなのではないかなと考えた。今の技術では、地震を完全に阻止することはできないのが今の日本の現状だと考えた。だから、家具の固定など、自分の身の回りで出来ることをしていくべきだと思った。耐震工事などお金がかかるので手軽にできて誰でもできるようなものが大切だし、学校のロッカーなども固定する必要があるのではないかなと考えた。学校の先生がもっと、地震などに興味もっていくことが大切だとも思った。今では、マニュアルが作られているそうだがそのマニュアル通りにはいかないのが災害だと思う。だから、学校の先生も子供たちに防災を教えつつ、皆に興味を持ってもらえるような勉強の仕方などを考えるのが大切なのではないかなと思った。

9 これから私がしていきたいこと

この話を聞いて、自分が出来ることは地震を予防することが大切だと思う。その予防することは、私の力で日本全体を救うことはできないが、「防災」を広めていくことは本当に大切だと思う。なぜなら、筋交がちぎれてしまうほどの地震が来るのはこわいけど、それを想定の中に入れて、他の備えをしていくことが大切だと思った。一人一人が地震を身近に考えて頭に入れていくことが大切だと思った。また、防災や減災などは、私自身、環境防災科に入ったからこそ防災などに興味をもった。それがなかったら、防災などに何一つかかわってなかった。今の時代阪神・淡路大震災のことを知らない世代になってきている。阪神・淡路大震災のことも今では20年だからこそ話題が沢山出てきているが、普段では、防災など、耐震などでこないテレビや新聞ではほとんど放映されてもいない。だから、私たち環境防災科の生徒や、卒業生のみんなが力を合わせて地域のリーダーになって皆に防災を広めていかなくてはいけないと思った。そうすることで、自分の身の周りの方だけかもしれないが助けることはできるのではないかなと思った。防災をみんな固く考えすぎだと思う。だからみんな防災などに興味を示さないのだと思った。おもしろく、皆が覚えやすく、身近に考えられるような防災教育をできたら防災の意識が高まり、災害に強い街になるのではないかなと思った。

10 語り継ぐ

私は、最初この語り継ぐは、正直しんどいと思った。しかし、卒業研究初めての授業の時に参考程度に過去の先輩の語り継ぐを見させてもらった。それをみて、しっかりこの語り継ぐを書かなくちゃいけないと思った。なぜなら、たくさんの経験が書かれていた。阪神淡路大震災を体験した人の話も

見た。軽い気持ちで書いては行けないなと思った。沢山の方が、思い出すのも嫌だったかもしれないのに一生懸命自分の言葉で語り継ぐを書いていた。私は、この語り継ぐは、書いて終わりじゃなく、自分の言葉で伝えて行くことも大切だと思った。将来私は、美容師になりたい。最初は、学校の先生になりたいと思っていたが、東北ボランティアに行かせて頂いたことで、自分の将来の夢を見つめ直すことが出来た。自分の出来ることを将来にいかしていきたいと思った。美容師と防災なんて考えている人はいないと思う。だから私が第一人者になって美容師になりながら防災を語り継いでいきたいとおもっている。私は、語り継ぐ方法として、お客様に阪神・淡路大震災の話を提供したりできるのではないかと思った。美容室はリラックスする場であり、そういう話も出てくると思う。だから、そういう話になってもいつでも対応できるように勉強をもっと頑張っていくことが大切だと思った。私は、環境防災科で習ったことは、社会に出ると意味がないことかもしれない。だけど、私は、この習ったことを有効活用して、社会に出ても防災や地震について携わっていきたいと思った。自分にできることは今、何にもないけど、大人になってからは自分で考えて防災教育などもしていきたいと思っているし、人の役に立ちたいと思った。私が、防災を広めていくことによって一人でも多くの人を助けたい。助ける、助けないは難しいかもしれないけど、そのぐらいの思いでこれから卒業するまではもう少ししか時間はないけど、勉強していきたいと思った。

「生きているだけで丸儲け」

丸岡 佑亮

当時、僕はまだ生まれていなかった。そしてこの言葉の深さを知らなかった。

1 母の体験

(1) 1月17日火曜日5時46分、阪神・淡路大震災発生

マンションの一階に住んでいた。家族は無事だった。まさか地震が来ると思っていなかった。タンスも倒れ、食器もすべて割れてしまった。地震について何の対策もしていなかったため、水もなく家から出てみると周りがガス漏れしていたためガス臭かった。危ないと感じ、近所の人達と一緒に近くの避難所の中学校に移動した。避難先の中学校は朝早かったせいか門が閉まっていたはいることができなかった。冬だったため寒いから待つこともできなかった。情報がなく、どうしていいかわからずに結局家に帰った。

少し時間がたち落ち着くと、勤務先に行った。その当時東灘区の総合病院の受け付けをしていた。焼けているところやつぶれているところを通して勤務先に行った。

(2) その後一週間

一週間の間、家に帰ることはできず病院にいた。勤務している間は家族とは連絡が取れなかった。入院患者だけでなく次から次に来る人の対応で病院はあふれかえっていた。今では病院に来た患者さんに色のついたリボンをつけたりしているが、その当時はなく、大変だった。患者さんが来ても先生などが少なく、看護師のひとが泊っている看護師寮がつぶれ、たくさんの方が亡くなった。人によって怪我の程度が様々で考え方もバラバラなため、そんなにたいした怪我でなくても大げさに言う人もいるし、なかなか大変な作業だった。そして何より、トイレがとても困った。水がなくても使う人が多くて、処理するのは本当に悲惨だった。病院なのにとっても不衛生だった。食糧は救援物資として自衛隊の方々がくれたので助かった。

また、お風呂を用意してくれたが、患者さんが優先のため、入らなかった。お風呂に入れたのは一週間後、友達の家に行き入れさせてもらった。仕事場に行くときは駅から歩いていけないといけなため、スニーカーの必要性を感じた。当時スニーカーを持っていなかったため、とても大変だった。いろいろなことをしたが必死であり覚えていない。身の回りの知り合いが家族を亡くしている人が多いため、震災についての話はしたことがない。

(3) 経験して感じたこと

まさかこんな地震が来るとは思っていなかった。水や食べ物の準備などを全くしていなく、事前に備える大切さを学んだ。経験していざというときにどうしたらいいかなどの対応の知識を頭にいれておく必要があると思った。また、防災について意識することの大切さを感じた。そのため、災害が起こる前からいざという時に備えて家族や身の回りの人と話し合い、防災についての知識や意識を高めていくことが大切だと感じた。生きていることだけで丸儲けだと身をもって感じたそう。

2 父の体験

(1) 震災直前・直後

当日、5時46分には起きていた。今思えば、関係あるかは分からないが1カ月前に鳥が住みついて、地震後にはいなくなったそう。地震はものすごい音と突き上げるような揺れが続いた。揺れはとても長く感じた。

地震の揺れが収まった後、会社に行った。会社を見に行ったら後、実家の様子を見に行ったら。電車などは動いておらず、バイクで移動した。会社に行くまでにバイクで火の中を走った。家は食器が全部壊れていた。そして、ドアも壊れていて、建物は全壊の状態だった。

地震が来るとは思っていなかったため、水や食料などの備蓄を全然していなかったため、大変だった。

家の水は止まっていたので近くの寺に水を貰いにいった。

(2) その後一週間

垂水の家から三宮の会社に勤務していた。会社では復旧と被災状況調査をした。会社での仕事内容は半分が仕事で半分が水汲みだった。なぜなら、トイレを流すには水が必要だったから。食料は助け合いでなんとかかなった。震災当時は車よりは自転車の方が使い勝手が良かったためとても売れているように感じた。自転車屋に自転車が全然なかったため驚いた。

(3) 経験して感じたこと・伝えていきたいこと

水・電気・ガスなどのライフラインがないと生活がとても困る。そして、なかったらどうしたらいいのかを考え、普段から当たり前に行っていることの大切さを感じた。家族と連絡がとれないときはとても寂しかったそうだ。

また、伝えたいことは、助け合いの大切さ「人はひとりでは生きていけない」ということだ。震災を通して改めて感じた。そして、いざというときにどうしたらいいのかを考える力。家族、友達を日ごろから大切にすること。非常時に備えて、日ごろから最低限の避難道具をそろえておくことが大切だと感じた。災害時のときは特に「あかん」「もうだめ」などの弱音を吐かず、気持ちで負けないことが大切だ。

3 お話を聞いた感想

僕は話を聞いて、災害を経験した方や今を生活している人はいろいろな過去を持ち、生活しているということを改めて感じた。僕は阪神・淡路大震災を経験していない。また、巨大地震など、身をもって感じていない。しかし、聞いたお話を語りつなぎ、教訓をいかして今後おこるかもしれない災害の被害を少なくすることはできると思う。僕が防災を学ぶ理由はそこにあるような気がした。防災を学んだ人が意見をいろいろなところに発信してほしい。また地域の交流で防災を広めていくことも大切だと思う。そのときに大切なのはたくさんの方の支えがあって活動に取り組むことができるということだ。普段の生活にも一人でできることには限りがある。地域の人、知り合いの人、家族が協力することが日常でも災害時にでも大切だと思う。日常生活から周りの人を大切にして、あいさつやほんの少しのコミュニケーションをとっていくことがいざという時に役に立ち、改めて大切さについて考えていくことができると思う。災害前からもしもの状態を考えていく必要があると思う。

話を聞いた中に災害時は人の性格がよくでるといっていた。災害時はパニックになり、家が壊れた人は自分の自由な空間がなく、ストレスも溜まりやすい。非日常的なことばかりで混乱するのは当たり前だと思う。そういうときに防災や心のケアを学んだ僕たちが誰かの役に立ていけるのではないかな。事前に過去の災害からの問題点をまとめておけば、次の災害に少しでも関連死を防げることができると思う。災害時にも平常時でも知識があるのとないのとでは全然違うということを感じた。僕は被災してストレスが溜まり、苦しんでいる人や寂しがっている人に寄り添ってられるような人になりたい。寄り添える人になるためには、自分をよく知ることが大切だと思う。災害時にもあわてずみんなをまとめていけるような人になりたい。また、被災した方々のところに行く前に迷惑がかからないような準備などをしていく必要があると思う。僕にできることは限りがある。だからこそ時間を無駄に使わないように考えて行動していくことがこれからも大切になってくると思う。

話を聞いて学んだことや疑問に思ったことなどがたくさんあった。一つは、避難所が開いていなかったということについてだ。災害時はいつ起こるかわからない。だからどんな時にでも適切な対応をとっていかないといけないと思う。避難所ならばもっと意識を高く持つ必要があると思う。阪神淡路での教訓を生かして、次の災害では住民を安全に避難してあげられるような避難所が増えてほしい。災害時にはどうやったら避難所をすぐに開けることができるのかを考える必要があると思う。

また、避難所だけでなく、家族との合流場所も考えていく必要があると思う。みんなが家にいるときに災害が起こるとは限らない。普段当たり前どこに居るかわかっているけれど、災害時はとても不安で怖くなると思う。事前に家族と話し合い、入れ違いにならないようにして、状況を把握しておくことが大切だと思う。家族の場所を把握しているだけでもとても安心して心に余裕ができると思う。

二つ目はトイレについてだ。お話を聞くなかでトイレが大変だったことがとても心に残った。災害時には水道が止まるため、水の量が限られている。そのため、一人一人が備えておく必要がある。水には飲料水と飲めない水があり、風呂の残り水を置いておくことも一つの防災だと思う。備えようとは思っていても、実際に実行することは難しい。僕は少しでも多くの人々が備えてくれるように地域の取り組みに参加し、発信していきたいと思う。伝えていく側も相手の心に届くようにしなければいけない。僕は分かりやすくありのままに伝えることが大切だと思う。また、普段当たり前にしていることも防災に繋がっていることを知らせていきたい。なぜ防災について興味を持ってくれない人がいるのかについて考えると、どうでもいいとか面倒くさいと思うからだと思う。一人一人が興味を持ってくれるには、地域の触れ合いの場がもっと必要だと思う。都会は特に近所の人たちとの触れ合いが少ない。もっと地域をまとめられるリーダーがいてほしい。僕は少しでも地域のリーダーになれるように日々の学習に取り組むと思う。

震災のお話を聞いて改めて感じたのは、人と人との繋がりの大切さだ。自分勝手な人も多いと思うけれど、災害時にも気持ちで負けずに必死で生きていく人たちはすごいと思った。僕が特に興味を持ったのは避難所の運営をしている人や、炊き出しをボランティアでしていた人たちだ。普通に生活することもできないのに誰かのために思いやることはなかなかできないと思う。「お互い様」という言葉はすごい言葉だと思うけれど、自分の体がぼろぼろになるまで無理をする人もいると思い、言葉はとても重くなる時もあることを学んだ。被災地に行くときには一つ一つの言葉を考えていかないといいと思うし、それは日常生活でも大切なことだと思う。何事にも頭の中で考えて相手の立場になって考えていくことが大切だ。

また、災害前から家族とは災害時にどこに集まるかを考えていることが大切だと思った。相手の普段から、何げないときに防災の話をして、ボランティアの話をして家族と防災について考えるたりすることが意識を高めていくことにつながっていくと思う。環境防災科は地域の交流に参加させてもらい、そのなかで防災を広めさせてもらっている。参加するたびに喜んでもらえたり、勉強になったといわれたりするのがとても嬉しい。特に子供たちは一生懸命に話を聞いてくれて家に帰ってもお母さんにお話をしてくれるので、防災の大切さが広まっていき、とてもいいと思う。「語り継ぐ」ということの大切さ、過去の悲しい思い、大変だったおもいを聞かせてもらい、未来の巨大地震が起こったときに少しでも多くの人々が防災に取り組んでもらえるような防災教育をしていきたいと思った。

題名の「生きているだけで丸儲け」だという言葉聞いた時、初めはそんなに深い言葉だとは思わなかった。しかし、お話を聞いているうちに、生きることの大切さ、身をもって経験したことを聞いて僕が今防災を勉強して過去の教訓を学んでいることは本当に大切に意味のあることなのだと思った。今回は父と母にお話を聞いたが、これを機にいろいろな知り合いの方のそれぞれの経験や思いを聞きたいと思った。そして、聞いたお話を自分なりにまとめて後世に分かりやすく伝えていけるような人になりたい。

最後に、今回のお話を聞いて今後の活動に心がけたいことは「助け合い」と「生きること」についてだ。いろいろなことができるのは生きているからで、自分が相手に防災を呼び掛けていてもまず自分がしなければ始まらないと思う。僕は今まで意識を高めようと相手に呼び掛けていながら自分は偉そうに言えるのかを不安に思っていた。特にそれを強く感じたのは小学生に防災について教えたときのことだ。小学生の児童はみんな知識もあって実際に防災グッズを用意していたりしている子が多くてとても僕の方が勉強になったことがいっぱいあった。そのときには、教える側も教えられる側も得られるものがたくさんあるものだと感じた。僕はまだまだ防災や、災害についての勉強不足だがこれからもっと環境防災科の訓練をいかして成長して行きたいと思っている。また、今勉強できているのは、たくさんの人の支えがあってこそだということを思い、忘れないようにして、今後も取り組んでいきたいと思う。

阪神淡路大震災

森下 清美

1 阪神淡路大震災

(1) 午前5時46分

地震が起きた時、母は会社に行く時間だったので起きて会社に行く準備をしていた。祖母は母の朝ごはんを作るためにリビングにいて、祖父は母を送るために一階の大広間にいたから大丈夫だった。祖母と祖父の寝室には高いタンスが置いてあったので、もし寝ていたらタンスの下敷きになっていた。

(2) 地震直後

すごい大きな揺れでびっくりしたが、すぐに兄弟の安否を確認し一階に降りて両親と母の祖母の安否を確認したようだ。リビングには、昔の大きな電子レンジが落ちていた。大きい食器棚などが多かったので、すぐに大広間に母親を連れて行った。電気がつかなかったため、母は外に出て原付バイクのライトで家の中を照らした。そして部屋の中のものが倒れたり壊れたりしていくのを呆然と見ていた。近所の人も次々に出てきて「大丈夫ですか？」と安否確認をした。そのときに隣の家の戸が開かなくて、中に閉じ込められていたので母の兄が助けに行って外に出てくることができた。

(3) そのあと

近所の人たちが外にでてきていて情報を知ろうと一緒にラジオを聞いていた。そしたら、近所の人たちが「雪が降ってきた」と言っていた。でもよく見たら雪ではなく灰だった。長田の灰が風に乗って雪が降っているかのように垂水まで来ていた。「長田の火事があんなにすごいことになっていたことは後から知った」と言っていた。

2 ライフライン

近所の方たちはガスと電気は早く復旧したけれど、水道は遅かったから水に困った。けれど、母の家はなぜか水道が止まらず使えていた。だから、母の家に水をくみにくる人がいたそうだ。公園の水道も使えたのでその公園にもたくさんの方が水をくみに来ていた。ガスの復旧は早かったのでお風呂にも困ることなく入れた。だから、家に帰ると知らないおじさんが、お風呂に入りに来ていたりしていた。水道は止まらなかったしガスと電気はすぐ復旧したから母の家はそんなに困らなかったと言っていた。

3 ボランティア

水道も電気もガスも使えていたので、避難所におにぎりを作って持って行った。ほかにも近所で集めた服を原付バイクで兄と届けに行っていた。そんな日が毎日続いていた。でも1週間もすれば支援物資が届いていたのでおにぎりなどが足りるようになった。だから、「ボランティアをして思ったのはあまり食べ物では困らないということだ。困るのは避難する場所」だと言っていた。いろんな県からたくさんの方がボランティアに来てくださったし、支援が早かった。母の友人は避難所に半年以上、ボランティアをしていた。子どもたちと遊んだりして、子どもから大人気だった。子どもたちはとても楽しそうにしていたのを母は見て、子どもたちのストレスは少なくなっているのだろうと思った。

4 母が経験・聞いた話

(1) 当時の彼氏の話

当時の彼氏のいとこが震災で亡くなってしまった。いとこ直接は会ったことはなかったけれど、亡くなったいとこを母は運んだ。いとこの母親は娘がなくなり、精神的に少しおかしくなっていた。娘がいないと毎日のように泣いたりし、娘の弟の話をあまり聞かない毎日だった。そして、娘の弟は「俺は生き残っているのにお母さんはお姉ちゃんばかりだった。僕が死んでお姉ちゃんが生き残っ

ていたらよかったのに」と言っていたそうだ。その話を直接聞いて、生き残った人の辛さ、苦しみを感じたと言っていた。

(2) すれ違い

子どもが亡くなって母親は立ち直ることができない。けれど、父親は立ち直ることができる。このことがきっかけで、すれ違って別れてしまう夫婦もたくさんいたそうだ。専業主婦はとくに立ち直れないそうだ。なぜ、母親が立ち直れないかという、母親は父親に比べて家にいる時間が長く子どもと接している時間が長い。だから家にいるといろんな思い出がよみがえってくるから、立ち直れない。

5 現在

(1) 19年たった今

「復興した復興したと言っている人も多いけれど、まだ終わっていない」と言っていた。家族を亡くした人、友達を亡くした人、教え子を亡くした人、がたくさんいる。街が復興したといっても19年前に戻ったわけでもない。10年経っても、20年経っても、30年経っても復興は終わらない。憎む相手がいないから辛いこの辛さに終わりが無い。

(2) 大切だと思うこと

家に非常持ち出し袋や水などを置いておくこと、家族で災害が起きたらどこに行くかを話すことも大切と言っていた。そして次の世代になぜ伝えるのが大切だと思う？と聞いてみると、それは戦争と一緒に忘れてはいけないからだと母も父も言っていた。だから風化させてはいけない。ただ伝えるだけ、聞くだけではない。伝えられた側が忘れては意味がないから伝えられた側（受け止める側）も大切だそうだ。だから、受け止める側は興味を持つことが大切だと思う。興味を持たないと頭に入ってこない。受け止める側も前もって調べるなどをして準備をすることが大切だ。起こってからちゃんと話を聞いておけばよかったと気づいては遅い。だから、受け止める側も調べて、話を聞いたときに忘れないようにし受け継いでいかなければいけない。そうでないと、せっかく今まで震災を経験した方が語り継いでくださったのに、次に災害が起こった時に生かすことができない。話聞いたことが意味なくなるからだ。語り継いでいる方の中にとっても辛い経験をしている方もいるかもしれない。でも大切だと思っているから次の世代に語り継いで入るはずだと思う。こうやって前もって話す側は準備をして語り継いでらっしゃるのだから、受け止める側も前もって準備をして聞くことが大切だと私は思う。と言っていた。

6 感想

(1) まず初めに…

阪神・淡路大震災が起きてからもうすぐ20年になる。東日本大震災のボランティア活動をしている先輩方を見て、私も舞子高校の環境防災科を志望した。阪神・淡路大震災をきっかけにできた環境防災科に通い始めて、震災の話を聞くようになった。少し話を聞いたことはあったけれど、両親にその当時のことをちゃんとした形で聞いたのは今回が初めてだった。父に話を聞いたとき「思い出したくない」と言ってほとんど話してくれなかった。父が思い出したくないことを初めて知った。語り継いでいくことが大切なことは父も思っているようだったが19年経った今でも思い出したくないと思っている人がいることを改めて感じた。

(2) 母の話を聞いて

話を聞いてまず初めに思ったことは、母の行動の速さに驚いた。地震が起こったあとすぐに、家族の安否確認をするのはすごいと思った。自分にできるかなと考えてみるとすぐ動ける自信がないと思った。震災の勉強をしているが、実際起きたら怖くて、家族の安否を確認して両親を安全な部屋に避難させる、迅速に判断ができる自信がない。だから、母の行動力はすごいと思った。

母に震災が起きたときどう思ったかとか、起きた後どう動いたかなどを聞くと少し笑えるような話を混ぜながら話してくれた。けれど、母が遺体を運んだ話と、なぜ次の世代に伝えていくことが大切なのか？という話をしているとき、母は真剣な顔で話をしてくれた。話を聞いたときは何も思わなか

ったけれど、今考えると笑えるような話を混ぜながらじゃないと辛くてしんどくなるのかもしれないと思った。父と同じように話したくないと思っていたのかもしれない。それか、私がしんどくなるのではないかと考えて話してくれたのかもしれない。

全部大切だと思うけれど、笑ってはいけないようなところは真剣に話してくれた母を見て、伝えていくことの大切さをすごく感じた。夏休みで母か父の震災体験と今後子どもにどう生きていってもらいたいかを書くような課題がある。今回、震災体験を聞いたときまず初めに母に「夏休みの課題のときに書いた内容覚えているか？」と聞かれた。私は正直覚えていなかった。そのときに母がなぜ、伝えることが大切なのかを話してくれた。そのとき母に、「話す側だけじゃなくて聴く側(受け止める側)が興味を持つことが大切。」という話を聞いて心に響いた。私はいつも聞いているようで聞いていないのかもしれないと感じた。外部講師の話でもレポート書き終わると正直覚えていないことが多い。私以外にも覚えていない人はいると思う。だからまず私の経験と一緒に受け止める側が興味を持って聞くことの大切さを伝えていきたいと思った。それから今までボランティアや外部講師、そして今回聞いた両親の話を語り継いでいきたいと思う。今回母と話をし語り継ぐことの大切さを改めて感じた。

(3) 南海トラフ地震

震災が起きたら私は最前線で動ける人になりたいと思っている。環境防災科に入るまでは、正直防災に全くと言ってもいいほど興味がなかった。防災訓練もめんどくさいと思っていた。けれど、環境防災科に入って防災訓練の大切さを学んだ。そして、将来防災にかかわる仕事に就きたいという気持ちが強くなった。私たち家族は共働きで小学1年生の妹と年少の弟がいる。平日に震災が起きるとみんなバラバラだし父は海辺でたぶん助からないと言っている。そして母は大阪だからなかなか帰って来られない。だから私が妹と弟を助けないといけない。自信がない自信がないとはいってられない。私が生きていく間にきっと南海トラフ地震はおこる。だから今できることをしたいと思う。まずは、家族で地震が起きたらどうするかを話し合う。普段からこのとき地震が起きたら自分はどう動くべきなのかをシミュレーションする事が大切だと授業で学んだ。だから、普段から考えるようにし、妹と弟を守る自分になりたいと思う。

(4) 将来の夢

私の将来の夢は警察官だ。もともと、誰かのために動ける、そして役に立てる仕事につきたいと思っていた。中学生のときから警察官という仕事に興味も持っていたし憧れももっていたが男の仕事というイメージが強かったので悩んでいた。そして中学の時に車で東北の被災地のために高校生がボランティア活動している姿を見て、私もあんな風になりたいと思い舞子高校、環境防災科を受験した。そして入学して「災害と人間」という授業で警察官の方のお話を聞かせていただいた。そのとき、被災地で活動した女性の警察官の方の話を聞いた。「もともと警察官という仕事は男の仕事だと思っていた。けれど被災地で被災者の話を聞いていたときにおばあさんが“女性の警察官がいて話しやすかったわ。ありがとう”と言ってくれてそのとき初めて警察官でよかったなと思った。」という話を聞いた。そして警察官になりたいという気持ちが強くなった。警察官になれば、誰かのために動ける、そして役に立てる仕事だし防災と関わることができるからだ。その後、警察官を退職された母親の上司の方のお話を聞かせていただいた。そのときも女性の警察官のやりがいを感じた話を聞いた。この2つの話を聞いて女性の私でもなにかできることがあるのではないかと考えたし、誰かに頼ってもらえる、誰かに私を必要としてもらえる警察官になりたいと思ったので、この時に警察官を目指す決心した。

(5) 警察官になったら

私が警察官になったら、もちろん災害現場に行かせていただき被災者の力になれるようなことはしたいと思っている。でも、災害現場に行かせていただくだけの防災じゃなくて地域ならではの防災を広げていきたいと思っている。私は、地域部の地域企画課か、生活安全部の安全企画課または、交通部につきたいと思っている。なぜ地域部の地域企画課かというと、私は舞子高校の環境防災科という学科に入学し3年間防災のことを学んできた。この3年間で学んできたことを生かしていきたいと思っているからだ。地域部の地域企画課では地域の方たちとたくさん関わって地域との交流を大切にしていきたいと思っている。そして、私と同世代や若い人たちには私が高校生の時に聞かせていただい

た話や授業で学んできたことを語り継いでいきたいと思っている。そして、年上の方には、震災当時のことなどを聞かせてもらい学びながら地域でできる防災を考えていきたい。生活安全部の安全企画課では、ストーカーやDV事犯が増えているので、その被害にあった人たちの心の傷が少しでもなくなるような心のケアができる警察官になりたいと思っている。ストーカーやDV事犯が増えているのと同時に交通事故が増えている。なので、交通部では子どもたちに交通安全を守ってもらえるように呼びかけて、少しでも悲しい思いをする人が減るようにしていきたいと思っている。

(6) 最後に

お母さん、お父さん、話をしてくれてありがとう。

僕の家族と阪神淡路大震災

森本 圭彦

1 僕の家族

その時、当たり前だが僕はまだ生まれていない。家族は父と母と当時生後3か月の姉の三人で北区にあるマンションに住んでいた。父は当時三宮で電気製品販売の仕事をしており、母は専業主婦で姉の面倒をずっと見ていたらしい。震災前日は、たまたま須磨区の母の実家に行っていたが、当日朝は北区の自宅に戻っていた。もし、母の実家に泊まっていたら、大変な事になっていたそうだ。あの1・17に起こった大震災によって神戸の街並み、生活の変化の様子。この話は僕の母親から聞いた話である。

2 震災当日

(1) 震災直後

朝突然、下から突き上げるように床が揺れ、地震だとすぐに分かったらしい。たんすのすぐそばで寝ていたため、上に積んでいた物が落ちてきた。家の中にある食器棚・本棚の中身が床にぶちまけられ、また水槽の水がこぼれ家の中がめちゃくちゃになった。その直後に水道・ガス・電気といったすべてのライフラインがストップし、もちろんテレビも見ることができず状況が確認できなかった。電話で親や友人に連絡を取ろうと試みるが電話もつながらなく、とりあえず家の中は危険だと思い父と母と姉で外に避難した。のどが渴いたので自動販売機で飲み物を買おうとしたが動かず、飲み水を確保することができなかった。そしてまだ早朝だったため家に戻り、割れた食器の片づけや家の修復作業をして昼まで過ごした。今までの思い出のコップや写真立てなどが割れてしまいとても悲しかった。災害は人の思い出までも奪っていく。

(2) 昼

お昼前になったら最寄り駅の鈴蘭台駅に向かった。理由は電車で父の実家がある谷上駅へ行こうとしたからである。しかし震災の影響で電車はすべてストップしていた。動く気配もなかったので歩いて谷上まで向かった。3か月の姉がいた為、オムツや粉ミルクといったベビー用品を持ち、父と母の生活必需品をかばんに詰めてとても大変な移動をした。他にもたくさんの人が徒歩で移動していたのを覚えている。お店もすべて閉まっていたが味が悪かったといっていた。約2時間重たい荷物を持って歩き続けようやく谷上までたどり着いた。谷上の実家にたどり着くと電気・水道・ガスがすべて動いていてテレビをその日初めて見た。その時は震災関連のニュースがずっと流れていて、その時初めて事の重大さを感じた。高取のほうで火災が起こっていて長田の町並みが火の海へと化していた。テレビからみる神戸の街並みが今まで見たことがない光景でこれからいったいどうなるのか不安で仕方なかったらしい。

そしてその日は疲れがたまっており8時ごろには寝てしまった。

(3) 翌日

翌日、スーパーが開いていたため姉を実家に置いて母は、買い物に出かけることにした。だが、品ぞろえが悪く満足いくほどの買い物ができず、必要最低限の水と簡単に食べられるものしか買うことができなかった。買うのにもレジには長蛇の列ができており一苦労した。次に銀行に行きATMでお金をおろしに行った。しかしそこにもすごい列ができていてお金をおろすだけで時間がかかった。何をやるにおいても時間がかかると感じたそうだ。そしてその日から徐々に電話回線が回復していき、親、友人の安否確認ができるようになった。幸い父方の身内にも、母方の身内にも犠牲者はおらず安心した。

ただ、母の実家の方は、なかなか水道が復旧しなかった為、しばらくの間 お風呂も入れず、飲み

水確保の為、近くの小学校まで水をもらいに行く、電気がストップしているのでエレベーターが使えず8階に住居があるため階段での運搬でかなり大変だったそうだ。

父は仕事場がある三宮に向かって様子を見に行った。三宮の町は被害が壊滅的で地獄絵図だといった。あちこちでビルが倒壊していて、あるスーパーでは商品がすべて破損して地面に転がっていた。売り物になるものはもうほとんどなかった。三宮が復旧復興するまでは相当時間がかかるだろうと思った。テレビでも三宮の映像はよく流れていて、その被害の大きさ、悲惨さはよくわかるものだった。

谷上の実家から鈴蘭台の家に戻れたのは1週間後。帰るころには電車の運行も再開していた。それでも帰ってからも不便なことが続いた。

(4) 震災数日後

父の勤めていた会社の三宮店は建物の半倒壊で使えずしばらくの間閉店することになり、鈴蘭台店に移動になったり、ハーバーランド店に移動になったりで、ころころ勤務先が変わり、仕事内容も震災前とは少し違うことに違和感を覚えたらしい。今まで一緒に仕事をしてきたチームとも分かれて環境ガラッと変わってしまった。今までの人とのつながりでさえも地震は断ち切ってしまうのだなとますます地震が憎くなった。通勤も電車が復旧しているところと、していないところがあり、かなり疲労がたまり疲れていたそうだ。通勤スタイルも革靴ではなく、運動靴を履き、かばんも両手が空くリュックにするなど変化した。日常生活は、スーパーの物量もかなり戻っていたが、品切れ商品もかなりあり3か月の姉の赤ちゃん用品の欠品で困ったそうだ。大人なら少しは我慢出来るが、子供はどうしようもないからだ。銀行・郵便局などは震災直後のような込み合いは解消され、普段の業務内容になり何時間もかかることはなくなった。震災前は近所のつながりはないとは言わないが、震災後の方がより会話を交わすようになり、困ったことがあれば助け合うようになり、前より知り合いが多くなったなど悪いことばかりではなく、いいこともあった。そのころからボランティアといっているところから神戸に震災の後片付けなどのお手伝いといったことをしてくれる人が増えた。そんなニュースを見て人のありがたみを実感したといっていた。

感想

最初にも書いたがこの話は母から聞いた。前々から阪神淡路大震災はすごい数の被害を出したというのは勉強して知っていた。また僕たちの為に外部講師で来てくださった先生方から話しも聞いていたのでもうほとんど知ったつもりでもいた。しかし、いつ何処で何時に起こったか、被害者の数はどれほどなものかなどを知っていただけで、実際にどんなに残酷でどれほど過酷なものだったのかなんて僕は何も知らなかった。何も知らないあやふやな時、この『語り継ぐ』で母の話を聞いた。実際に聞いてみて自分の身内の話は他人に聞いた話しより実に鮮明に、そして生々しく感じた。

僕は自分の親から初めてこうしてじっくりと被災体験を聞いた。今まで生きてきた中でこういった話を聞く機会がなかったのもあるが、僕が被災体験を聞くのがイヤだったというのも本音である。なぜイヤだったのかというと、自分には聞く覚悟がなかったからである。聞いても自分で処理できる気がしない。母もこういった昔のしんどかった話は思い出したくもないだろう。語り継ぐ大事さも知らず、そんなことを考えて自分からは決して話を聞こうとしなかった。そんな生半可な考えで今まで2年間環境防災科で防災学習をしていた。これは本当に恥じるべきことで、僕は弱い人間だ。過去の災害の反省点を生かして、未来の災害に備える。そうして過去の災害を風化させないようにする。学校で習ったことだが僕自身それを実践することが出来ていなかった。そうして3年目になった今、卒業研究で『語り継ぐ』という機会をもらった。この機会に自分の親の被災体験に真剣に向き合ってみようと思うことが出来た。3年目にして本当に防災に向き合うことが出来たと思った。

実際に話を聞いて、今安全に生活できている幸せ。あったかいごはんが何不自由なく食べられること。毎日帰る家があり家族がみんないること。リラックスしながらゆっくり眠れること。全て当たり前のよう感じていたがこれこそが本当の幸せなのだと思うことが出来た。また同時に、これから先必ず起こるとされている南海トラフ大地震への恐怖がこみ上げてきた。阪神淡路大震災が起こってから19年。神戸は一人ひとりが助け合い、支えあいながら復旧して、やっと復興する事が出来た。しかし、

また南海トラフ地震で今まで頑張って復興してきた努力が水の泡になってしまうのかなと思い人間の無力ささえも感じた。つい最近の政府の発表で、自分の住んでいる兵庫県は最大で約 29100 人の方が亡くなってしまおうとっている。しかし、人々が速やかに避難し、しっかり地震に対応すればその被害者をなんと約 400 人にまで減らすことが出来る。そこまで被害者を減らすにはやはり過去の災害から学び語り継ぎ、教訓を生かす。このことが必要不可欠なのだと思います。被害者は 1 人でも少ない方がいいし、誰にも悲しんで欲しくない。被害者 400 人でも多い方だ。限りなく 0 に近い数の犠牲者しか出て欲しくない。きれいごとだといわれるかもしれないが僕は本気でそう思う。過去の災害をこうして語り継ぐ。それこそが災害に対する備えの大きな一歩なのだと思います。

母が僕に教えてくれたこの話で印象に残った言葉は『震災前より近所付き合いが増えて、知り合いが増えた。震災は悪いことだけではなくいいこともつれてきてくれた。』という母らしいポジティブな言葉である。僕は今まで防災学習をしてきた中で災害が起こっていいこともあったという話を聞いたことがない。僕が覚えていないだけかもしれないが、聞いた覚えがない。僕の家族は知り合いの方が亡くなってしまったとか、大きな被害が出ていないからというのものもあるかもしれないが、災害をこうしてプラス思考で考えていくことはこれからも大切だと思う。プラスに考えることによって気持ちの切り替えが出来、いつまでも悩まないこれからまた頑張ろうと思えることが出来るからだ。こういう大きな考え方を出来る母はとても偉大だなと思うことが出来た。僕もこれから先プラス思考でいこうと思った。

また母は僕たち災害を経験していない世代の私たちに伝えたいことがあると言ってくれた。

1 つ目は日ごろから災害について備える。まだ災害が起こっていない平常期に行うことで、たとえば、非常用持ち出し袋を予め準備しておくことや、家具を固定しておくことや、水を蓄えておくなどといった実際に備えるものがある。そして、近所の人との中を密接にしておく、災害に対して関心を持ち勉強し防災力を高めておくなどである。ここに記した全てのことは実際に阪神淡路大震災の時母が困ったと言っていたことである。のどが渴いても水が出ない。食べ物もろくにない。家は家具を固定していなかった為食器はほとんど割れてタンスも棚も倒れていた。阪神淡路大震災が起こった時はまだ世間は防災に対して意識がないに等しいほどしかなく、防災対策や備えることなどまったくしておらず本当に苦労したと言っていた。神戸で地震なんて起こるはずがないとまで言われていた時期であり、その慢心状態のときにあの巨大地震が兵庫県を襲った。このようにあのころは知識が何もなくだったので被害が大きくなり、そして長引いた。今度発生するとされている南海トラフ大地震は規模が桁違いに大きい。だが今は世間でも防災が広まっていて被害者を極限まで減らす事だって出来る。自分たちを生かすも殺すも自分たち自身だということだ。だから今出来る最大限の備えをして災害に立ち向かって欲しい。そして被害者を出来るだけ少なくして欲しいといった。

2 つ目は家族の絆を深めておくこと。災害時、最終的に頼れるのは家族だと思う。自分のことを一番知ってくれているのも家族。自分を一番支えてくれるのも家族。喧嘩などしてしまうこともあるが、思い出があり一緒に居て安心するのが家族。そういった絆が絶対に災害時に助けになると母は教えてくれた。だから災害が起こったときにどこに集合してどこの避難所に向かうかや各々と連絡が取れるようにしておくことや、災害時伝言ダイヤルの登録の仕方を知っておくなど家族と一緒に災害対策を進めていくことが一番大事なのだと思います。これからは家族と学校で習った知識を共有しながら、自分たちの家の防災対策を進めていくことにしよう。そして災害に強い家族になりたい。今回の『語り継ぐ』を通して阪神淡路大震災の恐ろしさ、反省点を自分の親の体験を通して知ることが出来た。初めて親の被災体験も聞くことが出来た。今の自分ならこの体験を活かし次の震災への備えに出来ると思う。だからこの体験をしっかりと僕のまた次の世代へと語りついでいこうと思う。僕は災害時に一人でも多くの方の命を救う為に、市民のリーダーになる為に環境防災科で防災を勉強している。今まで 2 年間防災に対して本気になることができていなかった。しかし、これをきっかけにこれからはもっとボランティアにも積極的に参加させていただこうと思うことが出来た。僕は環境防災科 3 年生。防災に自分からは決して参加せず、最上級生になってしまった。こんなことではいけないとも思った。最上級生に恥じないよう意識を高めて 1 つ 1 つの授業をもっと積極的に取り組み、ま

た自分自身の防災力も高め環境防災科の名に恥じないような舞子高校生になろう。そして残りの数ヶ月悔いの残らないような高校生活を送っていかれたらいいと思う。これから先変わるも変わらないも自分次第。僕は変わっていく。この貴重な被災体験を教えてくれた親と、この機会を与えてくれた学校また卒業研究『語り継ぐ』に感謝している。本当にありがとうございました。

震災がおしえてくれたもの

山崎 春香

私は震災体験を姫路市内に住んでいた母と、神戸市垂水区に住んでいた祖父母の2人に話を聞いた。揺れが激しかったところと、まだ揺れが少なかったところで何が違うのか。そして、何が必要だったか。私は比較して2つのことを語り継ごうと思った。

1 祖父母

(1) 震災前日・当日

震災前日、母は当時結婚して、姫路市内に父と暮らしていたがその日は祖父母の家に泊まっていた。母は2階で就寝していた。その次の日母はぎりぎりまでもう1泊するか悩んでいた。しかし、姫路の家へ帰ったそうだ。その日は成人の日で、祖父は仕事が休みで二人で家でのんびりしてそしていつも通りに眠りについた。その頃から祖父母は早起きだったらしく4時には起床していたそうだ。寒かったので灯油ストーブをつけていつも通りに朝ごはん・弁当を祖母は作り祖父は新聞を読んでいた。

(2) 地震発生

地震が発生した。母はつけていた灯油ストーブのことをとっさに思い出し、すぐに消しに行った。祖父は最初揺れていることに気付かなかった。最初は小さな揺れで急にグラッと揺れ、大きな揺れに変わった。二人とも無事であったが家はめっちゃくちゃであった。祖母は2階へ上った。母が前日に就寝していた部屋では、母が寝ていたところに電灯が落ちてきていた。近所の家はほとんど全壊であった。しかし、祖母の家は半壊で済んだ。揺れがおさまり祖父母はすぐに家の目の前の垂水中学校に避難した。

(3) 避難

30分ほどで祖父母たちは避難したが、垂水中学校は大勢の人であふれていた。そのため、垂水中学校の上にある千代ヶ丘小学校へ避難してくださいと指示がありそっちへ移った。しばらくそこで避難生活を送ることになる。垂水中学校も千代ヶ丘小学校も大勢の人であふれかえっていた。寝るのにも一苦労で、とてもその生活は苦しかった。ご飯は冷たいおにぎりばかり、トイレも極力行かないようにしていた。千代ヶ丘小学校で1週間ほど避難した頃、祖父がインフルエンザにかかった。千代ヶ丘小学校に避難していた大勢の人がインフルエンザにかかっていたという。すぐに祖母は下の徳洲会病院へ祖父を連れて行った。少しでもおそかったら祖父はもっとひどくなっていたかもしれない。すぐに処置してもらい数日で良くなった。その頃から祖母は避難所の衛生管理が怖いと感じていた。

(4) 家

避難している間も祖母は時々自分の家を見に行っていた。隣近所の家は、ほとんど全壊。今では草が生えて面影もない。なぜそんな中で祖母たちの家だけ半壊で済んだのか。それは祖母の家が震災が起こる前、家を増築していて家が強くなっていた。だから近所の家よりも強くて半壊で済んだという。もし、増築していなかったら、きっと全壊で助かってなかったかもしれないねと祖母は言った。これもまた運命だと思う。そんな時、祖父の会社から、芦屋の社宅に家が回復するまでの間住んで大丈夫だという連絡があり、荷物をまとめて社宅へ移った。それから1年はずっとその社宅に住んでいたそうだ。母から聞くとその社宅はとても狭かったそうだが、避難所よりはよっぽど良いと言っていた。社宅に住んでいて祖母は何度も家へ帰りたいたいと思いつつ半壊の家を見に行ったりしていた。その半壊の家は後日大工さんに頼んで直してもらった。

(5) 震災を経て

家の半壊も回復し、家へ住み本当にいつも通りの生活を取り戻すにはしばらく時間がかかったらしい。家の隣に住んでいた方の家も全壊で今では草がボーボーに生えていてとても昔家があったとは思えないくらいになっている。祖母は震災を受けてたくさんの苦労をしたと話した。でも、そのたくさ

んの苦労があったからこそ今このいつもの生活が送れていることに感謝して毎日生きているよと言っていた。『これから南海地震が将来来るかもしれないって言われているね』と話す祖母は、阪神淡路の経験を活かして頑張って長生きするように逃げよ、また防災のことを教えてねと言ってくれた。祖父は今入院していて話を聞くことはできなかったけど祖父も祖母も私が環境防災科に入ってから、またさらに防災のことを考えるようになったよと言ってくれてすこしでも誰かの防災を考えてもらうきっかけになっているんだと考えたらうれしかった。そして、逃げると言ってくれたことが一番うれしかった。私が中学生の時は、「もうばあちゃんはいいい年や、地震が来て家が壊れそうになってもここおるよ。」と言っていたのでどうしたら助かるように逃げられるかなと思っていたので少しでも考えを変えてくれたことが嬉しかった。

2 母

(1) 震災前日・震災当日

母は当時結婚し、父と2人で姫路市内のアパートに住んでいた。私はまだお腹の中にもいなかった。母は前日、実家へ帰り泊まっていた。父はいつも通り会社へ。震災当日は成人の日だったから母と父はずっと会社でお互い働き詰めだったので休んでいた。

(2) 地震発生

母と父は寝ていたところを揺れで起きた。しかし姫路市内は、神戸ほど揺れは少なかったので部屋は少し散らかる程度で済んだ。二人の両親ともに垂水区に住んでいるので心配だった。しかし、母方の祖父母宅には電話が奇跡的に繋がり安否確認ができた。父方の祖父母の安否確認のことを母は、あまりはっきりとは覚えていないと言っていた。けれど朝までにはわかっていたようだ。

(3) 避難してきた母の姉

翌朝、二人の家にある家族が避難してきた。母の姉とその旦那さんであった。二人は地震で家がめちゃくちゃになってしまったため、少しの間避難させてほしいと家へやってきた。しばらくの間は4人で生活していた。母の姉はその頃私のいところを妊娠していたため、避難所では風邪の感染にかかったり、いろいろな人に迷惑をかけたくない・生活しやすい環境がいいと避難してきた。母と父は被害をあまり受けていなかった。炊飯器が落ちて壊れてしまったり、部屋が少し散らかった程度で済んだ。

(4) 会社

震災があつてしばらくしてから、母は須磨のほうに会社があつたのでそこに向かわなければいけなくていつも父の運転で行っていたが、渋滞がひどく、母は山陽電車で向かった。その山陽電車でいくのも大変でいつもみている会社の風景とは全く違って須磨は変わり果てていたと言っていた。

(5) 母から見た祖父母

母と父は垂水中学校の体育館に避難している祖母と祖父にたびたび会いに行っていた。母と父は姫路から父の車で向かっていたので渋滞には合わなかったようだ。体育館で寒そうに二人で支え合っているのを見て母は悲しかったと言っていた。垂水のほうは物資も少なかったそうでとても祖母たちは困っていた。そんな中で母の知り合いのひとが大阪からバイクにお水や物資をリュックに詰めて10万円を持って垂水に支援へ来た。母はそんな知り合いの姿に感動した。

(6) 震災を経て

母はあまり被災経験がないので受けた母の姿を見てつらかったし悲しかった。二度と母や父をそんな経験させたくないしもうあんなことはあってほしくないと言っていた。でもきっと南海トラフがきても垂水は瀬戸内海だし津波は来ないだろうし大丈夫やろとも言っていた。父も依然同じことを言っていた。母の姉はちゃんと阪神淡路大震災で経験したことを思い出して、防災は力入れているよと言っていた。

・被害の大きさと比例する防災意識

母と祖母の2つの震災体験を聞いて、すごく大きなものを感じた。被害をたくさん受けた祖母は、「今度の南海トラフがきてもちゃんと逃げよ」と言っていた。一方で被害をあまり受けていない母

は、「大丈夫やって。瀬戸内海やし、津波なんか来一へんよ、来てもマンションやから助かるって」と言われた。正直かなりショックだった。これまで3年間環境防災科で防災を学んできてたくさん母に言ってもそのような返答だった。何も変わっていなかった。私がどれだけ言っても母は大丈夫という。私の伝え方が不足しているのかもしれない。けれどこのまま南海トラフが来てしまったらきっと母は逃げないだろうし、防災に対して意識が低いままになってしまう。もし逃げないで津波にのまれてしまったら。そう考えることすらも嫌で母には絶対助かってもらいたいし、私が環境防災科に入った理由の一つでもある大切な人を守ることが出来ない。しかしどうしたら母は逃げてくれるのか。津波や地震の場合によっては家にいたほうが安全だという場合もある。けれど逃げなければいけない状況が9割だと私は考えている。私の父は単身赴任で今イギリスにいる。だから、もしこのまま震災が起こったら2人で助け合わないといけない。もし私と母が別々だったら、母のことはだれが守るのか。私と母と一緒にいたら手を引っ張ってでも母をおぶってでも避難することが出来る。母にはわかってもらいたい。この語り継ぐを、読んで逃げるようになってほしい、私の強い思いをわかってほしい。

しかし、今回被害が少ない・多いで比べてみたがやはりこの兵庫県でも阪神淡路大震災で生き延びたし大丈夫でしょという母と同じような考えの人は少なくはないと思う。母だけに限らず『大丈夫とってる』と言っている人は何人か見てきた。阪神淡路大震災の時、被害はなかったし、生き延びたし、南海トラフなんて大丈夫でしょ、この言葉を聞くたび自分はなんのために環境防災科で防災を学んでいるかわからなくなる。その言葉を聞いてちゃんとはっきり言えずそうなのかなと流してしまう自分が本当に情けない。こんな風に言っている人がいて本当に津波が来たとき自分たちがやっていることで一人でも多くの人を助けられるのか。でも私たち環境防災科が率先して防災を伝えていかないとその1人すらも助からない。

防災をわかってくれない人たちはまだまだたくさんいる。けれど、きっとその人もわかってくれるような防災をしていきたいと私はこの語り継ぐを通して思った。自分の大切な人を守るため。その大切な人の周りの人の力にもなるため。みんなで生き延びていくため、そう思った。「この神戸をまた悲しい思いでいっぱいさせたくない。」この思いが自分の中で一番強い。今の自分がこんなに当たり前の生活を何ごともなく過ごしているのは阪神淡路大震災の復興をここまでしてくれた神戸の人たちのおかげだと思う。その人たちのためにも、絶対にこの神戸の街を守りたいし、悲しませたくない。だから、ちっぽけな力かもしれないけれど自分ができることを限界までしていくべきだと感じた。恩返しをしていかなければいけないし、次は私たちが力になる番だと思います。震災の時に市民のリーダーになって率先していける人になりたい。そして、もし南海トラフが起きてしまって悲しい思いをしている人がいたら、私はそばにいてあげたい。祖母はこの話を聞いた際にこんなことも言っていた。「あのころは今みたいに話を聞いてくれる人も少なかったからねえ」と。その言葉を聞いて私ができることではないだろうかと感じた。私は将来ドックセラピーのトレーナーになりたいと考えている。これからの自分の防災に対する意識も、夢への一歩もすべて「寄り添う」ことが大切だと思う。

私はこの3年間その心のケアをしっかりしていきたいと思って、頑張ってきた。被災者の方の心のケアをどうしていったらいいのか。きっと将来その職業に就くことができれば被災地へ行く機会が出来るしその時にしっかりとケアをしていけるように今から勉強して防災も広めていきたいという考えを持って過ごしてきた。私は防災を広めていくうえで、みんなで寄り添っていかなければいけないということも広げていきたいと思っている。阪神淡路大震災の時自分の体験を話せない人がいたということ先輩から聞いてもっとこのように話し相手になったり、話を聞くだけで人の役に立てると思った。もし地震が起きて避難所などでストレスや不安を抱えている人がいたら私は話を聞いてあげたり、そばにいてあげたいと思う。この寄り添っていかなければいけないということをもっともっと広めていかなければいけないと思う。語り継いでいくという事にも関係してくると思う。そして、

最近ニュースで見た南海トラフの被害予想。約2万9000人と言われていた。私は驚いた。けれど減災で400人に減ることが出来る。私たち若い学生や大人が中心となって減災を今、していくべきだと強く感じた。環境防災科で3年間積み上げてきたものを発揮してこれからもっと地域などに密着して防災を広げていきたい。私のこれからの目標は「地震・津波大丈夫だって」と軽く考えている人を一

人でも多く減らすことだ。きっと時間はかかるだろうし難しい時もあるかもしれない。けれどそこでくじけたら私が3年間やってきたことがもったいないし、水の泡だから絶対にこの目標を遂げたい。考えを変えられる人になりたい。そう思う。

そして毎日、この神戸の方々に感謝して生きていくことが大切だと感じた。私たち環境防災科は普段から防災に触れて、考えているが環境防災科ではない普通科の高校生などは私たちのように日常の中で考えている人は少ないと思う。そんな人たちも私たちのように防災に少しでも興味を持ってくれるようになってほしい。いつも震災の特集や、震災関連のニュースをしているのをふと見ると、阪神淡路大震災の時の火事の映像が流れることがあります。自分はずっとそれを見てこんなに大変なことになっているのに今ではあんなにきれいなんだなと感じることが多い。そう思わせてくれているのは神戸を復興させてくれた被災した方やその時に動いてくれた人に感謝して今を生きていかないといけないと感じる。その復興させてくれた人たちは今でも防災を広めていたり、活動をしていて本当に自分も見習わないといけないと感じた。授業で震災障害者の方のお話を見る機会がありました。震災障害者とは、震災が原因で障害を持った人のことです。その方のお話で「東日本大震災で自分たちのような震災障害者の方が心に、つらかったことや生活での不安など抱えている人がいるのではないのか、そういうひとたちで集まって自分たちのように愚痴を言って少しでも気持ちを軽くできるような空間を作ってもらおうように訴えていく」とおっしゃっているのを見て、本当に素晴らしいし、自分もあの人のようになっていかないといけないと感じた。

私は一番これからしたいと思っているのはさっきも述べた心のケアももちろんそうだが、子供たちに防災を広めていくこともしていきたいと思っている。今の小学生や中学生や自分より下の子はもちろん震災を体験していないわけだから詳しくないだろうし防災に関しても意識が低いのではないのかと思う。私はドッグセラピーのトレーナーになってももちろん今行われている被災地での活動や病院や老人ホームなどへ訪問することもしていきながら、小学校や地域の小さな子を集めたイベントなどに行ってワンちゃんと共に環境防災科で学んだことや防災を広めていきたいと思っている。少しでも「地震・津波なんて大丈夫やって」と言っている人を減らすため。いざ地震が起きた時被害を減らすために。きっとこんな簡単に言っているかもしれないけれどすごく難しいことだろうし、わかってくれない人もいると思う。でもそれでもくじけずに私たちが頑張っていくと南海トラフの2万9000人という文字は減らないと思う。だからその2万9000人という数字を少しでも減らすために自分は活動していきたいです。最後に、お母さん。私が3年間環境防災科で学んだことをこれからもっとちゃんと伝えていくのでどうか地震が起きた時、津波が来るとなったとき安全に逃げて下さい。私は母が大丈夫だよと言っていても引きずってでも一緒に逃げます。お父さん、外国の防災などはあまり詳しくないけれど逃げるということは同じです。逃げて下さい。そして無事に日本に帰ってきてください。おじいちゃん・おばあちゃん、貴重な経験を話してくれてありがとうございました。そして私にちゃんと逃げるよと言ってくれてうれしかったです。これからもっと頑張っていくので見ていて下さい。最後に。今こうして幸せに暮らしていて、防災を学ばせてくれて本当にありがとうございます。

語り継ぐ

吉岡 麻衣

1 父と母の震災体験

(1) 震災発生前

父と母は当時、須磨海浜水族園から5分ほどの4階建てマンションの4階に住んでいた。母は震災を経験するまで、神戸は自然災害が少なく、地震が起こるなど夢にも思っていなかった。暮らしやすい土地で一生住むにはいい所だと思っていた。震災が起こる2年前の平成5年7月に、北海道の奥尻島でマグニチュード7.8の大地震と大津波があり、テレビで見ながら大変だなあと他人事のように思っていた。前年の12月末に「24時間風呂」という1日中お風呂を沸かすことができる機械を購入した。そのため浴槽にはいつも3分の2ぐらい水を張っていた。阪神淡路大震災が起きる前日の16日の夕方6時半ごろ震度3の地震があり、マンションの4階は大きく揺れたような気がした。この日は朝から父が出かけていて母は自宅に一人でいたから怖かった。嫌な予感がした。しかし神戸には地震は絶対に起きないと信じ込んでいたから、大丈夫だろうと軽い気持ちでいた。でも心のどこかで不安は拭えなかった。

(2) 震災発生

就寝中、「ゴー」という音が聞こえたと思ったらいきなり突き上げるような激しい揺れが来た。台所から「ガシャンガシャン」と食器棚の食器が割れる音がした。最初はマンションの下の階でガス爆発でも起きたのかと思ったが、途中で地震だと気付いた。数秒後家具が倒れだし、寝室にあった整理たンスの上段が水平に飛び、向かいの壁に衝突し父の頭に落ちてきた。

洋服たんすは扉が開き、支え棒のような状態で転倒は免れた。母は父が覆いかぶさってくれていたおかげで無事だった。食器棚も上段は吹き飛んでいた。中に入っていたガラスのものは全部割れて部屋中に飛び散っていた。そのため裸足では玄関に向かえる状況ではなかった。外に電子レンジも落ちて壊れていた。簡単には開かないはずの冷蔵庫の扉や冷凍庫の引き出しが全開していた。浴槽の水が4分の1ぐらいまで減っており、お風呂の天井が濡れていた。マンションは倒壊しなかった。前日に焼いていたクッキーや冷蔵庫にあったジャムを食べた。電気が止まっていたから、真っ暗だった。ベランダに出て下を見下ろすと黄色の土けむりが漂っていた。海の方を見ると水族園の明かりがすべて消え、非常灯のみになっていた。沖合の船の明かりと紀伊半島(大阪)の明かりが見えた。周りは真っ暗で何の音もしなかった。1分後ぐらいから「きゃー！助けてー！」と悲鳴が聞こえてきたがとにかく真っ暗で外に出ることができなかった。そのまま明るくなるのを待った。

明るくなってからベランダのサンダルを履いて外へ出た。辺り一面ガス臭く、人が数人外に出ているがとにかく静かだった。呆然としていた。近所の古い木造家屋が数軒倒壊したり傾いたりしていた。マンションを確認すると、目立った損傷は無かったが建物ごと5cmほど動いて亀裂が入っていた。その影響で水道タンクとポンプがちぎれたため、水が出なくなった。ときどき、また「ゴー」という地鳴りとともに余震がきた。外で聞く地鳴りはとても不気味だった。車を自宅から少し離れた駐車場に置いていたので見に行ったところ、多少キズが付いていたが車は無事だった。しかし駐車場の向かいの家が完全に倒壊し道に流れ出てきていたため、車を出すことは不可能だった。

父は自宅の方に停めていたスクーターで近所の様子を見て回った。東に向かうと阪神高速道路の柱が挫屈しておりコンクリートが割れ鉄骨が見えていた。西に向かうとJRの普通電車が踏切の上で脱線していた。なぜか踏切の警報機は作動しており、カンカンと鳴っていた。木造の模型屋(須磨模型)から火が出ていた。消防車が1台いたが消火活動はしていなかった。さらに西に向かうと塩屋駅前の家屋が数軒倒壊しており、国道は通れなくなっていた。

自宅に戻り、寒さ対策のためスキーウェア等を着込んで家の片づけをしていると、電話が鳴った。

市内電話は通じていた。携帯電話を持っていたが、それは圏外だった（原因は基地局の電源喪失）。

昼頃になり、食料の確保と思ったが、近所では不可能であり、東の方（長田方面）は既に黒い煙が上がっていたため、西に向かった。塩屋の道路は歩行者と二輪車は通れたので明石に向かった。明石駅前のスーパーには大量の支援物資が来ていたがトラックが通れないため神戸に運ぶことができないようだった。買い物を済ませ須磨まで戻ったところ、長田方面の火災が大きくなっており、東側全体が煙の壁のようになっていた。

翌日、長田方面に向かった。辺り一面焼け野原の地域があった。国道沿いの建物はまだ燃えていた。国道の交差点には何本もの消火ホースが横切っていた。携帯は昼頃につながった。

友人から石油ストーブを借り、暖房と明かりが手に入った。しかし自宅の近所では灯油の確保が難しく、スクーターで名谷方面まで灯油を買いに行った。電気がくるまでは暗くなると何もできないからスキーウェアや毛布にくるまって寝た。

19日に父は勤務先の神戸支店（ハーバーランド）から復旧に行くという連絡が入り、向かった。国道は走行できたが、阪神高速の柱はすべて挫折し、傾いており2号線の高架も一部橋げたがずれていた。神戸支店は高層ビルの最上階であり、頻繁に余震がある状態だった。そこから使えるものを運びだし大阪に搬送するとのことだった。1週間程度で復旧し神戸で再開を、と言っている会社幹部がいたそうだが、現地を見た人は「何を考えているのだ」と怒っていた。大阪ではまだ神戸の状況が分からないようだった。

電気が復旧し通電すると、自宅の近所でも火災が発生した。近所の人が並んでバケツリレーで消火活動をし、夕方には消えた。

山口県警や香住の消防など、色んな所から応援が来ていた。しかし何をしたらいいのか分からない様子だった。近所では自衛隊の救助活動が始まっていたが、あちこちの倒壊建物から遺体が搬出されていた。駐車場に白い毛布にくるまれた遺体が並べられていた。夜中に自衛官が赤十字の車を待っていた。

（3）震災後1週間～1か月

この頃には父も母ももう仕事に出ていた。しかし電車もバスも止まっているため、母は和田岬まで片道30分のバイク通勤をしていた。父はJRの代替バスを乗り継ぎ大阪へ片道8時間かけて出勤していた。母の会社は社員食堂が使用できないため、缶詰めとパンが配られた。家では、水が出ないため、近所の市営住宅付近に設けられた仮設水道から20Lのタンクにいっぱいの水を入れバイクでマンションまで往復し、4階まで何回も運んだ。階段しかないから本当に大変だった。週末は、被害の少なかった友人の家に数人が集まり一緒に食事をした。電気が来てからは去年の年末に買っていた「24時間風呂」の機械が使えた。だから何度も水を浴槽に運び、機械でお湯を沸かしてお風呂に入ることができた。本当にありがたいと感じた。毎日洗面器一杯で頭と体を洗った。しかし、水がどろどろだったからフィルターがすぐ汚れた。同じマンションの住民がみんな他の場所へ避難してしまったから、火災が起きないように見守るために我が家だけ残った。近所の建物からは火災が起きた。家が倒壊し流れ出て道路をふさいでいた。

（4）震災後半年～1年・私が生まれた頃

自分たちがなぜ生き残ったのかを考えた。いつ何が起きて突然死ぬか分からない。だから生きていうちに、やりたいことをやろうと思った。神戸に二度と震災が起きないように願った。もう起きないと自分に言い聞かせ、思い込むようにした。子ども（私）を授かった意味を考えた。生きて、すべき仕事を与えられたような気がした。

まちでは常にどこかで工事をしていった。土けむり、騒音がひどかった。マンションがたくさん建設されていった。同じマンションに住んでいた人たちが戻ってきて生活していた。道路はまだ完全に復旧してはいなかった。

(5) 現在・震災から19年

阪神淡路大震災で被災し、東日本大震災を目の当たりにし、日本に住んでいる以上は地震から逃げることはできないと思った。もしもう一度震災にあったなら、気持ちがくじけてしまうかもしれない。いつ、どこで被災するか分からないからどういう対策や備蓄をすればいいのか分からず、中途半端な対策や準備になってしまっている。

まちでは道路が広がった。焼けてしまった地域はきれいな建物が立ち並んでいる。電柱がない地域もある。しかし19年経った今でも神戸は元には戻っていない。須磨は震災が起きる前に比べ、若い人が減ってしまった。須磨に限らずお年寄りが多く、若者が少ないまちが増えた。若者だけでなく、住んでいる人自体が減ってしまった。新長田の地下はシャッターが閉じたままの店舗ばかりで、商店街は営業している店舗が減った。復興は見かけだけだ。どうしたらもっと神戸が元気になるのか…。

2 小学校・中学校のころ

私が阪神淡路大震災のことを知ったのは小学生のときだ。私の通っていた若宮小学校では年に2回ほど避難訓練が実施されていた。訓練内容は地震と火災だ。低学年の頃は事前に予告されていても、いつ警報が鳴り出すかとびくびくしていたが、高学年になると警報音や予告ありの訓練に慣れてしまい緊張感のない状態で参加していた。毎年1月17日には震災学習があり宿題で母に初めて阪神淡路大震災の話をしてもらったが、まったくイメージができず、よく分かっていなかったように思う。体育館に全校生徒が集められて震災当時のDVDを見たが、ただ怖かっただけだった。保護者への引き渡し訓練も行っていたが、それが何のために行われているのか分かっていなかった。

中学校でも小学校の頃と同じような避難訓練が行われていた。しかし東日本大震災が発生した年からは火災ではなく津波の訓練に変わった。消火訓練はまた別で行った。バケツリレーは中学で初めて体験した。訓練の際に先生方が言った「災害時にはみんなで助け合うことが大切。」と「助けられる側の人間ではなく、助ける側の人間になれ。」という言葉がとても印象に残っている。また中学でも毎年1月17日に震災メモリアル行事があり上記の防災訓練や、PTAによる炊き出しなどがあった。同じ日の夕方に新長田駅前の広場で行われる追悼行事で「しあわせ運べるように」を歌い、5時46分に黙とうをした。追悼行事に来ていた方に「あんたら震災起きた時いくつだったの？」と聞かれ「震災の1年後に生まれたので経験していません。」と答え、「そうかー、もうそんなに経ったのだね。」と少し寂しそうだった。どう答えたらいいのか分からなかった。中学3年生の12月に東北の中高生と神戸の中高生と一緒に神戸の街を走りリレー形式で襷を繋いでいく「チャリティーリレーマラソン」というイベントに参加した。走り終わった後に東北から来た子が「震災があった神戸もここまで綺麗になっているというのがとても希望に思えた。東北も頑張ろうと思った。」と言って嬉しかった。またこのイベントで初めて環境防災科の先輩方とお話をした。みんなすごく元気ではきはきしているなというのが第一印象だった。私もあんな人になりたいと憧れていた。

3 環境防災科

(1) 環境防災科に入って

小学校、中学校とたくさん震災について学ばせてもらえる環境にあったが、震災や災害について分からないことだらけだった。だからもっと詳しく学びたいと思い、また、ボランティア活動も募金活動しかしたことがなかったから他に学生ができるボランティア活動をたくさん体験したいということで環境防災科に行こうと思った。

環境防災科に入って、普段の授業や外部講師の方のお話で阪神淡路大震災や東日本大震災のことを知ることができ、小学校の頃に母から聞いた話もほんの少しイメージすることができた。また、災害に対する対策や備蓄など、今まで思いつきもしなかったアイデアやその意外な弱点なども知ることができた。ボランティア活動では協力することの大切さ、人に分かりやすく伝えることの大切さなど他にもたくさんのことを学んだ。ボランティア活動に行くたびに自分の課題を見つけた。

私が環境防災科に入ってから家族も防災を意識するようになった。母と妹は、若宮小学校で行われ

た防災のイベントに参加して、舞子高校のブースで「ぶるる」の説明を聞き、耐震と免震の違いを理解したようだ。また、トイレには水を入れたペットボトルを数本常に置いている。非常用持ち出し袋を用意し、常に中身をチェックしている。冷蔵庫には私の住んでいる地域のハザードマップが貼ってある。防災意識が高くなってきているように思う。

（２）東日本大震災被災地支援活動

高校1年生の8月、12月、高校2年生の8月に東日本大震災の被災地へ行った。高1の8月に初めて被災地を見た。津波で流されてしまったまちは辺り一面雑草が生い茂り草原のような状態で、何もなかった。人もいなかった。よく見ると家の土台であるコンクリートがあり、もっとよく見ると家の鍵や食器、衣服などがあつた。ここに本当に人がいて、まちはあつたのかと驚き、茫然とした。津波が本当に怖くなった。このときは主に民家の草抜きをした。また、このときから現地のおばあちゃんとの交流が始まった。同じ年の12月に8月に訪問したおばあちゃんのところへ再び訪問した。とても喜んでくれた。その方のお友達も来てくれて、2人で作ったという手作りのフクロウの置物をもらった。私たちが来ることを楽しみにしてくれている人がいるというのがとても嬉しかった。またおばあちゃんは震災当時の話をたくさんしてくれた。話し終えた後に、「このことを神戸でしっかり他のみんなに伝えてね。」と言われ、私がしっかり伝えないと、と強く思った。高2の8月の訪問の時に、高1の時と同じ場所を見てまわった。しかし高1の時とは自分の考え方や感じ方が違い、壊れた建物や津波の被害にあつた場所を見るたび涙が溢れた。悲しいのか苦しいのか自分でも分からなかったが、涙が止まらなかった。その場所だけ、あの日から時間が止まっていると感じた。このときは本当にたくさんの方から震災体験を聞かせてもらった。「舞子高校の人たちは一回限りじゃなくて毎年来てくれて、被災地を忘れていないというのが嬉しい。」と言われ、継続的な支援の大切さを実感した。

4 最後に

（１）震災体験を聞いて

私が父から震災体験を聞いたのは初めてだったが、母からは初めてではなかった。小学校の頃から、震災体験を聞くという宿題などで何度も聞いていた。今回も同じように震災体験を聞くと「本当は思いついたくもない。」と言われた。胸に刺さった。今まで何度も聞いてきたがそんなことを言われたのは初めてだった。母の本当の声、気持ちが聞こえたような気がした。19年経つ今でも震災の傷は癒えていないということ、身を持って感じた。母はそう言ったあとに「でも、そういう学科に行ったのなら、きちんと伝えていかないとあかんよね。」と言って話をしてくれた。

今回、阪神淡路大震災の話聞いて考えたことは「備え」についてだ。阪神淡路大震災では建物の倒壊と火災で多くの人が亡くなった。建物の耐震化をしていれば、倒壊した家屋の下敷きになってしまう人も、それによって脱出できずに火災に巻き込まれてしまう人も減らせたと思う。建物の耐震化だけではない。いくら建物自体が倒壊しなくても建物の中の家具などを固定していなければ激しい揺れによって家具が飛んだり落ちてきたり倒れたりして、私の父のように怪我をしてしまうし、家具が入り口を塞いでしまい脱出できなくなってしまう可能性もある。また、私の母は偶然震災前にお風呂を沸かす機械を買っていたりクッキーを焼いていたが、それは偶然ではなく、意識してすべき「備え」なのだと思う。日頃から災害時に食べるものがなくなってしまうように備蓄しておいたりお風呂やトイレなどに使うための水を置いておいたり災害時に使える防災グッズを買いそろえておいたりすることで、今回の「偶然」をきちんとした「備え」という形に変えていかないとけないと思った。

もうひとつ考えたのは「神戸はまだ復興していない。」という両親の言葉だ。神戸の街並みは綺麗になり、テレビなどでも「神戸はここまで復興しました。」などと言っている。しかし、上にも書いたが19年経つ今でも人々の心のどこかに震災の傷跡がありその傷は癒えていない。テレビに映らない部分というのはこういうことなのだと分かった。

(2) 語り継ぐ

私は阪神淡路大震災が起きた時はまだ生まれていなかったため経験していない。東日本大震災も経験していない。経験していないことを語り継ぐというのは難しいと思った。うまく伝わるか、お話をしてくださった方が伝えたいことをきちんと私が伝えられているか、と不安になることもある。しかしお話をしてくださる方はみんな、伝えてほしいという思いが強くて話してくれている。もしかしたら本当は話したくないかもしれない。震災のことを思い出したくもない人だっているはずだ。それでも話をしてくれている。だから私は、お話をしてくださったことに感謝してお話をしてくれた方々の伝えたいという思いをしっかりと受け止めその思いも一緒に、震災について知らない次世代や同世代の人たちに伝えていかなければならないと強く思った。また過去にこのようなことがあったという事実だけでなく、そこから得た教訓やこれからの災害に備え、今から何ができるか、何をすべきなのか正しい知識も多くの人に伝えていきたい。伝えるだけでなく、一緒に考えていきたい。

私は将来、消防の予防課や市役所の防犯・防災に力を入れている部署などで、多くの市民が興味を持つような地域の防災訓練やイベントを企画したい。ただ参加するだけではなく、そこで地域の人たち同士が交流できるような企画も盛り込みたい。また、小学生でも分かるようなハザードマップも作りたい。無茶な量ではなく、準備することの可能な備蓄の量を考え、地域に広めていきたい。そして「これなら準備できる」と思って備蓄をしてくれる人を一人でも増やしたい。他にもたくさんしたいことがある。すべてを実現させるのは難しいかもしれないが、何か一つでも実現させたい。そうして、これまでの震災の教訓を子どもから大人までたくさんの人々に伝え、震災を忘れない、教訓を忘れないようにしたい。そして次の災害がもし起きた時に悲しい思いをする人を少しでも減らしたい。

阪神淡路大震災

渡辺 沙耶

今回は“阪神淡路大震災を語り継ぐ”ために、知人の大学4回生にインタビューをした。その内容を本人の目線から書こうと思う。

1 阪神淡路大震災

当時私は須磨区（名谷駅付近）に建つ二階建てのアパートに父、母の三人で暮らしており、母のお腹の中には2月3日に出産を控えた男の子がいた。

（1）1月16日

この日は幼稚園が休みだったため、一日家で過ごした。父はハワイへ旅行していた祖母を迎えに、関西国際空港へ行っていらしい。変わったことと言えば、いつもより私の寝る時間が遅かったことぐらいで、それ以外はいつもの“当たり前の日常”だった。

（2）1月17日（阪神淡路大震災）

①地震発生

家族三人、タンスのある部屋で川の字に寝ていた。そして阪神淡路大震災発生。揺れに一番に気づいた父は、起きて真っ先にタンスが倒れないように押さえ、私と産休中である母とそのお腹の子を守ってくれた。母も2歳の私とお腹の子の命を守ることに必死だった。母は「アパートに何か落ちてきたんかな。何かぶつかったんかな」と思ったらしい。揺れている時間が長く、父はしばらくの間この揺れが地震だとは理解できなかったという。

②地震発生後

揺れが収まり、床を見ると食器棚のお皿がすべて割れていた。そして私のお気に入りだったウルトラマンのコップ5つもすべて割れてしまい、すごくショックだったことを覚えている。父は地震によってドアが開かなくなることを知っていたので、ドアを開けに玄関へ行った。ドアは開いた。そして水を確保するためにお風呂にお水を張った。その時スリッパすら履いておらず素足だったため、割れた食器棚で足を切ったらしい。「靴下を履いておけばよかった」と思った。祖母がプレゼントしてくれた5月人形をタンスの上に飾っていたのだが、それも壊れてしまった。部屋のテレビは、1回消えたがすぐ付いた。ガスも止まってしまっていたのでガスコンロを使った。母はまず、外を見た。名谷から長田の燃え盛る炎を見て、「この火が名谷まできたらどうしよう。電線も切れて火花が散ってるし、このアパートが火事になったら・・・」という不安にかられ、同時に出産に対し焦っていた。やはりお腹の子が気になり、そのあと産婦人科に電話をした。だが、電話そのものが繋がらず直接産婦人科へ向かった。須磨を過ぎたあたりから、ぺたんこに潰れた家が見え始めた。産婦人科の門や塀も倒れており近くまで車を持っていけなかったため、少し遠い場所に車を止めて歩いた。だが出産予定日まで2週間以上あり、すぐに入院はさせてくれなかった。学園都市に住んでいた祖母はタンスが倒れてきて打撲を負った。出血していたため病院へ行った。父はハワイに旅行していた祖母に頼んだナイキのスニーカーを履いて部屋を片付けた。母と私の足の踏み場をとりあえず確保し、当時小学校の教員をしていたので学校へ行く準備をした。そして車に乗り込み、ラジオをつけた。チャンネルはNHK。「神戸で地震発生。震度7。」と言っていたらしい。それを聞いて初めて神戸で大地震が起きたことを知った。少しして学校に到着。この日、教員が全員そろわなかったため安否確認ができず、片付けをした。

(3) 地震発生から3日間

①母と私と祖父母の動き

私たち家族は小学校の避難所に行った。家にストーブがなく、母は生まれる子供のためにも体を温めなかったからだ。しかし避難所は受け入れてくれなかった。その3日後、再び産婦人科を訪れた母は分娩室だけは使えると聞き、入院を決めた。その間私は祖父から「うちにおいて」と声をかけられ、当時60代前半の祖父の家に預けられた。西区は水道が止まっていたため、祖父が給水車まで水を汲みに行っていた。何度も家と給水車の来る場所を往復し、私の幼稚園までの送り迎えしてくれていた。祖母は毎日家事におわっていた。

②父の動き（震災から学校再開までの2～3週間の動き）

父は小学校の近くの水がきれいだったのでそれを汲んで帰った。このときあまり2Lペットボトルが浸透しておらず「ペットボトルがもっと普及してればなあ」と思ったという。3～5日経ってやっと教員がそろい、安否確認を始めた。幸いにも生徒は全員無事だったが、その家族や身内には亡くなった方もいた。教育委員会から「ほかの学校にも手伝いをしに行ってもらいたい」と言われ、はじめに長田区の小学校が割り当てられた。板宿駅から歩いて向かった。父が歩いた道の土は熱く、何日もその上を歩いていたため靴の底が溶けた。町並みは家が潰れているというよりは、火事によって家そのものがなかった。学校については何をしいのかかわからず、向こうから与えられた仕事だけをこなした。この学校への避難者は多く、トイレの数が足りなかったため小学校の畑を掘り、テントを立てて簡易トイレをつくった。その次に湊川区の小学校に向かった。ここではそれぞれ始めから仕事が割り当てられており、父は配給車が持ってきた食べ物の在庫管理をしていた。だがその車がいつくるのか、食べ物をどう公平に渡すかで何度もクレームを受けたという。最後に行った長田区の小学校では主に避難所の夜番をしていた。この学校の手伝いをしているころには、自分の勤務先の学校は再開していた。1週間ほどお風呂に入れなかったもので、2～3日間同じ服を着ていた。

(4) 地震発生から1か月

震災から1年が経ったことで、あの日のことをよく考えるようになった。「あの時、ちゃんと家具の固定をしておけばよかったなあ」と思った。水道から出ていた水も、水道管が壊れるにつれて錆びてしまっていた。さらに震災直後は車で30分ほどで通勤できたが、日を重ねるごとにボランティアなどが神戸に集まり、時間がかかった。その後も余震が続き、地震に対して敏感になり、それが何度も続くことでストレスになった。

(5) 震災をしらない世代に伝えたいこと

「1月17日に神戸で地震があって、たくさんの方が亡くなったということをまず伝えたい。地震といういつ起こるかかわからない自然現象によって、一瞬にして全ての幸せがなくなってしまう。大切な人や家族が亡くなることや、自分以外の身内が亡くなることもある。地震というものによって一瞬で命が奪われてしまうということを、心のどこかに置いてほしい。直接震災を体験していないが、そういう人たちの悲しみに共感できるような人になってほしい。」

2 語り継いで（自分の感想）

(1) この話を聞いて

今回インタビューをさせていただいた方のお父さんが教員だったため学校の動きについて深く聞くことができ、普段防災に関わっていない人がいきなり支援や避難所設営側に回るのはすごく大変なんだと再認識した。このような事態に備え、普段から公務員に対する少し専門的な防災教育に力を入れるべきだと感じた。支援する側が防災に対する知識を少しでも持っているだけで、避難所の運営やボランティアが大きく変わると思う。そして最近、防災という言葉がテレビでもよく耳にし、もっと防災が流行してくれればいいと思う。そのためには年代関係なく楽しめる防災を考え、私は犬猫を災害から守るための防災を考えたい。また震災から19年経ったいま、次世代に語り継ぐため私のイン

タビュを快く受け入れてくださり、自分の被災経験を語ってくださった方々に感謝したい。

(2) 経験

以前の私は語り部さんのお話を聞いてもただ“なるほど”と思うばかりで、そこから教訓や反省点を見つけることはできていなかった。それは私自身の阪神淡路大震災に対する興味が薄かったせいだろう。だが、環境防災科に進学し災害を知り、災害と向き合うことで、今では“語り継ぐ”ということができるようになった。

この17年間で私が一番“語り継ぐことができた”と感じたのは、高校2年の夏に行った4泊5日の東北ボランティアだ。そのうち2日は移動、1日を使いきっての活動は間の3日間だった。主に被災地の学校との交流や被災地見学がメインだったが、後半の2日間は涙が途切れなかった。最終日、SAで会った現地のおじさんに「当時はこの辺も死体だらけで、俺も親族を探しに歩き回ったよ」と笑いながら言われた。この笑顔が本心の笑顔だったのかはわからない。その時は私もおじさんの顔を見ることはできなかった。神戸に帰り親に会った瞬間、私は被災地で聞いたこと、見たこと、感じたこと全てを話した。辛かったことも、泣いたことも。きっとこの気持ちを共有することで楽になったかと思う。私はそのすべてを抱えきれず、そして受け入れられてなかった。だから誰かにこの気持ちを理解して、わかってほしかったかと思う。この時に私は初めて“話を聞く”というボランティアの意味の大きさを知った。話を聞いてもらうことでどれだけ気持ちが楽になるか、身に染みて感じた。それからしばらくして、あのおじさんの笑顔の理由がわかった気がした。誰かがそのおじさんの痛みを半分取り除いたからだろう。きっと阪神淡路大震災当時も、そのようなことがあちこちで行われていたに違いない。やはり人間を救えるのは“人”、つまり専門家や医者ではなく家族や友人なんだろうなと思った。

(3) ルミナリエ

中学1年生のときに、ルミナリエが阪神淡路大震災の記憶を次の世代に語り継ぐための、神戸のまちと市民の夢や希望を象徴するための行事として開催していたことを知った。阪神淡路大震災の犠牲者への思いを込めた送り火、もうすぐ新しい年を迎える神戸の復興への夢、そして希望を託して始まったルミナリエは今年で開催で20回目になる。このことを知ってから、私は欠かさずルミナリエに行くようになった。被災直後の12月から今まで、絶やさず毎年市民に希望を与え続けたルミナリエ。神戸の復興と照らし合わせていた。毎年どんどん綺麗に輝くライトをみて、震災を経験していない私も復興を感じることができた。私にとってルミナリエは、阪神淡路大震災を教えてくれるところだと思う。そして、神戸が生きている証だと感じている。

(4) 将来の夢

私の将来の夢は災害救助犬の訓練士だ。阪神淡路大震災では日本の救助犬よりスイスから派遣された救助犬の活躍が多く、そのことが少し気にかかった。「警察犬より多くのひとを救うことができる！」という気持ちから始まった思い。普段生きた人間の臭いで訓練をしている救助犬が被災地に出向き、ご遺体の臭いを嗅ぎ続けることは非常に大変なことだ。犬の最大の長所である嗅覚を失ってしまうこともある。そのことについて抵抗はあるが、やはりみんなを家族のもとへ連れて行ってあげたい。私はそう思った。そして後には南海トラフ地震に備えた防災に対する知識もハンドラーとしてのスキルも磨き、私だからできる犬の知識と防災の知識を活かした犬猫のための防災を考えていきたい。できるだけ動物の命と人間の命に優先順位をつけなくていいような社会にしたい。そして何より、まずは自分の身の回りの地域の方々から“防災を好き”になってほしい。阪神淡路大震災が気付かせてくれたたくさんの“弱さ”をみんなで無くし、これからの災害に負けないような強い故郷をつくる。何度も災害を経験しているからこそ、よりレベルの高い防災が日本人にはできるはずだ。ひとつではない命の守り方や故郷の守り方を、地域の方たちを探し続けていきたいと思う。